

**徳島大学工学部
創立100周年記念誌**

徳島大学工学部
創立100周年記念誌

100th
Anniversary

*Faculty of Engineering,
Tokushima University*

■ 昭和48年（1973年）当時の徳島大学常三島キャンパス



■ 現在の徳島大学常三島キャンパス



徳島大学工学部
創立100周年
記念誌

目次

CONTENTS

100周年記念誌の刊行にあたり

徳島大学理工学部長 武藤 裕則…… 4

工学部生物系学科から生物系学部と未来へ

徳島大学生物資源産業学部長 松木 均…… 6

祝 徳島大学工学部100周年

徳島大学長 河村 保彦…… 8

母校の創立100周年を祝う

徳島大学工業会理事長 林 宏二郎…… 10

歴代校長・学部長…… 12

徳島高等工業学校創立から徳島大学工学部への歩み…… 16

工学部各学科・独立専攻・共通講座・事務部の歩み…… 21

理工学部・生物資源産業学部設立から現在までの歩み…… 63

自己点検・評価…… 84

理工学部・生物資源産業学部・大学院の将来へ…… 89

思い出の恩師…… 93

旧教職員と卒業生からのメッセージ…… 101

理工学部、生物資源産業学部と創成科学研究科の現状…… 126

理工学部と生物資源産業学部と大学院の教育と研究…… 139

理工学部と生物資源産業学部の建物と利用する施設…… 170

各種センター・研究所の活動…… 174

地域交流の推進…… 181

キャンパスライフ…… 183

徳島大学工業会の歩み…… 193

創立100周年記念事業…… 196

付録…… 212

執筆者・編集者一覧…… 234

あとがき…… 235

ごあいさつ

100周年記念誌の刊行にあたり

徳島大学理工学部長

武藤 裕則



徳島大学理工学部はこのたび、大正11年（1922）10月に前身の徳島高等工業学校が創設されてから数えて100年の節目を迎えました。この間、徳島工業専門学校（昭和19年（1944）～）、徳島大学工学部（昭和24年（1949）～）を経て徳島大学理工学部（平成28年（2016）～）と受け継がれてきた主体性・創造力・対人力を育む確かな教育力の下、母校を巣立たれた4万9千人を超える卒業生・大学院修了者が社会のさまざまな分野で活躍し、各界の発展に多大なる貢献をしてこられたことは大変喜ばしく存じます。とりわけ、中村修二氏（2014年ノーベル物理学賞受賞、電子工学科昭和52年卒）、東原敏昭氏（株式会社日立製作所取締役会長 代表執行役、電気工学科昭和52年卒）をはじめとする、当代を代表する人材を輩出したことは、大いなる誇りであるとともに、教職員・学生にとりましても今後の励みとするところでございます。

創立75年（平成9年（1997））を賀した20世紀末以降、社会の変転はさらにその度合いを増し、21世紀も四半世紀を過ぎようとする今日、わが国の諸情勢は国内・国際関係を問わず大きく様変わりしました。国立大学に対しても、平成16年（2004）の国立大学法人化をエポックとして、それ以前からさまざまな改革が求められてきました。法人化以降の本学部の歩みを

振り返りますと、平成18年（2006）には工学部7学科を3学系7学科+工学基礎教育センターに再編すると共に、大学院工学研究科を大学院先端技術科学教育部に改組し、それまでの博士前期8専攻・博士後期5専攻を3専攻に整理再編しました。そして、平成28年（2016）に、工学部から生物工学科を除く6学科と、総合科学部から総合理数学科が融合し、理学・工学をシームレスに繋ぐマインドを持った新しい時代に活躍できる科学者・技術者の育成を標榜する理工学部が6コース体制（令和4年（2022）より8コース体制に改変）で発足しました。続いて学年進行に伴い、令和2年（2020）には常三島地区の3学部を基盤とする大学院創成科学研究科が設置され、理工学専攻修士課程（令和4年（2022）博士前期課程に名称変更）が置かれました。さらに、令和4年（2022）には、常三島地区の博士後期課程を1つに包含する同研究科創成科学専攻が設置されました。一方、同じく令和4年（2022）には、魅力ある地方大学の実現に資する地方国立大学の定員増に「次世代ひかりトクシマ若者雇用創出計画～『医光／医工融合人材』が切り拓く新たな地方創生～」のテーマで選定され、令和5年（2023）に医光／医工融合プログラムが30名の定員で新設されました。以上のように、時代の変遷と社会の要望を踏まえ、理工系分野における学術研究の高度化と学際融合に対応すると同時に、本学部の強みをより一層発揮できる体制づくりに腐心して参りました。この間、本学部の発展にご尽力・ご支援いただきました、文部科学省はじめ学内外の関係各位に深く感謝申し上げます。

さて、今日の人類社会は科学技術にかつてなく依存しており、今後もその進化によって人類の繁栄と持続可能性が担保されることから、理工学分野はその重要性を一層増大させるでしょう。75周年当時を顧みますと、例えばこの間の情報通信技術の発展に伴う時空間の距離の克服、すなわちオンライン会議やバーチャルな空間におけるコミュニケーションが日常となる現在の状況は、想像し難いものであったと思われます。バーチャルにおけるリアリティの追求は今後も強力に推し進められるでしょうが、一方でコロナ禍を経てリアルに体験を共有することの重要性も見直されています。バーチャルの質的向上の追求のみでは他に埋没するだけとも思われます。地域の核となる地方大学との文脈で捉えた時、地域の特長・特色が顕在したリアルを主体に、それらをより一層活かす形でバーチャルの活用を図る視点も欠かせないのではないのでしょうか。

結びとなりますが、本記念誌の発行にあたり種々ご協力いただきました皆さまに厚く御礼申し上げます。また、本学部に対して長年にわたり温かいご支援を賜りました皆さまに心より感謝申し上げます。教職員・学生一同、次の慶節に向けてますます精励・努力して参りますので、引き続きご指導・ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

ごあいさつ

工学部生物系学科から 生物系学部と未来へ

徳島大学生物資源産業学部長

松木 均



徳島大学工学部創立100周年並びに100周年記念誌の刊行を心よりお祝い申し上げます。

徳島大学工学部は、大正11年（1922）に徳島高等工業学校として発足し、昭和24年（1949）の学制改革により徳島大学の3学部内の一つとして創設されました。以来、平成28年（2016）に現在の徳島大学理工学部および生物資源産業学部に再編されるまでの67年間の長きにわたり、我が国の高度な科学技術の推進と優れた工学系人材の育成に大きな貢献を果たし、令和4年（2022）には設立以来節目となる創立100周年を迎えました。同年秋に予定していました記念事業は、コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大状況を鑑み、やむなく開催延期することとなり残念でしたが、翌年（2023）5月14日に多数の関係者を集めて盛大に挙行されました。

戦後の昭和期、徳島大学工学部は創設当初の土木、機械および化学の3分野に電気と知能情報の2分野が加わり5分野において工学系教育と研究に力を傾注してきました。他方、昭和末期のめざましい生命科学の進歩を背景にして、バイオサイエンスやバイオテクノロジーに関する研究の工学分野への参入の機運が高まり、昭和63年（1988）には徳島大学工学部内に、徳島大学初の生物系学科である「生物工学科」が設置されました。設置当初は4講座体制でしたが、

工業短期大学部改組時に7講座体制に拡張され、以来、この講座体制において、その後の四半世紀強にわたる28年間、教育および研究活動が行われてきました。その間、2,500人にのぼる卒業生と修了生を社会に輩出し、現在、生物工学系の様々な分野において活発にご活躍されているのを折りにつけ窺い知るの、大慶の至りに存じます。

平成期の後半には、農林水産業（1次産業）を基幹産業とする徳島県において農学系の教育研究組織が無いことに対し、徳島県や県内経済団体などから農学系学部への強い要望が寄せられたことから、平成24年（2012）に徳島県と「教育・研究分野における農工商連携の推進に関する協定」を締結し、教育面においては生物工学科内に「医薬工連携スタディーズ」および「農工連携スタディーズ」の選択コースを設置し、研究面においては徳島大学内に「農工商連携センター」を設置し、新学部設立の準備体制が整えられました。

そして、平成28年（2016）に実施された常三島地区の学部改組時に生物工学科は発展的に解消し、同地区の総合科学部環境共生化学分野、蔵本地区の医歯薬学研究部および農工商連携センター等の教員を部局横断的に再配置することにより、農学部系列の新学部として「生物資源産業学部」が設置されました。生物資源産業学部では、ヘルス（医療）、フード（食料）、アグリ（農業）分野に関するバイオ技術を用いて、食素材や動植物資源の機能性、森林資源や水産資源の利用、地球上の環境保全などに関する高度な研究を行うことで、農山漁村にイノベーションを起こし地域を元気にする人材、新しいバイオ系産業を創出し地元経済を活性化させる人材を社会へ送り出すことを目指しています。また、令和2年（2020）には、地域貢献強化を目指し、県内3拠点（石井、鳴門、新野）間を連携してバイオイノベーション研究所（BIRC）が設立されました。

令和4年（2022）には、生物資源産業学部に接続した大学院創成科学研究科博士後期課程が設置され、工学部創立100周年と呼応するような形で、学部から大学院までの一貫した教育および研究の体制が整備されました。生物資源産業学部設立以来の7年間に卒業生と修了生、合わせて約400名が社会に巣立ちました。これからの我が国の生物系産業の中核的役割を担う人材として活躍されることを大いに期待するところであります。我々教職員は、生物資源を用いた「持続可能な開発目標（SDGs）」や「脱炭素社会（カーボンニュートラル）」の実現を目指して、学生と共に切磋琢磨しながら精励していきます。

生物資源産業学部は、これまでに築き上げてきた工学部の輝かしい実績を踏まえ、工学部生物工学科の過去よりの歴史と伝統を継承して、「生物資源が創生する輝く未来へ向かって」たゆまぬ努力を続けてまいります。今後とも、ご指導とご鞭撻を賜りますよう、ここに謹んでお願い申し上げます。

祝 辞

祝 徳島大学工学部100周年

徳島大学長

河村 保彦



徳島大学工学部は、大正11年（1922）10月に前身の徳島高等工業学校が創設されてから、100年の節目を迎え、これを記念して令和5年（2023）5月14日に、講演会、式典、祝賀会が挙行されます。この機会に、1922年という年の事績を紐解いてみますと、我が国は高橋是清内閣の時代で、ワシントン軍縮会議が終了しワシントン海軍軍縮条約・九か国条約が調印されました。また、スターリンがロシア共産党書記長に選出され、ムッソリーニのイタリア首相就任やソビエト社会主義共和国連邦の成立などがありました。このように、戦時色濃厚な世の中で、徳島高等工業学校も当時の我が国の「殖産興業」の流れを受けて、歴史的に産業界の多様な発展があった当地徳島に創設されたのではないかと考えられます。現在、理工学部正門から入構しますと、すぐ左側に噴水と園地からなる庭園が設けられ、徳島高等工業学校初代校長の小溝茂橋教授の胸像が設置されています。その後徳島高等工業学校は、昭和19年（1944）4月に徳島工業専門学校と改称され、昭和26年（1951）3月に閉校、徳島大学工学部にバトンを渡します。新制徳島大学は、昭和24年（1949）5月31日に発足しました。初代工学部長には、徳島工業専門学校 第四代校長 久保 進教授が就任されました。

一方、この100年間に、科学技術は驚くべき速さで進歩しました。JAXAは、来年度以降に新型H3ロケットでペイロードを月に運び、極域の水を探査しようとしています。また、スマートフォンは大変身近なものとなり、相手の顔を見ながら会話したり、オンライン会議も日常的となっています。医療の面でも、その基礎となるライフサイエンスの進歩は、我々の生活を変えようとしています。ヒトゲノムが解読され、同じ病気でもそれぞれの人に合致した「個別化医療」が進んだり、令和2年（2020）のノーベル化学賞に輝いたゲノム編集技術や、さらには塩基配列編集技術も現れました。また、新型コロナウイルス禍で待ち望まれ、人々の福音となったmRNAワクチンの開発、逆にウイルスを用いたり抗体薬物複合体（ADC）によるガン治療や、様々な難病に対処する方法が開発されたりと目覚ましい進歩があります。

このように、前世紀からの夢が今世紀に入って次々と実現されつつあります。前世紀は、いわば人類の夢の実現に注力された時代でした。しかし、その結果、地球温暖化や自然破壊、食・エネルギー・サプライの連鎖の崩壊、新型コロナウイルス禍といった疫病など課題は山積しました。さらにそれに加え、かつての大戦で夥しい犠牲が強いられ、苦難を経験したにもかかわらず、なお世界の各所で紛争が続いています。これらからわかるように、私たちは今もなお、世界のあらゆる人々が安心安全で平和な生活を送れるポリシーや考え方が確立できていないと思われまます。大学には、大局的にはこうした考え方について教授・研究するとともに、新たな夢の提供が大いに求められていると思われまます。大学に課せられた第一の責務は、あらゆる分野において優れた人材を育成し社会に輩出することであり、良い教育を行うためには、時代を切り拓く先端的基礎研究と、地域と社会に裨益できる価値ある応用研究、社会実装研究、さらに高度先進医療の推進が重要です。これらの推進には、単にそれぞれの分野を進展させれば良いだけではなく、文系と理系両者の学び、アントレプレナーシップ教育（起業家教育）、データサイエンス教育、インターンシップなど多様な学びが必要です。そのため、現代には「高等教育のSociety5.0」（サイバーとフィジカル両空間を不断に融合した人間中心の学びの場）が必要と考えまます。

結びとしまして、徳島大学工学部100周年を心から寿ぎ、これまでに寄せていただきました学生、教職員、同窓生の皆様、並びにステークホルダー各位のご声援、ご支援、ご協力に厚く御礼申し上げます。今後も何とぞ理工学部と生物資源産業学部、並びに徳島大学を宜しくお願い申し上げます。

さあ、次の100周年はどんなセンテニアルになりますでしょうか。益々のご発展をお祈り致します。

祝 辞

母校の創立100周年を祝う

徳島大学工業会理事長

林 宏二郎



徳島大学工学部創立100周年誠におめでとうございます。我々卒業生にとりまして母校がこの様に記念すべき100周年の節目の年を迎えることが出来たことは大きな喜びであります。

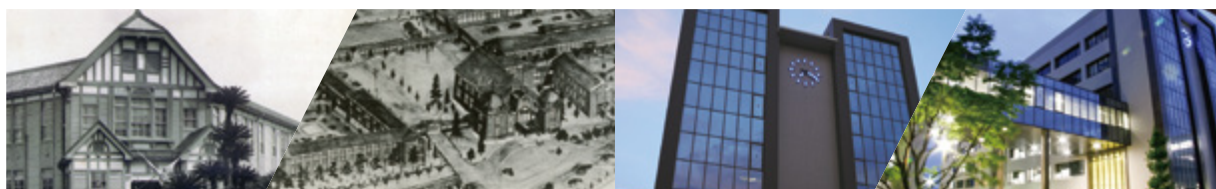
徳島大学工学部は大正11年（1922）徳島高等工業学校として創立されて以来、長い歴史と変遷の中で49,000余名の優秀な人材を世に輩出してまいりました。その卒業生の皆様方が国内外で活躍され社会発展のために大いに貢献をされました。その意味から徳島大学工学部が果たした役割は誠に大きなものが有ると考えます。

徳島大学工業会も昭和8年（1933）12月に卒業生の同窓会組織「徳島工業会」として設立されて以来、本年で設立90周年を迎えます。「徳島工業会」設立時は徳島高等工業学校が設置されてまだ10年という時点でありましたが関係者が集まり昭和8年（1933）12月に設立のための役員会が開催されたという記録があります。その後、昭和26年（1951）3月に徳島大学工学部が設置された折「徳島工業会」から「徳島大学工業会」と改称され、現在に至っております。また、平成8年（1996）9月16日には工業会館新築工事が竣工し、工業会事務局も館内に移設され工業会活動の拠点と成っております。

現在、徳島大学工業会会員は約30,000名、全国に18か所の工業会支部を設けて、諸先輩が築いてこられた工業会活動を継承し、推進しております。徳島大学工業会も令和15年（2033）に設立100周年を迎えます。会員の皆様と共に引き続き徳島大学工業会が発展することを祈念致しております。

現在、世界情勢は大きく変化しております。その変化の中で特に科学技術の発展は著しいものがあります。デジタル通信技術、AI活用技術、宇宙開発技術、バイオ技術、医薬品開発技術、脱炭素エネルギー開発技術、交通インフラ開発等、数え上げればきりがありません。このような技術発展の中で、これからも徳島大学の研究と教育に対する期待は非常に大きなものがあると考えます。しかしながら大学に対する国からの運営交付金が減少しているというお話をお聞きし大変危惧しております。技術開発による国際競争力の構築には国の支援が非常に重要であります。また、国からの支援を得ながら「産官学一体」と成って日本の産業全体の科学技術の向上を図らなければなりません。日本は今日まで、長く培ってきた技術力を駆使して経済発展をしてまいりました。しかしながら、現在日本の国際技術競争力の優位性に陰りが生じていることを懸念いたしております。これからも日本が引き続き世界で技術競争力を維持していく為には有能な人材を育成して行かなければなりません。

平成28年（2016）、工学部は「理工学部」と「生物資源産業学部」に再編され、今まで以上に幅広い知識を有する人材を育成できる体制が構築できました。これからも引き続き国際社会が求める優秀な人材を輩出して戴けることと期待いたしております。母校の今後益々の発展を祈念し、お祝いのご挨拶とさせていただきます。



学部構内にある工業会館

歴代校長・学部長



初代学校長
小溝 茂橘
[1922.12 - 1932.3]



第2代学校長
松本 岩太郎
[1932.3 - 1941.3]



第3代学校長
北沢 忠男
[1941.3 - 1943.7]



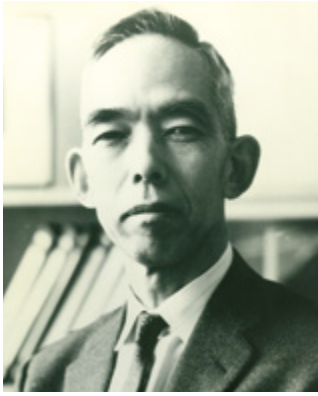
第4代学校長
初代工学部長
久保 進
[1943.7 - 1951.3]
[1949.5 - 1952.2]



第2、8代工学部長
石黒 美種
[1952.2 - 1958.2]
[1969.4 - 1971.3]



第3代工学部長
高杉 悌一郎
[1958.2 - 1960.2]



第4代工学部長
松田 亮一
[1960.2 - 1962.2]



第5代工学部長
久米 泰三
[1962.2 - 1965.3]



第6代工学部長
鈴木 喜彦
[1965.4 - 1967.3]



第7、10代工学部長
荒木 謙一
[1967.4 - 1969.3]
[1977.4 - 1978.4]



第9代工学部長
仁田 工吉
[1971.4 - 1977.4]



第11代工学部長
添田 喬
[1978.4 - 1982.1]



第12代工学部長
沖津 泰
[1982.1 - 1988.1]



第13代工学部長
田中 忠
[1988.1 - 1990.1]



第14代工学部長
太田 忠甫
[1990.1 - 1991.3]



第15代工学部長
河野 清
[1991.3 - 1995.4]



第16代工学部長
森吉 孝
[1995.5 - 1999.4]



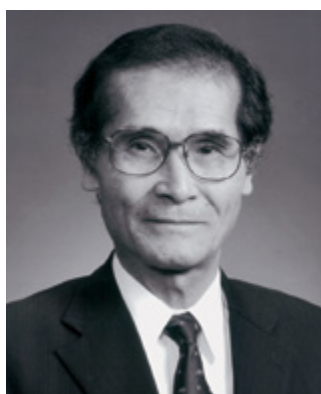
第17代工学部長
川上 博
[1999.5 - 2001.4]



第18代工学部長
芳村 敏夫
[2001.5 - 2003.4]



第19代工学部長
矢野 米雄
[2003.5 - 2007.4]



第20代工学部長
福井 萬壽夫
[2007.5 - 2009.3]



第21代工学部長
大西 徳生
[2009.4 - 2013.3]



第22代工学部長
福富 純一郎
[2013.4 - 2014.3]



第23代工学部長
初代理工学部長
河村 保彦
[2014.4 - 2017.8]
[2016.4 - 2017.8]



第24代工学部長
第2代理工学部長
橋爪 正樹
[2017.9 - 2020.3]
[2017.9 - 2020.3]



第25代工学部長
第3代理工学部長
山中 英生
[2020.4 - 2022.3]
[2020.4 - 2022.3]



初代生物資源産業学部長
辻 明彦
[2016.4 - 2018.3]



第2代生物資源産業学部長
横井川 久己男
[2018.4 - 2020.3]



第3代生物資源産業学部長
長宗 秀明
[2020.4 - 2022.3]

徳島高等工業学校創立から 徳島大学工学部への歩み

大正11年（1922）12月15日に徳島高等工業学校の設置場所が徳島市常三島町と決定された。当時の常三島は、吉野川の堤防まで一望することができ、一面に田畑が広がり、家らしきものはほとんどなく「号外も常三島はただ歩き」と川柳に詠まれたほど淋しい場所であった。第一回入学試験は、大正12年（1923）3月18日から3日間、徳島と大阪で行われ、入学生は土木工学科35名、機械工学科37名、応用化学科35名の計107名であった。第一回生を送り出す卒業式は大正15年（1926）3月15日に挙行され、土木工学科31名、機械工学科22名、応用化学科製薬化学部16名、応用化学科農産工業化学部8名に晴れの卒業証書が授与された。



徳島高等工業学校

昭和12年（1937）には、応用化学科製薬化学部が独立し製薬化学科が設置された。製薬化学科の創設は本校創設からの懸案事項であった。卒業生は社会の求人に応じきれない状況にあり、

入学志願者も常に定員の10倍を超えていた。昭和14年度（1939）には、工作機械科が設置された。これは、機械工業が発展するとともに、既設の機械工学が担う分野が広がり、専門分野を工作機械、原動機械、鉱山機械、化学機械、精密機械、航空工学などに細分化する必要が生じたためである。昭和15年（1940）には、電気工学科が設置され、入学志願者は184名あり、その内41名が入学を許可された。

昭和8年（1933）8月に、本校の卒業生相互の親睦をはかり母校の発展を助け、さらには工業の発展を期するための組織である「徳島工業会」が発足した。本会は、本校卒業生および修業生で組織し、学校長を会長とし、その下に役員として評議員と幹事を置き、会報や会員名簿を発行し、適宜その他の事業を行うことを目的とした。

昭和12年（1937）7月、日中戦争が勃発し、非常時に対処するために9月から国民精神総動員運動が実施された。翌年4月には、「国民総動員法」が公布され、国をあげての戦時体制がつくられた。こうした時勢は、学校教育にも大きな影響を与えずにおかなかった。

文部省令第28号により、昭和19年（1944）4月に、徳島高等工業学校は徳島工業専門学校に改称された。同時に科名も変更され、土木工学科は土木科、機械工学科は機械科、製薬化学科は製薬工業科、応用化学科は化学工業科、電気工学科は電気科になった。また、工作機械科は機械科に併合され、機械科に第二部（夜間部）と造船科が設置された。昭和20年（1945）3月には「決戦教育措置要綱」が閣議決定され、「国民学校」高等科の生徒から大学の学生に至るまでが、同年4月1日から翌年3月31日までの期間、学校で授業を受けることを停止させられた。これによって、本校からも学生の姿が全く消えてしまった。

昭和20年（1945）8月15日、ついにわが国はポツダム宣言を受諾し、終戦を迎えた。文部省は8月28日に全ての学校に対し授業の再開を訓令した。9月から本校では焼け残った工業会館や機械科、電気科の教室の一部を使用し、二部制をもって授業を再開した。昭和20年（1945）入学者は、県内出身者が半数近くを占め、それを含めた四国出身の入学生が約70%を占めていた。これが昭和22年（1947）入学生になると、さらに県内出身者が増えて実に60%近くになり、四国の出身者は80%をはるかに超すまでになった。これは、厳しい食糧事情や経済的事情から、できるだけ近くの学校への進学を余儀なくされた結果だと思われる。また、戦後の教育制度の改革によって、専門学校にも男女共学が実施された。本校では昭和22年（1947）に、初めて製薬工業科に女子が1名入学した。翌年には、同じ製薬工業科に4名が入学した。

昭和24年（1949）に教育制度の根本的な大改革が実施され、同年5月31日の国立学校設置法の公布により、旧制の高等学校、師範学校、専門学校、高等師範学校、大学などを併せて新制大学が発足した。新しい学校教育法では、「大学は学術の中心として広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授、研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開することを目的とする」と規定され、従来の学問のための大学から、教養ある市民を育成する大学に変わった点に基本的特色があった。徳島大学は、学芸学部、医学部、工学部の3学部をもって発足し、初代学長には徳島医科大学長であった中田篤郎博士が就任した。徳島工業専門学校から昇格した工学部は、土木工学科、機械工学科、応用化学科、薬学科、電気工学科の5学部をもってスタートした。造船科はこの時に、5年余の短い歴史を閉じた。初代工学部長には、徳島工専校長の久保進教授が就任した。発足当初の入学定員は190名であった。第1回の大学入学試験は、昭和24年（1949）6月8日、9日の両日、徳島市と岡山市で実施され、入学式は7月15日に工学部講堂で行われ、167名が入学を許可された。

昭和25年（1950）には、徳島大学評議会が設置され、工学部規定も制定された。8月に、米国工業教育視察団が来日し、調査を行い、工業教育に対する勧告を行った。この年、徳大整備計画が議論され、各学部の充実や薬学部の蔵本キャンパスへの設置、北常三島の総合運動場の活用、教養教育棟の増棟など計画案の大綱が示された。昭和26年（1951）3月には、工学部薬学科が昇格し、薬学部として独立した。3月26日に徳島工専最後の卒業生162名を送り出し、旧制徳島工業専門学校は閉校となった。昭和29年（1954）3月には勤労学生を対象とした夜間3年制の徳島工業短期大学部（以下、工短大と記す）が入学定員40名の機械科と電気科の2学科制で新設された。昭和30年（1955）7月に医学部に大学院が設置されたのを契機として、工学部にも大学院を設置するべく、その第一歩として、工学専攻科の設置を申請した。昭和31年（1956）3月には、4専攻それぞれ入学定員5名、計20名の工学専攻科の設置が認められた。理工学ブームにより、大学も学科増、入学定員増の時代に入り、本学部も昭和32年（1957）には、機械工学科、応用化学科、電気工学科の3学科で15名、さらに昭和33年（1958）には35名の増募を行った。また、この年に工短大に入学定員40名の土木科が設置された。昭和36年（1961）には、入学定員40名の精密機械工学科が、機械工学科から1講座（自動制御）を持出して設置された。またこの年、昭和34年（1959）に完成した応用化学棟を延長して、化学・土木工学科棟の鉄筋コンクリート3階建の工事が開始されている。

国立の新制大学にも大学院工学研究科の設置を希望する声が強くなり、工学研究科修士課程が、昭和39年（1964）4月に認められた。入学定員は土木工学専攻8名、機械工学専攻8名、応用化学専攻12名、電気工学専攻10名の合計38名。4月22、23日に入学試験を行い、23名が入学を許可された。

昭和41年（1966）7月に、計算機TOSBAC-3400が電気工学科棟内に設置され、電子計算機センターが開設された。昭和43年（1968）

は各地に大学紛争がおこり、激動の年となった。昭和44年（1969）4月に入学定員40名の建設工学科が設置され、念願だった4系列8学科が完成した。

昭和45年（1970）に北村義男学長は、学生と大学との間に意思の疎通があるとして、徳島大学広報委員会を発足させ、「徳大広報」を刊行した。さらに徳島大学大学改革委員会を設置し、改革すべき問題点があれば取り上げ、大学改革を進めることとなった。さらに工学部50周年記念行事が催された昭和48年（1973）に、情報工学科が設置され、入学定員は375名となった。情報工学科は、情報科学、技術の急速な発展とともに研究者・技術者の需要が急激に増加したため、社会の要請に応えるために設置したものである。この後、学科の講座増設に移り、昭和54年（1979）に機械工学科に動力工学、昭和56年（1981）に電気工学科に应用電気工学、昭和57年（1982）に精密機械工学科に精密機械設計学、昭和60年（1985）に電子工学科に光電子工学、また共通講座には昭和47年（1972）に工業数学第二と昭和48年（1973）に情報処理工学の講座が増設され、入学定員は415名となった。昭和60年（1985）代より第2次ベビーブームの影響で大学進学希望者が急増したので、工学部を中心に臨時増募することになった。本工学部でも昭和61年（1986）に入学定員を60名増やしたために、475名と急増した。

昭和63年（1988）に、バイオテクノロジーに携わる研究者・技術者の育成のための生物工学科が、入学定員40名で設置された。これによって、入学定員は515名となった。これと同時に大規模な改組が行われた。すなわち、既設の9学科の内、情報工学科を除いた8学科について、系列の2学科を1学科にまとめて4学科とし、さらにそれぞれの学科を3大講座に再編成した。これは、従来の教授1名、助教授1名、助手1名の小講座制に代わって、複数名の教授、助教授、助手からなる大講座制に編成替えることにより教育・研究の多様化・高度化に対応しようとしたものである。

平成3年（1991）に、昭和63年（1988）の

学部の改組・再編成に基づき、修士課程9専攻を博士前期課程（建設工学、機械工学、化学応用工学、電気電子工学および知能情報工学専攻）として入学定員74名で再編成し、同時に、高度の研究能力を持つ研究者・技術者を育成するために、博士後期課程（物質工学、生産開発工学およびシステム工学専攻）を入学定員17名で設置した。

平成5年（1993）に徳島大学工業短期大学部が廃止され、本学部を2コースに改組した。すなわち、従来通り昼間に教育を行う昼間コース（入学定員655名、内編入学定員40名）と、夜間に勤労者や社会人のための教育を行う夜間主コース（入学定員100名）とに分けた。それに伴い、建設工学科、機械工学科、および電気電子工学科に、それぞれ社会システム工学、生産システムおよび知能電子回路の大講座を増設した。この年に、光技術の教育・研究をするための光応用工学科が設置された。この学科は入学定員50名で2大講座（光機能材料、光情報システム）から成っている。なお、徳島大学工業短期大学は平成8年（1996）3月に最後の卒業生206名を送り出し、勤労者に対する夜間工業教育機関の使命を果たし、42年間の歴史の幕を閉じた。昭和29年（1954）の開学以来、卒業生は4,500名を数え、地元だけでなく、全国、各方面で活躍する人材を輩出した。

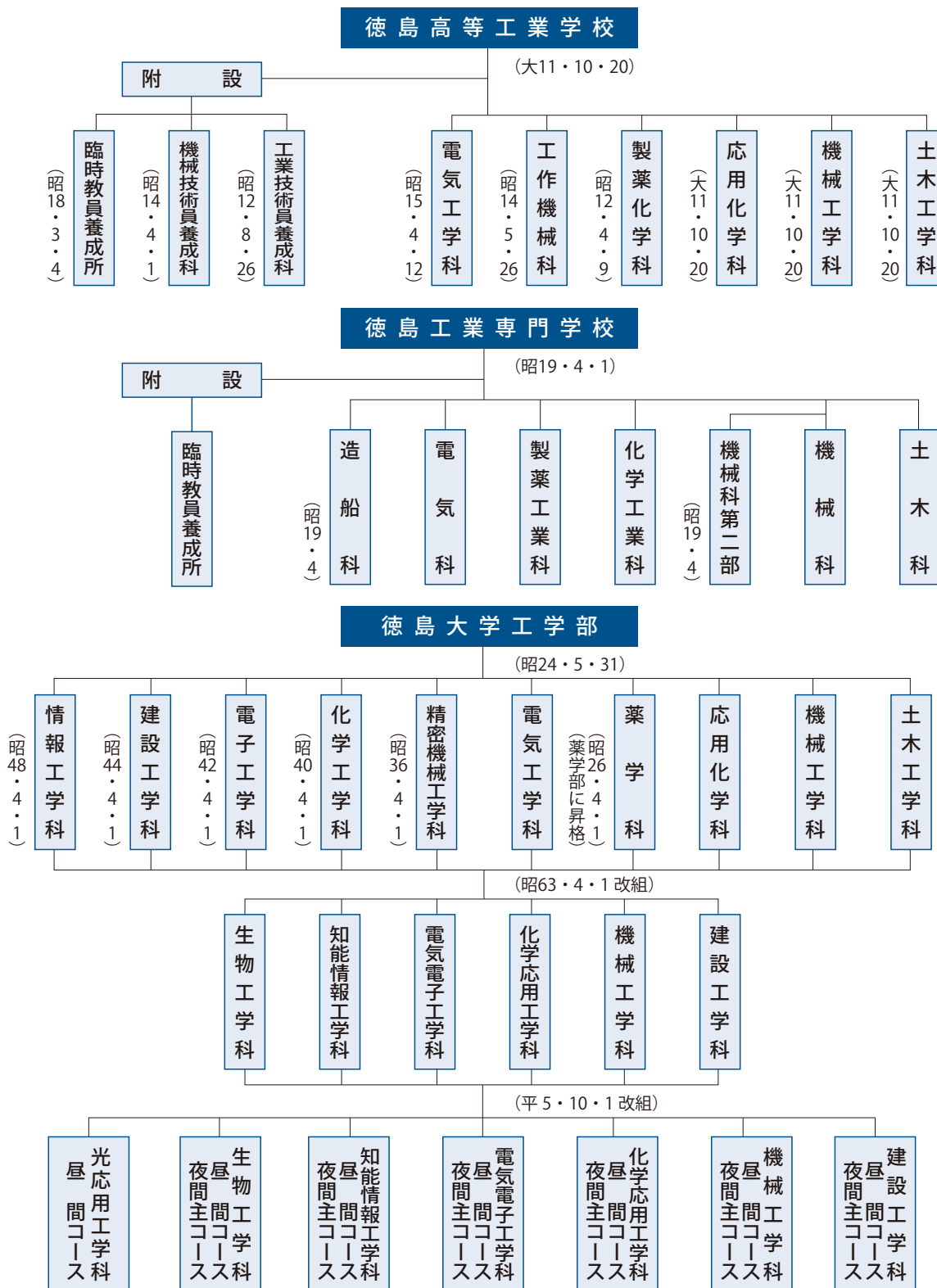
平成9年（1997）に、大学院にエコシステム工学専攻が設置された。これは、学部基礎となる学科を持たない独立専攻であり、社会・環境問題をエコシステムの観点から研究し、政策策定や問題解決技術を独自に開発できる技術者の養成を目的としたものである。学部教育については、平成5年（1993）に教養部が廃止され、従来の教養部での教育を全学共通に変え、教養教育と専門教育を4年間一貫して行うことになった。そのために、まず教養教育を1年次から3年次までの「ピラミッド型」とし、専門教育を「逆ピラミッド型」とした。次に、「履修の手引き－講義概要」を通して、専門教育での講義内容をシラバスにより詳しく説明し、教官による自己点検・評価や学生による授業評価

に基づいて、この内容を毎年修正するようにした。大学院教育については、博士前期課程の学生が増加しているのので、ゼミや演習を多く取り入れ、かつ視聴覚機器やコンピュータを用いて

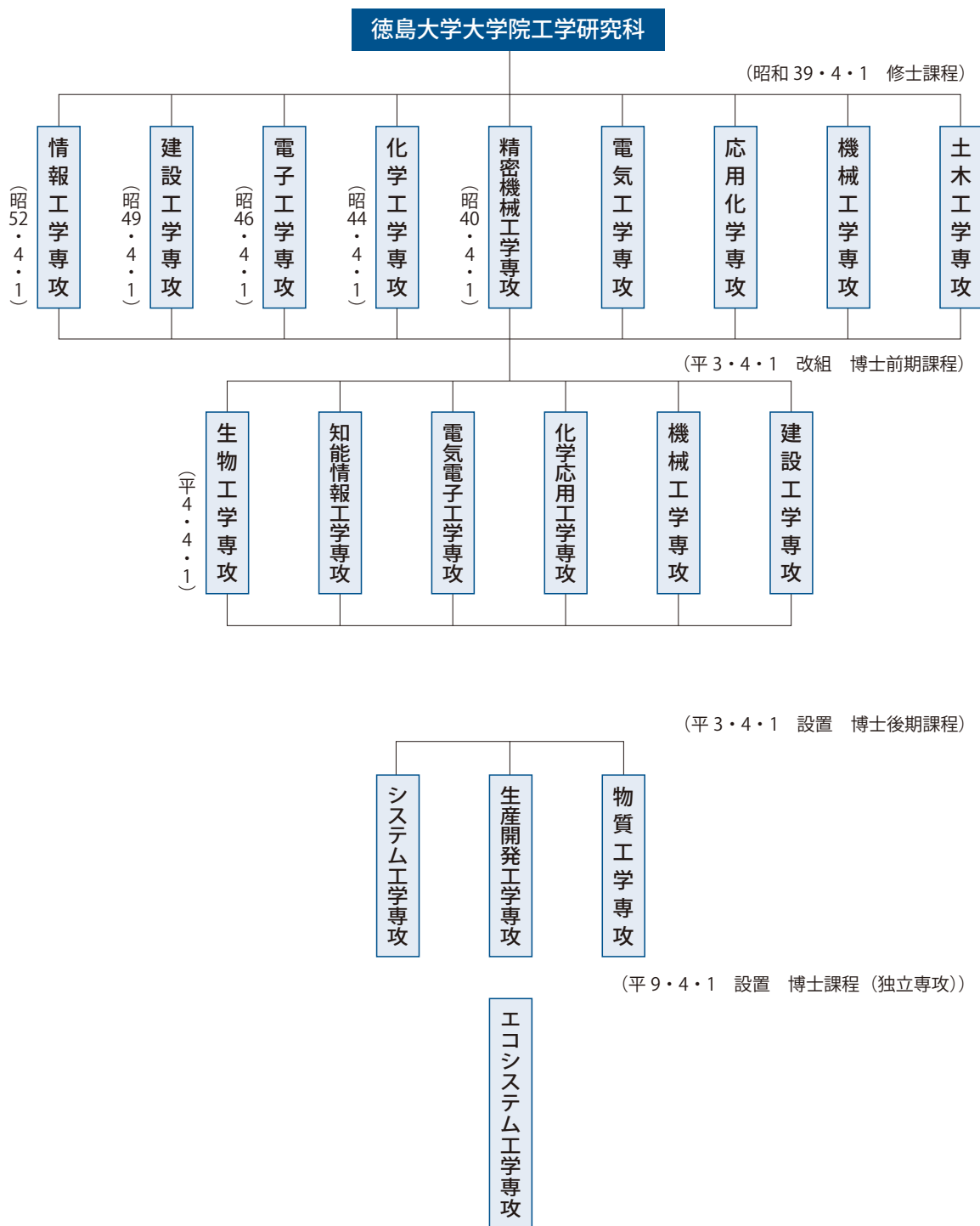
講義に工夫を凝らした。

次表に徳島高等工業学校開設からの徳島大学工学部および徳島大学大学院工学研究科の沿革を示す。

徳島大学工学部の沿革



徳島大学大学院工学研究科の沿革



工学部各学科・独立専攻・共通講座・事務部の歩み

共通講座、工学基礎講座、工学基礎教育センター

工学部において長く工学基礎教育を支えていた共通講座は、徳島大学発足時の工業数学教室および工業物理学教室が始まりである。工業数学教室は、昭和47年（1972）に工業数学第二講座が、昭和48年（1973）には情報処理工学講座が増設された。

昭和63年（1988）4月の工学部改組にともない、情報処理工学講座は知能情報工学科に吸収されるとともに、工業数学第一講座、工業数学第二講座、および工業物理学講座はそれぞれ工学基礎A講座、工学基礎B講座、工学基礎C

講座に名称変更した。平成3年（1991）には大学院工学研究科博士後期課程が設置され、工学基礎A講座と工学基礎B講座の教官はシステム工学専攻に、工学基礎C講座の教員は物質工学専攻に所属することになった。平成5年（1993）10月に工業短期大学の廃止にともない、工業短期大学所属の教官が工学基礎講座に転入した。工学基礎講座は平成18年（2006）4月に改組にともない工学基礎教育センターに名称変更した。

75周年までの歩みは「徳島大学工学部七十五年史」を参照していただくとして、創立75周年当時（平成9年（1997）10月）の工学基礎講座のスタッフのリストは以下の通りである。

平成9年（1997年、工学部75周年）当時の工学基礎講座教職員組織

教職員名	
数学	今井仁司教授、篠原能材教授、長町重昭教授、香田温人助教授、澤下教親助教授、深貝暢良助教授、竹内敏己講師、岡本邦也助手、坂口秀雄助手
物理	多木俊彦教授、金城辰夫教授、大野 隆助教授、道廣嘉隆講師、岸本 豊講師、中村浩一助手

平成10年（1998）から平成19年（2007）

平成11年（1999）1月に岡本邦也助手が講師に昇任した。3月に篠原能材教授が定年退官した。篠原名誉教授はちょうど大学院経営情報学研究科経営情報学専攻（修士課程）が設置されたばかりの四国大学に異動して、経営情報学部長としても四国大学に尽力した。4月には、竹内敏己講師が助教授に昇任し、金成海講師が財団法人・高度情報科学技術研究機構より着任した。金講師は平成14年（2002）4月に徳島大学留学生センターに教授として異動され、令和5年（2023）現在も高等教育研究センター教授として在職されている。7月に中井利仁助教授が着任し、平成12年（2000）3月に辞職した。

平成13年（2001）3月に多木敏彦教授が定年退官した。11月に中村浩一助手は講師に昇

任した。平成14年（2002）6月に大阪大学から川崎祐助手が着任した。平成15年（2003）4月に竹内敏己助教授が教授に昇任した。

バングラデシュからの留学生として本講座で学位を取得したムハマンド・ラフマン氏が、平成16年（2004）4月から「先端工学教育研究プロジェクト」助手として着任した。

平成17年（2005）3月に金城辰夫教授が定年退職した。また、同時に澤下教親助教授も退職した。4月に岸本豊講師が教授に、川崎祐助手は講師に昇任した。6月にムハマド・ラフマン助手が岡山大学地球物質科学研究センターに転出した。10月には広島大学より高橋浩樹助教授が着任した。

平成18年（2006）4月から大学院重点化にともない、今井教授・竹内教授・深貝准教授・

岡本講師が建設工学科・大学院建設創造システム工学コース、長町教授・大野教授・高橋准教授・川崎講師・坂口助教は電気電子工学科・大学院電気電子創生コース、岸本教授は光応用工学科・大学院光システム工学コース、道廣准教授・中村講師は機械工学科・大学院機械創造システム工学コースを併任することになった。同時に、共通講座は発展的に解消して工学基礎教育センターに改められた。

平成18年(2006)6月に、川崎祐講師は「大学教育の国際化推進プログラム」により、スイスのポール・シェラー研究所へ出張した。平成19年1月に、川崎祐講師はスイスのポール・シェラー研究所から帰国した。

平成20年(2008)から平成27年(2015)

平成21年(2009)3月に高橋浩樹准教授が広島大学に転出した。4月に室蘭工業大学日本学術振興会特別研究員(PD)であった水野義紀准教授が着任した。

平成22年(2010)3月に大野隆教授が定年退職した。平成23年(2011)3月には長町重昭教授が定年退職した。平成24年(2012)4月に中村浩一講師は教授に昇任した。10月に道廣嘉隆准教授が突然倒れ、大変残念なことに、平成25年(2013)1月に60歳にて急逝された。

平成25年(2013)8月に高橋浩樹教授が広島大学から着任した。11月に川崎祐講師は准教授に昇任した。また、残念なことに、12月に金城辰夫名誉教授が逝去された。享年74歳であった。

平成26年(2014)9月今井仁司教授が退職して同志社大学に転出した。10月に犬飼宗弘講師が京都大学から着任した。

総合科学部総合理数学科等

創立は、徳島大学内でも一番古く明治7年(1874)5月に徳島師範期成学校が創設(旧徳島城西の丸藩校跡)され、のち徳島県師範学校・官立徳島師範学校などに改称した。また、明治11年(1878)12月に徳島女子師範学校が創設され、徳島青年師範学校等に改称された後、こ

れら二つの学校が、後に昭和24年(1949)5月に国立大学徳島大学の設置に伴い学芸学部となる。詳しくは、徳島大学50年史をご覧ください。昭和41年(1966)4月に学芸学部を教育学部と改称(平成2年(1990)3月廃止)した。後の昭和61年(1986)4月に総合科学部(総合科学科)を設置するとともに、教育学部附属の小学校・中学校・幼稚園・養護学校を鳴門教育大学に移管した。昭和40年(1965)4月に教養部が設置され、平成5年(1993)3月をもって教養部が廃止され、総合科学部と合併することにより、総合科学部は、人間社会学科と自然



徳島県師範学校入口
(昭和5年(1930)撮影・写真原本の所有者は渭水会)



徳大学芸学部校舎全景
(昭和35年(1960)3月撮影・写真原本の所有者は渭水会)



教育学部は総合科学部に改組される。
総合科学部創設記念式典
(昭和61年(1986)10月15日撮影・
渭水会所有の渭水会会報第1号より)

システム学科の2学科に改組される。平成6年(1994)4月に大学院人間・自然環境研究科を設置(平成21年(2009)大学院総合科学教育部に改組)する。平成21年(2009)4月に博士後期課程設置に伴い、教員所属が大学院ソシオ・アート・アンド・サイエンス研究部(平成28年(2016)大学院総合科学研究部に改称)となった。



改築後の現在の総合科学部3号館(旧教養部A館)

建設工学科

社会基盤デザインコースの前身である建設工学科の創立からの組織(建設工学科ならびに建設系学科やコースの教員および職員)の変遷を表1に一覧表でまとめた。なお、本表は、技術職員として令和2年(2020)まで勤務された梅岡秀博氏が作成したものである。

建設工学科は、昭和24年(1949)に土木工学科として発足した。以下は、創設から工学部時代の教員の人事の変遷を中心に紹介する。

土木工学科の変遷

教育制度の改革により徳島大学が発足した昭和24年(1949)に、工学部土木工学科として出発し、昭和33年(1958)に工業短期大学部に土木科が設置されて、工短大が廃止されるまで工学部と工短大の両学科で融合運営がなされてきた。

土木工学科は、徳島工専の土木科を引継いで、昭和24年(1949)にスタートした。土木工学科の発足時から昭和26年(1951)にかけての教官陣は、第一講座(構造力学、橋梁工学)が大野諫教授、青木康夫講師、水野俊一助手、第

二講座(水理学、河川工学、港湾工学)が久宝保教授、堀俊之講師、田中要三助手、第三講座(土質力学、施工法、鉄道工学、道路工学)が久保田敬一教授、森吉満助助教授、泉英世助手、第四講座(鉄筋コンクリート、土木材料学)が荒木謙一助教授、廣瀬嘉治助手であった。

昭和33年(1958)には、工短大に土木科が新設された。森吉満助助教授がその道路工学研究室の教授に昇任し、その充実、発展に努めた。昭和34年(1959)には、青木康夫助教授が工短大にできた衛生工学研究室の教授に昇任した。この年に久宝保教授が日本大学へ、田中要三助教授が学外へ転出され、後任として昭和35年(1960)に杉尾捨三郎教授が信州大学から、榎木亨助教授が京都大学から着任し、新風を吹き込んだ。榎木亨助教授は約2年間在任し、その後任に建設省土木研究所から三井宏助教授が、また昭和37年(1962)に、京都大学大学院修士課程を修了した児嶋弘行講師が着任した。

昭和39年(1964)に、大学院工学研究科修士課程土木工学専攻が設置された。昭和44年(1969)に、土木工学分野の拡大と多様化に対応するため、土質工学、土木防災学、土木計画学、土木設計学の4講座からなる建設工学科が、入学定員40名で設置された。

工学部創立50周年を迎えた昭和48年(1973)に、大学院工学研究科に建設工学専攻が設置され、土木工学科の構造工学、水工学、交通工学、コンクリート工学の4講座、建設工学科の4講座、工短大土木工学科の道路工学、衛生工学の2講座を合わせて計10講座となり、土木系学科の融合運営並びに教育・研究が行われてきた。

昭和63年(1988)に行われた大規模な改組により、既設の土木工学科、建設工学科は、2学科8小講座体制から3大講座(建設構造工学、環境整備工学、社会基盤工学)の建設工学科に再編・統合された。

これに伴い、大学院工学研究科の土木工学、建設工学の2専攻も建設工学専攻に再編・統合された。平成5年(1993)には、工短大が廃止され、代わって夜間主コースが設置された。そのため、建設工学科は20名の定員増となり、

環境情報・景観工学などの教育・研究を目的とした社会システム学大講座が増設された。

昭和45年(1970)4月に、土木設計学講座に京都大学から宇都宮英彦講師が着任し、土木計画学講座に昭和47年(1972)に建設省から定井喜明教授、京都大学から青山吉隆講師が着任した。

建設工学科の変遷

昭和48年(1973)に、水口裕之助手(コンクリート工学)、岡部健士助手(土木防災学)、藤目節夫助手(土木計画学)および井上賢太郎技官がそれぞれ着任し、佐々木英治助手は横浜市水道局に転職した。

昭和49年(1974)に、河野清助教授(コンクリート工学)が教授に昇任し、荒木謙一教授はコンクリート工学講座より交通工学講座に所属換えした。高橋政一助手(土質工学)が着任し、筒井茂明助手は琉球大学に転出した。また高畑健二技官の転職に伴い、梅岡秀博技官が着任した。昭和50年(1975)に、越智裕助手(水工学)、松岡正己助手(交通工学)が着任した。瀬川浩司助教授は病気のため退職し、藤目節夫助手は愛媛大学に転出した。昭和51年(1976)に、井上了助手(交通工学)が着任し、松岡正己助手はJR四国に転職し、妹尾恒技官の所属換えに伴い太田寛二技官が着任した。

昭和52年(1977)に、木野戸重信助手(構造工学)、森谷久吉助手(土木計画学)が着任した。西野泰正技官の所属換えに伴い、吉川よし江技官が着任した。昭和53年(1978)には、堀田政国助手(土質工学)が着任し、荒木謙一教授が停年退官し、また越智裕助手、井上了助手、木野戸重信助手、森谷久吉助手らが転職した。

昭和54年(1979)に、短大・高専からの補欠入学生の編入学年を2年次から3年次に変更した。澤田健吉教授(交通工学)、成行義文助手(構造工学)が着任し、また建設共通の土川資生技官の所属換えに伴い、杉本員代技官が着任した。また、昭和55年(1980)には、西内剛三助手(水工学)が着任した。昭和56年(1981)には、宇都宮英彦助教授(土木設計学)が教授に昇任し、近藤光男助手(土木計画学)が着任し、堀田政国助手

が転職した。昭和57年(1982)には、太田寛二技官の所属換えに伴い土田章仁技官が着任した。

昭和58年(1983)から平成4年(1992)昭和58年(1983)に、堀井克章助手(コンクリート工学)、植田康宏助手(土質工学)および椎野彰浩助手(土木設計学)が着任した。小田英一教授、杉尾捨三郎教授が停年退官し、西内剛三助手は退職した。昭和59年(1984)には、加藤憲一助手(水工学)、長尾文明助手(土木設計学)が着任し、椎野彰浩助手は貞光工業高等学校に転出した。昭和60年(1985)に、端野道夫助教授(土木防災学)および山上拓男助教授(土質工学)がそれぞれ教授に昇任し、堀井克章助手は阿南高専に転出した。

昭和61年(1986)に、加藤憲一助手は転職した。昭和62年(1987)に、臨時増募のために土木系学科では10名の入学定員増となり、それに伴い教官の定員増があった。工短大より平尾潔教授が構造工学講座に配置換えし、青山吉隆助教授(土木計画学)が教授に昇任した。中野晋講師(水工学)、島弘講師(コンクリート工学)が着任し、尾島勝助教授は福山大学教授に昇任し、また荒井敏文技官は転職した。

昭和63年(1988)に、土木工学科、建設工学科は建設工学科に統合され、2学科8小講座体制から3大講座に再編成された。すなわち、建設構造工学大講座(コンクリート工学、風工学、構造工学)、環境整備工学大講座(海岸工学、河川・水文)および社会基盤工学大講座(都市・地域計画、基礎工学、地盤工学)になり、入学定員は90名(臨時増募による10名を含む)になった。ヴィラチ・ルンロサーラティス助手(建設構造工学)、吉田弘助手(環境整備工学)、鈴木壽助教授(社会基盤工学)、安富英樹助手(同)および小嶋啓介助手(同)が着任し、また植田康宏講師は転職した。

平成2年(1990)には、廣瀬義伸助手(社会基盤工学)が着任し、ヴィラチ・ルンロサーラティス助手は退職した。鍛冶公美技官の停年退官に伴い、平成3年(1991)1月に石丸啓輔技官が着任した。

平成3年(1991)に、学部改組の一環とし

て大学院の土木工学、建設工学の2専攻を建設工学専攻に再編成した。中正康広助手（社会基盤工学）が着任し、定井喜明教授は停年退官し、また安富英樹助手は転職した。平成4年(1992)に、小川洋二助手（建設構造工学）、三島豊秋助手（環境整備工学）が着任し、小嶋啓介助手は福井大学に転出した。

平成5年（1993）には、工短大が廃止され、勤労者や社会人のための夜間主コースが工学部内に設置され、社会システム工学大講座を増設した。工短大に所属していた村上仁士教授、伊藤禎彦助教授が環境整備工学大講座に、水口裕之教授、山中英生助教授および横井克則助手が社会システム工学大講座にそれぞれ転入した。臨時増募に伴って増えた教授席にポペスク教授を1年間招聘し、児嶋弘行助教授は徳島文理大学教授に昇任し、中正康広助手は転職した。

平成6年（1994）に、米崎武夫技官は総合情報処理センターに所属換えになった。平成7年（1995）には、三岩敬孝助手（建設構造工学）、ピーター・シュラター助手（同）および細野和博助手（社会基盤工学）が着任し、小川洋二助手と三島豊秋助手は転職した。

平成8年（1996）に、澤田勉助教授と近藤光男助教授がともに社会基盤工学講座の教授に昇任した。上月康則講師（環境整備工学）、北野利一助手（同）、蔣景彩助手（社会基盤工学）および上田隆雄助手（社会システム工学）が着任した。澤田健吉教授は停年退官し、青山吉隆教授および伊藤禎彦助教授は京都大学に配置換えし、細野和博助手は転職した。

平成9年（1997）に、山中英生助教授が教授に昇任し、橋本親典助教授（建設構造工学）、姚華夏助教授（環境整備工学）および山口行一助手（社会システム工学）が着任した。また、酒部義宏教務員（建設構造工学）は助手に昇任し、島弘助教授は高知工科大教授に昇任した。エコシステム工学専攻が設置され、村上仁士教授、近藤光男教授、成行義文助教授、並びに上月康則講師は助教授に昇任し所属換えとなった。

平成10年（1998）以降は、組織が目まぐるしく変わったため、教員の所属は研究室名で表

記する。また、退職や転職に関しては、表1を参照していただきたい。

平成10年（1998）に、山地功二助手（コンクリート研究室）、上野勝利講師（基礎研究室）、鎌田磨人助教授（環境保全研究室）が着任した。

平成11年（1999）に、野田稔助手（風研究室）が鳥取大学から配置換えとして着任した。

平成12年（2000）に、滑川達講師（都市デザイン研究室）、三神厚助手（環境保全研究室）、倉田健吾助手（環境衛生研究室）、渡邊健助手（コンクリート研究室）、竹林洋史助手（河川・水文研究室）が着任した。

平成13年（2001）に、三宅正弘助手（都市デザイン研究室）が着任した。

平成15年（2003）に、渡辺公次郎助手（都市・地域計画研究室）が着任した。

平成17年（2005）に、白澤多一助手（風研究室）が着任した。

平成19年（2007）に、真田純子助手（都市デザイン研究室）、山中亮一講師（環境衛生研究室）が横浜国大から配置換えとして着任した。

平成20年（2008）に、田村隆雄助手（河川・水文研究室）が高松高専から配置換えとして着任、佐藤弘美助手（構造研究室）が着任した。

平成21年（2009）に、奥嶋政嗣准教授（都市・地域計画研究室）が岐阜大学から配置換えとして着任し、河口洋一准教授（生態系管理研究室）が九州大学から配置換えとして着任し、田代優秋助手（環境衛生研究室）が着任した。

平成22年（2010）に、渦岡良介教授（地盤研究室）が東北大学から、武藤裕則教授（河川・水文研究室）が京都大学からそれぞれ配置換えとして着任した。また、大角恒雄教授（基礎研究室）と石田達憲助手（環境衛生研究室）が着任した。

平成23年（2011）に、塚越雅幸助手（維持再生研究室）が着任した。

平成25年（2013）に、山城明日香助手（生態系管理研究室）が着任した。

平成26年（2014）に、井上貴文助手（構造研究室）が着任した。

平成27年（2015）に、馬場俊孝教授（地震研究室）が着任した。

機械系学科

機械工学科の発足

機械工学科は旧制・徳島工専の機械科を引き継いでスタートした。昭和24年（1949）の発足時は入学定員20名であった。機械工学科は5講座で構成され、当時の教官は、第一講座（材料関係）が横瀬彰教授、稲田貞俊助教授、秋園幸一講師、第二講座（流体関係）が高杉悌一郎教授、渡部孝助教授、川人明美助手、第三講座（熱関係）が牧忠教授、第四講座（設計、工作関係）が賀勢晋助教授、雄倉伸明助教授、金野仁助手、第五講座（造船関係）が土田幸雄教授、佐々木馨講師、田上重美助手であった。当時は教育・研究の傍ら、戦災で損傷した実験・実習用の機械設備・装置の復旧修理をすることも重要な任務であり、この修理には復興基金が与えられた。

第一講座では材料関係の教育・研究を担当した。焼失を免れた金属組織学研究室、東邦レーヨン記念館を実験室として、アムスラー、オルセン、アベリー万能試験機、摩擦試験機、高速軸受試験機などが並べられ実験研究を行っていた。

第二講座では流体関係の教育・研究を担当した。水力実験室にはフランスス水車などが設置されていた。また別棟ポンプ試験室が作られ、タービンポンプ、ベルト水車、渦巻ポンプなどを備え、研究を行っていた。

第三講座では熱力学、内燃機関などの教育・研究を担当した。棟瓦建の熱機関実験室は工学部の象徴的な存在であり、フライホイールを持つ30馬力ラストンディーゼル、冷凍機、焼玉エンジン、縦型煙管ボイラーなどが並んでいた。

第四講座では機械設計、工作法、測定法などの分野を担当した。また、工場を管理し、工作実習も担当した。鍛工場のエアハンマー、機械工場の旋盤、歯切盤などを修復し、活躍していた。特に卒業研究では試験片や実験装置の作製で、工場は常に繁盛していた。

第五講座では造船関係の教育・研究を担当した。以前は工専の造船科であり、工学部への昇格の際に機械工学科第五講座となった。この講座は工学部北端の建物内にあり、製図室、実験

室を備え、大規模な船型試験水槽があって模型船の抵抗試験などを行っていた。

その後、機械工学・工業の発展に伴い、昭和34年（1959）には入学定員が40名に増加した。

工短大に機械科の新設

昭和29年（1954）には、勤労者教育を目的として工短大に入学定員40名の機械科が設置され、翌30年（1955）に同科の初代教授に第一講座の稲田貞俊助教授が昇任した。当時の入学志願者は定員の3倍強もあり、そのほとんどは勤労学生であり、徳島県内だけでなく日本各地から志願者が集まった。人文、社会、自然の一般教養科目のほかに外国語、体育を必修とした。機械専門科目としては工業数学、応用物理学、機械力学、材料力学、水力学、熱力学、機械設計、設計製図などがあり、工学部機械工学科に似たカリキュラムを編成し、中堅技術者の養成を目指した。

精密機械工学科の設置

昭和36年（1961）には、入学定員40名の精密機械工学科が設置された。同科は4講座から成り、第一講座は精密加工、第二講座は精密測定、第三講座は非破壊検査、第四講座は自動制御に関する教育・研究を担当し、各講座はそれぞれ、教授1名、助教授1名、講師または助手1名および技官1名で構成されていた。

精密工学科の特色は「精密」というイメージを前面に強く打ち出したところにある。そのため、機械工学科から工作部門を持ち出し、機械工学科と精密機械工学科はそれぞれ4講座に再編された。この時点で機械関連学科は工学部の機械工学科、精密機械工学科の2科と工短大の機械科の合計3科となり、融合運営により教育・研究活動を行うことになった。その頃から、これら3科を一括して「機械系学科」と呼んだ。

大学院工学研究科修士課程の設置

昭和39年（1964）に、大学院工学研究科修士課程が設置され、入学定員8名の機械工学専攻が発足した。昭和41年（1966）には第一回

修了生を送り出した。

昭和40年（1965）に、学年進行に伴い、入学定員8名の精密機械工学専攻が設置された。これにより機械系学科は、学部・修士課程の一貫教育体制が整い、より高度な技術者・研究者を送り出すことができるようになった。

昭和42年（1967）には、精密機械工学科を母体として、工短大に入学定員40名の精密機械科が設置された。当初のカリキュラムは、工短大機械科とほぼ同じであったが、工学部精密機械工学科の影響を受けて、次第に特色のあるものになっていった。これにより機械系学科の工短大専任教官は機械科、精密機械科ともに教授2名、助教授2名、助手1名となり、その教育・研究体制はさらに充実した。工学部と工短大の入学定員は合わせて160名となり、専門知識を身に付けた多くの機械技術者を世に送り出した。その後、昭和44年（1969）に、工短大の機械科は機械工学科に、精密機械科は精密機械工学科を経て昭和53年（1978）には生産機械工学科に科名を変更した。

昭和54年（1979）には、機械工学科において動力工学講座が増設され、入学定員が10名増加して50名となった。

昭和57年（1982）には、精密機械工学科に精密設計講座が増設（3年次編入学定員10名）された。また、この年にパソコン20台を購入し、メカトロニクス教育を開始した。この年、添田喬教授が工学部から初めて学長に就任した。

昭和58年（1983）には、工短大創立30周年記念事業が行われ、エンジン、タービンブレードなどが企業から寄付された。

昭和60年（1985）には、精密機械工学科の創立25周年記念事業が行われ、記念誌「未来への礎」が刊行された。

機械工学科と精密機械工学科の統合

昭和63年（1988）には、大学院博士後期課程設置に伴う大規模な改組が行われた。機械工学科と精密機械工学科が統合され機械工学科となり、3大講座（機械科学、機械システム、知能機械学）に再編成された。機械科学講座は、

材料の力学的性質、機械材料学および機械工学とその周辺分野の複合技術に、機械システム講座は、流れ現象とその応用の流体システム、熱現象とその応用の熱システムおよび設計工学システムに、また知能機械学講座は、ロボット、数値制御工作機械に代表される情報機械に対応するための精密工学、メカトロニクス技術に重点を置き、それぞれ、教育・研究を担うことになった。

平成元年（1989）には、臨時増募の入学定員15名を加えて、機械工学科の入学定員が105名となった。

博士後期課程の設置

平成3年（1991）に博士後期課程が設置された。

工短大の廃止

平成5年（1993）に工短大の学生募集が停止され、機械工学科に入学定員20名の夜間主コースが発足した。それに伴い、工短大の機械工学科および生産機械工学科所属の教職員は全員、工学部機械工学科に配置換えとなり、工学部機械工学科には生産システム大講座が新設されて4大講座体制になった。この大講座はコンピュータ支援による機械設計、素材加工、精密測定、データ処理などに関する教育・研究を担うことになった。これを受けて、大学院機械工学専攻の入学定員は16名になった。また、この年に、旧機械工場と機械工学科の一部の実験室を収める機械実習棟が完成した。平成6年（1994）には光応用工学科の発足に伴い、西岡一水教授、井上哲也助教授、森篤史助手が同学科に配置換えとなった。平成8年（1996）には、工短大が閉学し、機械工学科と生産機械工学科が廃止された。

エコシステム工学専攻の設置

平成9年（1997）には、大学院にエコシステム工学専攻が設置され、三澤弘明教授、三輪恵教授、高木均助教授、清田正徳助教授がこの専攻に配置換えとなった。

創立75周年当時の機械系のスタッフは以下の通りである。

平成9年（1997年、工学部75周年）当時の機械工学科（エコシステム工学専攻教官を除く）教職員組織	
講座名	教職員名
機械科学大講座	猪子教授、坂巻教授、山田教授、吉田助教授、大石講師、岡田（達）講師、松尾助手
機械システム大講座	逢坂教授、大岡教授、中瀬教授、福富教授、森岡教授、一宮講師、木戸口講師、草野助手
知能機械学大講座	今枝教授、小西教授、芳村教授、橋本助教授、日野助教授、浮田助手
生産システム大講座	佐藤教授、英教授、村上教授、岡田（健）助教授、多田助教授、升田助教授、伊藤講師、日下助手

工学部75周年史発刊から平成9年度（1997）末まで

徳島大学工学部機械工学科のルーツである旧制・徳島高等工業学校（旧高工）の設立から旧制・徳島工業専門学校（旧工専）を経て工学部75周年までの機械系学科の歩みについては「創立から75周年までの歩み・機械系学科」に記している。ここでは「徳島大学工学部75周年史」の原稿締め切りから平成9年度（1997）末の間に起こった人事異動や訃報から書き起こす。

平成8年（1996）8月、30年余りにわたって勤務された機械工作センターの平川徳次技官が逝去された。機械工作センターに大崎貴之技官が着任した。平成9年（1997）10月、新制工学部発足直後に機械設計・機械力学講座で助教授を務められた石田誠先生が逝去された。平成10年（1998）3月末には、エネルギーシステム研究室を創設した大岡五三実教授が定年により退官された。また、機械工作センターで19年勤務された古一明良技官が定年により退官された。

以下、年度ごとに学科共通の出来事、昇任人事、転出、新任、機械事務室、ご逝去、ご退職について振り返る。

平成10年度（1998）から平成19年度（2007）

平成10年（1998）7月に待望の機械工学科棟が完成し、引っ越しが行われた。旧機械棟からは旧工専時代まで遡る古い物品が次々と見つかかり、ゴミ集積所が連日満杯になって、移転業務を管理されていた多田吉弘先生が大変な苦勞

をされた。廊下に最後まで残った所属不明の古く重いロッカー群を、教官、技官が休日に「ボランティア」として出動し、猛暑の中、汗と埃まみれになって長時間の撤去作業を行った。

岩田哲郎助教授が着任した。事務室では喜多陽子さんが退職し、那須良美さんが後任となった。

平成11年（1999）3月末には、昭和32年（1957）から勤務された志摩俊郎技官、昭和37年（1962）から勤務された濱敏雄技官が定年により退官された。

堀川敬太郎助手、堀口祐憲助手、溝渕啓助手、米倉大介助手、長町拓夫講師が着任した。化学応用工学科より山下治郎技官が着任した。事務室では那須良美さんが退職し、日高志乃さんが後任となった。

平成11年（1999）6月、三菱長崎在職時に戦艦・武蔵の設計に携わり、旧工専、工学部、工短大で30年にわたって勤められた玉田幸雄先生が逝去された。

平成12年（2000）3月末には、昭和37年（1962）から勤務された桑内忠昭技官が定年により退官された。

伊藤照明講師が助教授に昇任した。事務室では立石良美さんが退職し、大塚美和さんが後任となった。

平成13年（2001）3月末には、昭和37年（1962）から勤務された喜羽武技官が定年により退官された。

平成13年（2001）5月、芳村敏夫教授が第18代工学部長に就任した。

岡田達也講師が助教授に昇任した。事務室では日高志乃さんが退職した。

平成14年(2002)3月末には、昭和38年(1963)から勤務された小松敏行技官が定年により退官された。

平成14年(2002)4月、交換人事により木戸口善行講師、松尾繁樹講師がエコシステム工学専攻に所属換えとなり、清田正徳助教授、高木均助教授が機械に戻った。片岡由樹技官が着任した。

平成15年(2003)3月末には、昭和40年(1965)から工学部において講師・助教授・教授を務められ、金属材料からスポーツ障害の生体力学まで幅広い研究に取り組みされた坂巻清司教授が定年により退官された。また、昭和37年(1962)から工短大、工学部において助手・講師・助教授・教授を務められ、金属材料中の転位と結晶粒界、再結晶について研究を行われた猪子富久治教授が定年により退官された。

平成15年(2003)8月5日から8日に日本機械学会年次大会が開催され、実行委員長の芳村敏夫教授を中心に機械工学科全教官が準備と運営にあたった。台風直撃というアクシデントはあったものの臨機応変に対処し、成功裏に終了した。

日本技術者教育認定機構(JABEE)本審査を受審するため、多くの教官が多大な労力を払って準備作業に従事した。また後年、国立大学における研究力衰退の一因として指摘されることになる国立大学法人化に向けての準備も進められた。

吉田憲一助教授が教授に昇任した。堀口祐憲助手が大阪大学基礎工学研究科に助教授として栄転した。米倉大介助手が1年間、英国Leeds大学に留学した。

平成15年(2003)5月、昭和41年(1966)から工学部において助手・講師・助教授・教授として務められた中瀬敬之教授が62歳で逝去された。ターボ機械研究の傍ら、山岳部部長を務められ、ネパールとの友好などダイナミックな活動を展開された中瀬先生の逝去は多くの人々に惜しまれた。

平成16年(2004)3月末には、昭和37年(1962)

から工短大・工学部において助手・講師・助教授・教授を務められ、塑性加工や摩耗、セラミック成形について研究を行われた佐藤悌介教授が定年により退官された。

平成16年(2004)4月、国立大学法人化が行われ、教官と技官は教員および技術職員に職名変更された。前年度のJABEE本審査の結果、JABEEプログラムとして認定された。

岩田哲郎助教授が教授に浮田浩行助手が講師にそれぞれ昇任した。堀川敬太郎助手が大阪大学基礎工学研究科に助教授として栄転した。石原国彦教授、海江田義也教授、西野秀郎助教授が着任した。

平成17年(2005)3月末には、山下治郎技術専門職員が定年により退職された。

平成17年(2005)7月、学生の保護者との連携を図るため、機械工学科としては初めて保護者懇談会を開催した。

伊藤照明助教授が1年間、米国出張した。佐藤哲也技術職員が着任した。事務室では岡本美和さん(旧姓・大塚)が退職し、以前にも勤務されていた日高志乃さんが復帰した。

平成18年(2006)3月末には、昭和48年(1973)から工学部において助教授・教授を務められ、化学プロセス制御やシステム工学に関する研究に取り組みされた今枝正夫教授が定年により退職された。また、昭和38年(1963)から工短大、工学部において助手・講師・助教授・教授を務められ、振動解析やアクティブサスペンションについて研究され、本学評議員、工学部長などを歴任された芳村敏夫教授が定年により退職された。また、昭和41年(1966)から勤務された筒井功技術専門職員および昭和39年(1964)から勤務された筒井宏隆技術専門職員が定年により退職された。

平成18年(2006)4月、部局化に伴い教員の所属先が学部から大学院になったが、実質的な運営については従来通り学科単位で行われた。一方で大学院関連の会議や書類仕事は別途増え、教員の負担が更に増大した。

重光亨助手が着任した。

平成19年(2007)3月末には、昭和39年(1964)

から工短大、工学部において助手・講師・助教授・教授を務められ、伝熱や吸収冷凍機に関する研究をされる一方、教務関係の生き字引として頼りにされた森岡斎教授が定年により退職された。また、昭和45年（1970）から工学部において助手・講師・助教授を務められ、空気圧アクチュエータと制御弁を制御対象とした研究に取り組みされた橋本強二助教授が、定年まで1年を残して退職された。

平成19年（2007）4月、学校教育法改正に伴い、助教授が准教授に助手が助教にそれぞれ名称変更された。

高木均准教授、日野順市准教授が教授に、大石篤哉講師が准教授に昇任した。末包哲也教授、三輪昌史講師が着任した。機械工作センターに宮本康平技術職員、島村豪敏技術職員が着任した。

平成19年（2007）8月、昭和20年（1945）から昭和57年（1982）まで旧工専、工学部で講師・助教授・教授を務められ、流体制御、自動機械や瀬戸内海海水入れ替え提案まで幅広く研究された金野仁名誉教授が逝去された。また、平成20年（2008）3月、昭和37年（1962）から平成5年（1993）まで工学部で助教授、教授を務められ、X線材料強度学の分野において各種材料の残留応力解析を研究された藤原晴夫名誉教授が逝去された。

平成20年（2008）3月末には、昭和43年（1968）から勤務された田上稔技術専門職員が定年により退職された。

平成20年度（2008）から平成27年度（2015）

JABEE継続審査を受審するため、多くの教員が多大な労力を払って準備作業に従事した。

米倉大介助教が准教授に昇任した。事務室では日高志乃さんが退職し、高野景子さんが後任となった。

平成21年（2009）3月末には、昭和42年（1967）から工短大、工学部において助手、講師、助教授、教授を務められ、気液二相流や固液混相流の研究に取り組みされた逢坂昭治教授が定年により退職された。また、昭和48年（1968）から工短大、工学部において講師、助教授、教授を

務められ、熱応力や弾性に関する理論的研究に取り組みされた山田勝稔教授が定年により退職された。また、昭和43年（1968）から工短大、工学部において助手、講師、助教授を務められ、音弾性を利用した応力測定に取り組みられる傍ら、賀川豊彦の顕彰活動に奔走された岡田健一准教授が定年により退職された。また、昭和45年（1970）から工短大、工学部において助手、講師、助教授を務められ、切削加工の研究に取り組みされた升田雅博准教授が定年により退職された。

岡田達也准教授が教授に重光亨助教が講師に昇任した。出口祥啓教授、水谷康弘講師、園部元康助教が着任した。

平成22年（2010）3月末には、平成16年（2004）から教授を務められ、TiNi合金のヒートエンジン応用などを研究された海江田義也教授が定年により退職された。在籍6年間に学科長や学生委員長を歴任された。また、昭和44年（1969）から工学部において助手、講師、助教授、教授を務め、X線応力測定法の開発と応用に関する研究を進める傍ら、学生の創造能力育成に情熱を注がれた英崇夫教授が定年により退職された。また、昭和43年（1968）から勤務された近藤正春技術職員が定年により退職された。

日下一也助教が講師に昇任した。安井武史教授が着任した。

平成22年（2010）8月、昭和37年（1962）から平成11年（1999）まで勤務された濱敏雄元技官が逝去された。また、平成23年（2011）3月、昭和43年（1968）から平成22年（2010）まで勤務された近藤正春元技術職員が逝去された。

平成23年（2011）3月末には、昭和44年（1969）から勤務された栗本政雄技術専門職員が定年により退職された。

一宮昌司講師、長町拓夫講師、重光亨講師が准教授に昇任した。末包哲也教授が東京工業大学大学院教授に転出した。石田徹教授、アントニオ・ナカガイト講師が着任した。飯田仁技術職員、菅野智士技術職員が着任した。

平成23年（2011）6月、昭和23年（1948）から平成4年（1992）まで旧工専、工学部、工短大において助手、講師、助教授、教授を務め

られ、システム制御工学の研究を行われた田上重美名誉教授が逝去された。また、平成23年(2011)10月、昭和25年(1950)から昭和63年(1988)まで工学部において溶接や疲労など材料強度学に関する研究を行われた秋園幸一名誉教授が逝去された。

平成24年(2012)3月末には、平成16年(2004)から教授を務められ、流体関連振動について研究を進められた石原国彦教授が定年により退職された。在籍8年間に4人の博士後期課程院生を指導され、学科長や教務委員長を歴任された。また、昭和62年(1987)から工学部において助教授、教授を務められ、アコースティックエミッションについて研究を進める傍ら、材料力学の教育に情熱を注がれた吉田憲一教授が定年により退職された。

平成24年(2012)4月、エコシステム工学コース再編に伴い、木戸口善行教授、藤澤正一郎教授、佐藤克也講師、名田譲講師が機械工学科に所属換えとなった。

西野秀郎准教授が教授に昇任した。太田光浩教授が着任した。

平成25年(2013)4月、福富純一郎教授が第22代工学部長に就任した。

溝渕啓講師が准教授に昇任した。長谷崎和洋教授が着任した。事務室では、長年勤められた福田涼子さんが退職し、平井葉月さんが後任となった。

平成25年(2013)10月、昭和21年(1946)から昭和60年(1985)まで旧工専、工短大、工学部において講師、教授を務められ、ターボ機械内部の流れについて研究を行われた渡部孝名誉教授が逝去された。

平成26年(2014)3月末には、昭和48年(1973)から工学部において助手、講師、助教授、教授を務められ、各種機械の振動制御から画像処理まで幅広く研究された小西克信教授が定年により退職された。また、昭和46年(1971)から工学部において助手、講師、助教授、教授を務められ、ターボ機械の内部流れの解明と性能向上について研究を行われた福富純一郎教授が定年により退職された。また、昭和52年(1977)

から工短大、工学部において助手、講師、助教授、教授を務められ、疲労破壊や薄膜による材料特性向上など機能性材料について幅広く研究される一方、徳島大学の国際化に精力的に取り組まれた村上理一教授が定年により退職された。

アントニオ・ナカガイト講師、三輪昌史講師が准教授に昇任した。

平成26年(2014)9月、昭和12年(1937)から昭和57年(1982)まで旧高工、旧工専、工短大、工学部において助教授、教授として機械加工に関する研究を行われ、戦災からの復興に尽力された賀勢晋名誉教授が逝去された。

平成27年(2015)3月末には、昭和49年(1974)から工学部において助手、助教授を務められ、吸収冷凍機に関する研究に取り組まれた清田正徳准教授が定年により退職された。

平成28年(2016)からの理工学部への改組を控え、学部運営にあたる教員は多忙な業務をこなした。

米倉大介准教授が教授に名田譲講師が准教授に昇任した。水谷康弘講師が大阪大学基礎工学研究科准教授、園部元康助教が高知工科大学講師として栄転した。高岩昌弘教授、松本健志教授、石川真志助教が着任した。

化学系学科（応用化学科、化学工学科、工業短期大学部応用化学科、化学応用工学科）

応用化学科の発足と化学系学科の経緯

応用化学科は、徳島工専の化学工業科を引き継いで、昭和24年(1949)に発足した。化学系の学科としては、当初、応用化学科と薬学科の2学科が設置されたが、後者は昭和26年(1951)に薬学部として独立した。発足時の応用化学科は、第一講座（無機化学、電気化学）、第二講座（物理化学、分析化学）、第三講座（有機化学・発酵化学）および第四講座（高分子化学）の4講座で構成され、教員定員は教授4名、助教授4名、助手4名、入学定員は30名であった。昭和28年(1953)3月に第一回卒業生32名を送り出した。

昭和34年(1959)に工業短期大学部(工短大)応用化学科が設置され、工学部応用化学科の講座増設、昭和39年(1964)に大学院工学研究科修士課程応用化学専攻の設置、昭和40年(1965)に化学工学科の設置など、化学系学科の拡充が行われた。工短大応用化学科が新設されたのは、工短大が昭和29年(1954)3月に設置された5年後であり、昭和37年(1962)3月に最初の卒業生23名を送り出した。また、応用化学科が(工短大も含めて)、無機化学、物理化学、有機化学、高分子化学、分析化学など基礎化学の分野の教育・研究をするための学

科であったのに対し、化学工学科は、化学工業における製造プロセスの開発、装置予備プラントの設計・保全ならびに新しい材料の機能設計に関する教育・研究をするための学科として設置され、高圧化学工学・熱力学、反応工学、単位操作、化学工業装置・材料の4講座で構成された。講義は各学科のカリキュラムに従って並列に進められ、教室運営の議事決済は、工短大応用化学科を含めた合同の化学系教室会議で行われた。工学部50周年を迎えた昭和48年(1973)当時の化学系学科の教職員は表の通りである。

昭和48年(1973年、工学部50周年)当時の化学系学科教職員組織

講座名	教職員名
工学部応用化学科	
第一講座(無機化学・電気化学)	久野教授、池田助教授、松井助手
第二講座(物理化学)	神田教授、鈴木講師、大川助手、南技官
第三講座(有機化学)	増村教授、堀江助教授、津嘉山助手、長瀬技官
第四講座(高分子化学)	安村教授、太田助教授、増田講師
化学共通(図書館)	片山技官、(ガラス細工)山下(茂)技官、(分析実験)玉井技官
工学部化学工学科	
第一講座(高圧化学工学)	森吉助教授、金品助手、小倉技官
第二講座(化学反応工学)	森本教授、林講師、川城助手、吉田技官
第三講座(単位操作工学)	岡崎教授、秋田助教授、富田助手、山下(治)技官
第四講座(化学工業装置・材料)	松居教授、小西講師、中林助手、西条技官
工業短期大学部・応用化学科	
第一講座(分析化学)	寺沢講師、平田助手、佐竹技官
第二講座(発酵化学)	武市教授、高麗助手、大坂技官

その後、昭和49年(1974)に、応用化学科の安村二郎教授が定年退官した。金品昌志助手(高圧化学工学)が九州大学助教授に昇任した。昭和50年(1975)に、高麗寛紀助手(有機化学)が工短大第二講座の講師に昇任し、田村勝弘助手(高圧化学工学)が着任した。

昭和51年(1976)に桐田(旧姓大川)久和子助手(物理化学)が講師に昇任したが、昭和52年(1977)に環境庁環境研修センターへ転出した。

昭和53年(1978)に、工短大応用化学科の武市一孝教授が退官し、金崎英二助手(物理化学)と山下敬郎助手(有機化学)が着任した。

昭和54年(1979)に田中均助手(高分子化学)が着任した。

昭和56年(1981)には、太田忠甫助教授が高分子化学講座の教授に昇任し、増田精造講師が助教授に昇任した。昭和57年(1982)に池田早苗助教授が工短大第一講座の教授に昇任し、森吉孝助教授(高圧化学工学)が教授に、中林一朗助手(化学装置材料)と富田太平助手(単位操作)が講師に昇任した。また魚崎泰弘助手(高圧化学工学)が着任した。10月には岡山恵美子技術補佐員が工短大応用化学科に着任した。

昭和59年(1984)山下敬郎助手(有機化学)

が東北大学理学部へ転出し、田村勝弘助手（高圧化学工学）が講師に昇任した。

昭和60年（1985）に、応用化学科の久野武夫教授と増村光雄教授が定年退官し、工短大の寺沢敏夫助教授が退職した。堀江徳愛教授（工短大第二講座）が有機化学講座へ配置換えになり、代って増田精造助教授（高分子化学）が工短大第二講座の教授に昇任した。大阪市立大学から佐藤恒之助教授（高分子化学）が着任し、松井弘助手（無機化学・電気化学）が講師に昇任し、また河村保彦助手（有機化学）が着任した。

昭和61年（1986）に、大阪市立大学から梶章教授（無機化学・電気化学）が着任した。

昭和62年（1987）に、化学工学科の森本史郎教授と松居國夫教授が定年退官し、林弘助教授（反応工学）が教授に、中林一朗講師（化学装置材料）が助教授に、田中均助手（高分子化学）が講師にそれぞれ昇任した。安澤幹人助手（無機化学・電気化学）が着任し、岡崎達也教授（単位操作）が化学装置・材料講座の教授に所属換えになった。

化学応用工学科の経緯

以上の化学系学科は、昭和63年（1988）に改組が行われ、化学応用工学科に統一された。この改組では、性質・機能の高度化、特殊化、多様化および省エネルギー、環境保全を推進する高度プロセス、プラント技術開発への要求にこたえるため、物質合成化学講座、物質機能化学講座、化学プロセス工学講座から構成される3大講座制を取った。この年、太田忠甫教授（高分子化学）が臨時増募教授席に所属換えになり、秋田清水助教授（単位操作）と佐藤恒之助教授（高分子化学）が教授に、富田太平講師（単位操作）が助教授に、川城克博助手（反応工学）が講師にそれぞれ昇任した。また、杉山茂助手（反応工学）が着任し、佐竹弘助手が生物工学科助手に昇任した。小西義昭助教授（化学装置・材料）が退職した。

平成元年（1989）には、大阪大学から芦田利文助手（物質合成化学）が、また土屋活美助手（化学プロセス工学）が着任した。田中均講師（物

質合成化学）と川城克博講師（化学プロセス工学）が助教授に、金崎英二助手（物質機能化学）と河村保彦助手（物質合成化学）が講師に昇任した。また、分析化学実験およびコンピュータ教育のために、林由佳子副手が着任した。

平成2年（1990）1月には、評議員、総務委員長を務めた太田忠甫教授が工学部長に就任した。岡崎達也教授および山下茂技官が定年退官し、中林一朗助教授（化学プロセス工学）が教授に、魚崎泰弘助手（物質機能化学）が講師に昇任し、妹尾真紀子助手（物質合成化学）が着任した。

平成3年（1991）に、工学部長の任にあった太田教授が逝去された。工学部長の在任が1年2ヶ月と短いものであったが、化学系学科はもとより、工学部、徳島大学の発展充実のために奔走された。この年の4月には、大学院工学研究科博士後期課程が設置されたが、化学系の教官はすべて物質工学専攻の物性工学大講座と物質変換工学大講座に所属した。この年の8月に完成した化学生物棟は8階建てで、化学系学科が1階から5階までと6階の約半分のスペースを占め、9月には移転が完了した。この年には、森賀俊広助手（化学プロセス工学）が着任した。また、津嘉山正夫助教授（物質合成化学）が教授（臨時増募席）に昇任した。

平成4年（1992）に、化学プロセス工学講座の秋田清水教授が逝去された。

平成5年（1993）に、神田精一教授が定年退官し、富田太平助教授（化学プロセス工学）が教授に、松井弘講師（物質機能化学）が助教授に昇任した。この年の10月に工短大が廃止されたため、その化学系教職員は工学部化学応用工学科に転入し池田早苗教授と本仲純子助手が物質機能化学講座に、増田精造教授と高麗寛紀助教授が物質合成化学講座に所属した。

平成6年（1994）3月に、大学院の博士後期課程第一回生を送り出し、化学応用工学科教官の指導により6名の博士（工学）が誕生した。田中均助教授（物質合成化学）が教授に、本仲純子助手（物質機能化学）が助教授に、杉山茂助手（化学プロセス工学）が講師に、河村保彦講師（物質合成化学）と魚崎泰弘講師（物質機

能化学)が助教授に、土屋活美助手(化学プロセス工学)が講師(臨時増募席)に、それぞれ昇任した。改組後の第一回生として、化学応用工学科昼間コースに90名、また夜間主コースに12名が入学した。

平成7年(1995)に田中均教授(物質合成化学)が光応用工学科へ所属換えになり、高麗寛紀助教授(物質合成化学)が生物工学科教授に昇任した。芦田利文助手(物質合成化学)が講師に昇任し、近畿大学工学部講師に転出した。南川慶二助手(物質合成化学)と加藤雅裕助手(化学プロセス工学)がそれぞれ着任した。この年の5月に、森吉孝教授が工学部長に就任し、本学科のみならず本学部、本学のために活躍された。

平成8年(1996)に、堀江徳愛教授が定年退官した(令和3年(2021)10月16日ご逝去)。また、金崎英二講師(物質機能化学)が助教授に昇任し、西内優騎助手(物質合成化学)が着任した。

平成9年(1997)に、森吉孝教授が2期目の工学部長に就任した(平成11年(1999)3月まで)。この年度中に、南川慶二助手、森賀俊広助手が共に講師へ昇任し、土屋活美講師、杉山茂講師が共に助教授へ昇任した。

平成10年(1998)から平成19年(2007)

平成10年度(1998)の学科長は津嘉山正夫教授が務めた。この時点の化学応用工学科の構成人員を表に、また教職員の集合写真を示す。

平成10年(1998)当時の化学応用工学科教職員組織

講座名	教職員名
物質合成化学講座	A-1 津嘉山正夫教授(学科長)、河村保彦助教授、西内優騎助手
	A-2 佐藤恒之教授、妹尾真紀子助手
	A-3 増田精造教授、南川慶二講師
物質機能化学講座	B-1 池田早苗教授、鈴木 旭助教授、本仲純子助教授
	B-2 森吉 孝教授、田村勝弘助教授、金崎英二助教授、魚崎泰弘助教授
	B-3 梶 章教授、松井弘助教授、安澤幹人助手
化学プロセス工学講座	C-1 中林一朗教授、森賀俊広講師
	C-2 富田太平教授、土屋活美助教授、加藤雅裕助手
	C-3 林 弘教授、杉山 茂助教授
	C-4 川城克博教授
職員	林由佳子教務員、大坂秀昭技官、山下和代技官、南 英生技官、平嶋茂利技官、西條 博技官、山下治郎技官、吉田英文技官、岡山恵美子技術補佐員、三笠まり(化学系図書室)



平成10年度(1998)化学応用工学科・教職員集合写真

年度末の3月に池田早苗教授が定年退官された。

平成11年度(1999)の学科長は引き続き津嘉山正夫教授が務めた。4月に平野朋広助手(物質合成化学)が大阪大学大学院基礎工学研究科より着任した。11月に本仲純子助教授(物質機能化学)が教授に昇任した。また、3月に森吉孝教授(物質機能化学)、鈴木旭助教授(物質機能化学)がともに定年退官、三笠まり職員が工学部学務係に異動した。

平成12年度(2000)の学科長は林弘教授が務めた。4月に田村勝弘准教授(物質機能化学)が教授に昇任、妹尾真紀子助手(物質合成化学)、安澤幹人助手(物質機能化学)がともに講師に昇任した。6月に鈴木良尚助手(物質機能化学)が科学技術振興事業団より着任した。7月に松原輝彦助手(化学プロセス工学)が東京工業大学大学院生命理工学研究科より着任した。10月に加藤雅裕助手(化学プロセス工学)が講師に昇任した。11月に藪谷智規助手(物質機能化学)が名古屋大学大学院工学研究科より着任した。また、3月に柵章教授(物質機能化学)が定年退官した。

平成13年度(2001)の学科長は引き続き林弘教授が務めた。4月に森健助手(物質合成化学)が九州大学大学院工学研究科より着任した。7月に村井啓一郎助手(化学プロセス工学)が大阪大学大学院理学研究科より着任した。また、8月に南川慶二講師(物質合成化学)、妹尾真紀子講師(物質合成化学)、安澤幹人講師(物質機能化学)、森賀俊広講師(化学プロセス工学)がともに助教授に昇任した。3月に大坂秀昭技官、西條博技官が定年退官した。

平成14年度(2002)の学科長は佐藤恒之教授が務めた。4月に藤永悦子技官が着任した。3月に増田精造教授(物質合成化学)が定年退職した。土屋活美助教授(化学プロセス工学)が同志社大学に教授として、松原輝彦助手(化学プロセス工学)が慶應義塾大学に講師としてそれぞれ転出した。また、南英生技官、吉田英文技官が定年退官した。

平成15年度(2003)の学科長は引き続き佐藤恒之教授が務めた。4月に河村保彦助教授(物

質合成化学)が教授に、平野朋広助手(物質合成化学)が講師にそれぞれ昇任した。河内哲史技官、大澤六合豊技官が着任した。また、3月に外輪健一郎講師(化学プロセス工学)が九州大学大学院工学研究院より着任した。

平成16年度(2004)より、国立大学の法人化に伴い、従来の教官は教員、技官は技術職員に名称が変更された。学科長は田村勝弘教授が務めた。4月に堀河俊英助手(化学プロセス工学)が関西大学大学院工学研究科より着任した。3月に林弘教授(化学プロセス工学)、中林一朗教授(化学プロセス工学)がともに定年退職した。

平成17年度(2005)の学科長は引き続き田村勝弘教授が務めた。4月に金崎英二助教授(物質機能化学)、杉山茂助教授(化学プロセス工学)が教授に昇任、鈴木良尚助手(物質機能化学)が講師に昇任した。11月に森健助手(物質合成化学)が九州大学大学院工学研究院に転出した。1月に藪谷智規助手(物質機能化学)が講師に昇任した。また、3月に佐藤恒之教授(物質合成化学)、津嘉山正夫教授(物質合成化学)がともに定年退職、妹尾真紀子助教授(物質合成化学)が退職した。

平成18年度(2006)には、教教分離に従い、ソシオテクノサイエンス研究部と先端技術科学教育部が発足。教職員は新たにソシオテクノサイエンス研究部の、物質合成化学講座及び物質機能化学講座所属の教員はライフシステム部門所属に、化学プロセス工学講座所属の教員は先進物質材料部門所属になった。大学院生は工学研究科化学応用工学専攻から先端技術科学教育部環境創生工学専攻化学機能創生コース所属に、学部生はこれまで通り工学部化学応用工学科所属になった。コース長(学科長)は富田教授が務めた。4月に加藤雅裕講師(化学プロセス工学)が助教授に昇任、5月に倉科昌助手(物質機能化学)が筑波大学大学院理工学研究科より着任、12月に村井啓一郎助手(化学プロセス工学)が講師に昇任した。また、1月に右手浩一教授(物質合成化学)が大阪大学大学院基礎工学研究科より着任した。2月に魚崎泰弘助教授(物質機能化学)が教授(物質合成化学)に

昇任、3月に外輪健一郎講師（化学プロセス工学）が助教授に昇任、岩澤哲郎助手（物質合成化学）が米国スクリプス研究所より着任、中川敬三助手（化学プロセス工学）が九州大学大学院工学研究院より着任、松井弘助教授（物質機能化学）が早期退職した。

平成19年度（2007）には、大学教員の名称変更により、従来の助手が助教、助教授が准教授に名称変更となった。学科長は川城克博教授が務めた。4月に林由佳子教務職員が助教に昇任した。2月に平野朋広講師（物質合成化学）が准教授に、堀河俊英助教（化学プロセス工学）が講師にそれぞれ昇任した。平成20年（2008）3月に富田太平教授（化学プロセス工学）が定年退職、大澤六合豊技術職員が金沢大学へ転出した。

平成20年（2008）から平成27年（2015）

平成20年度（2008）の学科長は本仲純子教授が務めた。4月に西内優騎助教（物質合成化学）が講師に昇任、3月に岩澤哲郎助教（物質合成化学）が龍谷大学理工学部准教授として転出し、平嶋茂利技術職員が定年退職した。

平成21年度（2009）の学科長は引き続き本仲純子教授が務めた。4月に森賀俊広准教授（化学プロセス工学）が教授に昇任、吉田健助教（物質合成化学）が米国ピッツバーグ大学より着任、上田昭子技術職員が着任した。3月に中川敬三助教（化学プロセス工学）が講師に昇任した。また、川城克博教授（化学プロセス工学、令和3年9月23日ご逝去）、本仲純子教授（物質機能化学）が定年退職した。

平成22年度（2010）の学科長は河村保彦教授が務めた。10月に押村美幸助教（物質合成化学）が名古屋工業大学から着任、林由佳子助教（物質機能化学）が退職した。3月に田村勝弘教授（物質機能化学）、山下和代技術職員が定年退職した。

平成23年度（2011）の学科長は引き続き河村保彦教授が務めた。4月に魚崎泰弘教授、吉田健助教が物質合成化学講座から物質機能講座に所属替えとなり、桑原知彦技術職員が着任した。10月に鈴木良尚講師（物質機能化学）、藪

谷智規講師（物質機能化学）、村井啓一郎講師（化学プロセス工学）がともに准教授に昇任。11月に高柳俊夫教授（物質機能化学）が岡山大学大学院自然科学研究科より着任した。3月に外輪健一郎准教授（化学プロセス工学）が教授に昇任した。

平成24年度（2012）の学科長は杉山茂教授が務めた。4月より大学院環境創生工学専攻が物質生命システム工学専攻に名称変更となった。4月に山下陽子技術職員が着任し、8月に今田泰嗣教授（物質合成化学）が大阪大学大学院基礎工学研究科より着任した。

平成25年度（2013）の学科長は引き続き杉山茂教授が務めた。4月に荒川幸弘助教（物質合成化学）がスイス連邦工科大学チューリッヒ校より着任し、アルカンタラ アビラ ヘスース ラファエル助教（化学プロセス工学）が京都大学大学院工学研究科より着任した。10月に吉田健助教（物質機能化学）が講師に昇任した。

平成26年度（2014）の学科長は魚崎泰弘教授が務めた。4月に河村保彦教授（物質合成化学）が工学部長に就任した。5月に八木下史敏助教（物質合成化学）が千葉大学共用機器センターより着任した。11月に藪谷智規准教授（物質機能化学）が愛媛大学社会連携推進機構紙産業イノベーションセンターに教授として転出した。また平成27年（2015）3月に金崎英二教授（物質機能化学）が定年退職した。

平成27年度（2015）の学科長は引き続き魚崎泰弘教授（9月まで）、10月より今田泰嗣教授が務めた。4月に岡村英一教授（物質機能化学）が神戸大学大学院理学研究科より着任した。5月に堀河俊英講師（化学プロセス工学）が准教授に昇任した。9月に水口仁志講師（物質機能化学）が山形大学大学院工学研究科より着任した。10月に河内哲史技術職員が退職、12月に安澤幹人准教授（物質機能化学）が教授に昇任した。また、魚崎泰弘教授（物質機能化学）が11月に逝去された。平成28年（2016）3月に中川敬三講師（化学プロセス工学）が神戸大学大学院科学技術イノベーション研究科に准教授として転出した。

電気電子工学科

75周年までの概要：創立から50周年（平成9年（1997））まで

電気の利用拡大に伴い、大正11年（1922）に工学部の前身の徳島高等工業学校に電気工学科が設置され、その18年後の昭和15年（1940）に開設された徳島工業高等専門学校に電気科が設置された。その当時の卒業生で本学教員となった多田修先生、牛田富之先生、生田信皓先生は多くの学生の教育に携わった。また、ノーベル賞並みの研究成果と言われたシルバードダイオード（通称；キタ・ダイオード）を電信電話公社で開発した喜田昭一博士も電気科を卒業した。

徳島工業高等専門学校を設置した9年後の昭和24年（1949）の徳島大学工学部設置時に機械工学科、応用化学科とともに電気工学科が設置された。設置時は、第一講座が久保進教授、池野英三助教授の電気理論講座、第二講座が仁田工吉助教授の電気機器講座、第三講座が鈴木喜彦助教授、多田修講師の電力工学講座、第四講座が石黒美種教授、原田尚文助教授、牛田富之助手の通信工学講座の4講座体制であった。

それ以降の工学部創立100周年までの電気電子工学科の流れは、設置された昭和24年（1949）からの「大学設置期」、昭和39年（1964）からの「大学拡充期」、平成5年（1993）からの「大学変革期」に分類できる。ここでは、その分類と絡めて電気電子工学科の変遷を紹介する。

徳島大学が設置された昭和24年（1949）からの15年間の「大学設置期」には、日本で社会的に工学人材の養成が求められ、本学部に新たな組織が次々と創設された。

その当時は勤労学生の教育への要望が高く、昭和29年（1954）に機械工学科、電気工学科の2学科構成で徳島大学に工業短期大学部が設置され、多くの優秀な勤労学生を輩出した。その年から20年間は日本では高度成長期を迎え、それまで以上に多くの電気工学分野の技術者が社会から求められ、工学部、工業短期大学部の電気工学科の教員が協力してその人材養成に携

わった。

その後、電気工学分野の著しい発展が進み、電気工学科では「拡充期」を迎えた。社会からは大学院生の養成も求められるようになり、昭和39年（1964）に大学院工学研究科修士課程電気工学専攻を設置した。特に、コンピュータの出現により「弱電」と呼ばれていた分野の技術革新が進み、社会からもその分野の技術者養成が求められたことから、昭和42年（1967）に工学部電子工学科が、昭和46年（1971）に工業短期大学部電子工学科を設置し、学年進行に伴い昭和48年（1973）に大学院工学研究科修士課程電子工学専攻も設置した。その当時は工学部、工業短期大学部の学生は一部の科目を除き電気工学科と電子工学科に分かれ、工学部と工業短期大学部の教員が協力して授業を担当し、また工学部の学生の卒業研究も協力して指導した。その後、コンピュータが普及し始め、仁田工吉先生が工学部長であった昭和48年（1973）に情報工学科を設置し、電子工学科の島田良作先生、赤松則男先生、矢野（山本）米雄先生が転籍し、大学院生であった青江順一先生、仁木登先生が情報工学科の教官となった。

その後の電気電子工学分野の発展により次第に電気工学と電子工学が互に関連するようになり、昭和52年（1977）に電気工学科、電子工学科のカリキュラムを統合した。その当時の電気電子工学科は、次ページの表1のように電気工学科4講座、電子工学科4講座の8小講座体制で運営していた。この運営体制がその後の電気電子工学科の基本となった。そこでは、徳島高等専門学校当時の久保・池野先生の電気理論は電気一講座に、仁田先生の電気機器は電気二講座に、鈴木喜彦先生の電力関係は電気三講座に、石黒美種先生の気体放電関係は電子一講座に、原田先生の電子回路は電子三講座に引き継がれた。

その後、表1の体制は、昭和57年（1982）に鈴木茂行教授の応用電気工学の電気五講座が、昭和60年（1985）に福井萬壽夫教授の光電子工学の電子五講座が、昭和62年（1987）に川上博教授の電子制御工学の電子六講座が追加さ

表1 昭和52年（1977）当時の電気電子工学科（下線部工業短期大学部所属、二重下線部は技官）教職員組織

	講座名	専門分野	教職員名
電気工学科	電気一講座	電気基礎理論	池野、 <u>牛田（明）</u> 、 <u>近藤（透）</u>
	電気二講座	電 気 機 器	仁田、 <u>沖津</u> 、鈴木、森田、大西、 <u>福光</u> 、 <u>原田（寛）</u>
	電気三講座	電 力 工 学	横井、 <u>長田</u> 、伊坂、 <u>吉田</u> 、 <u>岡本</u>
	電気四講座	通 信 工 学	牛田（富）、木内、 <u>入谷</u> 、 <u>井村（喜）</u>
電子工学科	電子一講座	気体物性工学	<u>生田</u> 、森、大宅、原田（昭）
	電子二講座	固体物性工学	多田、 <u>新谷</u> 、福井、富永、 <u>近藤</u>
	電子三講座	電子回路工学	原田（尚）、爲貞、 <u>一宮</u>
	電子四講座	制 御 工 学	小林、川上、服部、 <u>田村</u>

れ、11小講座体制となった。その年に学科の運営体制を小講座体制から、大講座の中に教授を長とする研究室を設け、その研究室を中心に運営する大講座体制に変更した。

その当時は電気工学科、電子工学科への求人数が多く、ほぼ全員、学校推薦で就職が決まっていた。ただ、昭和48年（1973）の第一次オイルショック、昭和54年（1979）の第二次オイルショック時には、前年度まで積極的に採用してきた企業が突然、新規採用を中止し、その当時の学生は就職難に陥り就職担当教官は就職の世話に苦勞した。

昭和50年代までは工学部、特に電気工学科、電子工学科では留年生が多く、地方紙で取り上げられたりした。その一方で、昭和54年（1979）に国立大学に「大学共通第一次学力試験」制度が導入され、一期校・二期校制度が廃止され、一期校として3月上旬に実施していた徳島大学の入学試験も全国の国立大学が同じ日程で前期日程、後期日程の2度入試を実施することになった。その入試制度の変更で、国立大学の入学試験の受験科目が私立大学に比べ多いことを受験生が嫌い、国立大学の中でも地方国立大学が受験生から嫌われて私立大学へ流れ、地方国立大学の入学難易度が低下し、工学部では多様な学生への教育が求められるようになった。そのこともあり、電気工学科、電子工学科ともに教育カリキュラムを見直し、昭和57年（1982）から新カリキュラムに移行した。

その後の電気電子工学の急激な発展で電気工学と電子工学を明確に区別できなくなり、昭和63年（1988）に電気工学科と電子工学科を統合して電気電子工学科とし、教育カリキュラムを統一した。また、平成元年（1989）に工業短期大学部教官を含めて大講座体制を再整備した。そこで作られた大講座は生田信皓教授、森一郎教授、新谷義廣教授、福井萬壽夫教授の研究室からなる「物性デバイス講座」、横井良秀教授、長田正義教授、鈴木茂行教授、伊坂勝生教授の研究室からなる「電気エネルギー講座」、小林邦博教授、牛田明夫教授、爲貞建臣教授、川上博教授、木内陽介教授、入谷忠光教授の研究室からなる「電気電子システム講座」の3大講座であった。その年には、沖津泰先生が工学部長として新学科設置に向けて尽力をささげていた生物工学科が工学部に設置された。平成2年（1990）に電気電子システム講座に坂本研究室が追加され、電気電子システム講座は7研究室となった。

その当時、工学部には大学院は修士課程のみが設置されていたため、博士の学位を取得するには旧帝国大学等の他大学の大学院に進学する必要があった。それを自大学で取得できるよう大学院博士後期課程の設置を目指した。それには教官は学生への教育だけでなく自身の研究力を高めることが求められ、その努力の結果、平成3年（1991）に大学院工学研究科博士後期課程が設置された。その設置に伴い、大学院工

学研究科修士課程は「大学院工学研究科博士前期課程」と名称変更となった。大学院工学研究科当時は大学院生が10名を越えていなかったが、博士後期課程ができたことにより博士前期課程の大学院生は40～60名と大幅に増加した。設置された博士後期課程は物質工学、生産開発工学、システム工学の3専攻で、その設置で電気電子工学科の先生は物質工学、システム工学専攻の大学院生の研究指導を兼担することになり、学生は博士前期課程を修了後、博士後期課程に進学する場合は指導教員が兼担する専攻に入学し、研究指導を受けることになった。この大学院博士後期課程設置で電気電子工学科は拡充期の終わりを迎え、変革期に入り、組織の見直しが始まった。

高校生の大学への進学率が更に上昇し、工業短期大学部においては勤労学生が減少し、昼間に会社等で働く学生でなく、アルバイトで学費をかせぎ夜間に勉学する学生が増え、工業短期大学部の教育目標の変更が余儀なくされた。そこで、平成5年（1993）に工業短期大学部に変わり工学部に夜間主コースを設置した。それに伴い、工学部電気電子工学科を「電気電子工学科昼間コース」に名称変更し、新たに電気電子工学科に「夜間主コース」を設置した。それにより、夜間主コースの学生は夜間に開講される授業以外に昼間に開講される科目の受講も可能にし、また勤労学生のために夜間に開講される科目のみを受講しても卒業できるようにした。

この改組により工業短期大学部の全教員は工学部所属となり、電気電子工学科の大講座体制を見直した。そこでは小林邦博教授が退職し、川上博教授、木内陽介教授、入谷忠光教授、牛田明夫教授、坂本明雄教授、爲貞建臣教授の6研究室で構成していた電気電子システム講座を、電子回路関係の教育研究を担当していた牛田、坂本、爲貞研究室で知能電子回路講座を設置し4大講座体制とした。電気エネルギー講座では、横井良秀教授が退職し、平成9年（1997）に大西徳生教授の研究室が立ち上がった。

平成10年（1998）から平成19年（2007）

平成8年（1996）の坂本先生の高知工科大学への転出後、平成10年（1998）にKDDから來山征士教授が赴任し、知能電子回路講座に來山研究室を島本先生と立ち上げた。また四柳浩之助手、江南助手を採用し、それぞれ爲貞研究室、新谷研究室の一員となり、新谷研究室の牧田寛助教が高知工科大学に転出した。1998年当時は学科共通講座を臨時的に設けたが、電気電子工学科では基本的には4大講座（物性デバイス講座は森、大宅、新谷、酒井の4研究室、電気エネルギー講座は鈴木、大西、伊坂、長田の4研究室、電気電子システム講座は木内、入谷、川上の3研究室、知能電子回路講座は牛田、來山、爲貞の3研究室）の体制で運営した。

平成11年（1999）に川上博教授が工学部長となり、大学院博士後期課程を3専攻6大講座から4専攻9大講座への増強に取り組むとともに、オフィスアワーの導入、創成科目の設置などの教育改革と、教員の研究推進のための研究交流委員会の設置に取り組んだ。この年、吉永哲哉助教授が徳島大学医療技術短期大学部助教授として帰任した。また張欽宇助手、江南助手、川上烈生助手、北條昌秀助手を採用し、それぞれ電気電子システム講座木内研究室、物性デバイス講座新谷研究室、大宅研究室、電気エネルギー講座大西研究室の一員となった。

平成12年（2000）に森一郎教授が定年退職され、森研究室は富永先生が引き継いだ。森先生はプラズマ物性を専門としプラズマ中の非線形波動の研究等をされ、本学では原子力発電に関する授業を担当した。

平成13年（2001）5月に川上博先生が工学部長を退任して徳島大学理事（教育担当）副学長に就任し、全学の教育改革に取り組まれた。特に教養教育改革や、今ではどこの大学でも行われている教員に対するファカルティディベロプメント（FD）活動の立ち上げや、徳島大学教育研究ジャーナルを刊行した。この年に大野泰夫教授がNEC筑波研究所より着任し、富永先生、近藤技官とともに物性デバイス講座大野研究室を立ち上げ、GaN系電子デバイスの研

究を開始した。

平成14年（2002）には長田正義教授が定年退職をされ、下村先生が研究室を引き継いだ。長田先生は長年、発変電工学の授業を担当するとともに、鈴木喜彦先生、横井良秀先生の電力工学に関する研究を引き継ぐとともに、アーク放電による溶断に関する研究やモンテカルロシミュレーションによる照明設計に関する研究をした。また、この年に木内研究室の長篠博文助教授が徳島大学医学部教授として医学部保健学科に転出した。保健学科に移ってからも長篠先生はシミュレーションによる神経回路網の挙動解析を専門とし、米国フロリダアトランティック大学との交流を進めた。この年、川田昌武講師が赴任し、電気エネルギー講座伊坂研究室の一員となった。

平成15年（2003）には物性デバイス講座新谷義廣教授、知能電子回路講座牛田明夫教授、物性デバイス講座大宅研究室の中島貞之丞講師、木内研究室の張欽宇助手、新谷研究室の江南助手、学科共通講座の原田昭夫助手、近藤俊昭技官、井村喜義技官が退職した。新谷先生は工業短期大学部の部長もされ、多田先生在職中は新谷先生、福井先生、富永先生、近藤技官とともに電子二講座を構成し、後にノーベル賞を受賞した中村修二教授もその講座の室員であった。新谷教授はダイヤモンド薄膜の製造技術等に関する研究をしていたが、退職後、新谷研究室の直井先生が酒井研究室のメンバーとなり、新谷研究室は酒井研究室となった。牛田先生は非線形工学を専門とし、IC設計で不可欠な回路シミュレーション技法を開発してその分野の著作本も出し、電子情報通信学会のフェローの称号も授与され、池野先生の電気一講座に在籍し、長年、電気回路1の授業を担当した。牛田先生退職後、牛田研究室は西尾先生が引き継いだ。原田助手、近藤技官、井村技官は電気電子工学基礎実験を始めとする学生実験で学生指導を担当した。この年、物性デバイス講座大野研究室に勸金平助手が着任した。また、鎌野先生が教授に昇進し、鈴木研究室が鎌野研究室となり、この年採用した桑原（山口）明伸技官が鎌野研

究室に加わった。電気電子棟の改修工事が平成14年（2002）夏休み前から始まり、一時的に電気電子工学科は工学部講義棟に移転していた。その工事が平成15年（2003）3月に終わり、改修後の電気電子棟に入居した。その改修で電気電子棟1階に電気電子工学科の学科事務室が作られ、技術職員室となった。

平成16年（2004）には国立大学の法人化により、徳島大学は国立大学法人徳島大学となり、教官が教員、技官が技術職員と名称が変更となっただけでなく、組織改革が急激に始まった。この年に鈴木茂行教授が退職した。鈴木先生はアナログ演算工学等の授業で学生を引き込む授業をされ、電気機器のロボット等への応用研究や自然エネルギー利用技術に関する研究をし、学生部長や地域共同研究センター長を歴任して徳島大学に貢献した。この年に副学長の川上先生が学科から離れて本部業務に専念されることになり、川上研究室は久保先生が引き継いだ。また、電気電子工学科の図書管理等の学科の管理運営を担当した井村照代技術職員が退職した。

平成16年（2004）には新たに10名の教職員が着任した。NECから田島一人教授、物質・材料研究機構から井上廉教授、NTTから小中信典教授が赴任し、それぞれ物性デバイス講座田島研究室、電気エネルギー講座井上研究室、知能電子回路講座小中研究室ができ、下村先生が井上研究室に、西尾先生が小中研究室に加わった。また芥川正武講師、大窪義博助手、馬躍助手、佐藤弘明助手、宋天助手、勸金平助手の6名を採用し、それぞれ電気電子システム講座木内研究室、入谷研究室、木内研究室、知能電子回路講座小中研究室、來山研究室、物性デバイス講座大野研究室の一員となった。この年は山中卓也技術職員も採用され大宅研究室に加わった。この頃から教員の退職が多くなり、教授を長として研究室を構成することが困難となり、教授以外でも研究室を構成できることになった。平成16年（2004）は久保研究室以外に、富永先生が大野研究室から独立し富永研究室を立ち上げた。

平成17年（2005）には橋爪先生が教授となり爲貞・橋爪研究室となり、西尾先生が小中研究室から独立し西尾研究室を立ち上げた。この年、大窪先生は退職した。

平成18年（2006）には大学院工学研究科を改組し先端技術科学教育部を設置した。この年、電気電子工学科の学生が学部から大学院博士後期課程まで一貫した教育研究が行えるように工学部を3つの系に分け、電気電子工学科はコンピュータ工学系電気電子工学科となった。その学部生は先端技術科学教育部システム創成工学専攻電気電子創生工学コースの大学院に進学できるようになった。その設置と同時に、機械工学や電気電子工学など工学の基盤となる専門分野だけでなく、他の専門分野の教員との共同研究推進が求められるようになったことから、ソシオテクノサイエンス研究部という教員組織を設置し、教員はその研究部に所属し、先端技術科学教育部の大学院生の教育・研究指導を兼任することになった。技術職員もその研究部内に総合技術センターを設置し、学科の枠を超えた技術職員の組織が作られた。

平成18年（2006）には爲貞建臣教授が退職した。爲貞先生は電子三講座設置当時からパルスデジタル回路やコンピュータ回路の研究をし、教育ではパルスデジタル回路の授業を担当し、そのパワフルな講義に学生は圧倒された。退職後、爲貞・橋爪研究室は橋爪研究室となった。この年に人工知能の技法を制御に応用し多くの論文を執筆した鎌野琢也教授が病気で他界し、鎌野研究室は安野研究室となった。また、入谷研究室の大家講師が徳島大学評価情報分析センター教授として転籍し、木内研究室の馬躍助手が退職した。電気電子システム講座久保研究室の制御系の学生実験を担当した田村宏文技術職員、電力系の学生実験を担当した電気エネルギー講座の岡本正利技術職員も退職した。この年、森田先生が大西研究室から独立して森田研究室を立ち上げ、電気電子システム講座木内研究室に村上昭継助手が加わった。また、この年に日亜化学工業株式会社からの寄附により工学部に「ナノマテリアルテクノロジー（日亜）

講座」が設置され、井須俊郎教授、北田貴弘助教授等の先生に電気電子工学科の卒研究生、大学院生の研究指導を担当してもらった。

平成19年（2007）には電子四講座で小林邦博先生、川上博先生とともに制御に関する研究をされ、電気電子工学基礎実験や制御系の学生実験を担当した服部敦美助手が退職した。また、小中研究室の佐藤弘明助手が静岡大学に転出した。この年の4月の学校教育法改正施行により助教授が准教授、助手が助教と名称変更となった。この年は寺西研二助教を採用し、電気エネルギー講座井上研究室のメンバーとなった。また七條香緒莉技術職員、三浦隆浩技術職員を採用し、それぞれ橋爪研究室、下村研究室の一員となった。この年の運営体制は表2であった。

平成20年（2008）から平成27年（2015）

平成20年（2008）には通信回路に関する研究、特にDPLLの研究やマイクロコンピュータ回路に関する教育を担当した入谷忠光教授、エコーキャンセルなどの信号処理を研究した來山征士教授、電力設備の碍子の汚損に関する研究や電磁気が人体に及ぼす影響に関する研究をした伊坂勝生教授が退職した。それにより入谷研究室は大家研究室に、伊坂研究室は川田研究室となった。來山研究室は島本先生と宋先生とで島本研究室となった。この年、学生実験の実験回路の作成や電気電子工学創生実験の立ち上げ、科学体験フェスティバルの出展に貢献した一宮正博技術職員、木内研究室の村上昭継助教が退職した。その後、新谷洋人助教、榎本崇宏助教を採用し、それぞれ電気電子システム講座木内研究室、知能電子回路講座小中研究室に加わった。また、川上烈生助教が大宅研究室から富永研究室に異動した。

平成21年（2009）4月に大西教授が工学部長に就任した。この年には病氣療養中であった田島一人教授が退職した。また、電気エネルギー講座で超電導材料に関する研究をした井上廉教授が退職し、井上研究室は下村研究室となった。さらに、医学部や歯学部との共同研究を積極的に行い、多くの留学生を受け入れた木内陽介教

表2 平成19年（2007）当時の電気電子工学科（二重下線部は技術職員）教職員組織

講座名	研究室名	専門分野	教職員名
物性デバイス講座	大野研	窒化物半導体	大野、 <u>敖</u> 、 <u>稲岡</u>
	富永研	スパッタリング	富永
	大宅研	プラズマ工学	大宅、川上、 <u>山中</u>
	酒井研	光デバイス	酒井、直井、西野
電気エネルギー講座	大西研	パワーエレクトロニクス	大西、北條
	森田研	電気機器	森田
	安野研	電気機器応用工学	安野、 <u>原田（寛）</u> 、 <u>桑原</u>
	伊坂研	電力工学	伊坂、川田
	井上研	電力応用工学	井上、下村、寺西、 <u>三浦</u>
電気電子システム講座	木内研	医用生体工学	木内、芥川、村上
	入谷研	通信工学	入谷、大家
	久保研	制御工学	久保
知能電子回路講座	西尾研	非線形回路	西尾、 <u>山上</u>
	小中研	電子回路設計	小中
	來山研	集積回路	來山、島本、宋
	橋爪研	電子回路	橋爪、四柳、 <u>一宮</u> 、 <u>七條</u>

授が退職した。木内先生は電気電子工学科教員のソフトボールチームのピッチャーとして活躍し、電気電子工学科の駅伝大会の世話もしていた。退職後も地元企業と徳島大学との産学間のパイプ役やLED総合フォーラムの開催に尽力した。木内先生の退職に伴い小中研究室が知能電子回路講座から電気電子システム講座に移動し、そこに芥川先生が加わって木内研究室は小中研究室となった。この年、電気二講座、電気五講座、鎌野研究室の学生実験や研究用実験回路の作製に尽力した原田寛信技術職員が退職した。また、平成20年（2008）に採用した木内研究室の新谷洋人助教が熊本工業高等専門学校に転出した。この年には、NTTから光通信回路を専門とする高田篤教授が赴任し、電気電子システム講座高田研究室を立ち上げた。また大屋英稔准教授、井内健介助教を採用し、それぞれ久保研究室、大宅研究室の一員となった。

平成22年（2010）に井内健介助教が退職し企業に就職した。その後、井内先生は2013年に徳島大学産学官連携推進部助教となり、大学

と企業との橋渡し役を担当することになった。この年に、NTTからグラフェンを専門とする永瀬雅夫教授が着任し、永瀬研究室を立ち上げた。また上手洋子助教、東知里技術職員を採用し、それぞれ知能電子回路講座西尾研究室、物性デバイス講座大野研究室の一員となった。この当時、工学部内の教室へのエアコンの設置が進み、真夏の暑い時期でも授業ができるようになったこともあり、この年から夏休み前に前期試験、10月から後期開始に変わった。それにより、夏休みが8月1日～9月末となり、研究室のキャンプは梅雨明け後の7月だったのが8月の大学院入試の後になり、キャンプは真夏に行かなくなった。

平成24年（2012）には、電気二講座で電気機器の故障診断に関する研究等を行い、電気機器の授業を長年担当した森田郁朗教授が退職し森田研究室はなくなった。また、物性デバイス講座でクリーンルームの管理運営を担当していた稲岡武技術職員が退職した。この年、大学院先端技術科学教育部環境創生工学専攻エコシス

テム工学コースの閉鎖により富田卓朗助教が電気電子工学科に転籍し、直井研究室の一員となった。また山中建二助教を採用し、電気エネルギー講座大西研究室に加わった。

サイリスタの出現で電気2講座時代にスタートしたパワーエレクトロニクスに関する研究を専門分野として学振やNEDOプロジェクト研究に取り組んできた大西徳生教授が平成25年(2013)に退職し、大西研究室は北條研究室となった。大西先生は平成21～25年の4年間、工学部長を務め、大学院先端技術教育部へ環境工学教育の導入や博士後期課程の定員の適正化、夜間主コースへのフレックス履修制度の導入や、「とくしま地域産学官共同研究拠点」の設置、「フロンティア研究センター棟」の新設等に尽力した。この年、多田、新谷、福井先生とともに電子二講座を構成し中村教授と親交の深く、スパッタリングを専門とする富永喜久雄准教授が退職し、富永研究室は川上研究室となった。また、物性デバイス講座の大野泰夫教授が退職し、大野研究室の助教教授が窒化物半導体デバイスの研究を引き継ぎ、教研究室が作られた。また岡村康弘助教、北島孝弘技術職員を採用し、それぞれ高田研究室、安野研究室の一員となった。

平成26年(2014)に大野恭秀准教授を採用し、物性デバイス講座永瀬研究室の一員となった。この年の12月にノーベル物理学賞を学部・修士課程の学生の時に電子二講座に在籍していたカリフォルニア大学サンタバーバラ校の中村修二教授が受賞した。また、学部時代に電気二講座に在籍していた東原敏昭氏が日立製作所代表執行役社長兼COOに就任した。この時、中村教授、東原社長と同期で、小林先生、川上先生、服部先生がおられた電子四講座に在籍していた板東浩二氏がNTTぶららの社長に就任(後に船井電機社長にも就任)した。この3名は共通一次試験の前の一期校時代に入学し、昭和52年(1977)のカリキュラムの見直し前の教育を受けたOBである。

平成27年(2015)に鈴木浩司助教を採用し、安野研究室に加わった。



電気関係学会四国支部連合大会で恒例だった愛媛大学とのソフトボール大会(平成7年(1995))



電気電子棟改修前のE30教室での最後の講義



研究室対抗ボウリング大会(平成22年(2010))



研究室対抗ソフトボール大会(平成22年(2010))



駅伝大会（平成23年（2011））



プロジェクト演習（創成科目）の様子
（平成23年（2011））



授業風景（平成23年（2011））



電気電子工学実験 1 の様子

知能情報工学科

知能情報工学科の経緯

知能情報工学科の前身である情報工学科は、昭和48年（1973）に中国四国にある国立大学工学部の中で最初に設置された。全国的に見ても本学より早く情報工学科が設置されたのは旧帝大のみであった。このように地方大学でありながら、どこよりも早く設置が認められたのは、それまでになかった副専攻制度を取り入れたカリキュラムが評価されたためである。副専攻制度とは、情報工学科の専門科目を履修するとともに2年次から全員を土木系、機械系、化学系、電気系、電子系のいずれかの副専攻に分け、その学科で指定された科目を履修する制度である。副専攻で履修しなければならない科目はその学科での基礎科目であり、情報工学以外の領域の基礎知識を身につけた応用力のある人材を養成することを目的としていた。これは、工学部での従来の単一学科中心の教育とは異なる画期的なものであったが、現在でも通用する考え方である。当時4講座で構成された学科の入学定員は通常40名であったが、工学部共通講座の中に情報処理工学講座が増設され、情報工学科の入学定員は55名となった。

副専攻制度は、昭和53年度（1978）入学生から、電気系と電子系の副専攻が統合され、土木系、機械系、化学系、電気系の4副専攻に、昭和56年度（1981）入学生から、従来の副専攻に加え情報工学系の応用科目を履修する一般応用コースが設けられ、5副専攻に変更された。そしてこの副専攻制度は、昭和63年度（1988）に知能情報工学科に改組されるまで継続された。

昭和63年（1988）の改組後の知能情報工学科は、知能情報処理に代表される日進月歩の情報科学に対応し、発展著しい情報産業の要求に十分応えるべく柔軟な教育・研究を実施できるように、基礎情報工学講座と知能工学講座の2大講座に再編成された。知能情報工学科はその名のとおり、情報工学科に知能を加えたものであったが、30年以上も前から、現在の人工知能時代の到来を予見していたと言っても過言で

はない。また夜間主コースも設置され、実践的なカリキュラムに基づく教育が行われている。

昭和48年度(1973)から昭和57年度(1982)

昭和48年度(1973)に情報工学科が発足し、第一回生53名が入学した。この年に共通講座に情報処理工学講座が増設され、電子工学科から島田良作助教授が、電子計算機センターから大恵俊一郎助手が所属換えとなった。情報処理工学講座は情報工学科の一講座として運営され、計算機センターの管理運営も担当することになった。

昭和49年度(1974)に、情報応用工学講座とシステム工学講座の2講座が増設された。情報応用工学講座には島田良作教授、山本米雄助手、仁木稔明技官が所属し、システム工学講座には添田喬教授(機械工学科兼担)、馬場則夫助手、大松繁助手、広瀬康裕技官が所属した。また島田良作教授に代わり情報処理工学講座に富田豊助教授が着任した。なお、この年の8月29日から情報工学科棟の新築工事が始まり、昭和50年(1975)3月20日に竣工した。昭和50年度(1975)には計画工学講座が増設され、東洋紡から正満敏雄教授、最上義夫助手、宮城裕技官が着任し、システム工学講座に酒井英昭助手、富士正人技官が、情報処理工学講座には真鍋俊彦助手が着任した。年度末に情報処理工学講座の広瀬康裕技官が退職した。また昭和51年(1976)3月に、情報工学科の教育用計算機(1億1千万円)を購入した。当時は本学で最も大型の計算機であった。

昭和51年度(1976)には、情報基礎工学講座が増設され、島田良作教授、山本米雄講師、仁木稔明技官が情報応用講座から所属換えになり、情報応用工学講座に原田尚文教授(電子工学科兼担)、電気工学科から所属換えした赤松則男助教授、さらに青江順一助手と井上富夫技官が所属した。またシステム工学講座の富士正人技官が情報教育用電算室に所属換えになり、後任として田淵敏明技官が着任した。この年度末に情報基礎工学講座の仁木稔明技官が退職した。この年に情報処理講座を含む5講座に情報工学

科4年次の卒論着手者は35名が配属された。

昭和52年度(1977)には、大学院工学研究科情報工学専攻が設置された。情報応用工学講座に仁木登助手が着任した。情報基礎工学講座に石田富士雄技官が、情報処理工学講座に小田育稔技官が、さらに共通の技官(副手)に情報工学科第1回卒業生の菊地(旧姓野島)真美技官が着任した。情報応用工学講座の原田尚文教授が兼担を解かれ、12月に東芝から高橋義造教授が着任した。年度末に宮城裕枝技官が退職した。

昭和53年度(1978)に、システム工学講座の酒井英昭助手が京都大学へ転出し、情報処理工学講座の富田豊助教授が教授に昇任した。また河崎和雄技官が着任した。この年に大学院情報工学専攻の第1回修了生11名を送りだした。昭和54年度(1979)には、システム工学講座に情報工学科第1回卒業生の菊地章助手が着任し、同年度末に田淵敏明技官が徳島工業短期大学へ転出した。

昭和55年度(1980)に古味孝夫技官が着任し、同年度末に河崎和雄技官が退職した。その後任として板東亘技官が昭和56年度(1981)に着任し、同年度末に古味孝夫技官が退職した。昭和57年度(1982)8月にシステム工学講座に新日鐵から守末利弥教授が着任し、添田喬教授の兼担が解かれた。また同年度に大政修司技官が着任した。

昭和58年度(1983)から平成4年度(1992)

昭和58年度(1983)に宮田大輔技官が着任し、同年度末に退職した。その後任として昭和59年度(1984)に川口政代技官が着任し、同年度末に退職した。また大政修司技官が退職した。昭和60年(1985)に後藤園子技官が着任し、同年10月に情報処理工学講座の富田豊教授が近畿大学工学部に転出した。また同年度末に、システム工学講座の菊地章助手が鳴門教育大学の講師に昇任した。昭和61年(1986)9月に後藤園子技官が退職し、10月より中財史江技官が着任した。昭和62年度(1987)には、情報基礎工学講座に渡辺尚助手が、システム工学講座に福見稔助手が着任し、昭和63年(1988)には、守末利弥教授が名古屋大学工学部へ転出した。

昭和63年（1988）の工学部改組に伴い、情報工学科は改称されて知能情報工学科となり、基礎情報工学講座と知能工学講座の2大講座に再編成された。この時に、共通講座の情報工学講座は知能情報工学科に吸収された。その後大松繁助教授と馬場則夫助教授が教授に昇任した。年度末に中財史江技官が退職した。

平成元年度（1989）に、知能工学講座に前田茂助教授、小野典彦助教授、堂園浩助手、久米崇代技官が着任した。平成2年度（1990）に、基礎情報工学講座の渡辺尚助手が静岡大学へ転出し、河辺徹助手が着任した。また馬場則夫教授が大阪教育大学へ転出し、12月に筑波大学から宮本定明教授が着任した。平成3年度（1991）に、基礎情報工学講座にタノマル・ジュリオ助手が着任し、矢野米雄助教授（旧姓山本）が教授に昇任した。知能工学講座の堂園浩助手が熊本大学へ転出し、池田建司助手が着任した。同年度末に知能工学講座の真鍋俊彦講師が高松短期大学へ転出、前田茂助教授が退職した。

平成4年度（1992）に、知能工学講座に上田哲史助手が、基礎情報工学講座に北研二講師が、また臨時増募に伴う教官席に苦米地英人助教授が着任した。さらに、平成3年度（1991）末に退職した久米崇代技官の後任として、久米有子技官が着任した。

平成5年度（1993）から平成9年度（1997）

平成6年（1994）4月の久米有子技官の建設工学科への所属換えに伴い、立山あけみ技官が化学応用工学科から所属換えになり、学科共通

の事務担当となった。知能工学講座の宮本定明教授が筑波大学へ配置換えになった。平成7年（1995）3月に、知能工学講座の正満敏雄教授が本学科最初の定年退官者になるとともに、本学科最初の名誉教授になった。さらに大松繁助教授が母校の大阪府立大学工学部へ転出し、苦米地英人助教授が退職した。

この年から夜間主コースの学生の受け入れを開始した。また情報処理センターから総合情報処理センターの昇格により、高橋義造教授が初代のセンター長に就任した。平成7年度（1995）には、基礎情報工学講座に愛媛大学から森井昌克教授が着任した。また石崎文雄助手、佐野雅彦助手が着任し、河辺徹助手が総合情報処理センターの講師に昇任した。また知能工学講座の大恵俊一郎助教授が教授に昇任し、金群助教授、寺田賢治助手、獅々堀正幹助手、緒方広明助手が着任した。

平成8年度（1996）に、基礎情報工学講座に太田能講師と岩田賢一助手が、知能情報工学講座にNTTから下村隆夫教授が着任した。また基礎情報工学講座の仁木登助教授が光応用工学科教授に昇任した。平成9年度（1997）に、知能情報工学科の小野典彦助教授が教授に昇任した。また、高橋義造教授に代って島田良作教授が総合情報処理センター長に就任した。さらに、総合情報処理センターの河辺徹講師が筑波大学に転出し、後任として9月から基礎情報工学講座の佐野雅彦助手が講師に昇任した。

創立75周年当時の知能情報工学科のスタッフのリストは以下の通りである。

平成9年（1997年、工学部75周年）当時の知能情報工学科教職員組織

講座名	教職員名	
基礎情報工学講座	A1	高橋義造教授、タノマル・ジュリオ助手、佐野雅彦助手、井上富夫技官
	A2	島田良作教授、北研二助教授、河辺徹講師、石崎文雄助手、石田富士雄技官
	A3	赤松則男教授、福見稔助教授、菊地真美教務員
	A5	森井昌克教授、太田能講師、岩田賢一助手、小田育稔技官
知能工学講座	B1	大恵俊一郎教授、寺田賢治講師、上田哲史講師、小田育稔技官
	B2	下村隆夫教授、池田建司助教授、最上義夫講師、板東亘技官
	B3	青江順一教授、小野典彦准教授、獅々堀正幹助手、立山あけみ技官
	B4	矢野米雄教授、金群助教授、緒方広明助手、板東亘技官

平成10年（1998）から平成19年（2007）

平成10年（1998）には、立山あけみ技官が工学部用度係に配置換えとなった。また、毛利公美助手が香川短期大学より基礎情報工学講座に着任し、高橋義造教授が定年退官して大阪工業大学教授に就任、岩田賢一助手が松山東雲女子大学に転出、金群助教授が退職し会津大学に転出、タノマルジュリオ講師が退職した。

平成11年（1999）には、満倉靖恵助手が基礎情報工学講座に着任し、高木雅子事務官が工学部教務係に異動した。また、寺田賢治講師が知能工学講座助教授に昇任し、緒方広明助手が知能工学講座講師に昇任した。

平成12年（2000）には、島田良作教授が定年退官して四国大学教授に就任し、石崎文雄助手が南山大学に転出した。また、北研二助教授が基礎情報工学講座教授に昇任し、泓田正雄助手が知能工学講座講師に昇任した。柘植覚助手がATRより基礎情報工学講座に、森田和宏助手が知能工学講座に着任した。

平成13年（2001）には、基礎情報工学講座に任福継教授が広島市立大学より着任し、楊淳珂助手が退職して帰国した。また、獅々堀正幹講師が基礎情報工学講座助教授に、緒方広明講師が知能工学講座助教授に昇任した。

平成14年（2002）には、太田能助教授が神戸大学に転出した。また、上田哲史講師が高度情報化基盤センター助教授に昇任し、北研二教授が高度情報化基盤センター教授に配置換えとなった。

平成15年（2003）には、満倉靖恵助手が岡山大学に転出し、越智洋司助手が近畿大学に転出した。また、光原弘幸助手が基礎情報工学講座に着任した。

平成16年（2004）には、得重仁講師が広島市立大学より基礎情報工学講座に着任し、ステイフィン・カルンガル助手が基礎情報工学講座に着任した。

平成17年（2005）には、森井昌克教授が神戸大学に転出し、小野功助教授が東京工業大学に転出した。また、福見稔助教授が基礎情報工学講座から知能工学講座教授に配置換えして昇

任し、最上義夫講師が基礎情報工学講座助教授に昇任し、毛利公美助手が基礎情報工学講座講師に昇任した。

平成18年（2006）には、大濱靖匡教授が九州大学より基礎情報工学講座に着任した。毛利公美講師が岐阜大学に転出した。また、泓田正雄講師が知能工学講座助教授に昇任し、柘植覚助手が基礎情報工学講座講師に、森田和宏助手が知能工学講座講師にそれぞれ昇任した。

平成19年（2007）には、黒岩眞吾助教授が千葉大学に転出した。また、土屋誠司助教が基礎情報工学講座に着任した。

平成20年（2008）から平成27年（2015）

平成19年度（2007）には、知能情報工学講座の伊藤拓也助教が退職した。3月に基礎情報工学講座に東北大学から鈴木基之准教授が着任した。高度情報化基盤センターの佐野雅彦講師が准教授に、知能情報工学講座の光原弘幸助教が講師に昇任した。

平成20年度（2008）には、基礎情報工学講座の赤松則男教授が定年退職、高度情報化基盤センターの大恵俊一郎教授が定年退職し、基礎情報工学講座の土屋誠司助教が退職した。4月に基礎情報工学講座に松本和幸助手が着任した。

平成21年度（2009）には、知能情報工学講座の柘植覚講師が退職した。4月に基礎情報工学講座に東京工業大学から渡辺峻助教が、知能情報工学講座に東京農工大学から伊藤伸一助教が着任した。7月には石井純也技術専門職員が着任した。知能情報工学講座の寺田賢治准教授が教授に、徳島大学高度情報化基盤センターの上田哲史准教授が教授に昇任した。また、徳島大学高度情報化基盤センターの松浦健二助教が准教授に、知能情報工学講座のカルンガルステファンギディンシ助教が講師に昇任した。

平成22年度（2010）には、知能情報工学講座の矢野米雄教授が定年退職した。4月に知能情報工学講座に伊藤桃代助教が着任し、7月に北研二教授が高度情報化基盤センターから基礎情報工学講座へ配置換えし、矢野米雄教授が情報化推進センター長に就任した。10月に知能

情報工学講座に名古屋大学から柏原考爾講師が着任した。

平成23年度（2011）には、基礎情報工学講座の大濱靖匡教授が電気通信大学へ転出、基礎情報工学講座の鈴木基之准教授が退職した。知能情報工学講座の獅々堀正幹准教授が教授に昇任、知能情報工学講座の柏原考爾講師が准教授に昇任した。

平成24年度（2012）には、富士正人技術専門職員が定年退職し、基礎情報工学講座の得重仁講師が退職した。4月に上田哲史教授が徳島大学情報化推進センター長に就任した。

平成25年度（2013）には、最上義夫准教授が定年退職し、知能情報工学講座の緒方広明准教授が九州大学へ転出した。4月に基礎情報工学講座には東京大学から吉田稔講師が、知能情報工学講座には電気通信大学から大野将樹講師が着任した。

平成26年度（2014）には、知能情報工学講座の下村隆夫教授が定年退職した。また、菊地真美技術専門職員が定年退職した。基礎情報工学講座の渡辺峻助教が東京農工大学へ転出した。4月に基礎情報工学講座に東京工業大学から永田裕一准教授が着任した。10月に基礎情報工学講座に名古屋大学から北岡教英教授が着任した。2月に知能情報工学講座に大阪大学から木下和彦教授が、基礎情報工学講座に京都大学から西出俊講師が着任した。知能情報工学講座の森田和宏講師が准教授に昇任した。

平成27年（2015）2月には、知能情報工学講座の青江順一教授が定年退職した。また、井上富夫技術専門職員が定年退職、石田富士雄技術専門職員が退職した。4月に基礎情報工学講座に康鑫助教が着任し、前年度定年退職された菊地真美技術専門職員が再雇用職員として着任した。知能情報工学講座の泓田正雄准教授が教授に昇任、徳島大学情報センターの松浦健二准教授が教授に昇任した。

光応用工学科

光応用工学科の経緯

1980年代、来るべき本格的なマルチメディア社会への到来に備えるため、光技術への関心がにわかに高まった。光通信技術の進展は目覚ましく、当時において既に通信の基線技術として定着していた。太陽光発電、表面改質光技術が実用化され、光エネルギー技術が大幅に進展、各種ディスプレイ技術、光計測技術、光CT技術、光バイオプシー技術などの光情報処理技術の飛躍的な進歩、高輝度の青色発光ダイオードの実用化と、光ディスクへの応用など光デバイス技術の大幅な進展など、特筆すべき各種光技術の発展により国内外の「光産業」は順調に成長し、当時4兆円台の売上高を誇るまでになり、さらに発展するものと期待されていた。このように、光技術の高度化に向けての要求が急激に高まったにもかかわらず、光産業分野での活躍が期待できる優秀な人材を育てる高等教育機関は皆無に近かった。こうした状況を打破すべく、本格的にフォトニクスを教育・研究する学科を設置する必要があると考え、工短大の廃止に伴う改組の一環として、平成5年（1993）10月に、国立大学工学部初のフォトニクスを教育・研究する光応用工学科が設置された。

本学科は、光機能材料の合成・創製・物性評価、光デバイスの作製・性能評価、分光・分析法などを教育・研究する「光機能材料講座」と情報処理・アナログおよびデジタル画像処理、光情報処理・光通信とその応用技術などを教育・研究する「光情報システム講座」の2大講座で構成された。

本学科の教育目標は、系統的な専門教育課程の下で、光技術に関わる課題を見出し、創造的に解決する能力を育成することに加え、工学を人類社会に技術面から貢献する使命を担うものとして位置づけ、広い視野と個々の使命感を持って生きる技術者の育成を目指している。

光応用工学科が設置された平成5年（1993）には、機械工学科から西岡一水教授、井上哲夫助教が、電気電子工学科から福井萬壽夫教授、

原口雅宣講師および榎原稔技官が本学科に所属替えになった。

平成6年（1994）4月に光応用工学科第1期生となる51名が入学した。

平成7年（1995）に化学応用工学科から田中均教授、機械工学科から森篤史助手が所属替えになり、西田信夫教授、友田昭彦講師、早崎芳夫講師、岡本敏弘助手、河田佳樹助手、田村和美教務員および小西啓子事務員が着任した。

平成8年（1996）に知能情報工学科から仁木登教授が所属替えになり、本郷高宏助手、山

本裕紹助手、Rachid Sammoud助手が着任した。河田佳樹助手が講師に昇任し、友田昭彦講師が退職した。

平成9年（1997）に手塚美彦講師が着任した。小西啓子事務員が退職され、齊原啓夫技官および西谷有紀子事務員が着任した。4月に5階建て耐震構造の光応用工学科棟が竣工し、それまでばらばらに配置されていた研究室が一カ所に集約され、本学科における教育・研究の拠点となった。

創立75周年当時の光応用工学科のスタッフのリストは以下の通りである。

平成9年（1997年、工学部75周年）当時の光応用工学科教職員組織

講座名	教職員名	
光機能材料講座	A1（光科学・光工学基礎研究室）	福井萬壽夫教授、原口雅宣講師、岡本敏弘助手
	A2（結晶成長学研究室）	西岡一水教授、井上哲夫助教授、森 篤史助手
	A3（材料設計研究室）	田中 均教授、手塚美彦講師、本郷高宏助手
光情報システム講座	B1（光計算工学研究室）	西田信夫教授、早崎芳夫講師、山本裕紹助手
	B2（光情報処理研究室）	仁木 登教授、河田佳樹講師、Rachid Sammoud助手
学科共通	榎原 稔技官、齊原啓夫技官、田村和美教務員、西谷有紀子事務員	

平成10年（1998）から平成19年（2007）

平成10年（1998）3月に、学部第1期生45名が卒業し、4月には第5期生53名が入学した。また、大学院工学研究科博士前期課程光応用工学専攻が発足し、大学院第1期生として33名が入学した。光応用工学科の準備段階から新設及び大学院設置に至るまでその中心となり献身的に尽力されていた光機能材料講座A2グループの西岡一水教授が、5月20日に逝去された。あまりにも急な出来事であった。核生成理論をはじめ、機械材料、結晶成長に関する数多くの研究や学会活動などの社会貢献の功績により、西岡教授には叙位（正四位）、叙勲（勲三等瑞宝章）が授与された。

平成11年（1999）光機能材料講座A2グループの井上哲夫助教授が教授に、森篤史助手が講師に昇任した。また、新たに柳谷伸一郎助手が着任し、A2グループに加わった。

平成12年（2000）4月、大学院工学研究科博士後期課程に、光応用としては第1期生とな

る4名が入学した。光情報システム講座B2グループのRachid Sammoud助手がUnited Arab Emirates Universityへ転出され、後任として久保満助手が着任した。

平成13年（2001）3月、光機能材料講座A3グループの本郷高広助手が退職された。西谷有紀子事務官が配置換えのために異動となり、後任として、津村恵子教務員が着任した。

平成14年（2002）、光機能材料講座A1グループの原口雅宣講師が、助教授に昇任した。この年、光応用工学科棟の隣に総合研究実験棟（通称「エコ棟」）が竣工した。その3階が光応用棟と連結され、光応用工学科の研究スペースとして利用可能になるなど、研究環境が充実した。

平成15年（2003）、光機能材料講座A3グループに新たに岡博之助手が着任した。この年、光応用工学科は日本技術者教育認定制度（JABEE）の認定審査を受け合格した。これにより、本年度からJABEE認定を受けた学部卒業生を輩出できるようになった。

平成16年（2004）、国立大学法人法制定により、本大学が国立大学法人徳島大学となった。法人化後初めての本学科の入学生として、4月に学部第11期生54名、大学院博士前期課程第7期生34名を迎えた。

平成18年（2006）、大学院の改組により、工学研究科が先端技術科学教育部となり、光応用工学専攻はシステム創生工学専攻光システム工学コースに名称変更となった。また、教員の所属が工学部から大学院ソシオテクノサイエンス研究部に変更になった。本学科にて、11年間教育・研究等に尽力されていた光情報システム講座B1グループの西田信夫教授が、3月末に定年退職され、その後本学大学院ソシオテクノサイエンス研究部の研究部長補佐に就任された。学科創設以来、学科の教務・事務などを担当していた田村和美教務員が6月末に退職され、後任として高橋雅代技術員が着任した。

平成19年（2007）、13年余年にわたり本学科にて教育・研究等に尽力されていた光機能材料講座A2グループの井上哲夫教授が、3月末に定年退職された。新たに、フォトリソグラフィネットワークを専門とされる後藤信夫教授、3D立体ディスプレイを専門とされる陶山史朗教授が光情報システム講座に着任した。後藤信夫教授の着任に伴い、後藤教授、森講師、柳谷助教の3名による光情報システム講座B3グループが新たに置かれた。光機能材料講座の福井萬壽夫教授が工学部長・大学院先端技術科学教育部長に就任した。学校教育法などの改正により、助教授は准教授に、助手は助教に職名が変更になった。また、教務員は技術職員に呼称が変更になった。

平成20年（2008）から平成27年（2015）

平成20年（2008）3月、光応用工学科に13年間にわたって教育・研究等に尽力されていた光情報システム講座B1グループの早崎芳夫准教授が宇都宮大学に転任された。光機能材料講座の福井萬壽夫教授が、工学部長・大学院先端技術科学教育部長に加えて大学院ソシオテクノサイエンス研究部長に就任した。

平成21年（2009）、本学に昭和46年に赴任され、光応用工学科設立の中心メンバーの一人であり長年にわたって精力的に教育・研究等に尽力されていた光機能材料講座A1グループの福井萬壽夫教授が3月末に定年退職され、名誉教授とられた。その後、本学大学院ソシオテクノサイエンス研究部の研究部長補佐に就任された。光応用工学科での教育・研究等に尽力されていた光情報システム講座B2グループの久保満助教が3月末に退職し、企業に移られた。5月末に学科の教務・事務などを担当していた高橋雅代技術職員が退職され、後任として10月に横山智弘技術職員が着任した。10月に光機能材料講座A1グループの原口雅宣准教授が教授に昇任した。光情報システム講座B1グループの山本裕紹助教が講師に昇任した。

平成22年（2010）3月末、光応用工学科で教育・研究等に尽力されていた光機能材料講座A3グループの岡博之助教が退職し企業に移られた。後任として丹羽実輝助教が7月に着任した。また3月に光情報システム講座B2グループに鈴木秀宣助教が着任した。平成21年に本学科を退職された福井萬壽夫名誉教授が、本学の研究担当理事・副学長に就任した。

平成23年（2011）、約10年間にわたり本学科の教務・事務などを担当していた津村恵子技術職員が異動され、後任として真鍋孝子技術補佐員が着任した。

平成24年（2012）4月、大学院エコシステム工学コースに所属していた橋本修一教授と松尾繁樹准教授が光応用工学科の所属になり、橋本教授、松尾准教授の2名による光機能材料講座A4グループが新たにスタートした。

平成26年（2014）3月末、光応用工学科の創設準備時期から本学科に教育・研究などに尽力されていた光機能材料講座A2グループの田中均教授が定年退職され、名誉教授になられた。また、本学科に教育・研究等に尽力されていた光機能材料講座A4グループの松尾繁樹准教授が芝浦工業大学に、光情報システム講座B1グループの山本裕紹講師が宇都宮大学に転任された。本学科の教務・事務などを担当していた真

鍋孝子技術補佐員が異動され、後任として堀内加奈技術職員が着任した。11月に光機能材料講座A1グループの岡本敏弘助教が准教授に昇任した。光機能材料講座のA3グループとA4グループが合併し、橋本教授、手塚講師、丹羽助教による新たなA3グループを構成することとなった。

平成27年（2015）、光機能材料講座に超高速分光を専門とされている古部昭広教授が着任し、古部教授と柳谷助教で光機能材料講座A4グループとなった。光情報システム講座に水科晴樹講師、岸川博紀助教が着任し、水科講師はB1に、岸川助教はB3グループに加わった。



光応用工学科の阿波踊り浴衣

光応用工学科第一期生謝恩会
(平成10年（1998）3月)



平成10年度（1998）
光応用工学科
新入生と教職員



光応用工学科棟



新入生合宿研修 (国立淡路青少年交流の家)



新入生合宿研修
(徳島県立山川少年自然の家)



平成27年度 (2015)
光応用工学科
新入生と教職員

生物工学科

20世紀後半における生命科学の進歩は目覚ましく、この進歩の過程でバイオテクノロジーが隆盛となり、実用化段階に達し、医学、農学、薬学から工学の分野にも係わるようになった。また、生物の多様で優れた機能を解明することは、現在の人類が直面している様々な問題解決に役立てることができる。バイオサイエンスやバイオテクノロジーに関する研究は今後益々重要となり、近い将来、革新的技術が誕生する可能性が非常に高まった。このような時代背景のもと、社会の要請に応える形で、国立大学工学部としては比較的早期の昭和63年（1988）4月に徳島大学工学部に生物工学科が設置された。

本学科は、生物情報の受容、伝達、応答等の分子機構やエネルギー変換、薬物作用等の経路解明を通じて、実用的なバイオ技術開発を目指す「生物機能工学講座（通称：A講座）」および遺伝子操作や細胞工学等のバイオ技術を駆使して、分化、発生、代謝等の生体内反応機構の解明を目指す「生物反応工学講座（通称：B講座）」の2つの大講座から構成がなされた。設立当初は各大講座に2講座の4講座体制（A1、A2、B1、B2）であり、創設当初の教員配置を表1に示す。この4講座体制は、平成6年（1994）の工業短期大学部改組時の定員増に伴い、7講座体制（A1～A4、B1～B3）に拡張された。以来、この講座体制で工学部内における唯一の生物系学科として教育および研究活動が継続されてきた。

創設当初に、学生と教職員の親睦を図るための互助組織である「らせん（RASEN）会」が設立され、新入生歓迎会、卒業生・修了生送別

会などの学科内諸行事を主催した。特に、徳島の夏の風物詩である阿波踊りには、「生物工学連」として毎年欠かさず参加して、卒業生、在校生および教職員の交流の場として大いに楽しまれた。

しかしながら、平成28年（2016）に行われた常三島キャンパス内の学部改組により、本学科は新たに設立された生物資源産業学部の中核として合流することになり、発展的に解消され、その役目を終えることとなった。学科設立時から解消時までの流れを人事異動を主体として以下に記す。

昭和63年（1988）から平成4年（1992）

昭和63年（1988）に、第一回生として40名が入学した。教官定員は2大講座に教授、助教授、助手の各2名ずつ計12名であり、発令は完成年度までに逐次行われた。初年度は金品昌志教授（A1講座）、堀 均助教授（同）および佐竹 弘助手（同）が着任した。化学応用工学科の製図室、講義室、学生実験室などを借用し、教官研究室として使用した。

平成元年（1989）に、松田佳子教授（B1講座）、辻 明彦助教授（同）および勢川（旧姓勝田）智美技官が着任した。この年、工学部再開発案が決定し、化学・生物棟の設計が開始された。

平成2年（1990）に、根岸正彦教授（B2講座）、松木 均助手（A1講座）、長宗秀明助手（B1講座）および黒田トクエ技官が着任した。3年次に入学定員5名で編入学生の受け入れを開始した。化学・生物棟の建築工事（6階の一部と7・8階が生物工学科）が開始された。

平成3年（1991）に、月原富武教授（A2講座）、森本幸生助教授（A2講座）、吉岡秀文助教授（B2

表1 生物工学科創設当初（平成5年）の教職員組織

講座名	教職員名	
生物機能工学講座	A1	金品昌志教授、堀 均助教授、松木 均助手
	A2	月原富武教授、森本幸生助教授、佐藤孝雄助手
生物反応工学講座	B1	松田佳子教授、辻 明彦助教授、長宗秀明助手
	B2	野地澄晴教授、吉岡秀文助教授



生物工学科第一期生卒業記念の集合写真 H4 (1992) . 3. 23 於 センチュリープラザホテル



徳島市阿波踊り参加記念 生物工学科連の集合写真 H3 (1991) . 8. 12

講座)、末吉達也助手(同)、中村(旧姓佐滝)真紀教務員および佐々木(旧姓西根)由香技官が着任した。化学・生物棟がこの年の9月に完成し、大学院工学研究科博士後期課程が設置された。佐竹 弘助手が地域共同研究センター助教授に昇任した。

平成4年(1992)に、第一回卒業生38名を送り出した。大学院工学研究科博士前期課程生物工学専攻が入学定員8名で設置され、15名が入学した。野地澄晴教授(B2講座)と佐藤孝雄助手(A2講座)が着任し、根岸正彦教授は米国NIHへ転出し、末吉達也助手が退職した。

平成5年(1993)から平成9年(1997)

平成5年(1993)に、大内淑代助手(B2講座)が着任した。

平成6年(1994)に、工業短期大学の廃止に伴い、生物工学科の定員が増加し、昼間コースは65名(編入学定員5名を含む)になり、新たに夜間主コース(入学定員10名)が作られた。また社会人特別選抜入試を実施した。博士前期課程第一回修了生15名を送り出した。また、この年に設置された大学院工学研究科博士後期課程物質工学専攻に生物工学科第一期生が進学し、金品昌志教授が大学院博士後期課程運営委員会委員長を務めた。

平成7年(1995)に、月原富武教授が大阪

大学蛋白質研究所教授に配置換えとなり、化学応用工学科の高麗寛紀助教授が教授(A3講座)に、長宗秀明助手がA3講座助教授に昇任し、前田拓也助手(A3講座)と長浜正巳助手(B1講座)が着任した。金品昌志教授が地域共同研究センター長および工学部教務委員会委員長を務めた。

平成8年(1996)に、森本幸生助教授が姫路工業大学に転出し、松木 均助手が講師に昇任した。大島敏久教授(B3講座)と井上(旧姓河野)久美子技官が着任した。金品昌志教授が地域共同研究センター長を務めた。機械・生物棟(7・8階が生物工学科)の建設工事が開始された。

平成9年(1997)に堀 均助教授がA2講座教授に昇任した。櫻庭春彦講師(B3講座)と永沢秀子講師(A2講座)が着任した。文部省在外研究員として長宗秀明助教授が英国ロンドン大学へ、松木 均講師が米国ユタ大学へ留学した。この年、博士後期課程第一期生が修了した。野地澄晴教授が工学部入試委員会委員長を務めた。

平成10年(1998)から平成14年(2002)

平成10年(1998)に、夜間主コース第一回卒業生7名を送り出した。ヴァイレヌーフ真澄美助手(A1講座)と宇都義浩助手(A2講座)が着任し、大内淑代助手が京都大学、長浜正巳助



生物工学科10周年記念祝賀会の集合写真 H10(1998).11.7 於 徳島パークホテル

手が東京薬科大学および佐藤孝雄助手が東京工業大学へ転出した。高麗寛紀教授が工学部自己点検・評価委員会委員長、金品昌志教授が工学部広報委員会委員長を務めた。秋に機械・生物棟が完成し、3研究室（A2、A3およびB3講座）が移転した。11月に学科創立10周年記念式典が催された。

平成11年（1999）に、伊藤嘉浩教授（A4講座）、小出隆規助手（A4講座）、川添直輝助手（A4講座）、黒田理恵子助手（B1講座）、三戸太郎助手（B2講座）、小湊（旧姓布浦）直樹助手（B3講座）および友成さゆり教務員が着任した。吉岡秀文助教授が兵庫教育大学に転出し、松木 均講師が助教授に昇任した。高麗寛紀教授が地域共同研究センター長、金品昌志教授が工学部広報委員会委員長を務めた。

平成12年（2000）に、大内淑代助教授がB2講座に再度着任し、今野博行助手がA4講座に着任した。川添直輝助手が奈良先端科学技術大学院大学へ転出した。高麗寛紀教授が地域共同研究センター長、野地澄晴教授が工学部教務委員会委員長を務めた。また、金品昌志教授が工学部評議員となり、工学部広報委員会委員長と研究交流委員会委員長を兼務した。

平成13年（2001）に、永沢秀子講師、櫻庭春彦講師が共に助教授に、小出隆規助手が講師

にそれぞれ昇任した。小湊直樹助手が退職した。金品昌志教授が学長補佐に就任し、工学部評議員と広報委員会委員長、研究交流委員会委員長を兼務した。

平成14年（2002）に、郷田秀一郎助手（B3講座）が着任した。伊藤嘉浩教授が退職し、黒田理恵子助手が福岡県立工業技術センター、ヴィレヌーヴ真澄美助手が埼玉大学へ転出した。金品昌志教授が学長補佐、高麗寛紀教授が工学部広報委員会委員長を務めた。

平成15年（2003）から平成19年（2007）

平成15年（2003）に、湯浅恵造助手（B1講座）および玉井伸岳助手（A1講座）が着任し、今野博行助手が京都大学へ転出した。秋に日本技術者教育認定機構（JABEE）試行審査を受審した。高麗寛紀教授が学長補佐に就任した。

平成16年（2004）に、国立大学が法人化された。辻明彦助教授が教授に昇任し、小出隆規講師が新潟薬科大学へ転出した。高麗寛紀教授が大学院博士後期課程運営委員会委員長、野地澄晴教授が工学部自己点検・評価委員会委員長、辻 明彦教授が入試委員会委員長を務めた。

平成17年（2005）に、長浜正巳助教授がB1講座に再度着任し、友安俊文助教授（A4講座）が着任した。長宗助教授が教授に昇任し、松田



生物工学科20周年記念祝賀会の集合写真 H20（2008）. 11. 15 於 徳島東急イン

佳子教授が退職した。秋に日本技術者教育認定機構（JABEE）本審査を受審し、フル認定を受けた。

平成18年（2006）に、大学院大学へ改組となり、教員は大学院ソシオテクノサイエンス研究部、大学院生は大学院先端技術科学教育部、学部生は工学部生物工学科に所属することとなった。田端厚之助手（A4講座）および間世田英明助教授（A3講座）が着任した。宇都義浩助手が助教授に昇任した。大島敏久教授が九州大学へ、永沢秀子助教授が岐阜薬科大学へ、郷田秀一郎助手が長崎大学へ転出した。

平成19年（2007）に、職位名の変更がなされた。中村嘉利教授（B3講座）、中田栄司助教（A2講座）、白井昭博助教（A3講座）および佐々木千鶴助教（B3講座）が着任した。金品昌志教授が退職し、松木均助教授がその後を引き継ぎ教授へ昇任した。前田拓也助手が兵庫医療大学へ転出した。

平成20年（2008）から平成24年（2012）

平成20年（2008）に、玉井伸岳助教が講師へ昇任した。櫻庭春彦准教授が香川大学へ転出した。11月に学科創立20周年記念式典が催された。

平成21年（2009）に、長浜正巳准教授が明治薬科大学へ転出した。辻明彦教授が、工学部副研究部長と研究交流委員会委員長を兼務した。

平成22年（2010）に、高麗寛紀教授が退職し、大政健史教授（A3講座）が着任した。中田栄司助教が京都大学に転出した。辻明彦教授が研究部副研究部長を務めた。秋に日本技術者教育認定機構（JABEE）継続審査を受審し、フル認定（2回目）を受けた。

平成23年（2011）に、後藤優樹助教（A1講座）が着任した。辻明彦教授が研究部副研究部長、野地澄晴教授が徳島大学附属図書館長、長宗秀明教授が工学部動物実験委員会委員長を務めた。

平成24年（2012）に、3年次学生の医薬工連携スタディーズおよび農工連携スタディーズが開始された。野地澄晴教授が早期退職し、徳島大学理事に就任した。大内淑代准教授が岡山大学へ転出した。堀均教授が工学部自己点検・評価委員会委員長、松木均教授が入試委員会委員長を、また辻明彦教授が研究部副研究部長を務めた。

平成25年（2013）から平成29年（2017）

平成25年（2013）に、夜間主コースカリキュラムのフレックス制が導入された。浅田元子助教（B3講座）が着任した。玉井伸岳講師および湯浅恵造助教が、それぞれ准教授へ昇任した。中村嘉利教授が工学部教務委員会委員長、大政健史教授が学生委員会委員長を務めた。辻明彦



生物工学科30周年記念祝賀会の集合写真 H29(2017).12.2 於 パークウエストーンホテル

彦教授が研究部副研究部長と工学部評議員を兼務した。

平成26年（2014）に、櫻谷英治教授（B2講座）が着任した。堀 均教授が退職し、宇都義浩准教授がその後を引き継ぎ教授へ昇任した。佐々木千鶴助教が講師へ昇任した。後藤優樹助教がスイス連邦工科大学チューリッヒ校へ留学した。辻 明彦教授が工学部評議員と学長補佐を兼務した。

平成27年（2015）に、山田久嗣助教（A2講座）および阪本鷹行助教（B2講座）が着任した。浅田元子助教が講師へ昇任した。大政健史教授が大阪大学へ転出した。玉井伸岳准教授

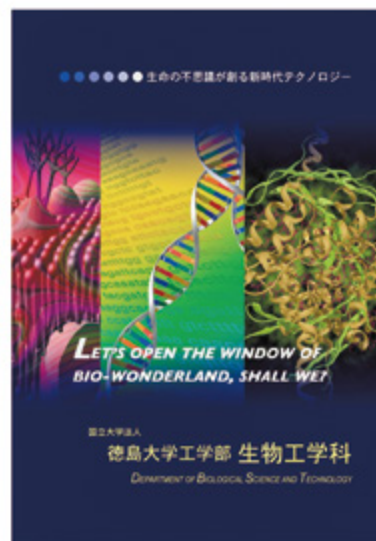
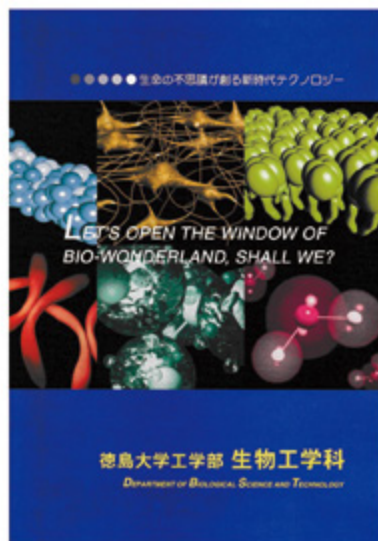
がデンマーク コペンハーゲン大学へ留学した。この年（生物工学科解消期）の教員配置を表2に示す。

平成28年（2016）に、間世田英明准教授が産業技術総合研究所へ転出した。同年、常三島キャンパス内に生物資源産業学部が新設され、生物工学科所属教員は新学部へ所属替えとなった。秋に日本技術者教育認定機構（JABEE）継続審査を受審し、フル認定（3回目）を受けた。

平成29年（2017）の12月には学科創立30周年記念式典が催され、1988年に工学部内に創立以来、約30年の期間に亘った本学科の教育および研究活動に終止符を打った。

表2 生物工学科解消期（平成27年）の教職員組織

講座名	教職員名	
生物機能工学講座	A1	松木 均教授、玉井伸岳准教授、後藤優樹助教
	A2	宇都義浩教授、山田久嗣講師
	A3	間世田英明准教授、白井昭博助手
	A4	長宗秀明教授、友安俊文准教授、田端厚之助教
生物反応工学講座	B1	辻 明彦教授、湯浅恵造准教授
	B2	櫻谷英治教授、三戸太郎助教、阪本鷹行助教
	B3	中村嘉利教授、佐々木千鶴講師、浅田元子講師



生物工科学科紹介パンフレットの変遷

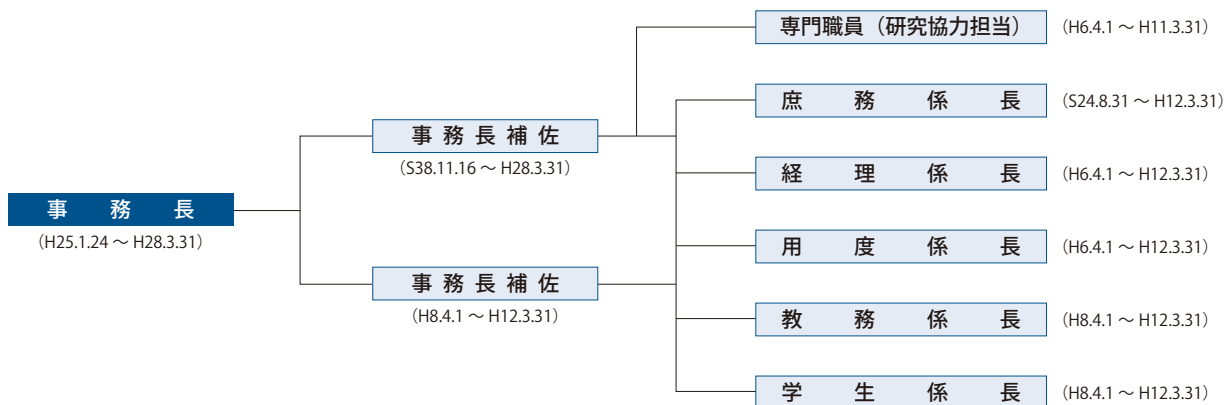
事務部の歩み

事務組織の変遷

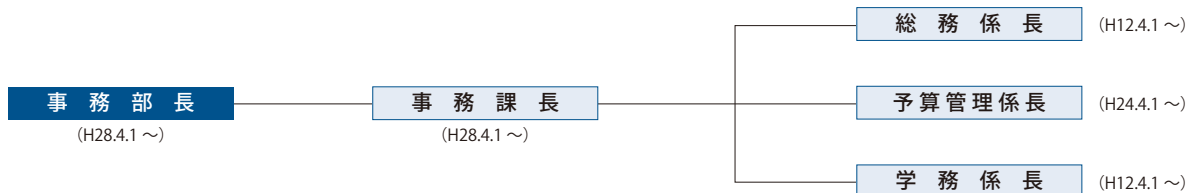
創立75周年にあたる平成9年（1997）当時の工学部事務部は、事務長、事務長補佐、専門職員、庶務係、経理係、用度係、教務係、学生係の組織体制であった。平成12年（2000）4月に、総務係、管理係、学務係の3係体制となったが、平成24年（2012）4月に管理係が予算

管理係に名称を改めた。また、平成28年（2016）4月、総合科学部の理系学科と工学部の生物工学科以外の学科が理工学部に、工学部の生物工学科が生物資源産業学部へ改組したことに伴い、総合科学部事務課、理工学部事務課、生物資源産業学部事務課及び会計課からなる常三島事務部が設置された。

平成9年（1997）当時の事務組織は



であったが、令和5年（2023）4月1日現在では次のとおりである。



事務組織歴代役職者名簿

○事務部長	石井 学 高原 哲也	H28.4.1 ~ H31.3.31 R 2.4.1 ~ R 4.3.31	大西 教博 泉 朗	H31.4.1 ~ R 2.3.31 R 5.4.1 ~
○事務長	寺井 重雄 三橋 喩 松家 正 富永 教和 吉平 富久 石井 学	H 9.4.1 ~ H10.3.31 H12.4.1 ~ H14.3.31 H17.4.1 ~ H18.3.31 H20.4.1 ~ H22.3.31 H23.4.1 ~ H24.3.31 H27.4.1 ~ H28.3.31	杉本 光伸 戸井 信行 石原 伴起 佐藤 明義 笹賀 一秀	H10.4.1 ~ H12.3.31 H14.4.1 ~ H17.3.31 H18.4.1 ~ H20.3.31 H22.4.1 ~ H23.3.31 H24.4.1 ~ H27.3.31
○課長 (理工)	森 太一 米田 雅信	H28.4.1 ~ H30.3.31 R 2.4.1 ~ R 4.3.31	高原 哲也 荒木 俊典	H30.4.1 ~ R 2.3.31 R 4.4.1 ~
○課長 (生物)	松江 重文 槌谷 和也 青木 正弘	H28.4.1 ~ H30.3.31 R 2.4.1 ~ R 3.3.31 R 5.4.1 ~	米田 雅信 沖津 貴司	H30.4.1 ~ R 2.3.31 R 3.4.1 ~ R 5.3.31
○事務長補佐	横山 和男 神田 年昭 森 太一 松尾 誠治	H 8.4.1 ~ H12.3.31 H10.4.1 ~ H12.3.31 H22.7.1 ~ H24.3.31 H25.4.1 ~ H26.3.31	榎村 高堅 杉野 彰一 高田 憲治 原 雄三	H 8.4.1 ~ H10.3.31 H17.4.1 ~ H22.3.31 H24.4.1 ~ H24.5.31 H26.4.1 ~ H28.3.31
○副課長	滝川 泰弘	H28.4.1 ~ H30.3.31		

事務組織の職務内容と職員

令和5年（2023）の職務内容と職員のリストは次の通りである。

理工学部事務課

◎総務係

主な事務は、次の項目に関することである。

- (1)教授会、その他の会議 (2)諸規則の制定及び改廃 (3)学部、学科、大学院、専攻等の設置及び改廃 (4)科学体験フェスティバル (5)科学研究費、その他研究推進 (6)郵便物の接受及び発送 (7)職員の人事（人事課の所掌を除く。） (8)職員の出張、研修（人事課の所掌を除く。）

職員は、奥村係長、柳主任、林事務員、久次米事務員、松井特任事務員、坂尾事務補佐員、久次米事務補佐員、岡澤事務補佐員、中山事務補佐員、木村事務補佐員である。

◎予算管理係

主な事務は、次の項目に関することである。

- (1)予算および決算 (2)受託研究および共同研究の報告並びに寄附金の受入手続 (3)固定資産、少額資産及び消耗品の管理 (4)固定資産、少額資産及び消耗品の貸付け、借受けおよび寄附受入れ

職員は、北岡係長、木下主任、鳥海事務員、前川事務員、島木事務補佐員、松永事務補佐員、山田事務補佐員である。

◎学務係

主な事務は、次の項目に関することである。

- (1)入学者の選抜 (2)学生の入学、卒業および修了並びに休学等学生異動 (3)学籍 (4)教育課程 (5)授業、試験および成績 (6)時間割、講義概要等の作成 (7)学位 (8)学生の表彰及び懲戒 (9)所掌事務に係る各種委員会 (10)諸証明

職員は、福島係長、木南事務員、原塚事務員、南海事務員、田中事務員、岩生事務員、新居事務員、石川事務補佐員、伊丹事務補佐員、北洲事務補佐員、篠原事務補佐員、宮本事務補佐員、片山事務補佐員、郡事務補佐員である。

生物資源産業学部事務課

◎総務係

主な事務は、次の事項に関することである。

- (1)教授会、その他の会議 (2)諸規則の制定及び改廃 (3)学部、学科、大学院、専攻等の設置及び改廃 (4)予算および決算 (5)法人文書の管理 (6)職員の人事（人事課の所掌を除く。） (7)職員の出張、研修（人事課の所掌を除く。） (8)固定資産、少額資産及び消耗品の管理

職員は、西本係長、谷主任、松島事務員、朝日事務補佐員、岡本事務補佐員である。

◎学務係

主な事務は、次の項目に関することである。

- (1)入学者の選抜 (2)学生の入学、卒業および修了並びに休学等学生異動 (3)学籍 (4)教育課程 (5)授業、試験及び成績 (6)時間割、講義概要等の作成 (7)学位 (8)学生の表彰及び懲戒 (9)所掌事務に係る各種委員会 (10)諸証明

職員は、竹重係長、三好主任、山中主任、岩野事務員、矢野事務補佐員である。

理工学部・生物資源産業学部設立から 現在までの歩み

工学部・大学院の变革 (理工学部・ 生物資源産業学部・創成科学研究科博士前期・後期課程の設置)

改組の背景

平成25年(2013)4月23日の「産業競争力会議」において、下村文部科学大臣(当時)から「人材力強化のための教育改革プラン～国立大学改革、グローバル人材育成、学び直しを中心として～」が提案された。その提案のうち「産業競争力強化のための国立大学改革」において、「イノベーション機能を抜本強化し、未来を見据えた理工系人材を育成」という戦略が示された。この戦略の中で「大学の強みや戦略を踏まえたライフ分野を含む理工系教育研究組織の再編成・整備を実施」とあり、各大学の意欲的な改革構想を支援するとの政府の方針が示された。これを受け、平成25年(2013)5月、香川学長(当時)名で大学本部執行部から福富工学部長(当時)宛てに、改革構想案を作成するよう指示が下された。

このような政府の方針とは別に、18歳人口の減少に伴う志願者の減少が顕在化し始めたのもこの時期であった。18歳人口は第二次ベビーブームにあたる平成4年度(1992)の205万人をピークに急激な減少が始まり、平成24年度(2012)には120万人を割り込み、令和2年度(2020)以降は再び急速な減少に転じた。これに対し、国公私立の四年制大学入学者は平成4年度(1992)の54万人から徐々に増加し、平成12年度(2000)以降は現在に至るまでほぼ60～62万人で推移している。また、平成4年度(1992)以降は四年制大学への現役進学率が26%程度から50%程度まで急増した時期でもあった。この少子化を原因とした進学率の急増と共に、各国立大学で志願倍率の低下、入学生の基礎学力の低下、入学生と入学先の学科等

とのミスマッチによる学習意欲の低下等が問題視されるようになってきた。このような情勢の中、国立大学でも志願者数の確保に向けた魅力ある大学づくり、広報活動、インパクトのある学部学科名への変更、学生支援体制の充実などの対策が進められてきた。

この時期、幾つかの国立大学の工学系学部では、学科名の変更や学科の分割・新設等の改組が進められていた。そのような中、平成21年度(2008)あたりから、教育の基盤となる学問分野は同じものの細分化されていた学科を再編・統合する国立大学が現れ始めてきた。例えば岡山大学は工学系7学科を4学科に、岐阜大学は9学科を4学科に再編した。とりわけ長崎大学は7学科を1学科に統合する大胆な改組を行った。この長崎大学の改組方針は、その後の国立大学工学系学部の改組の方向性に一石を投じるものであった。一方、学科の新設に対しても新たな流れが生じつつあった。それまでの学科新設は、あくまでも工学部内において工学系の新たな学科を新設するものであったが、人文・社会学系を含めた複数の学問分野にまたがる学部や学科が新設され始めた。例えば秋田大学における国際資源学部などがこれにあたる。

このような国立大学工学系学部の流れを踏まえ、学長からの改革構想案の検討指示に対応すべく、平成25年(2012)5月から徳島大学工学部においても学部執行部が中心となって様々な改革素案が立てられた。立案に際し、まず、①科学技術の進歩や現代社会の要請に基づいた改革とすること(新学科、少人数学科)、②学部学科および大学院教育部は、研究部教員が融合的に教授する体制とすること、③入試は学科を再編・統合した大括りの系列で募集を行い、系列をまたいだ志望も認め、学科をまたいだ転コースを容易とすること、および④女子学生にも魅力のあるコース設定と高校理科および数学一種

教員免許取得を可能とすること、の基本方針が定められた。これにもとづき、最初の叩き台として、平成25年（2013）6月に従来の工学部7学科を、全11コースで構成される社会基盤系工学科、機械・電子・情報系工学科および物質・生命・医療工学系学科の3学科に再編し、これとあわせて希望する全学科の学生が受講可能な国際エンジニアリングプログラムおよび理数情報系教職課程を配置する案が作成された。この段階では、あくまでも工学部単体の改組であり、一部のコースでのみ、ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部（総合科学部教員組織）やヘルスバイオサイエンス研究部（蔵本地区教員組織）の一部の教員が講義科目に協力する体制を想定していた。

この当初案にもとづき、大学本部と協議を重ねた。大学本部からは、英語のみで卒業が可能な新設の学科を創設すること、新設学科以外は工学科として一つにまとめること、工学科を構成するコースには従来の学問領域の枠組みを超えた融合領域の枠組みを作ること等の意見がつけられた。これを受け、平成25年（2013）10月にバイオ工学コースとフォトニクス工学コースからなる六年一貫の国際工学科と、社会デザインコース、機械電子工学コース、化学バイオコースおよび情報光コースからなる工学科で工学部を改組する第二案が立てられた。この第二案において、国際工学科は主に留学生を対象とし、全科目を英語で実施することを想定した案であった。一方、工学科は各コースの中をさらに細分化した“スタディーズ”を設け、それぞれ従来からある基盤的な学問体系に対応するスタディーズと、コース内の学問分野を融合したスタディーズを設ける案であった。さらに本部との協議を重ね、平成25年（2013）12月に、上記の二学科を一学科にまとめた創生工学科（仮称）とし、スタディーズの枠組みを改変してサブコースとする案が示された。この第三案の作成にあたっては、世界で戦える工学系人材確保と育成、工学教育の充実と質保証、地域再生につながる人材育成、優秀な日本人学生の海外留学促進のための環境整備、優秀な外国人留

学生の受入拡大を目指し、これらを実現するために「グローバル人材およびイノベーション人材の育成」を目指した創成工学科（仮称）の創設、「優秀な外国人留学生の海外重点地域での確保」を目指した海外拠点校からの3年時編入生の受入れ、「短期・長期留学、海外インターンシップ、学生募集、教育研究交流支援」を目指した海外拠点校での教育研究センターの設置、および「教育研究のグローバル化、イノベーションの実現」を目指した海外拠点校からの教育研究ユニットの誘致、の四つの柱を基本として案が練られた。

徳島大学改革プラン

このような流れで改組の初期方針が検討されていた中、平成25年（2013）11月に文部科学省から国立大学の機能強化を実現するための「国立大学改革プラン」が提示された。このプランでは、各国立大学の機能強化を図る上で、強み・特色の重点化、グローバル化、イノベーションの創出および人材養成機能の強化を推し進めることを方針としたものである。これを実現するために各大学に自主的・自律的な改善・発展を促す仕組みとして主に改革を求められた。具体的には、①社会の変化に対応できる教育研究組織作り、②国際水準の教育研究の展開、積極的な留学生支援、③大学発ベンチャー支援、理工系人材の戦略的育成、などの五項目の改革が求められた。

この国立大学改革プランの公表を受けて、平成26年（2014）1月に「徳島大学改革プラン」の案が本部から提示された。この案では「地域創成学部（仮称）」と新学部の「農工産業学部」の設置と共に、「理工学部」を常三島地区に設置する案となっていた。また、全学的な基幹教養教育実施体制の整備を目的として「教養教育院」を設置する案ともなっていた。これらの改組構想は、国立大学改革プランを受けたものであり、地域創成学部は地域課題の解決に取り組む人材の養成、農工産業学部は徳島の一次産業の六次産業化に取り組む人材の養成、そして理工学部は国際性、学際性と総合性の高度専門技

術者や研究者の養成を行う学部という案であった。また、この案における理工学部は、工学部と総合科学部の理系学科である総合理数学科が統合され、建設工学コース、機械電子工学コース、物質理工学コース、情報光応用工学コース、数理学コースの5コースで構成されるものとされていた。生物工学科は理工学部の枠組みから外れ、農工産業学部の母体となる案となっていた。また、入試改革として、一括入試の導入が初めて示され、三年次から専門コースを選択する制度を導入するとの原案が示された。

この「徳島大学改革プラン」は、これまでの改組案と方向性が大きく変化したものであった。しかし、平成28年度（2016）から始まる第3期中期目標期間にあわせて改組を行うこと、との本部からの強い意向により、平成27年3月までの残り一年で大学設置・学校法人審議会（設置審）に申請するための改組案と申請書の作成が急ピッチで進められた。

平成26年（2014）4月からは河村工学部長（当時）を中心に、理工学部設置へ向けた作業が進められた。「徳島大学改革プラン」で提示された理工学部は、それまでの一年間で検討されてきた当初案とは異なり、総合科学部との学部の垣根を越えた改組であった。そのため、教育理念や教育方法、カリキュラム等の摺り合わせを慎重に行う必要があった。一方、本部からは、新しい枠組み（コース）に相応しい教員を既存の学科の枠を超えて配置し、理学と工学を融合した教育を行う体制とすることが求められた。その際、コースの名称には、電気電子工学や機械工学などの従来からある学問分野の名称は古臭いため、使用しないことなどの注文もついた。これらの状況を踏まえ、工学部執行部が中心となって議論を進め、平成26年（2014）9月初旬に社会基盤デザイン、工学基盤システム、応用化学システム、知能情報・光システムおよび理学の5コースから構成される学部とする案が提示された。当時、カタカナ名を中心とした名称やこれまでに無い奇を衒ったような名称に変更する例が各大学でしばしば見受けられる時代であった。しかし、従来からある学問分野の名

称が無いコース名は高校生にとってイメージし難いこと、卒業生を採用する企業にとって専門分野がわかりづらく採用の抑制につながりかねないこと、既に構築された信頼性の高い、系統だった学問体系を基盤としてこそ新しい学問体系の創出につながることを考慮し、コースの枠組みを再検討することになった。この間、平成26年（2014）9月中旬に、学長をトップとする徳島大学学部等設置準備委員会が発足し、その下部組織として学部改組を取り扱う理工学部設置準備委員会が設置された。以後、改組に関する事項の方向性は、この設置準備委員会を中心として進められることになった。

理工学部への改組

設置審への申請まで残り半年と期限がせまる中、新たな枠組みの設定に向けて具体的なカリキュラムや組織作りが急ピッチで進められた。まず、志願者増加を目的として、理工学部を理工学科一学科として「一括入試」を行う事になった。これは前期日程と後期日程の入試において、理工学科全体で志願者の募集と選抜を行い、合格者を決める仕組みである。その際、受験生が予め申請した志望コースの順位にしたがってコースが配属され、第一志望のコースに不合格であっても、第二志望以下のコースで合格可能な仕組みとすることになった。さらに入学後についても、一年次末にコースを確定する「経過選択制」を導入し、入学後にコースの教育内容とのミスマッチを感じた学生が比較的容易にコースを変更できる仕組みとした。

コースの枠組みについては、一部のコースで分野横断型の融合領域とすることが引き続き本部から求められた。これを踏まえた検討が行われ、最終的に理学系を応用理数コースとし、その中に数理科学系、自然科学系の二つの系を配置する形となった。また工学系についても様々な組合せが考えられたが、最終的には情報光コースとし、その中に情報系と光系を配置する形となった。その他のコースとしては、工学部の学科を基盤として、社会基盤デザインコース、機械科学コース、応用化学システムコース、電

気電子システムコースを配置することになった。

カリキュラムについては、STEM (Science, Technology, Engineering and Mathematics) 教育に関わる科目を全コース共通の科目として配置することを本部から急遽求められ、学科共通の導入科目として、STEM概論とSTEM演習を配置することになった。また、教養教育をとりまとめる教養教育院の設立に伴い、これまでの共通教育科目が教養教育科目に変更され、あわせて理工学部で卒業に必要な教養教育科目の見直しも行われた。さらに理工学科一学科とすることに伴い、学科共通科目についても大幅に変更が加えられた。まず、グローバル化に対応するカリキュラムとして、科学技術に関する英語については、これまで各学科で実施されてきた科目を統合・再編し、「技術英語入門」、「技術英語基礎1」、「技術英語基礎2」の3科目を学科共通科目として配置することになった。また、工学基礎系の数学や物理学等の科目も学科共通科目として配置することになった。さらに起業等を見据えた科目として、「プロジェクトマネジメント基礎」、「アイデア・デザイン創造」、「アントレプレナーシップ演習」、「短期インターンシップ」、「労働管理」および「生産管理」の各科目も学科共通科目として配置することになった。

専門科目については、各コースで科目の見直しを行い、学生の教育に対して効率的なカリキュラムとしつつ、他分野の視点も養えるように「他コース履修」制度を導入した。これは他コースの専門科目から最小2単位を履修させるものであり、俯瞰的な視点を養わせる目的で導入した。また、工学部では他学科の科目を最大6単位まで専門選択科目として履修できたが、他コース履修制度導入の理念に従い、この上限を拡大して他コース専門科目を最大12単位まで自コースの専門選択科目として履修できるようにした。

また、学部と博士前期課程をあわせた六年一貫教育に対応する方策として、六年一貫教育を志望する学生に対して、四年次に大学院の講義科目を先取り履修できるようにした。これにより、大学院での研究に費やす時間の増加とともに

に、新たにできる時間を利用したインターンシップや海外留学等の大学から離れた活動も可能とする体制を整えた。

これらの案をもとに設置審への申請書類を準備し、平成27年(2015)3月末に書類を提出する運びとなった。ところが、提出の直前になって申請書類の提出を必要としない「事前審査」で良い旨の連絡が文部科学省から届いた。これ以後、平成28年(2016)4月の理工学部設置に向けて、設置準備委員会、教務委員会、入試委員会、広報委員会等の様々な委員会で運用に向けた詳細な議論および規則の改正が進められた。平成27年(2015)8月末に設置審から設置認可があり、理工学部へ改組されることが正式に決まった。そして、平成28年(2016)4月に、「理工学部理工学科」として新たなスタートを切ることになった。

創成科学研究科理工学専攻博士前期課程への改組

理工学部への改組直後の平成28年(2016)5月から、大学院の改組に関する議論が始まった。この議論が始まる直前の平成28年(2016)3月31日に、文部科学省から「第3次大学院教育振興施策要綱」が示された。そこでは、①体系的・組織的な大学院教育の推進と学生の質の保証、②産学官民の連携と社会人学び直しの促進、③専門職大学院の質の向上、④大学院修了者のキャリアパスの確保と進路の可視化の推進、⑤世界市場から優秀な高度人材を惹き付けるための環境整備、⑥教育の質を向上するための規模の確保と機能別分化の推進、⑦博士課程(後期)学生の処遇の改善、の7つの基本方針が示されていた。一方、先行して改組を行ってきた他大学院では、「主専修・副専修」科目の導入、複数教員による指導体制、地域産業を反映した新専攻、専攻の統廃合と共に融合領域専攻の新設、大学院の一専攻化など、様々な取り組みがなされていた。

徳島大学の理工学系における新たな大学院像の構想に際しては、学部各コース・系の代表者から構成される改組ワーキンググループ(以下、

改組WG)を立ち上げ、上述の政府の基本方針や他大学の取り組みを参考にしつつ、徳島大学の中期目標も踏まえて本部とのやりとりをしつつ、ほぼ毎月のペースで議論が行われた。なお、この時点では博士前期課程(修士)と博士後期課程(博士)の同時改組を想定した案を検討していた。基本構想として、授与する学位を工学と理学とし、養成する人材像を「環境の変化に即座に対応できる修了者、多様・変動する社会に柔軟に対応できる人材」とする方向で議論が進められた。新研究科および専攻の名称は、理工学研究科理工学専攻とし、博士前期課程では学部のコース・系を踏襲した8コース構想、博士後期課程は物理工学コース、化学応用工学コース、数理情報コース、および基盤科学コースの4コース体制とする案でまとめられた。教育体制および研究指導体制については、大前提として「研究に基づく教育」を改めて前面に押し出し、博士前期課程では研究の基盤となる自コース科目の履修と共に、研究に関する他分野の視点・知識・手法を学ばせる機会として、研究内容に沿った他コース履修を行わせる「教育クラスタ制度」を導入すること、教育クラスタは第4次科学技術基本政策に示された重点分野にもとづいて設定すること、博士後期課程ではなるべくコース間の垣根を取り払い、複数の学問分野にまたがる研究指導体制とする方向で改組案がまとめられた。これと合わせ、外国大学とのダブルディグリープログラムの継続、フロンティア研究センター(当時)や日亜寄付講座(当時)と連携した地域性を活かした看板プログラムの設置、他大学の大学院との連携を想定した防災関連プログラムなどの設置も検討が行われた。

このようにして、大学院改組の方向性がおおよそ固まったものの、平成28年(2016)10月に野地学長(当時)から、蔵本地区を含めた全て大学院を統一した「一研究科」を検討するように、との指示が下された。その指示では様々な検討事項が示されていたが、その中でも①一研究科に統合する必要性、②一研究科として養成する人材像の策定、といった改組の方向性そのものを最初から考え直さざるを得ない事項も

含まれていた。特に①については、そもそも一研究科にする大きなメリットが全くない中、なぜ一研究科にする必要があるのか、大学本部の意向を理解できず、本部に問い合わせるも見当違いの返答しか得られない中、改組の基本方針を大きく転換せざるを得なくなった。この問題は、設置審に申請書を提出し、補正書類を提出するまで長く引きずる問題となった。

本部において、さらなる検討が行われた結果、常三島地区で一つの研究科、蔵本地区で一つの研究科とする方向で検討するように改めて指示が下った。これにより、理工学部単体での大学院改組は事実上不可能となった。このような状況となったため、平成28年(2016)11月に、総合科学部、生物資源産業学部との間で常三島懇談会を新たに設置し、そこで、理工学部で議論されてきた内容をベースとして、この常三島一研究科案に対応するための協議を頻繁に行うことになった。また、各学部の改組WGでも議論を重ね、本部との意見交換も行いながら、新たな改組案の作成を進めた。

いわゆる文系と理系から構成されるこれらの学部をもとにした大学院は、当然のように養成する人材像および入学者に求める基礎能力が大きく異なる。また、求める人材を養成するための教育内容や研究の進め方も大きく異なる。そのため、まずは一つの研究科として、養成する人材像の設定から練り直し、それを踏まえ、文理にまたがった「一研究科とする理由」およびそれを実現するための教育組織とカリキュラムを考え出すことになった。

平成29年(2017)11月、仮に常三島地区で一研究科とする案を文部科学省に事前相談し、設置審査上で問題となりそうな事柄について様々な指摘を受けた。大きな指摘としては、まず手続き上の内容として、改組は年次進行為基本であるため、博士前期課程と博士後期課程の審査は別々に受ける必要があることを指摘された。次に内容に関して、文系の学生から見た理系と融合するメリットが明確に伝わる改組でないとして設置審で承認されることが難しく、文理をあわせた一研究科とする現状の案では理由が弱

いことを指摘された。また、文理をあわせた研究科を謳うのであれば、文理にまたがる内容の科目を強制的に履修させるカリキュラムとしないと設置審査を通過できないことも改めて指摘された。また、教育クラスター制度についても、一部の学生だけが履修する制度ではなく、全員が何らかの形で教育クラスターの科目を履修する必要があることも指摘された。そして、何よりも常三島地区を一つの研究科にまとめる理由が弱い、との意見がつけられた。

この文部科学省からの意見から、一研究科とするならば、コースで開講されている科目のみを履修するだけでは不適であること、オープンゼミを含めた研究科共通科目だけでも不適であること、教育クラスターのような複数の専門分野にまたがる科目の履修制度が必須であること、学生全員が教育クラスター科目を必ず履修するカリキュラムであること、などの点を解決することが必須の条件であることがわかった。これをもとに、再度、常三島懇談会および各学部の改組WGで議論を重ね、本部との意見交換も行いながら、新たな改組案の作成を行った。

まず養成する人材像を「中長期的な産業界・社会のニーズを踏まえ、グローバルかつ複合的な視点から技術・産業・社会の諸領域において新たな価値（イノベーション）を創成できる高度専門職業人を養成」とした。文理にまたがる研究科名は創成科学研究科とし、博士前期課程を構成する専攻として、理工学専攻、地域創成専攻、臨床心理学専攻、生物資源学専攻を配置することとした。理工学専攻では、社会からの分かり易さと学生のキャリアパスを考慮し、専門分野のわかりやすい学問体系ごとにコースを構成することとし、学部のコース・系を踏襲した8コースとする構成とした。カリキュラム面では、文理横断型の教育システムとして、全学生が履修する研究科共通科目として、本部から強い意向のあったデータサイエンス科目およびグローバル教育科目群を必修科目、必修選択科目として導入し、さらにイノベーション科目群を必修選択科目として配置した。これに学位指導科目を含めた各コースの専門科目の履修と、

多角的な視点の養成のために学生の研究テーマに則した他コース講義科目を選択必修科目として履修する制度を設けることとした（教育クラスター科目制度）。また、本部からは専攻やコースをまたいだオープンゼミの導入の指示があり、修士1年次の中間発表会を公開し、他専攻・他コース学生が聴講、質疑応答を行うこととなった。このように様々な科目を配置することにしたが、あくまでも専門分野をもとにした研究が主であり、それを補強する知識を得るための方策が教育クラスターや各種共通科目であることが前提として案が立てられた。

この新たな案をもとに、平成30年（2018）9月から平成31年（2019）3月の申請書提出まで、文部科学省に相談しつつ常三島懇談会、各学部の改組WGおよび本部との意見交換を行いながら詳細を詰めていった。一研究科とする理由の補強や一研究科に伴うカリキュラムや履修方法等の再考、特に理工系の素養に乏しい人文・社会学系の学生がデータサイエンス科目やオープンゼミに問題なく参加できるシステムの構築などを中心に多岐にわたる範囲で指摘がなされ、その都度、計画を修正する作業が続いた。この意見交換の中でも、わざわざ一研究科にするメリットが乏しく、設置審の委員から一研究科にする必要性が無いと捉えられかねないとの懸念を、文科省の担当者から度々指摘され、対応に苦慮した。

令和元年（2019）6月に、設置審から審査意見が届いた。専攻間共通の重複意見を含め、4専攻あわせて53個もの審査意見であり、他大学の例と比較しても顕著に多い意見数であった。意見の中でも特に多く、強調されていたことはやはり文系・理系の枠を超えて「一研究科にする理由」に関するものであった。一研究科にする理由について、この時点でも設置審の意見に耐える回答は本部から得られないままであった。しかし、補正書類の提出までのわずか一ヶ月間、これらの意見に対する回答の作成および設置の趣旨を記した書類の大幅な加筆修正作業を行い、令和元年（2019）7月に補正申請書類を提出した。そして同年8月30日に設置の認可が降り、翌年4月の改組に向けて、入試の実

施や各種規則の整備等が急ピッチに進められた。そうした作業を終え、令和2年（2020）4月に創成科学研究科理工学専攻修士課程（令和4年（2022）4月からは後期課程の改組に伴って博士前期課程に名称変更）として新たなスタートを切ることとなった。

創成科学研究科創成科学専攻博士後期課程への改組

博士前期課程の認可が下りてすぐの令和元年（2019）10月から、博士後期課程の改組に関する議論が本格的に始められた。当初は養成する人材像と専攻とコースについて前期課程をベースにした案を考え、学位については理工学系では工学に一本化、地域創成系（総科の人文・社会学系）では学術、生物資源系では農学とし、一研究科三専攻複数コース体制とする案を考えていた。しかし、本部からの要望として、工学系、学術系および農学系を一つにまとめて一研究科一専攻とすること、学位の名称も含め、従来の学問体系の枠組み（コース）を完全に破壊し、新たな枠組みに組み直すこと、コースではなく、この数年で文科省から提示された「学位プログラム」制度を導入すること、融合プログラムを作ること、医工連携プログラムを作ること、令和元年（2019）10月に開所したポストLEDフォトンクス研究所（pLED）を中心とした学位プログラムを作ること、などが示された。「学位プログラム」と、専攻・コースや博士前期課程等で開講されている四国防災・危機管理プログラムなどの教育プログラムとの違いが良く分からないなどの課題はあったものの、情報収集を重ねつつ、これらの要望に対して議論を重ねた。

その議論の中で、養成する人材像は「中長期に亘る社会からの本学へのさまざまな要請を踏まえ、それぞれの専門基盤・基幹技術に関する深い知識とスキル並びに幅広い関連分野の見識を有し、それらを基に自立的かつ継続的な高い研究能力を有し、やがてはそれぞれの分野で指導的役割を負える人材養成を行う。それによって、次世代社会の課題発見能力とその解決能力

を有するのみならず、国際環境の変化にも柔軟、かつ自律的に対応できる高度専門職業人・研究者・起業家人材を養成する。」とする方針が立てられた。このような人材を養成するにあたり、一番大切なことは基盤となる専門分野の高度な知識や技術であることはこれまでと変わらない。そこでこのような基盤となる専門知識を修得する仕組み（縦串）として「学位プログラム」を中心に据えることとした。それに加えて、自身の研究を深化させる際に、課題解決のための新たな切り口を見つける切掛けとなる分野横断的な多角的視点を有することは非常に効果的である。このような多角的視点を形成させる仕組み（横串）として、後述する「研究指導クラスター」を導入する方針もあわせて立てられた。

学位プログラムの構成や名称については、受益者となる学生の立場や社会通用性を鑑み、なるべく普及した学問名を含むプログラムすること、文理融合プログラムとしては、社会基盤システム系と地域創成系を一つの学位プログラムとし、工学と学術の学位を選択できるシステムとすること、工学系の融合プログラムとしては、そもそも光システム系が学際的な内容であり、これにpLED教員が協力する形で学位プログラムを構成すること、学位論文の指導は複数指導教員体制とすること、その際、主指導教員に加え、学生の研究内容と類似した研究分野の他プログラム教員が副指導教員として加わる「研究指導クラスター制度」を採用すること、研究指導クラスターは、社会のニーズをもとにした課題解決型の枠組みを設定すること、などを基本方針とすることになった。また、文理を問わず、全学生向けに長期インターンシップ、企業行政演習、技術経営特論などから構成される研究科共通科目を設ける方向で調整が進んだ。この方針をもとに橋爪社会産業理工学研究部長（当時）を中心に、新たに原案の作成を行った。令和2年（2020）7月以降、五度にわたる文科省との事前相談を重ねながら、学内で改組案に修正を加えていった。事前相談における文科省からの主な指摘事項は、一研究科一専攻と教育課程を大きく括ることの意義・効果・妥当性が

設置審では特に問われるため、丁寧かつ論理的な説明が必要となること、研究指導は各学位プログラムの教員だけでなく、専攻全体の教員が必ず携わる仕組みが必要であること、同じ学位プログラムで工学と学術の学位を出す場合に、取得する学位を決定する時期や基準をきめ細やかに設定すること、研究指導クラスターに基づいた研究指導だけでは多角的な視点を養成できる保証はないので、実習や演習による単位認定による質保証の担保が必要となること、また一専攻なので実習や演習はプログラムをまたいだ教員が専攻全体で指導および評価に加わること、募集定員はこれまでの入学状況や就職先等の細かなデータにもとづいて設定すること、などであった。多角的な視点養成の質保証に関しては、学生が所属する学位プログラム外の研究指導クラスター教員が担当する新たな科目として「創成科学特別演習」および「創成科学特別実習」を研究科共通の必修科目として加えた。また、学生や企業へのアンケート実施を行い、各種根拠資料の作成を行いつつ、文系分野と農学分野を含めた一研究科一専攻とする意義・効果・妥当性に悩みながらも新たな博士後期課程設置に関わる申請書の作成を進めた。

令和3年(2021)3月、設置審に申請書を提出し、6月に審査意見が届いた。今回つけられた意見は13個であった。その多くは教育システムに関して追加説明を求めるものであったが、学術と農学に関しては養成する人材像等の意義・妥当性を再度問われた事に加え、その分野の教員組織と教育体制についても意見があった。これらの意見に対する回答の作成および設置の趣旨を記した書類の加筆修正作業を行い、令和3年(2021)7月に補正申請書類を提出した。そして同年8月27日に設置の認可が降り、令

和4年(2022)4月に創成科学研究科創成科学専攻博士後期課程として出発した。

こうして平成25年(2013)から始まった改組への対応は一区切りを迎えた。様々な経緯はあったものの、これら改組を実施して新学部・新研究科を設置することができたのは、教員・事務職員の尽力はもちろんのこと、度重なるアンケートに協力頂いた卒業生や企業のご助力、ご支援の賜物であることを記し、謝意を表したい。

工学基礎教育センターの経緯

平成28年(2016)4月に理工学部が設立され、教員は理工学部応用理数コースにも所属することになり、数学の教員は数理科学系に、物理の教員は自然科学系に配属された。4月に大山陽介教授が大阪大学から着任した。平成30年(2018)3月に香田温人准教授が定年退職した。令和2年(2020)4月に犬飼宗弘講師が准教授に昇任した。残念なことに、令和3年(2021)10月に篠原能材名誉教授が逝去された。享年87歳であった。

令和4年度(2022)より、数理科学系、自然科学系はそれぞれ、数理科学コース、自然科学コースにコース分けされたが、工学部工学基礎教育センターとしては継続して運営されている。理工学部の学科共通科目や大学院創成科学研究科博士前期課程の教育クラスター科目を担当しており、その理念は組織名が変わっても徳島大学発足時より変わらぬものがある。

令和4年(2022)10月に工学部100周年を迎えたが、令和5年(2023)3月をもって工学部が廃止され、工学基礎教育センターも共通講座以来の歴史を閉じることになった。最終時での教員組織は以下のとおりである。

工学基礎教育センター教職員組織

(令和4年(2022)10月現在)

教職員名	
数理科学コース所属	大山陽介教授、高橋浩樹教授、竹内敏己教授、深貝暢良准教授、水野義紀准教授、岡本邦也講師、坂口秀雄助教
自然科学コース所属	岸本 豊教授、中村浩一教授、川崎 祐准教授、犬飼宗弘准教授

応用理数コース数理科学系・ 数理科学コースの経緯

応用理数コース数理科学系は、工学部と総合科学部の理学系組織により理工学部を設置した際に、総合科学部総合理数学科数理科学コースの教育体制に工学部工学基礎教育センターの教員を加えた形で作られた。総合科学部は、大学創設の際に（昭和24年（1949））学芸学部として設置され、小学校と中学校の教員養成と学内の一般教養教育を担っていた。昭和40年（1965）に教養部が設置され、その翌年に一部の教員が教養部に移り、学芸学部は教育学部に改称された。鳴門市に新構想教員養成大学院大学を設置することから（現鳴門教育大学、昭和56年（1981）設置）、教育学部を廃止し総合科学部を創設するという移行形態をとり、昭和61年（1986）に総合科学部が発足した。総合科学部は1学科4コース制（文化・社会科学・基礎科学・健康科学）をとり、それぞれのコース内にピークを設置した。数理科学系は、基礎科学コースの数理・システムピークを引き継いでいる。平成5年（1993）には、教養部を統合し、人間社会学科と自然システム学科の2学科制に改組され、自然システム学科数理システムコースが新設された。さらに、総合科学部が従来の一般教育に相当する全学共通教育の中心部局としての役割を担うことになり、数学と情報の教育を担当することになる。平成6年（1994）には、徳島大学大学院人間・自然環境研究科が設置され、自然環境専攻として修士課程を担当することになる。平成13年（2001）には、学部の教育課程が9コース制から10コース制に再編され、コース名を数理・情報コースに改称した。平成21年（2009）の大学院総合科学教育部（博士前期課程・博士後期課程）の

設置に伴い、学部も3学科（人間文化学科、社会創生学科、総合理数学科）に改組され、総合理数学科数理科学コースが新設された。平成28年（2016）には、総合科学部総合理数学科と工学部を統合する形で理工学部に変更された。この改組により、大学創設以降、初めて学内の数理系教員は応用理数コース数理科学系として一つにまとまった。理工学部の一期生卒業に合わせて、令和2年（2020）に大学院創成科学研究科が設置された。令和4年（2022）には、2系からなる応用理数コースを廃止して、それぞれの系がコースになり、数理科学コースが新設された。この年から始まったコース別入試で34名の新生を迎え入れた。また、同年に大学院創成科学研究科に7学位プログラムからなる博士後期課程創成科学専攻が新設され、知能情報・数理科学系プログラムを担当する。

理工学部改組（平成28年（2016）以降

平成29年（2017）に、桑原類史教授が定年退職し、蓮沼徹准教授が教授に昇任した。

平成30年（2018）に、大橋守教授と香田温人准教授が定年退職し、白根竹人講師が着任した。

令和2年（2020）に、応用理数コース数理科学系の一期生26名が卒業した。その内の5名が大学院創成科学研究科に進学した。

令和3年（2021）に、鍋島克輔准教授が東京理科大学に転出し、松井紘樹講師が着任した。

令和4年（2022）に、大淵朗教授と片山真一教授が定年退職し、安本真士講師が着任した。さらに、白根竹人講師が准教授に昇任した。松井紘樹講師が、2022年度日本数学会秋季総合分科会において、社団法人日本数学会より日本数学会賞建部賢弘特別賞を受賞した。

令和5年（2023）に、國川慶太講師が着任した。

数理科学コース教職員組織

講座名	教職員名
数理情報	蓮沼教授、守安教授、白根准教授、中山准教授、國川講師、松井講師
応用数理	小野教授、村上教授、宇野准教授、大沼准教授、安本講師
数理解析	大山教授、高橋教授、竹内教授、深貝准教授、水野准教授、岡本講師、坂口助教

応用理数コース自然科学系・ 自然科学コースの経緯

平成28年（2016）4月より、専門性をより追及する目的で改組により総合科学部の総合理数学科および社会創生学科環境共生コースの理数系教員は理工学部と生物資源産業学部の所属になり理工学部では教育研究組織として応用理数コース（数理科学系・自然科学系）が新たにスタートした。また、令和4年（2022）4月より教育的効果をさらに上げるため応用理数コースにある数理科学系と自然科学系をそれぞれコースとして独立させることになった。

平成26年（2016）から令和4年（2022）

改組後の系長（コース長）は、石田啓介、小山晋之、三好徳和、真壁和裕がつとめた。

自然科学コースでは、「物理科学分野」「化学分野」「地球科学分野」「生物科学分野」の4分野を設けており、発足時のスタッフは以下のとおりである。なお、令和4年（2022）4月時点で退職等をした教員にはカッコにより記載している。

<物理科学分野>

教授：井澤健一、岸本 豊、小山晋之（定年退職）、齊藤隆仁（教養教育院所属）、中村浩一、日置善郎（定年退職）、伏見賢一、真岸孝一

准教授：川崎 祐

講師：犬飼宗弘、折戸玲子、久田旭彦

<化学分野>

教授：小笠原正道、三好徳和

准教授：山本 孝

講師：上野雅晴、中村光裕

助教：大村 聡、山本祐平

<地球科学分野>

教授：石田啓祐（定年退職）、村田明広（定年退職）

准教授：青矢陸月、西山賢一

<生物科学分野>

教授：真壁和裕、松尾義則、渡部 稔（教養教育院）

准教授：佐藤高則（故人）

理工学部と生物資源産業学部と大学院の 教育と研究

応用理数コース自然科学系・自然科学コース

応用理数コース自然科学系・自然科学コースのカリキュラムでは、数学、物理学、生物科学、地球科学の各分野を専攻するようになっている。そこでは理学的な知識の基礎から専門までを深く修得し、また理工学部に置かれたコースであるメリットを生かし、理学のみならず工学的観点から総合的かつ論理的なアプローチのできる能力人材の育成を目指している。そのため在学生は専門を超えて数理科学コースや他コースの講義も受講する機会が増えている。逆に幾つかの講義では、応用理数あるいは自然科学コース以外の学生が多く占める授業もある。これらの交流によって様々な現象を数学的な観点から見る事を学べ、諸現象の総合的な解明に必要な基礎的知識、論理的思考、情報技術、コミュニケーション能力など自然科学に関する能力を幅広く発展させられる事が出来るよう教育を行っている。そのため理学・工学的観点からの総合的かつ論理的なアプローチのできる能力人材の育成を目指している。

具体的には自然科学コースでは宇宙・地球から生物、さらには原子や素粒子の性質まで、全ての物質・生命に関わる現象を理論・実験を通して教育研究を行っている。

ここでは理工学部という立場を活かして、既存の分野にとらわれることなく、幅広い視点を有する人材を育成するための教育と研究を行う。そのため卒業研究では、それまでに培われた高度な知識を活かし、実用に通じる技術の素早い修得が出来て世界に通用する人材の育成を行う。これらのため自然科学系では更に物理科学分野、化学分野、地球科学分野、生物科学分野の4分野を設けている。

・物理科学分野

物理科学分野では、実験科目を通して、自然現象を正確に観察しながら、背景にある基本原理を探っていく。専門課程として、まず、力学、電磁気学、熱統計力学などの基礎的な科目から物理の基礎概念を学び、それに基づき、量子力

学、放射線科学、宇宙科学などの発展的な科目から、現代の自然科学について学ぶ。その上で、物質・宇宙・素粒子などに関する様々な課題を研究する。

物理学講座のスタッフの専門はそれぞれ、井澤健一（素粒子理論模型、宇宙のインフレーション）、岸本豊（強結合超伝導体のエネルギーギャップの異方性の核磁気共鳴法による研究）、小山晋之（新奇超伝導体の超伝導発現機構に関する研究）、齊藤隆仁（超伝導体の核磁気共鳴）、中村浩一（リチウムイオン電池材料におけるイオン拡散に関する研究）、伏見賢一（宇宙暗黒物質探索）、真岸孝一（強相関電子系の核磁気共鳴）、川崎祐（強相関電子系における磁性と超伝導の核磁気共鳴による研究）、犬飼宗弘（固体核磁気共鳴法の新規な応用と装置開発）、折戸玲子（宇宙線物理学、放射線計測学）、久田旭彦（強相関電子系の物性研究）である。

・化学分野

化学分野では、化学を使って持続可能な社会の維持のために、社会と共生する住みよい活気あふれる地域と未来社会を築くため、種々の社会的課題を解決できる実力を付けるべく、教育を行っている。まず実験科目ならびに無機化学、物理化学、分析化学、有機化学などの基盤を教育研究する。

化学講座のスタッフの専門はそれぞれ、小笠原正道（立体選択的有機合成手法による遷移金属錯体の不斉合成法の開発とその応用）、三好徳和（新規有機合成手法の開発、新有機反応の開発）、山本孝（固体触媒科学、機能物質科学）、上野雅晴（グリーンケミストリー）、中村光裕（細胞生物学、細胞計測学）、山本祐平（環境中の

重金属元素に関する無機化学・地球化学・環境化学・分析化学）である。

・地球科学分野

地球科学分野では、地球環境問題の深刻化や、世界中で相次ぐ自然災害の猛威など、地球を舞台にして進行している様々な現象を考えるために、地球の成り立ちから現在までの歴史の変遷を学び、将来に活かす教育研究を行っている。

地球科学講座のスタッフの専門はそれぞれ、安間了（海嶺沈み込みとマグマティズム、島弧・付加体の形成過程）、青矢睦月（変成岩の形成・上昇に関わるテクトニクス）、西山賢一（岩石の風化と地すべりに関する応用地質学的研究）、齋藤有（堆積学：堆積物の起源と挙動から読み取る環境変動および人間活動）である。

・生物科学分野

生命科学分野では、生命現象について広い視野をもち、生体高分子レベルから個体レベル、さらに生物集団の進化レベルまで生命科学に関する深い知識をベースに、社会の様々な分野で活躍できる人材の育成を目標としている。細胞を構成する物質の構造と機能について知り、それらの生体内での相互作用について学び、そのうえで細胞の振る舞いや情報の伝達のメカニズムや細胞分化のしくみ、さらに遺伝現象と進化の分子機構などの教育研究を行っている。

生物科学講座のスタッフの専門はそれぞれ、真壁和裕（ホヤを用いた初期発生メカニズムの分子・進化発生学的研究）、松尾義則（適応進化の遺伝学的研究）、渡部稔（両生類胚を用いた初期発生の分子生物学的研究）、平田章（核酸関連タンパク質の構造生命科学、超好熱菌を用いた生命起源の研究）である。

自然科学コース教職員組織

（令和4年（2022）4月現在）

講座名	教職員名
物 理 科 学	井澤健一教授、岸本 豊教授、中村浩一教授、伏見賢一教授、真岸孝一教授、齊藤隆仁教授（教養教育院所属）、川崎 祐准教授、犬飼宗弘准教授、折戸玲子准教授、久田旭彦講師
化 学	今井昭二教授、小笠原正道教授、三好徳和教授、上野雅晴准教授、山本 孝准教授、中村光裕講師
地 球 科 学	安間 了教授、青矢睦月准教授、西山賢一准教授、齋藤 有講師
生 物 科 学	真壁和裕教授、松尾義則教授、渡部 稔教授（教養教育院）、平田 章准教授

社会基盤デザインコースの経緯

平成28年(2016)、工学部の理工学部への改組に伴い、それまでの建設工学科をほぼそのまま受け継ぐ形で社会基盤デザインコースは発足した。同時に講座の構成についても見直され、構造・材料講座、防災科学講座、地域環境講座の3講座体制とされ、構造・材料講座には構造工学、風工学、コンクリート工学及び維持再生工学の各研究室が、防災科学講座には地域防災、河川・水文、地盤工学及び地震工学の各研究室が、さらに地域環境講座には都市デザイン、都市・地域計画、生態系管理工学及び環境衛生工学の各研究室が配置された。加えて、建築学を専門とする小川宏樹教授の着任に伴い、建築計画研究室がコース13番目の研究室として新たに立ち上げられ、防災科学講座に配置された。なお、地域防災研究室は令和3年(2021)より防災レジリエンス研究室と改称された。学生の入学定員(1学科制・共通入試のため目安)としては、昼間コース79名、夜間主コース10名である。

大学院創成科学研究科理工学専攻修士課程は、理工学部の一期生が卒業するのに合わせて、令和2年(2020)に設置され、それまでの建設創造システム工学コースを引き継ぐ形で社会基盤デザインコースが発足した。講座は、学部と同じ名称・構成の3講座に整理された。学生定員は39名である。さらに、大学院創成科学研究科創成科学専攻博士後期課程が令和4年(2022)に設置され、それに合わせて修士課程は博士前期課程に名称変更された。博士後期課程では一専攻の下学位プログラム制を導入し、社会基盤デザインコースの各教員は社会基盤システム学位プログラムに所属している。

平成28年(2016)から令和4年(2022)

平成28年(2016)には、先述の小川宏樹教授(建築計画)に加えて尾野薫助教(都市デザイン)が着任した。一方、三神厚准教授(地震工学)が東海大学に異動し、梅岡秀博技術専門職員が定年退職した。なお、梅岡技術専門職員

はその後令和3年まで再雇用され、引き続きコースの教育研究を補助いただいた。また、鈴木壽准教授(地盤工学)が一身上の都合により退職した。

平成29年(2017)には、中田成智准教授(地震工学)が着任した。一方、渦岡良介教授(地盤工学)が京都大学に、野田稔准教授(風工学)が高知大学にそれぞれ異動した。また、中野晋教授、上月康則教授、蔣景彩准教授及び山中亮一講師が環境防災研究センターの専任教員に所属換えとなったが、理工学部併任として本コースの教育研究を引き続き担当している。

平成30年(2018)には、近藤光男教授(都市・地域計画)が定年退職した。

平成31年・令和元年(2019)には、金井純子助教(建築計画)が着任した。また、奥嶋政嗣准教授(都市・地域計画)が教授に昇任した。一方、塚越雅幸助教(維持再生工学)が福岡大学に異動した。さらに、杉本員代技術専門職員が定年退職した。

令和2年(2020)には、山中英生教授が理工学部長に就任した。白山敦子講師(建築計画)が着任し、渡辺公次郎助教(都市・地域計画)が准教授に昇任した一方で、成行義文教授(構造工学)が定年退職し、また尾野薫助教(都市デザイン)が宮崎大学へ異動した。なお、成行教授の退職に伴い、中田准教授が構造工学研究室へ配置換えとなった。さらに、森田椋也講師(都市デザイン)が人と地域共創センターに着任し、本コースの教育研究を担当することとなった。

令和3年(2021)には、中野晋教授(地域防災)が定年退職し、井上貴文助教(構造工学)が阿南高専へ異動した。なお、中野教授はその後環境防災研究センター特命教授として地域防災・減災力向上の研究を継続している。また、蔣景彩准教授(防災レジリエンス)が教授に昇任した。

令和4年(2022)には、山中英生教授が大学院社会産業理工学研究部長に、武藤裕則教授が理工学部長にそれぞれ就任した。森山仁志講師(構造工学)と松重摩耶助教(環境衛生工学)

がそれぞれ着任した。一方、長尾文明教授（風工学）が定年退職した。また、山中亮一講師（環境衛生工学）が准教授に、湯浅恭史助教（防災レジリエンス）並びに金井純子助教（建築計画）が講師にそれぞれ昇任した。

令和5年（2023）には、野田稔教授（風工学）、

兵頭知准教授（都市・地域計画）、堀越一輝講師（地盤工学）がそれぞれ着任した。一方、山中英生教授（都市デザイン）が定年退職した。なお、山中教授は引き続き大学院社会産業理工学研究部長の任に就かれている。

コース研究室と教員

コース研究室と教員	構造工学研究室  中田 成智 ●准教授 耐震工学  森山 仁志 ●講師 鋼構造学	地震工学研究室  馬場 俊孝 ●教授 地震学  白山 敦子 ●講師 建築構造	
	コンクリート工学研究室  橋本 親典 ●教授 コンクリート工学  渡邊 健 ●准教授 非破壊・維持管理工学	地盤工学研究室  上野 勝利 ●准教授 基礎工学  堀越 一輝 ●講師 地盤工学	
	建築計画研究室  小川 宏樹 ●教授 建築防災学  金井 純子 ●講師 地域防災学	風工学研究室  野田 稔 ●教授 風工学	維持再生工学研究室  上田 隆雄 ●教授 コンクリート工学
	防災レジリエンス研究室  蔭 景彩 ●教授 地盤工学  湯浅 恭史 ●講師 危機管理学	生態系管理工学研究室  鎌田 磨人 ●教授 生態系管理工学  河川 洋一 ●准教授 環境生態学	
	河川・水文研究室  武藤 裕則 ●教授 河川工学  田村 隆雄 ●准教授 水文学	都市デザイン研究室  清川 達 ●准教授 建設マネジメント  森田 椋也 ●講師 地域計画	
	環境衛生工学研究室  上月 康則 ●教授 生態系工学  山中 亮一 ●准教授 環境水理学  松重 摩耶 ●助教 防災教育 環境教育		
	都市・地域計画研究室  奥嶋 政嗣 ●教授 都市計画・交通計画  渡辺 公次郎 ●准教授 都市計画  兵頭 知 ●准教授 交通工学		
	石丸 啓輔 河村 勝 木戸 崇博 源 貴志 小池 崇代 佐藤 智子 武市 加代子       		

機械科学コースの経緯

平成28年（2016）から令和4年（2022）

平成28年（2016）3月に米倉大介准教授が教授へ昇進された。園部元康助教が3月末で高知工科大学へ転出した。一方、4月に大石昌嗣准教授と6月に南川丈夫講師が着任した。平成29年（2017）2月に石川真志助教が講師へ昇進した。

平成29年（2017）3月末に多田吉宏准教授が退職し、長町拓夫准教授が広島工業大学へ転出した。一方、4月に一宮昌司准教授が教授へ昇進した。そして5月に久澤大夢助教が着任した。

平成30年（2018）3月末に藤澤正一郎教授が定年退職した。4月に南川丈夫講師が准教授へ昇進した。10月に越山顕一郎准教授と松井保子助教が着任した。

平成31年（2019）3月末に伊藤照明准教授が岡山県立大学へ転出した。

令和2年（2020）3月末に岩田哲郎教授が定年退職し、9月末に松井保子助教が退職した。一方、4月に佐藤克也講師と溝渕啓講師が共に准教授へ昇進した。

令和3年（2021）4月以降、機械科学コース教員の異動はない。令和4年（2022）4月現在の教員組織（計29名）を示す。

表1 機械科学コース教職員組織

（令和4年（2022）4月現在）

講座名	教職員名
材料科学	岡田達也教授、高木 均教授、西野秀郎教授、大石篤哉准教授、アントニオ ノリオ ナカガイト准教授、石川真志講師、久澤大夢助教
エネルギーシステム	一宮昌司教授、太田光浩教授、木戸口善行教授、出口祥啓教授、長谷崎和洋教授、松本健志教授、大石昌嗣准教授、越山顕一郎准教授、重光 亨准教授、名田 譲准教授、草野剛嗣助教
知能機械学	高岩昌弘教授、日野順市教授、佐藤克也准教授、三輪昌史准教授、浮田浩行講師
生産工学	石田 徹教授、安井武史教授、米倉大介教授、溝渕 啓准教授、南川丈夫准教授、日下一也講師

応用化学システムコースの経緯

平成28年（2016）から令和4年（2022）

改組による理工学部発足に伴い、平成28年（2016）4月から化学応用工学科は理工学科応用化学システムコースに名称変更になった。大学院はソシオテクノサイエンス研究部に代わり理工学研究部が発足し、化学系教職員は応用化学系の所属となった。河村保彦教授（物質合成化学）が初代理工学部長に就任した（平成29年（2017）9月末まで）。応用化学システムコース長は引き続き今田泰嗣教授が務めた。南川慶二准教授（物質合成化学）が教養教育院の教授に昇任し、馬場雄三助教（化学プロセス工学）がオーストラリアメルボルン大学より着任し、井本朗暢技術職員が着任した。また、平成27年（2015）2月に馬場雄三助教（化学プロセス

工学）が逝去された。

平成29年度（2017）のコース長（系長）は引き続き今田泰嗣教授が務めた。4月に理工学研究部を含む常三島地区の3つの研究部が統合され社会産業理工学研究部が発足すると共に、河村保彦教授（物質合成化学）が社会産業理工学研究部長に就任した（令和2年（2020）3月末まで）。化学系教員は理工学域応用化学系の所属となった。また、蔵本、常三島両地区の技術職員、リサーチ・アドミニストレーター、教務員は技術支援職員として技術支援部に所属することとなった。4月に野口直樹助教（物質機能化学）が岡山大学惑星物質研究所より着任し、3月にアルカンタラ アビラ ヘスース ラファエル助教（化学プロセス工学）が京都大学大学院工学研究科へ講師として転出した。

平成30年度（2018）のコース長（系長）は

森賀俊広教授が務めた。4月に霜田直宏助教(化学プロセス工学)が成蹊大学理工学部より着任した。3月に外輪健一郎教授(化学プロセス工学)が京都大学大学院工学研究科に転出、藤永悦子技術職員が退職した。

令和元年度(2019)コース長(系長)は引き続き森賀俊広教授が務めた。3月に河村保彦教授(物質合成化学)が定年退職した。



令和元年(2019)12月に開催された出藍会

令和2年度(2020)4月に創成科学研究科理工学専攻(修士課程)が先端技術科学教育部博士前期課程の後継組織として発足し、全ての教員は理工学専攻応用化学システムコースの所属となった。コース長(系長)は右手浩一教授が務めた。河村保彦教授が副学長(教育担当理事)に就任し、10月に加藤雅裕准教授(化学プロセス工学)が教授に昇任した。令和2年度(2020)で特筆すべきは、日本でも年初より本格的に影響が広がった新型コロナウイルス感染症(COVID-19、コロナ禍)により、教育研究活動に大きな影響が出た点である。まず授業については、この年の4月から基本的にオンライン授業となった。授業を行う教員の側も、授業を受ける学生の側も、TeamsやZoomなどのオンライン会議ツールに戸惑

いながら、手探り状態での授業となった。また研究については、研究室での実験、ゼミなどは当面中止となり、ミーティングもオンラインを通じてのやりとりとなった。

令和3年度(2021)のコース長(系長)は引き続き右手浩一教授が務めた。4月に水口仁志講師(物質機能化学)、荒川幸弘助教(物質合成化学)、八木下史敏助教(物質合成化学)がいずれも准教授に昇任、松本愛理さんが上田昭子技術職員の育休中の代替職員として着任(11月末まで)、10月に東日出美技術職員が着任した。令和3年度(2021)もコロナ禍は衰えを見せず、春、夏、年末など、人が移動する季節になると感染者が増える傾向が継続したが、後期には対面で行われる授業も増えてきた。

令和4年度(2022)のコース長(系長)は安澤幹人教授が務めた。4月に創成科学研究科創成科学専攻(博士後期課程)が先端技術科学教育部博士後期課程の後継組織として発足し、応用化学システムコースの教員は全て化学生命工学系プログラムに参画した。修士課程は博士前期課程に名称変更された。4月に河村保彦教授が学長に就任した。また3月に今田泰嗣教授(物質合成化学)が定年退職した。令和4年度卒業式・修了式(令和5年(2023)3月20日)に撮影された教職員の写真を下に示す。令和4年度にはコロナ禍もようやく収束の兆しが見え始め、4月からの授業は基本的に対面で行われた。また3年ぶりに開催された阿波踊りには、当コースからも化応連が参加した。化応連は、



令和4年度(2022)応用化学システムコース教職員集合写真。

工学部応用化学科の時代からの伝統を継承している学生連である。下の写真は化応連が阿波踊りに参加している様子である。



令和4年（2022）8月 阿波踊り会場での化応連

電気電子システムコースの経緯

平成28年（2016）から令和4年（2022）

平成28年（2016）に工学部を改組し理工学部を設置した。それに伴い、工学部コンピュータ工学系電気電子工学科は、電気電子工学を専門とする一つの教育プログラムの教育を行う組織となり、理工学部理工学科電気電子システムコースとなった。この改組に伴い、教員組織である大学院ソシオテクノサイエンス研究部を「大学院理工学研究部」に名称変更し、電気電子工学科の教員は理工学部門電気電子系所属となった。平成28年（2016）4月の理工学部設置前の3月に大屋英稔准教授が退職し、その後、東京都市大学に就職した。

平成29年（2017）には、プラズマの挙動解析を専門とし、科学研究費の中の大型予算である「特定研究」の代表者となって活躍した大宅薫教授が退職した。大宅先生は、石黒先生から始まる牛田富之先生、生田先生、森先生などの本学科で脈々と続けられた気体物性に関する研究の流れを受け継いだ研究者で、教育では長年にわたり電気磁気学を担当した。この年には、教員組織である大学院理工学研究部がなくなり、総合科学部の教員も含めた常三島キャンパス内の教員組織として大学院社会産業理工学研究部が作られ、電気電子工学科の教員は理工学域電気電子系所属となった。

平成30年（2018）には、中村修二教授と懇意でLED研究に関して日本だけでなく世界を引っ張っていた酒井士郎教授が退職した。酒井先生は電子二講座の出身で、他の研究室と異なり早朝から研究室のゼミが始まり、そこでは酒井先生から次々とアイデアが出てくると学生の間で有名であった。昭和62年（1987）に工学部構内にサテライトビジネラボラトリー棟が建設され、そこに酒井研究室の最先端の半導体製造装置が設置され研究が進められた。酒井先生退職後、酒井研究室は西野研究室となった。この年に木内研究室の流れをくみ医学部と共同研究をしていた小中信典教授が退職した。退職後は芥川先生、榎本先生からなる芥川・榎本研究室となった。

国立大学法人化後、国からの大学への運営費交付金が毎年約1%ずつ削減され、その対策として徳島大学では平成30年（2018）からは人事のポイント制を導入し、そのポイントを毎年減らしながらその中で人事を進めるか否かを決めるようになった。そのため、平成24年（2012）以降、電気電子工学科では多くの教授が退職したがその後任人事は進まず、また、昇任人事も難しくなった。その中でも令和元年（2019）に高島祐介助教、片山貴文助教を採用し、それぞれ物性デバイス講座直井研究室、知能電子回路講座島本研究室の一員となった。

令和2年（2020）に山中卓也技術職員が大坂大学技術職員として転出した。この年に理工学部へ続く大学院創成科学研究科修士課程が設置され、その中に理工学専攻電気電子システムコースができた。

令和3年（2021）に電気エネルギー講座北條研究室の山中建二助教が徳島大学高等教育センター助教として転出した。この年に大学院創成科学研究科博士後期課程が設置され、その中に理工学専攻電気電子システムコースができ、また、創成科学研究科修士課程が創成科学研究科博士前期課程に名称変更となった。それにより、理工学部から博士後期課程までの教育システムが完成した。

令和4年（2022）に物性デバイス講座教員 金

平准教授が退職して中国に帰国し、教研究室は閉鎖となった。また、平成29年（2017）から令和2年（2020）に理工学部長となった橋爪正樹教授が退職し、四柳研究室となった。橋爪先生は電気二講座出身で徳島大学には電子三講座に着任した先生で、コンピュータ回路やICの電気テストとそのテスト容易化設計を専門とし、アナログ電子回路等の授業を担当した。学部長としては、大学院創成科学研究科博士前期課程・博士後期課程の設置に尽力した。

ここまで電気電子工学科の教職員や運営体制を中心に紹介したが、以下ではそれ以外の変遷を紹介する。

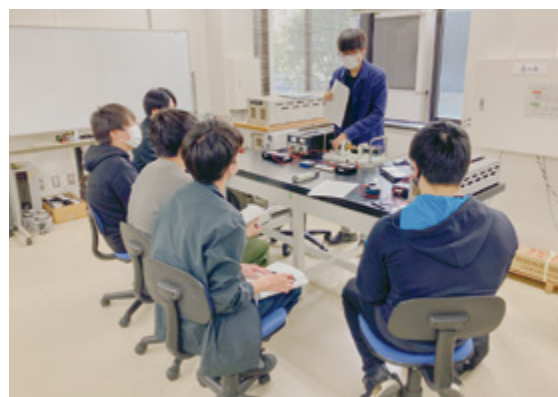
工学部時代は、阿波踊りの学生連は各学科に存在していた。その中でも土木工学科、化学工学科は連の人数が多く、電気工学科連はそれほどではなかった。当初は電気工学科連、電子工学科連があって別々に踊っていたが、電気電子工学科設立時に電気電子工学科連が作られ、その後は雷連となった。次第に他学科の連の活動が下火になったものの、雷連は総合科学部や蔵本キャンパスの学生も加わって規模を拡大し、練習も活発に行い、阿波踊り大学選手権に出場したり、四国電力徳島支店やNHK徳島放送局の栈敷でも踊ったりするようになり、100周年記念祝賀会でも演舞した。それ以外に、電気電子工学科で恒例となっていた学科の夏のソフトボール大会、冬の駅伝大会は工学部が理工学部となっても続けている。ただ、ソフトボール大会は教員チームが組織できなくなり、研究室対抗のソフトボール大会となった。それ以外に、ボーリング大会が研究室対抗で行われるようになった。

令和2年（2020）になってから日本国内でコロナウイルスが蔓延し、学生は登校禁止となり、授業は実験・実習科目を除き原則オンライン授業となった。Microsoft Teamsと学習管理システムmanabaを使っでの授業が主体となり、先生方は黒板を使っでの授業ができないため、パワーポイント資料や授業動画の作成に追われた。卒業研究や大学院研究に関しては自宅での研究推進が望ましいとされ、大学に出てくる場合は大学への届け出が必要となった。定期試験

に関しては試験会場で密にならないよう多くの教室に分かれて実施するなどした。令和3年（2021）になると前年度作成したそれらの授業資料を修正することになり、授業の準備にそれほど労力はかからなくなった。コロナは令和4年（2022）に入っても収まらず、オンライン授業は続いた。コロナによって研究室での飲み会も中止となり、コロナ禍前の研究室の雰囲気とはまったく異なり、閑散とした状態が続いた。



コロナ禍での新入生オリエンテーション
(令和3年(2021)4月)



TAによる実験指導の様子(令和4年(2022)11月)



エンジニアリングデザイン演習(創成科目)の
中間発表の様子(令和5年(2023)6月)

知能情報システムコースの経緯

平成28年（2013）の工学部改組に伴い、知能情報システムコースの前身である知能情報工学科と光応用工学科が融合し、理工学部情報光システムコースが設立された。このコースは情報系と光系から構成され、知能情報工学科が情報系に光応用工学科が光系に対応する。令和2年（2020）には、情報系と光系がそれぞれ知能情報コースおよび光システムコースに改組され、現状の体制となった。令和2年（2020）には知能情報南棟、令和3年（2021）には知能情報北棟の改修工事が完了し、学生実験で使用する電算室やラーニングcommons、各研究室が一新され、学会でも使用可能なパブリックフロアなども設置された。

現在、知能情報システムコースは情報工学講座（4研究グループ）、知能工学講座（5研究グループ）および協力講座として情報センターが連携した体制となっている。この体制の下、情報工学分野、知能工学分野の構成の下に、現代社会の基幹を成す科学技術分野である人工知能やデータサイエンス等の専門性の深化と、広い視野に立って他分野と融合化することができるICT、IoT関連の高度専門職業人の養成を目指して教育研究を行っている。

平成26年（2016）から令和4年（2022）

平成28年（2016）には、伊藤桃代助教が知能工学講座講師に昇任した。また、片岡由樹技術専門職員が着任した。

平成29年（2017）には、情報工学講座の河内亮周講師が大阪大学に転出した。

平成30年（2018）には、情報工学講座に西村良太講師が着任した。

平成31年（2019）には、情報工学講座の北岡教英教授が豊橋科学技術大学に転出し、知能工学講座の柏原考爾准教授が立命館大学に転出した。

令和2年（2020）には、松本和幸助教が情報工学講座准教授に、光原弘幸講師が知能工学講座准教授に、伊藤伸一助教が知能工学講座講

師に、それぞれ昇任した。また、情報工学講座の小野典彦教授が定年退職し、菊池真美技術員が再雇用の任期を満了して退職した。

令和3年（2021）には、情報センターの谷岡 広樹助教が講師に昇任した。また、情報工学講座の西出俊講師が京都橘大学に転出した。また、井上富夫技術員が再雇用の任期を満了して退職した。

令和4年（2022）には、知能工学講座にガジェゴス ラモネト アルベルト助教が着任した。また、情報工学講座の任福継教授が退職した。

令和5年（2023）には、永田裕一准教授が情報工学講座教授に昇任した。また、板東亘技術員が再雇用の任期を満了して退職し、福田芽衣子技術補佐員が再雇用の任期を満了して退職した。

情報光システムコース・光系及び、光システムコースの経緯

平成28年（2016）から令和4年（2022）

平成28年（2016）4月、学部改組により理工学部理工学科の一学科制となった。光応用工学科は知能情報工学科と融合した「情報光システムコース」となり、教育・研究は「情報光システムコース・光系」に受け継がれることとなった。4月に理工学部理工学科の第1期生が入学し、そのうち126名が情報光システムコースに仮配属となった。榎原稔技術職員が3月末に定年退職後、再雇用となった。4月にPankaj Koinkar講師（国際連携教育研究センター併任）が着任した。情報光システムコースへの組織替えに伴って研究室の番号が変更され、光機能材料講座はC1（原口、岡本、森）、C2（橋本、手塚、丹羽）、C3（古部、Koinkar、柳谷）、光情報システム講座はD1（陶山、水科）、D2（仁木、河田、鈴木）、D3（後藤、岸川）の6研究室体制で教育・研究が進められた。

平成29年（2017）、長年教育・研究などに尽力されていた光情報システム講座の仁木登教授が3月末に定年退職され、名誉教授になられた。4月に河田佳樹准教授が教授に昇任した。大学院の一部改組で大学院社会産業理工学研究

部が設置され、それに伴い教員の所属が変更された。

平成30年（2018）から、学部入学生は系単位で仮配属されることになり、4月に情報光システムコース・光系仮配属者48名が入学した。3月末、教育・研究等に尽力されていた光機能材料講座の橋本修一教授が定年退職、手塚美彦講師が起業のため退職された。10月に光情報システム講座の岸川博紀助教が准教授に昇任した。光応用工学科新設後初期から教育・研究等に長年尽力されていた光機能材料講座の森篤史講師が4月18日に逝去された。

令和元年（2019）3月、ポストLEDフォトリニクス研究所が設置され、光機能材料講座の岡本敏弘准教授が研究所の専任教員（理工学部併任）となった。4月に光情報システム講座に松廣幹雄特任助教が着任、光機能材料講座のPankaj Koinkar講師が准教授に昇任した。7月に片山哲郎助教が着任し、C3グループに加わった。

令和2年（2020）大学院改組に伴い、先端技術科学教育部システム創生工学専攻光システム工学コースは創成科学研究科理工学専攻光システムコースとなり、修士課程に25名が入学した。光応用工学科創設時から研究・教育・運営などに長年貢献されていた榎原稔技術職員が、3月に再雇用の任期を満了して退職した。4月に柳谷伸一郎助教が准教授に昇任し、光機能材料講座C2グループは、柳谷准教授と丹羽助教で構成された。長年教育・研究等に尽力されていた光情報システム講座の後藤信夫教授が5月24日に逝去された。

令和3年（2021）3月末、本学科・系で長年にわたり教育・研究などに尽力されていた光情報システム講座の陶山史朗教授が定年退職され、光機能材料講座の丹羽実輝助教が退職し企業に移られた。新たに山本健詞教授、藤方潤一教授、南康夫准教授が4月に着任し、それぞれD1、D3、C2グループに加わった。教務・事務などの担当として松本愛理特任技術職員が3月に着任し、5月末に異動となった。後任として小西勇士特任技術職員が着任し、11月末に異動と

なった。

令和4年（2022）4月、光科学・光技術の教育・研究のさらなる充実のため、情報光システムコース・光系は光システムコースとなり、ポストLEDフォトリニクス研究所と融合した研究・教育体制で入学生を迎えることになった。これに伴い、光系のほとんどの教員はポストLEDフォトリニクス研究所の専任教員（理工学部併任）となり、ポストLEDフォトリニクス研究所の安井武史教授、矢野隆章教授、南川丈夫准教授、久世直也准教授、山口堅三准教授、永松謙太郎准教授（大学院博士後期課程の教育のみ担当）を加えた新体制となった。大学院博士後期課程の改組によって、先端技術科学教育部システム創生工学専攻光システム工学コースは創成科学研究科創成科学専攻光科学系プログラムとなった。4月に理工学科光システムコースとしての第1期生50名、大学院創成科学研究科博士前期課程27名、博士後期課程4名が入学、10月に博士前期課程3名、博士後期課程1名が入学した。3月末に光情報システム講座の松廣幹雄特任助教が鈴鹿医療科学大学に転任された。教務・事務などを担当していた堀内加奈技術職員が異動され、後任として、4月に酒井仁美技術職員が着任した。

生物工学科から 生物資源産業学部へ

徳島大学は平成28年度（2016）から令和3年度（2021）の第3期中期目標期間の開始に際して、「地域ニーズに応える人材育成・研究を推進する大学」として再スタートすることを選択した。そしてその目標達成のための1つの目玉改革として、平成28年度（2016）に総合科学部と工学部を中心とする常三島地区の教育組織の再編がなされ、これまでの2学部の再編に加えて、ソシオテクノサイエンス研究部・工学部生物工学科教員19名【教授6名：宇都義浩／櫻谷英治／辻明彦／中村嘉利／長宗秀明／松木均、准教授5名：玉井伸岳／友安俊文／間世田英明／三戸太郎／湯浅恵造、講師4名：浅

田元子／佐々木千鶴／田端厚之／山田久嗣、助教4名：鬼塚正義／後藤優樹／阪本鷹行／白井昭博（敬称略）】とソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・総合科学部社会創成学科に属する教員9名【教授4名：小山保夫／玉真之介／濱野龍夫／横井川久己男、准教授5名：金丸芳／川上竜巳／佐藤征弥／服部武文／山城考（敬称略）】、及び他の部局等からの教員16名【(生物資源産業学部設置準備室) 教授1名：音井威重、准教授1名：山本圭、講師4名：岡直宏／岸本幸治／橋本直史／山下聡、助教2名：亀村典生／中橋睦美、(医歯薬学研究部・歯学部) 准教授1名：赤松徹也、(医歯薬学研究部・医学部医科栄養学科) 講師1名：向井理恵、(医歯薬学研究部・薬学部) 准教授1名：田中直伸、(農工商連携センター) 教授1名：刑部敬史（特任）、准教授2名：宮脇克行／刑部祐里子（特任）、助教1名：石丸善康、(糖尿病臨床・研究開発センター) 助教1名：谷原史倫（特任）（敬称略）】の総勢44名の教員によって、地域連携を担う新学部である生物資源産業学部が設立され、初代学部長には辻教授が就任した。本学部は学問的には生命科学を基盤とした農学分野と生命工学分野が融合した学部だが、さらに経済学や経営学といった文系教育も補強されて、研究成果を製品化・産業化に繋げる企業マインドを持った人材や6次産業を担える人材を養成するというユニークな性格を持った学部だ。これが学部の名称「生物資源産業学」にも現れており、このような特徴的な教育・研究を通して地域社会や地域経済への貢献を目指している。

本学部は学生定員100名の単一学科制（生物資源産業学科）であり、さらにこの中で、応用生命コース（定員35名程度；生物工学的アプローチで生物資源の医薬品・医療技術などへの応用と製品化を行い、バイオ産業の育成や経済発展に貢献できる人材の育成を目指す。教員16名）、食料科学コース（定員35名程度；食料問題の解決、有用成分の発見、機能性食品の開発を通して食品産業の育成や経済発展に貢献できる人材の育成を目指す。教員13名）、生物生産システムコース（定員30名程度；農工連

携による生物資源の生産・管理・育種・品質改良などを行い、1次産業の発展に貢献し、地域社会や地域経済の活性化に貢献できる人材育成を目指す。教員15名）の3コースに分かれる。農畜産系、水産系、林業系などの研究分野もカバーするため、キャンパスは現在大きく分けて常三島キャンパス、石井町のアグリサイエンスゾーン、鳴門市のマリンサイエンスゾーン、阿南市のフォレストサイエンスゾーンの4箇所に分散しているが、実習・実験以外のほとんどの教育は常三島キャンパスで行われている。

このようにスタートした生物資源産業学部だが、学部が完成する令和元年度（2019）末までも、徳島県との交流人事や定年・転出等に伴う多くの人事異動があった。

平成28年度（2016）には山田晃嗣特任助教が着任し、間世田准教授が産業技術総合研究所へ異動された。平成29年度（2017）には亀村助教が徳島文理大学へ異動し、中村綾特任助教、平田真樹特任助教及び和田直樹特任助教が着任された。また、山田（晃）特任助教が退職されて助教として採用され、白井助教が講師に、向井講師が准教授に昇任された。さらに年度末に徳島県との交流人事によって中橋助教が退職され、翌年から徳島県農林水産総合技術支援センターに異動された。

平成30年度（2018）には、徳島県との交流人事で阿部成人助教、また渡邊崇人助教の2名が着任された。一方、生物工学科創設期から勤められ、生物資源産業学部を立ち上げられた初代学部長の辻教授及び小山教授が定年退職を迎えられ、二代目学部長には横井川教授が就任されている。さらに、田中准教授が配置換えで薬学部へ戻られ、平田特任助教は年度末で退職の後、令和元年度（2019）に特任講師として採用されている。

令和元年度（2019）は本学部設立の4年目であり、令和2年（2020）3月末をもって学部は完成を迎え、第1期の卒業生を送り出すことができた。また設置計画履行状況等調査結果や大学認証評価において、本学部への大きな問題点の指摘も無く一定の評価を得ることもできた

(令和2年(2020)4月)。その令和元年度(2019)においては、辻教授と小山教授の後任として、県立広島大学から田井章博教授及び本学薬学部から田中保教授が着任され、立命館大学から亀村助教の後任として林順司助教が着任された。なお、配置換えで研究支援・産学官連携センターより森松文毅教授が着任された。また、金丸准教授が教授に、佐々木講師と浅田講師は准教授に昇任され、年度末には2代目学部長だった横井川教授が定年退職され、さらに阿部助教も退職されて県の交流人事で徳島県に戻られた。

令和2年(2020)4月からは常三島の2教育部が統合された大学院創成科学研究科が設立され、その中に本学部の教育研究に継続性のある生物資源学専攻応用生命科学コース、食料生物学コース、生物生産科学コースの修士課程(定員39名)がスタートした。この大学院修士課程に第一期生を迎えた令和2年度(2020)には、三代目学部長に長宗教授が就任された。服部准教授と刑部(祐)准教授は教授に昇任され、大阪大学から中澤慶久教授が着任され、平田特任講師は講師となり、さらに栗飯原(旧姓:中橋)助教が交流人事で徳島県から戻られた。一方で、山下講師、谷原特任助教及び昇任間もない刑部(祐)教授は、それぞれ森林総合研究所、自治医科大学及び東京工業大学へ異動された。そして令和2年(2020)7月1日には、本学部の生物生産システムコース教員を基軸教員として、石井/鳴門/新野キャンパスを中心に、地域や産業界と連携して生物系新産業や6次産業化に関するオープンイノベーションを推進する「徳島大学バイオイノベーション研究所(BIRC)」が全学組織として設立された。BIRCには音井教授、森松教授、三戸准教授、宮脇准教授、岡講師、平田講師、渡邊助教が移籍された。ただし、これらの先生方は本学部及び大学院の教員も兼任し、以後も本学部・本専攻の教育にご尽力を頂いている。

続く令和3年度(2021)には、タイからソンキティディロチョンマナート助教と京都大学生存圏研究所から山村正臣准教授が着任された。またこの年度は多くの内部昇任人事があり、林

助教、栗飯原助教、石丸助教は講師に、岸本講師、山田(久)講師、田端講師、白井講師、後藤助教は准教授に、三戸准教授と浅田准教授は教授に昇任されている。さらに湯浅准教授は摂南大学へ異動され、山田(晃)助教が退職されて、翌年度に講師に採用されている。長宗教授は年度末をもって退職し、徳島大学教育担当理事に移った。

そして令和4年度(2022)には、2年前に創設された大学院創成科学研究科に博士後期課程が発足した。この博士後期課程は学位プログラム制であり、分野横断/融合型の研究指導クラスター体制をとったユニークなものだ。7つの学位プログラムの内、本学部系のものとして化学生命工学系プログラム【応用生命系が含まれ、授与学位は博士(工学)】と生物資源学系プログラム【食料科学系と生物生産系が含まれ、授与学位は博士(農学)】(定員は課程全体として47名)が設置され、新入生を迎えることができた。令和4年度(2022)は、四代目学部長に松木教授が就任し、岡講師が准教授へ、鬼塚助教、阪本助教及び渡邊助教がそれぞれ講師に昇任された。また、令和3年度(2021)に退職した長宗教授が、教授(兼任)として着任された。さらに、チョンマナート助教は退職された。

このように、昭和63年度(1988)から28年間の工学部生物工学科の時代を経て、平成28年度(2016)に生物工学科は発展的に解消し、その伝統を受け継いだ生物資源産業学部へと生まれ変わった。そして新たな分野の息吹きも取り入れ、誕生後8年目を迎えた現在もさらに成長と発展を続けている。

自己点検・評価

1. 理工学部自己点検・評価委員会の現状

平成3年（1991）7月の国会で可決された大学設置基準法、大学院設置基準法などの改正案に基づき、平成3年（1991）7月3日開催の徳島大学将来構想委員会において、本学の自己点検・評価の実施のため全学的な自己点検・評価委員会及び学部など部局ごとの自己点検・評価委員会の設置が決議された。これを受け、工学部では工学部将来構想委員会において「工学部自己点検・評価委員会」を置くことが決定され、平成4年（1992）3月31日までの暫定処置として「工学部将来構想委員会」の委員が工学部自己点検・評価委員会委員を兼ねることとなり、工学部自己点検・評価委員会が正式に発足した。本委員会は、「大学設置基準の大綱化に伴い、大学はその設置理念・目的に照らして教育・研究の現状とその社会的寄与について自主的に点検・評価して、不断の改革に取り組むことが求められた」、「社会の経済的・技術的發展と共に大学の果たす役割が多様化し、教育・研究の国際化が進行する中で、高等教育機関としての機能の高度化に加え質的な整備充実が益々重要になってきた」との認識に立ち、学部の現状の点検と評価を自主的に行い、改革を推し進め、充実した学部とするための組織として位置付けられた [1]。平成16年（2004）4月の「国立大学法人」への移行後、平成28年（2016）4月に工学部（生物工学科を除く各学科及び工学基礎教育センター）と旧総合科学部の理系（総合理数学科及び社会創生学科環境共生コースの一部）が協力・融合した「理工学部」、旧総合科学部社会創生学科環境共生コース及び工学部生物工学科から組織した「生物資源産業学部」の設置、令和2年（2020）4月に大学院創成科学研究科（修士課程）の設置、令和4年（2022）4月に大学院創成科学研究科創成科学専攻（博士後期課程）の設置があった。この変遷のなか、工学部自己点検・評価委員会は、平成28年

（2016）4月に理工学部自己点検・評価委員会として再出発し、学部の現状の点検と評価を継続して行っている。

なお、理工学部自己点検・評価委員会の令和4年（2022）の主な所掌事項は、以下の取り組みからなっている。

- ① 各種委員会（理工学部教務委員会、学生委員会、FD（Faculty Development）委員会）における教育活動の検討結果の検証。
- ② 教育の成果・効果を検証するためのアンケート調査。

工学部自己点検・評価委員会の発足当時に実施されていた学生による授業評価に関するアンケートは、理工学部FD委員会が分析等取りまとめて継続して実施されている。外部評価は、外部評価委員会及び地域連携懇談会において継続して行われており、それぞれ令和元年（2019）及び令和4年（2022）に開催された。

2. 理工学部自己点検・評価委員会の最近の取り組み

ここでは、令和4年（2022）度進行中の取り組みを中心に理工学部自己点検・評価委員会の活動の記録 [2] をもとに上記の自己点検・評価に関わる取り組みを述べる。

2.1 「理工学部・工学部の教務委員会、学生委員会、FD委員会における教育活動の検討結果の検証」について

検証の手続きは、各種委員会における教育活動の検討結果の報告を受けてその内容を検証し、検証結果を理工学部教育プログラム評価委員会、各種委員会に通知する流れである。なお、各種委員会においては、以下の教育活動の現状の確認と改善策の検討が行われている。

教務委員会：

- (1) 大学院の複数指導体制を活用して研究指導を適切に行えているかについて研究指導計画

書・報告書を点検。

- (2) 担任制実施状況について確認し、必要があれば改善策を検討。
- (3) 成績評価の根拠となる資料（評価に用いた全課題・問題等）の写しが5年保存されていることを各コース毎に確認。

学生委員会：

- (1) 履修相談室利用状況の確認を行い、必要があれば利用体制改善を検討。

FD委員会：

- (1) 各コース毎に授業改善アンケート結果及び学生の意見等をもとに対応が必要と考えられる授業科目について改善策を検討。
- (2) 大学院の各コースに、研究環境に関するアンケート結果及び学生意見等をもとに対応が必要と考えられる研究環境について改善策を検討。

自己点検・評価委員会はこれらの各種委員会での検討結果を受け、主に以下の点の検証を行い、結果を教育プログラム評価委員会、各種委員会に報告する。

- (1) 大学院の研究指導計画書・報告書の点検結果の検証。
- (2) 担任制実施状況に対する改善策の検証
- (3) 成績評価の根拠となる資料の原本又は写しの5年保存結果の検証、成績評価の分析状況に対する改善策の検証。
- (4) 授業改善アンケート結果及び学生の意見等をもとに対応が必要と考えられる授業に対する改善策の検証。
- (5) 大学院の研究環境に関するアンケート結果及び学生の意見等をもとに対応が必要と考えられる環境に対する改善策の検証。
- (6) 履修相談室利用体制の改善策の検証。

2. 2 「教育の成果・効果を検証するためのアンケート調査」について

2. 2. 1 令和3年度（2021）「教育の成果・効果を検証するためのアンケート調査」の実施について

学校教育法に「大学は、その教育研究水準の向上に資するため、文部科学大臣の定めるとこ

ろにより、当該大学の教育および研究、組織及び運営並びに施設及び設備の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表する」と記されている。本学では、大学の理念・目的の実現のため、恒常的かつ継続的な教育研究、運営、施設整備等の質の維持・向上を図る点検・評価及び改善（内部質保証）に関する基本的事項を「徳島大学における内部質保証方針」に定め、令和元年度（2019）から毎年点検・評価を実施することになった。全学自己点検・評価委員会では、全学委員会（大学教育委員会、施設・環境委員会、附属図書館運営委員会、情報戦略室会議、学生委員会、国際交流委員会、入学試験委員会）からの報告書及び根拠資料による内部質保証の点検・評価を毎年行うことになった。また、概ね6年に一度、認証評価機関が定める評価基準等を参照し、点検・評価を行うこととなっている（令和6年度（2024）を予定）。点検・評価の実施後は、その評価結果を本学ホームページ等により広く周知することになった。内部質保証の点検・評価の項目である「教育の成果・効果を検証するためのアンケート調査」は令和元年以前より実施されており、平成28年度（2016）から実施周期を2年ごとに変更し、2年間のアンケート結果及び調査票関係資料の作成が工学部・理工学部等の部局に依頼され進められてきた。令和3年（2021）5月6日開催の全学自己点検・評価委員会でアンケート調査の見直しについて審議され、令和3年度（2021）は全学自己点検・評価委員長の依頼のもと「教育の成果・効果を検証するためのアンケート調査実施概要」に基づいて実施された。実施概要に記された目的「教育の効果を検証し、教育改善を図るため、学生・卒業（修了）生・雇用主・教員による教育の成果に関するアンケート調査を実施する」により、全学自己点検・評価委員会が作成した全学共通の様式を原則として使用し、各学部等の特徴により修正可の条件のもと実施された。大学院創成科学研究科理工学専攻、及び先端技術科学教育部の修了見込生330名及び理工学部の卒業見込生611名を対象に令和4年（2022）1月から2月

に「教育の成果・効果を検証するための修了時学生アンケート調査」をMicrosoft FormsによるWebアンケートの形式で実施し、調査結果の分析報告書の作成を行った。アンケート回答学生は、大学院及び理工学部、それぞれ、

214名、351名、回答率は64.8%、57.4%であった。この集計・分析の結果は全学自己点検・評価委員会に報告された。卒業（修了）時学生アンケート調査の結果と分析報告の一部を図1に示す。



図1 令和3年度（2021）卒業（修了）時学生アンケート調査の結果と分析報告（一部抜粋）

2. 2. 2 令和4年度（2022）卒業・修了生、雇用主アンケートの実施について

本学教育戦略室において、全学自己点検・評価委員会、教学関係委員会、高等教育研究センターとの協同で、学内で行われているアンケートについて、質問項目の見直しや統廃合、及び

実施体制の見直し等が行われ、令和4年度（2022）から教学アンケートとして毎年実施することを決定した（令和3年（2021）5月28日開催教育戦略室会議において検討開始。令和3年（2021）10月20日大学教育委員会、令和3年（2021）12月15日学長企画会議、令和3年

(2021) 12月21日教育研究評議会、令和3年(2021) 12月22日役員会で決定及び報告)。教学アンケートには、学生の入学から卒業までの学修実態や授業の評価、教員を対象とした教育活動の実態把握などが含まれ、これらのアンケート間を統一した設問を設定することで、経年かつ多角的な分析を可能にするものとなった。この中で、卒業時(修了時)アンケート、卒業・修了生及び雇用主アンケートについて理工学部自己点検・評価委員会で取りまとめを行うことになった。卒業時(修了時)アンケートの設問は、大学教育委員会が実施統括委員会となり、高等教育研究センター教育改革推進部門、教育

の質保証支援室、学修支援部門が作成を担当し、部局変更は不可(各部学部等において設問追加は可)とされた。卒業・修了生及び雇用主アンケート設問は、全学学生委員会が実施統括委員会となり、高等教育研究センター教育の質保証支援室、キャリア支援部門が設問作成を担当し、部局変更は不可(各部学部等において設問追加は可)とされた。アンケートは、令和3年度(2021)卒業・修了生、令和3年度(2021)卒業・修了生の就職先を対象に設定された。令和4年度(2022)卒業・修了生の共通設問の一部を図2に示す。理工学部では理工学部長からの依頼により学部独自の設問の追加並びに、アン

問3 大学の授業科目や課外活動について、どの程度熱心に取り組みましたか。
(1)~(10)のそれぞれの項目について該当する番号に一つずつ○をつけてください。

	熱心	やや熱心	どちらともいえない	やや不熱心	不熱心	取り組まなかった
(1) 全学教育(一般教養科目)	5	4	3	2	1	0
(2) 外国語科目	5	4	3	2	1	0
(3) 専門科目(実験除く)	5	4	3	2	1	0
(4) 専門科目(実験)	5	4	3	2	1	0
(5) ゼミや実習	5	4	3	2	1	0
(6) 卒業論文・卒業研究	5	4	3	2	1	0
(7) 部・サークル活動	5	4	3	2	1	0
(8) 資格の取得	5	4	3	2	1	0
(9) アルバイト	5	4	3	2	1	0
(10) ボランティア	5	4	3	2	1	0

問4 在学中を振り返って、以下の能力や知識はどのように変化しましたか。
(1)~(21)のそれぞれの項目について該当する番号に一つずつ○をつけてください。

	大きく増えた	増えた	変化なし	減った	大きく減った
(1) 一般的な教養	5	4	3	2	1
(2) 分析力や問題解決能力	5	4	3	2	1
(3) 専門分野や学科の知識	5	4	3	2	1
(4) 批判的に考える能力	5	4	3	2	1
(5) リーダーシップの能力	5	4	3	2	1
(6) 人間関係を構築する能力	5	4	3	2	1
(7) 他の人と協力して物事を遂行する能力	5	4	3	2	1
(8) 地域社会が直面する問題を理解する能力	5	4	3	2	1
(9) 国民が直面する問題を理解する能力	5	4	3	2	1
(10) 文章表現の能力	5	4	3	2	1
(11) 外国語の運用能力	5	4	3	2	1
(12) コミュニケーションの能力	5	4	3	2	1
(13) プレゼンテーションの能力	5	4	3	2	1
(14) グローバルな問題の理解	5	4	3	2	1
(15) 職業人・社会の一員として求められる倫理観	5	4	3	2	1
(16) 生涯学び続け、教養・専門性を高める能力	5	4	3	2	1
(17) 必要な情報を収集・取捨選択する能力	5	4	3	2	1
(18) データを読み、理解し、活用する能力	5	4	3	2	1
(19) 新しいことに積極的に挑戦する姿勢	5	4	3	2	1
(20) ストレスに対処する能力	5	4	3	2	1
(21) 柔軟に発想し、表現する能力	5	4	3	2	1

図2 令和4年度(2022)卒業・修了生の共通設問(一部抜粋)

ケート実施及び分析、報告書作成について令和4年（2022）8月3日開催の第1回理工学部自己点検・評価委員会で議論し、準備を進めている。理工学部独自の設問として、平成28年（2016）4月に発足した理工学部ならびに令和2年（2020）4月に設立された大学院創成科学研究科（修士課程）に関わる内容が追加された。追加設問の一部を図3に示す。現在、令和5年（2023）2月の分析報告書の提出期日に向けて取り組んでいるところである。

また、令和4年度（2022）実施分から、経年かつ多角的分析を可能にするために、アンケート設問は全学的に統一された。全学的な高度な分析によるアンケート結果の活用が促され、教育・研究の現場にフィードバックできる効率的な

つ効果的なアプローチの構築に期待がもたれる。

このように、理工学部では、各種委員会において検討された内部質保証のための改善策や卒業生、修了生及び雇用主を対象としたアンケート結果を自己点検・評価委員会において自己分析・評価した上で、地域連携懇談会や外部評価委員会による外部評価を受け、それらを各種委員会にフィードバックし、社会からの意見・要望に応える持続的な取組体制を構築している。

参考資料

1. 徳島大学工学部75年史. 自己点検・評価. pp.80 - 84.
2. 理工学部自己点検・評価委員会議題・報告資料（平成30年度 - 令和4年度）

(1) 理工学部卒業生あるいは卒業見込生を回答対象とした追加設問

理工学部カリキュラムは、理学・工学の分野融合による「理学のマインドを有する工学者、工学のマインドを有する理学者」の育成を目指し、以下のような制度や科目を導入しました。

- (1) 他コース専門科目の必修化
- (2) STEM 科目群
- (3) ニュービジネス概論

本カリキュラムを通じて分野融合による効果をどの程度実感されましたでしょうか。該当するものを一つ選択してください。理由、ならびに、さらに工夫の必要があると思われる点がございましたらお聞かせください。

(2) 理工学専攻修了生あるいは修了見込生を回答対象とした追加設問

創成科学研究科では、幅広い視野と専門性を兼ね備えた人材を養成するため、従来型の学問体系に基づく基盤教育に加え、研究に基づく分野横断型教育を行っています。分野横断型教育を推進するために、所属するコースで実施する専門教育に加えて、自らの研究分野を多角的にみる能力を養うために専門分野の枠組みに捉われない「教育クラスター」という仕組みを導入しました。教育クラスター制度にどの程度満足していますか。該当するものを一つ選択してください。また、理由もお聞かせください。

(3) 雇用主を回答対象とした追加設問

本学理工学部は2016年4月に発足し、卒業生を輩出するのは、この春で3年目となります。理工学部カリキュラムは、理学・工学の分野融合による「理学のマインドを有する工学者、工学のマインドを有する理学者」の育成を目指し、理工学の各分野で共通して必要となるSTEM*科目群を体系的に履修できるような制度や科目を導入しました。

*Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学）、Mathematics（数学）の頭文字をとったもの

このようなカリキュラムの導入により、工学部時代と比べてポジティブな変化はみられましたでしょうか。

（ あり ・ なし ・ わからない ）

図3 令和4年度（2022）卒業・修了生、雇用主アンケートにおける理工学部独自の追加設問例

理工学部・生物資源産業学部・大学院の将来へ

国立大学がおかれてきた状況を踏まえて、これから進むべき方向を記載したい。

国立大学の歩み¹⁾と徳島大学

我が国では明治19年(1886)の帝国大学令によって「国家の須要に応ずる學術技芸を教授し及び其の蘊奥を攻究する」ことを目的として、帝国大学が東京に設置され、その後、京都、東北、九州、北海道、京城、台北、大阪、名古屋に設置される。一方、明治36年(1903)の専門学校令制定と実業学校令改正により「高度の學術技芸を教授する」専門学校が位置付けられ、農、工、商業等の官立専門学校が設置される。大正11年(1922)には徳島大学工学部の前身となる徳島高等工業学校が設立された。すなわち、工業分野の専門職業人養成の需要に答えることが使命であった。

第二次大戦後、昭和24年(1949)国立学校設置法により、19大学、26高等学校、62専門学校、83師範学校等が統合され、70の新制大学が設立される。「教育の機会均等を実現するため、一府県一大学を設置する」ことが方針とされ、徳島大学もこの時に設置された。経済復興を歩む中、大卒人材の需要が高まり、学生定員が増加し、大学の大衆化が進む。

1980年代になると、国の緊縮財政政策が叫ばれる中で、規制緩和と自己責任を基本とする大学改革が推進されるようになる。平成3年(1991)に大学設置基準の大綱化、自己点検・評価の導入等が提言され、教養部廃止、大学院定員増や大学院重点化などが進んだ。

1990年代には一層の規制緩和と競争原理導入の潮流が進み、国立大学の独立行政法人化が議論されるようになる。そして、平成16年(2004)に「国立大学法人」制度が成立し、国立大学は法人化される。自律的な運営の確保、民間的マネジメントの導入、第三者評価に基づく資源配分などがねらいとされた。

振り返ると100年間のうち、最後の4半世紀の25年間は、拡張の時代から、効率化・縮小の中で、新たな改革を模索する時代であったと言える。まずは、法人化がもたらした制約を確認しておきたい。

法人化後の大学²⁾

法人化によって、国立大学は財務・経営の裁量権が与えられ、学長のガバナンスの下で、自律し、自己責任の元、質の高い運営が期待されるようになった。具体的には国立大学の経常費は、国から用途を指定しない運営費交付金で措置され、大学は裁量で学内に資源配分を行えるようになった。そして、中期目標・計画に基づいて業績を管理し、第三者評価の下での適正な運営が遂行される仕組みとなった。

一方で、法人化後、国からの運営費交付金の仕組みによって、国立大学は財務上の課題を抱えることになった。第1期中期目標期間(平成16年度(2004)～平成21年度(2009))は事業費の“1%減額”を求める「効率化係数」が設定され、運営交付金は毎年減額された。第2期中期目標期間(平成22年度(2010)～平成27年度(2015))でこの方式は廃止されたが、かわりに「大学改革促進係数」が設定され、意欲的な取り組みや新たな施策を支援する制度が拡充され、その見合い分、基幹経費分の交付金は減額された。さらに第3期中期目標期間(平成28年度(2016)～令和3年度(2021))では、国立大学を①地域貢献型、②専門分野教育研究型、③世界卓越教育研究型の類型に分けた重点支援枠を設定し、各大学が選択した類型に応じた評価指標に基づいて交付金配分に反映する方式が採用された。多くの地方大学は類型①地方貢献型を選択しており(当時86大学中55大学)、徳島大学もこの類型を選択している。

さらに、大学の教育・研究の向上を求める財務省の財政制度等審議会等の審議から、令和元

年度（2019）からは、運営交付金における「評価に基づく配分」が1000億円（交付金総額の約1割）となり、300億円は既存の重点支援評価配分で、700億円を共通指標等に基づいて配分されている³⁾。第四期中期目標期間令和4年度（2022）でも、指標を見直しながら「成果を中心とする実績状況に基づく配分」が継続している。

法人化以後、徳島大学の運営交付金および自己収入（病院を除く）を図1に示す。運営交付金について算定方向の見直しが進められてきたが、結果として3期18年で80%弱に減額となっている。

基幹的経費としての交付金の削減は、国立大学において大きな制約をもたらした。文科省は運営費交付金の減額の結果、10年間で常勤教職員人件費割合は11.7ポイント減で、国立大教員の約6割が年間研究費50万円未満となっているとしている²⁾。

徳島大学でも同様の状況にある。工学部教員の研究費はこの25年間で1/10程度になったとされ、教員数についても第3期において、ポイント制導入と年間3%のポイント削減が実施され、理工学部の教員数は、第3期終了令和4年度（2022）当初に、理工学発足前と比較して約11%減となっている。

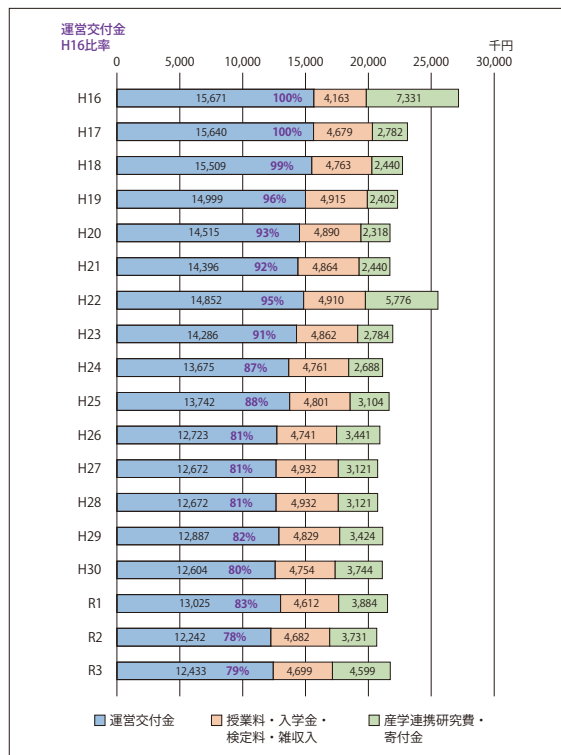


図1 徳島大学の運営費交付金・自己収入の推移

大学の将来 —教育改革へ—

以上のような大学への改革が進められる背景には、少子化の進展と技術革新が進む社会への対応という重大な課題がある。文部科学省によると、平成29年（2017）の18歳人口は約120万人、大学進学数は約63万人であったが、2040年には18歳人口は約88万人と約3/4になると予測されている⁴⁾。

一方でVUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）の時代と言われ、劇的な技術革新が進む社会変化に対応できる「普遍的な知識と、汎用的な技能を文理横断的に身に付ける」ことが求められている。

こうした中、新たなニーズに対応すべく教育改革を進めてきている。工学部は平成28年（2016）に総合科学部等との改組で理工学部と生物資源産業学部へ拡充し、令和2年（2020）には理工学部、総合科学部、生物資源産業学部を母体とする大学院修士課程に創成科学研究科の4つの専攻を設置、さらには令和4年（2022）にはこれらを統合した1専攻の博士後期課程を設置した。

いずれの改革においても、限られた教育資源の中で、新たな教育システムへの改革を目指してきている。特に、基礎的専門性に加えて地域や産業を支えるイノベーションを担う実践的な人材の育成を目指しており、こうした試みはこれからの大学が進む方向と言える。

一方少子化が進む中で、大学には、18歳高校卒以外の多様な学習ニーズへの対応が求められており、特に理工学・生物資源の大学院でも、留学生・社会人学生の入学増を進めることが期待される。

研究の活性化へ

また、大学のもう一つの柱と言える研究においても改革は待ったなしとなっている。

徳島大学の工学部はいわゆる伝統的工学の土木・化学・機械・電気と情報工学を基盤として、生物工学（昭和63年（1988））、光応用（平成5年（1993））と全国的にも新しい分野への研究を拡充してきている。

生物工学科を基盤とする生物資源産業学部は、バイオサイエンスに加えて、食料科学、生物生産（いわゆる農学）の分野を融合して、基礎的研究を産業活用する方向を目指している。令和2年（2020）には、こうした研究者を集約したバイオイノベーション研究所を設立し、話題となっている食用コオロギの商品開発、大学で一貫生産している徳大ハムなど、社会実装の実績が生まれている。

一方の光分野は平成30年（2018）に大型外部資金の地方大学・地域産業創生交付金を獲得し、ポストLEDフォトリソグラフィ研究所（pLED）を設立し、次世代光（深紫外、テラヘルツ、赤外光コム）の光源開発と応用・製品開発研究を進めている。理工学部の光系の教員は令和4年度（2022）にpLEDに移籍し、教育・研究を一体として進めており、さらには令和5年度（2023）には、全国3大学のみ認められた定員増で医光／医工融合プログラムを担う組織となっている。

こうした取り組みに見られるように、地方大学においては、特徴ある分野において研究体制を構築し、組織的な取り組みを進めることが求められており、それだけ産業化、社会実装といった成果を生み出すことが期待されている。

一方で、大学における研究は、その分野や開発フェーズ、人材において多様性を維持することが必須とされる。革新的研究成果を上げた多くの研究者が語るように、研究の初動期は着目されない取り組みから始まっている。創意にあふれた取り組みの多様性こそが、大学の力の源泉である。

したがって、若手研究者などが多様な研究へ取り組める環境、時間、資金などの維持は将来にわたって肝要と言え、上述のように基幹的経費として配布されていた教員研究費が削減されている中で、多様な支援策を構築することが必要となっている。

徳島大学では平成28年（2016）クラウドファンディングOtsucleを開設し、多様な研究プロジェクトの資金獲得に成功している。今後研究科研費や企業との共同研究などの外部資金獲得

に向けた指導、支援の一層の拡充が望まれる。

また、多様性からイノベーションを生むためには、多彩な分野の研究者の交流・情報交換が欠かせないとされる。今後は、学内はもとより、地域や企業、海外などと多様な交流を促進することも、果敢なく進めていかねばならない。

キャンパスの未来へ

国立大学はその拡張期の昭和40（1965）-50（1975）年代に施設整備が集中しており、その施設の老朽化が指摘され、文部科学省は平成5年（1993）からの国立大学等施設緊急整備5か年計画を策定し、その後令和3年度（2021）の第5次国立大学法人等施設整備5か年計画まで、老朽化対応とともに、機能強化の重点視点を示して優先的な整備事案に対して補助をする方針をとっている。

理工学部と生物資源産業学部の常三島キャンパスでは、研究拠点としてベンチャービジネス育成研究棟（平成9年（1997））フロンティア研究棟（平成26年（2014）：現在はpLED棟）、地域連携や国際交流の拠点として地域創生・国際交流会館（平成27年（2015））、と機能強化整備を進めてきている。一方、学部本体は平成の初期に新築や耐震改修した建物が多く、10年後にはその大半が築・改修後25年以上となり大規模補修時期を迎える。こうした施設の整備を進めるには、教育・研究機能の一層の強化を構想していく必要がある。

第5次施設整備5か年計画では、大学キャンパスに求められる機能として『キャンパス全体が有機的に連携し、あらゆる分野、あらゆる場面で、あらゆるプレーヤーが共創できる拠点「イノベーション・コモンズ」を実現する』こととしている。産業界との共同利用や実証実験などの共創スペース、学生主体のアクティブラーニングを進められる学習環境、地域公共団体との共創による地方創生拠点や相互利用空間などの拡充が期待されている。地方創生・国際交流会館5Fに整備されたフューチャーセンターは、国立大学としてこの「イノベーション・コモンズ」の先駆的な事例と言える。また、令和

3年度（2021）には、経産省の「地域の中核大学の産学融合拠点の整備事業」の採択を受けて、バイオイノベーション研究所が展開する石井キャンパスに企業とのオープンイノベーションを推進する新設の研究施設ヴォルテックス棟が整備されている。

今後も老朽化対応すべき施設整備に相まって新しい教育・研究・地域貢献機能の拡充を目指した整備を進めていくことが期待される。

参考資料

- 1) (一社) 国立大学協会：高等教育における国立大学の将来像（最終まとめ）、2018.1.26
- 2) 旺文社教育情報センター：国立大「運営費交付金“等”」の仕組みと狙い、2017.5
- 3) 田中秀明：国立大学法人の業績連動型交付金の現状と課題、広島大学高等教育研究開発センター、2022.3.31
- 4) 文部科学省：国立大学改革方針、2019.6.18

思い出の恩師

近藤 光男先生



近藤 明子

[平成15年(2003)建設工学科卒業、平成17年(2005)博士前期課程エコシステム工学専攻修了、平成20年(2008)博士後期課程エコシステム工学専攻修了]

「今日近藤先生、いつ研究室に戻っていらっしゃる？」が研究室での毎日の会話。いつもお忙しい、いつもみんな研究の質問も人生の相談もしたい。

近藤光男先生が徳島大学工学部に着任されたのが昭和56年(1981)4月のことです。近藤先生は、消費者行動や都市施設整備、人口移動や都市交通政策、さらには都市と地球環境問題など、都市計画分野のさまざまなご研究をされました。私は平成11年(1999)に入学し、地域計画や都市計画、まちづくりについて教えていただきました。我々が入学した当初は、1年生に少人数ゼミで先生方のご専門について学び、1年生なりの調査や分析を行って発表し議論する授業がありました。それは先生方お一方につき5名程度の学生が希望に応じ配属されるものです。私は授業で学んだ国土計画について近藤先生の下でもっと学んでみたいという大きな興味から、先生のゼミに配属していただきました。その後、3年生から修士課程、博士課程修了までの7年間に渡り近藤先生の研究室に所属し、大学生活全9年間、研究をはじめとして多くのことを学ばせていただきました。その後、教師と教え子に加え、現在四国大学の教員を務めている私にとって、教

員の大先輩として、教育・研究や社会活動などについても、先生のそのお姿を偉大過ぎる存在ながらお手本とさせていただいているところです。

近藤先生の授業では、都市計画に関わる知識や理論を丁寧に説明していただき、その適用方法や事例についてもわかりやすく解説してくださいるとともに、自らしっかりと『考える』ことの大切さを教わりました。同時に、テキストにはなかなか示されない計画に携わる立場となったときの心構えについても教えてくださり、学問を学びながら実践のことをしっかりと意識できる緊張感も味わいました。何より、授業の中で、私が目を輝かせて拝聴した内容は、先生がご経験なさった海外での生活や研究、人々との出会いや文化についてのお話しです。それは、とてもキラキラしていて、私のまちづくりに対する考えや人生観の根幹を形成するものとなりました。

研究室では、社会で求められる礼儀作法や品位が日常生活で身につくように、そのご指導は徹底されてきました。それは、我々教え子が周りにそして社会に可愛がられるようにという思いがおりになったのかも知れません。また、研究に取り組む際も、課題をしっかり深掘して様々な角度から観察できる視点を持つことやデータ解析、適切な手法の選択と適用、解決策を見出すために考えて考えて考えること、創造力を養うことの大切さを説いてくださいました。研究に関する質問にはいつも熱心にご対応いただきました。いつもお忙しい先生は、学内外のとても多くの会議のため研究室を留守にされることがあり、ご質問できるタイミングが限られていました。学生研究室に微かに聞こえてくる先生の足音とドアの開く音を合図に、走って質問に伺っていたことを覚えています。今思えば、会議でおつかれのところ、一息入れる暇もなく伺っていたのだと反省しています。研究室では、先生方や先輩、同級生、後輩との多くの出会いの機会、研究室が一丸となって取り組んだ様々

な出来事もありました。また、国内外の学会での発表の機会もたくさん与えてくださるなど、充実した楽しい日々を過ごさせてくださいました。社会に出た今、我々はこのとき教わったこと、先生方や先輩方に鍛えられた経験を糧にすることができています。

先生はいつもおっしゃいます。“You are happy, then I am happy.” 近藤先生は今も大きな背中をみせてくださっています。

浦川 和馬先生



原田 新一

[昭和43年(1968)機械工学科卒業、昭和45年(1970)修士課程機械工学専攻修了]

私は、昭和40年(1965)4月に徳島大学工学部機械工学科に入学しました。2年生の教養部時代に工学部機械工学科の各講座の紹介があったと思います。私は書道が趣味で、家の近くの書道の先生に師事していました。その師匠が、かつて国鉄の機関車の機関士でした。機関車やボイラーの事をよく話してくれまして熱関係に興味がありました。私が、3講座(熱講座)の浦川ですと温厚な紳士が自己紹介されました。この時が、浦川先生との最初の出会いでした。4年生の講座選択の時は、迷うことなく3講座の浦川先生の講座を選択しました。当時は4講座制でして、1講座が材料力学関係の稲田先生、2講座が水・流体力学関係の渡部先生、そして4講座が自動制御関係の添田先生でした。

浦川先生は、私の第一印象と正にぴったりの先生で、温厚な紳士であり情に厚い感じの人でした。

私は3年間お世話に成りましたが、怒られた記憶はありませんが、輪講等の授業では厳しく

指摘・指導されました。卒業研究テーマは「凝固を伴う金属と金型との熱伝達に関する考察」でありました。鉛を使った実験でしたが、3年程度継続した研究テーマでしたが、私が修士課程において修士論文を作成する段階になって、鉛の気化物を吸引すると将来に大きな問題となると新聞等で大々的に取り上げられました。学生の健康を考えてこのテーマは原田君の修士論文で終了としようと言われました。自身の研究よりも学生の健康が大事との判断で中止されました。将来を見越した判断をされたのだと思います。

先生は、温厚で情に厚い性格ですが、お酒は底抜けにお好きでした。普段は、車で通われているので、お酒は飲めませんが、熱講座全体の宴会にはバスで通われ、我々に宴会・2次会と御付き合い頂き、お酒がお好きなのだと実感しました。楽しいお酒でした。

私は、神戸製鋼所に入社面接で、研究していたテーマを生かして連続鋳造設備の設計を担当したいと申出ましたが、その部門は配属の要求が無いとのことで、圧延機設計に配属されました。入社4年目の昭和48年(1973)11月23日(勤労感謝の日)に私は結婚しましたが、主賓として徳島から神戸まで浦川先生は参列してくださいました。媒酌人が連続鋳造設計の課長でして以後は連続鋳造設備の設計に12年間従事しました。仕事変更の切掛けを造って戴いた事、および神戸まで来賓としてお運び頂いたこと感謝で一杯でした。その後、神戸製鋼所の連続鋳造設備の設計責任者となりました。しかしながら、昭和60年(1985)4月18日の浦川和馬先生のご逝去の報に驚愕しました。何故との思いでしたが、入院後21日目に肝ガンでお亡くなりになられたとのことでした。61歳の若さでした。ご冥福をお祈り申し上げましたが、5月25日の工学部葬には、業務の関係で参列できなかったことが心残りでなりません。

工学部100周年記念事業に当たり、実行委員会より「思い出の恩師」とのテーマを頂き、浦川先生を思い出し、思い出を書かせて頂きました。浦川先生のご冥福をお祈りするとともに工学部100周年記念事業の成功をお祈り申し上げます。

恩師 魚崎 泰弘先生



吉田 健

[応用化学システムコース]

魚崎泰弘先生は、平成21年（2009）4月に当時の化学応用工学科に助教として私が着任したときの、高圧化学研究室の教授をお務めでした。それから同じ講座で教育と研究に携わらせていただきましたが、平成27年（2015）12月に、誠に残念ながらご病気のため現役中の63歳でご逝去されました。6年半あまりではありませんでしたが、駆け出しの大学教員の時期に、教育と研究に対する姿勢をはじめ、多くのことを学ばせていただきました。

魚崎先生は、昭和27年（1952）に兵庫県でお生まれになり、昭和51年（1976）3月に名古屋工業大学工学部合成化学科をご卒業後、昭和57年（1982）7月に京都大学大学院理学研究科博士後期課程を修了され、同年12月に徳島大学工学部に助手としてご着任されました。その後同学部講師、助教授を経て、平成19年（2007）2月に教授に昇進されました。本学工学部の研究・教育・大学運営の各方面において、多大なる貢献をされてこられました。

魚崎先生は、高圧下の溶液化学がご専門でした。なかでも、高圧流体および超臨界流体中の誘電率、密度、溶解度等の基礎物性値の測定に取り組まれていました。私の着任以降は、超臨界流体の研究を基礎から応用へと拡大展開されておられました。超臨界流体を用いた薬剤の微粉化、ポリマーへの染料の含侵、高付加価値化合物の高次処理を指向した固・液・気平衡の高圧測定などを熱心に研究されてきました。

研究室での魚崎先生について印象に残ってい

ることに、卒業研究の学生指導のスタイルがあります。魚崎先生は、学生の一人ひとりに対して、教授として講義や校務でご多忙な中でも先生自ら手ほどきをされていました。これには、魚崎先生の実験装置には既製品がほとんどなく、魚崎先生ご自身で独自に組み立てられたり高圧測定用に改造されたりしたものばかりだったことがあります。装置そのものが独創性の源で、使い方は魚崎先生ご自身でしか教えようがない面がありました。もうひとつには、高圧科学の現象を生姿を文字通り自らの眼で観察しようとされ続けていたところがあったように思います。学会発表に使うデータは、学生の結果も必ずご自身で生データからすべて確認されていました。若い頃の研究では、実験的な観測が難しく過去の報告例がほとんどない、数百気圧までの高圧流体中の物性測定を、他の追従を許さない高精度で測定されてこられました。魚崎先生の精確なデータによって、種々の物性値の圧力依存性を記述する相関式の整合性や合理性が初めて検証可能となりました。それら初期のご研究は、私自身では論文でしか拝見したことはありませんが、緻密で粘り強い研究スタイルで成し遂げられてきたことは目に浮かびます。

魚崎先生の講義は学生には厳しいとの評判でした。物理化学系の科目のうち、熱力学の基礎や溶液化学の範囲を長年担当されていました。「学生には暗記力に頼るのではなく、物理的な背景を理解して深く考える力を身につけて欲しい」ということを常々口にされていました。試験の内容を拝見すると、確かに表面的な理解と暗記では歯が立たず、思考力と応用力が身についたか、まさに真の実力を試す問題を作成されていました。よく練った問題を、労を厭わず毎年更新されていました。学期末の授業アンケートはいまひとつだと直接お聞きしたことがあります。ご本人も承知のうえで、学生に媚びないことが学生のためですよ、と揺るがぬ理念をお持ちでした。全くの正論ですが、易きに流されないことに徹する大切さ、またその難しさは、いまだに日々感じています。及ばずながら引き継げればと思っております。

大学の管理運営面では、数多くの学内委員会委員長を務め、大学行政・運営に貢献してこられました。平成26年度（2014）からは、加療に専念された平成27年（2015）9月まで化学応用工学科学科長を務められ、学科の運営に献身的に尽くされました。学会関係では、日本高圧力学会や日本熱物性学会で多くの役職を歴任し、学会の運営ならびに発展・充実に大きく寄与されてこられました。平成26年（2018）11月に徳島で開催された第55回高圧討論会では実行委員長を務められ、魚崎先生が先頭に立って取り仕切ってください、無事盛会のうちに終えることができました。

志半ばでのご逝去は、大変に無念であられたことと思われまふ。ご逝去から早くも7年が経ちましたが、教わったこと、見習ったことの多くが今も支えになっています。感謝の念に堪えません。

イノベティブな 恩師 多田 修先生を偲んで



福井 萬壽夫

昭和46年（1971）、愛知県から徳島の地に降り立った私は27歳。多田先生が48歳。それから45年間、先生には上司として、時には談論の相手として、お付き合いして頂きました。

先生は「材料創製」の研究に取り組んでおられました。私の研究分野とは異なりますが、材料創製に関する物理的な解釈についてはしばしば議論をさせて頂きました。その際、先生から警抜なアイデアが次々と発想される事に感服しました。また、手作りを基本とした実験に対する情熱がすさまじく、「自作装置」は科学技術

にブレークスルーを引き起こす原動力と成りうる事を学びました。先生は本学工学部の「ものづくり教育」の基礎を築かれた主役の一人である、と言っても過言ではないと思っています。先生は教育に対して横溢するエネルギーをつぎ込んでおられました。その姿勢は学ぶ事が多く、“常に勉強弱者に寄り添う”をモットーとされ、鬱勃たる闘志で学生に赤誠を尽くしておられました。

先生は、淀み無く卒業生の名前や動静が詳細に口述されるなど、驚愕の記憶力を持っておられました。ここでも、社会的弱者となってしまった卒業生を寵遇されておられました。気宇壮大な人格者である事に間違いありません。

先生は桎梏の無い研究室作りをされ、“夫々の能力を活かす”事を基本にされ、研究テーマ設定を含めて自由に研究をさせて頂きました。先生のイノベティブな発想なしにはこのような環境は作られなかったと思います。

10年間以上、ランチをご一緒させて頂きました。その際に、教育、経済、政治、社会、文化、科学、技術など話題は多様で尽きる事はありませんでした。無聊な時間は無く、「智」を整えさせて頂いたと思っています。

先生は服装に恬淡で、事務的な仕事を蛇蝎のごとく嫌っていましたので、異端の教授と見られがちでした。しかし、私にとっては、イノベティブで、勉強弱者に優しく、才幹に優れ、師表として仰ぐ教授でした。

晩年は、最愛の人に先立たれ、孤影悄然とされておられましたが、93歳で奥様の待つ黄泉の国へ行かれました。先生と丁々発止の談論ができなくなった事は残念ですが、先生から学んだ事を大切にして、今後も少ない人生を歩んで行きたいと思います。天稟の才を持たれた恩師多田先生、長い間ありがとうございました。

“残された熟柿ぽつんと一つ（山頭火）”

恩師 青江 順一先生



泓田 正雄

[平成5年(1993) 知能情報工学科卒業]

青江先生は、私にとって、大学4年生から博士課程の学生時代の指導教員であり、徳島大学で勤務してからの上司になります。先生が退職される平成28年(2016)3月31日までの約24年間、大学でさまざまなことを指導していただきました。その間、一貫して本学にて教育、研究に従事されていました。

先生の研究は、コンパイラ生成、パターンマッチング、辞書検索、情報検索、自然言語処理、知識構築、完成情報処理、音声対話理解、医療情報処理、マンマシンインタフェース、高齢者支援など、多岐にわたります。多くの解説記事も執筆され、平成4年(1992)には情報処理学会のBest Author賞を受賞されています。辞書検索の研究においては、高速でコンパクトな「ダブル配列法」を平成元年(1989)に考案され、現在でも高速なキー検索手法として知られています。このダブル配列は、世界中の書籍の中で紹介されており、さらに多くの開発者によりライブラリが公開され、現在でもさまざまなアプリケーションやシステムの中で使用されています。自然言語処理の研究におきましては、コンピュータに言葉を理解させることを目標に、分野連想語、感性理解、知識獲得などの基礎的な研究から、言葉の意味、概念、感性などの知識を用いた応用研究であるメール要約、テキスト分類、対話理解など、さまざまな研究をおこなっておりました。昭和55年(1980)ごろからジャストシステムの仮名漢字変換ATOKの初期開発にも関わられておりました。

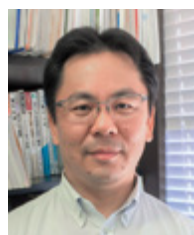
平成14年(2002)1月には、大学発ベンチャー企業である「言語理解研究所」を設立され、研究成果の事業化をおこなっており、様々な社会貢献をされています。

平成23年(2011)には「人間の心情と意図を理解する人工頭脳エンジンの開発」において、第9回産学官連携功労者表彰(文部大臣賞)も受賞されています。先生は知識、経験、アイデアの宝庫であり、研究の話をするときは、いつも話題が尽きず、日が変わるまで話し込むことも何度もありました。先生からのメールは夜遅くだったり、朝早くだったりして、いつ寝ているのかわからないほど、いつも研究に没頭されておられました。

教育面では、いつも笑いのある楽しい講義で、学生からの人気は絶大でした。海外からの留学生を積極的に受け入れ、メキシコ、エジプト、中国、韓国、ブータンなどからの留学生を指導されています。先生はいつも熱心に指導され、とても面倒見の良いため、留学生に「日本でのお父さん」と言われたこともありました。また、先生のもとで博士課程を修了した学生は48名にも上り、大学や企業の研究機関などで活躍する人材を社会に送り出しています。

先生は、大学を退職後も引き続き言語理解研究所で勤務されております。私も兼務しているのですが、今でもメールは時間を問わず送信されており、いつ寝ているのかわからない生活をされています。今でも多くのことを学ばせていただいています。ここに謹んで感謝の意を表し、今後のご健康を心よりお祈りいたします。

恩師 福井 萬壽夫先生の思い出



釜野 勝

[平成10年（1998）光応用工学科卒業]

福井先生より「かまちゃん」と呼ばれると、徳島大学に入学して30年が経とうとしている今でも「はいっ！」とオウム返しのように返事してしまいます。

徳島大学工学部創立100周年おめでとうございます。私が光応用工学科の1期生として徳島大学工学部に入学したのは平成6年（1994）4月のことです。日本全国の大学で『光』を主にした学科は、この徳島大学のみで、全世界で青色発光ダイオードが注目されだしたところです。福井先生は光応用工学科を開設されたときの中心的教員であり、ご担当しておられました半導体物性関連の講義は、全て最新の書籍を中心に進めてくださりました。しかし、当時の私にとっては衝撃を受けるほど難しすぎた内容であったことを覚えております。ただ、福井先生の講義にはすごく迫力があり、必死に食らいつきながら聴講しました。講義後にはなぜかわかったような気持ちになり、毎回の授業が充実していました。講義内容以外でも福井先生に質問に伺ったことがあります。このとき、福井先生は非常にお忙しい中時間を割いていただき、図書館でその内容に関する書籍までも探してくださいました。さらには、その内容に関する専門の先生をもご紹介くださいました。当時の私はちょっとしただけの質問のつもりだったのですが、非常に親身になって接していただき、感銘を受けました。何事に対しても全力投球で向かってこられます。研究や勉学に関して中途半端な受け答えでは一蹴されます。福井先生が担任をされた時

は、クラス全員に対して個人懇談を行ってくれました。大学に入学してからの成績のこと、課外活動や趣味の話をしました。福井先生の学生時代の話もあり、バイク好きで実際に乗っていたこと、手塚治虫さんのファンであったことなど、様々なお話をしていただきました。

今の光応用棟が完成したのは私が4年生になったときです。この光応用棟で博士後期課程修了までの6年間を過ごすことになりました。当時の福井研究室では電気電子工学科の大学院生も多く所属しており、先輩方も非常に優しく接していただきました。福井先生より、「かまちゃん」と呼ばれ出したのもこのころからです。当時の研究内容は半導体材料やプラズモンに関する研究が主にされていました。光関係でレーザーを用いる実験はもちろんのこと、シミュレーションを主体とするテーマもありました。実験で必要になる装置の多くは、榎原技官や工学部内にある工場を頼りながら手作りしました。毎週土曜日の午後に実施していた「週レポ（4年生は「月レポ」）」では、研究の進捗状況をまとめて発表する機会がありました。「輪講」という講座（講義）では研究室内の学生で担当を決め、英語論文や書物を授業形態で発表する経験も積むことができました。発表前には必死になって実験室にこもり研究を進めたり、輪講の授業準備を行なったりしたものいい思い出です。その際にも福井先生はもちろんのこと、原口先生、岡本先生、研究室の先輩や同僚に数えきれないほどのご指導をいただきました。週レポ後には、先輩や同級生と一緒に食事などにも行くことが習慣になっていました。ただ、福井先生はこの時間帯にマラソンに出発されていました…（笑）。日課のようにマラソンを行う、これが福井先生の講義や元気の源であると考えています。その他、夏休みの講座旅行、ボーリング大会、BBQ、学会発表など、多くのイベントや交流がありました。福井先生はもちろん原口先生や岡本先生、榎原技官も一緒にくださった講座旅行では、研究室内で車を出し合い皆が同乗し、旅行先の名所などを巡りました。研究の話はもちろんのこと、研究以外でも親睦を図り

ました。大学院博士課程修了の際に、6年間通い続けた研究室に足を運ばない数日、心に「ぼっかり」穴が開いたような気がしました。研究室で過ごした日々がいかに充実していたのかを感じておりました。

大学院を修了してからも徳島県内で就職したこともあり、研究室に出入りし近況の報告を行っていました。さすがに、研究室を離れ20年もの間がありますと、様々なところが変わっています。しかし、研究室に戻ると、今でも大学院当時の学生だった気持ちになります。福井先生、原口先生、岡本先生も笑顔で迎えてくれることが非常にうれしく思っています。「かまちゃん」と呼ばれますと、「はいっ!」と返事します。

最後になりましたが、母校である徳島大学が今後ますますご発展され、世界で活躍できる人材を輩出できる大学であることを心より祈念いたします。



福井先生とツーショット!

思い出の恩師 辻 明彦先生



赤松 徹也

[平成4年(1992)3月 生物工学科卒業]

昭和63年(1988)4月、工学部に新設された生物工学科に一期生として入学した当時(合格通知は「化学応用B」でした)、まだ専任教員は着任していなかったようで、入学直後は太田工学部長が対応されていました。そのような中、最初にお会いしたのが金品昌志教授(生物機能工学講座、物理化学系科目担当)で、大柄な体格とは裏腹に柔和なお人柄で優しく親身に指導いただきました。翌年には工学部初の女性教授となられた松田佳子先生(生物反応工学講座、生化学系科目担当)が着任され、厳しくも温かく指導いただきました。金品・松田両先生は生物工学科の象徴的存在で、恩師であることには変わりはありません。多才な教官陣で皆々に思い出深いですが、中でも私自身のその後の進路に大きく影響を受けたのが、平成元年(1989)9月に松田研究室の助教授に着任された辻明彦先生でした。辻先生には3年生の「生体高分子化学」の講義から教えていただくことになり、その最初の講義で、お調子者グループが教室の後ろで私語をしており、辻先生は眼光鋭く、「聴きたくないなら出て行って構わんよ」と一蹴し、教室中に緊張感が張り詰めたことを思い出します。先生の講義はその後の「酵素工学」も含めて、小さな字で黑板中に板書をし、膨大な情報量の説明もされ、黑板を消してはまた繰り返す、という感じで大変でしたが、不思議と苦にならず、他のどの科目よりも集中して取組んだように思います。試験の結果がどうだったかはさておき……。同期の中には様々

な書込みをした当時の教科書を今も会社のデスクに置き、行き詰まった際に見返しては知恵を絞ることもあるようです。先生の講義を通して、生命科学に対する興味は日増しに高まり、学生実習での酵素活性の測定や電気泳動等も通して、卒業研究は辻先生のもとで行いたいと考えるようになりました。研究室配属は、当時は生物機能工学講座、生物反応工学講座、各々2つの研究室、計4研究室から選択することになり、希望した松田研究室に配属されました。配属後は各教員のどの研究テーマで卒業研究を行うか決めることになり、辻先生が取り組まれていた「リソソーム病酵素補充療法の開発」に関するテーマに興味を持ち、辻先生の下で研究生活をスタートしました。先生は実験の準備から片付けに至る全てにおいて自ら範を示して指導され、そのスタイルは要職を歴任され多忙を極める中でも退職されるまで終始貫かれていました。さて、卒業研究では結果的に自分の希望とはやや違う形になりますが、酵素補充療法に用いる血清 α -マクログロブリン(α M)に関するテーマになりました。ラットの血清から α Mを各種クロマトグラフィーで精製し、ウサギに免疫して抗体を作製します。 α Mは生体内で特徴的なトラッピング機構により酵素を阻害(分子内の凹凸配列を酵素が切断すると構造変化を起こし、酵素をカゴの中に閉込める)し、肝細胞に取込まれリソソームで分解されますが、生体内の標的酵素は不明でした。この分解を阻害したラットの肝臓からリソソーム含有画分を調製し、酵素活性と α M特異抗体により、 α M-酵素複合体を精製し、酵素の基質特異性や阻害剤プロフィール等を解析して標的酵素候補を絞り込み、最終的に世界で初めて標的酵素の1つが、肥満細胞が脱顆粒により放出するトリプターゼであることを同定しました。卒業論文は今と違い、まだワープロの時代で、印刷した原稿のチェックをお願いすると、翌朝、机の上に真っ赤に修正されているだけでなく、手書きでぎっしり書かれた新しい原稿まで置かれていました。皆、先生

のペースに追いつこうと必死でワープロに入力した日々でした。図表の作成も手作業ですから、レタリングシートで文字もシンボルや線も、ゲルの写真も全て貼り付ける、非常に手間がかかり、失敗すると一からやり直しということもしばしばでしたが、そういう指導もきめ細やかでした。ご家族のご病気等で大変な時も本当に親身に指導いただきました。前述の研究成果は研究室の学生(M1)で初めて学会発表させていただき、学術誌にも発表いただきました。指導いただいた実験手技はもとより、取組む姿勢も全てが私の財産であり、原点です。この経験から大学院博士後期課程にも進学し、大学教員としての現在に繋がっています。その辻先生は退職後に故郷長崎へ戻られ、原爆関連のボランティア活動や趣味にと、益々精力的に活動されていた矢先、令和4年(2022)4月25日に学生時代からの趣味の登山中の事故で亡くなりました。急逝の知らせが届いた時は気が動転し、動揺しました。常に準備万端、熟知の上にも綿密な計画を立てて行動される先生だけに未だに信じられず、残念でなりません。先生からの教えを胸にこれからの大学教員としての職責を果たしていきたいと思えます。



完成直後の化生棟研究室にて。前列左端が辻先生。



卒業研究開始時の間借りした医学部生化学実習室にて。後列左から松田先生、辻先生、長宗先生。

旧教職員と卒業生からのメッセージ

旧教職員からのメッセージ

私の思い出



共通講座

長町 重昭

徳島大学工学部75年史には、創立50周年記念式典・祝賀会が昭和48年（1973）5月に行われた、と書いてあります。ちょうどこの年の4月に徳島大学工学部に助手として赴任しましたので、記念式典のことなど少しは覚えていてもいいはずなのですが、残念ながらまったく思い出せません。仕方がありませんので、思い出せるものを少し書いてみることにします。

徳島大学に就職した頃は、工学部の共通講座というところに所属していましたが、この講座の入るべき建物が建設中で、機械工学科の建物の中に間借りしておりました。間借り生活の悲しさで、研究室は同じ時期に就職した澤下教親先生と共同使用でした。

徳島大学の数学の先生方は仲が良く、教育学部、教養部、工学部の先生方が毎週集まって輪講をしていました。いろいろな分野の研究者が一つの本を読むのですから、分野の違う人は大変です。でも当時はみんな「数学だから、ちょっと勉強すればわかるはず」というような学生気質をまだ持っていて、楽しくやっていました。輪講をやっていてよかったことは、皆さんとすぐに打ち解けることができたことで、伊東由文先生とhyperfunctionの共同研究することになりました。当時数学会の年会では、東京大学出身の秀才たちによる佐藤のhyperfunction

についての発表や講演がたくさんあって、ぜひ私もいつかはやってみたく思っていたものでした。

共同研究といえば、教育学部の小林美治先生と行ったのが刺激的でした。毎年数学の先生方全員で忘年会を行っていました。2次会で飲みなおすのが常で、酔っぱらった勢いでまとまったのが、素粒子の超対称性やひも理論の超対称性を記述するのに使われるGrassmann代数に関する共同研究でした。

このように楽しくて有意義だった輪講もほどなく終わってしまいました。原因はよくわかりませんが、教育学部が総合科学部に変わったり、短期大学部が廃止になったり、大学法人化されたりと環境が目まぐるしく変わったことかもしれません。悲しいことに、学生気分でも数学をやるような環境は完全に破壊されてしまったようです。でも、忘年会のほうはまだ続いているらしく、コロナが終息してお呼びがかかるのを心待ちにしています。

学部長を勤めた平成3年（1991）から7年を回顧して



徳島大学名誉教授

河野 清

工学部出身の添田学長と沖津・田中・太田の3先生の学部長時代のご尽力により平成3年（1991）4月に大学院工学研究科に後期博士課程が設置され、社会人17名、外国人5名を含む31名の入学生を迎え嬉しいスタートとなりました。

在任中の一番の思い出は、工業短期大学部を

学部の夜間主コースへ移行し、全国の工学部の中で真っ先に光応用工学科が新設できたことです。文部省専門教育課を数回訪問し学部の将来構想を相談し、新学科については最終段階の平成4年（1992）6月15日に強力な推進役の福井教授、仁木島事務長と上京して内容を説明して手答えをもちました。順調な実現は、本部事務局、工学部・短大の教職員の皆様のご協力の賜物でした。

大学紛争のあった昭和44年（1969）の秋から教授定員と同数の助講会員が参加した拡大教授会でこれまで運営されてきました。将来構想委員会で教授会の在り方を検討して助講会委員長へ学部長から構成員の検討を申し入れ、平成3年（1991）は見送られましたが、仁木委員長の時、平成5年（1993）1月再度申入れを行い、議事録の公開と要望時教官会の開催を条件とした承の回答があり、漸く本来の専任教授会へ戻り安堵しました。

外国の大学との学術交流にも力を注ぎました。オークランド大学との協定書更新時と医療工学科新設の希望があったマレーシア工科大学とは医学部も加わり、平成5年（1993）11月下旬に武田学長、齋藤医学部長らと両大学を訪問して大学間での国際学術交流協定が結ばれました。フロリダアトランチック大学と総合科学部が参加し、学長の指名で私と木内教授が平成7年（1995）3月下旬に渡米して、Catanese学長から協定書にサインをいただき、工学部建設工学科で阪神淡路大震災に関し特別講演を行いました。

当時、科研費の中に、「大学間国際協力研究（3年継続）」があり、オークランド大学へ留学経験がある村上理一教授の提案で研究代表者となり両大学の材料関係研究者十数名が加わって平成2年（1990）に先進材料の開発、特性評価及び応用の課題で申請して採択され、平成6年（1994）には機能性材料の課題で再び採択されたので、6年間に渡る極めて活発な学術交流と研究討論ができ、これがAMDPの国際会議につながりました。

平成7年（1995）1月17日にM7.2の阪神・

淡路大震災が発生し、甚大な被害をもたらしました。建設工学科の教官を主に卒業生が加わり団長となって2月に淡路島に限定して被害の実態を調査し、4月に工学部から調査報告書を出版したことが忘れられません。

最後に理工学部の一層の充実とご発展並びに皆様のますますのご活躍を祈念致します。

工学部変遷の思い出



徳島大学名誉教授
機械工学科
福富 純一郎

100年、一世紀の長きに渡り、高等教育研究機関として社会に対する役割を果たし続けてこられたこと、また、この間の卒業生の絶え間ないご活躍に対して心から工学部100周年をお慶び申し上げます。

私は昭和46年（1971）に工学部機械工学科助手として奉職し、当時の機械2講座で渡部孝教授、中瀬敬之助教授のご指導を賜り、その後、平成26年（2014）までの43年間に渡り工学部でお世話になりました。この間、工学部は様々な変革を重ねていきましたが、足早にたどってみたいと思います。

当初は大学進学率の急激な上昇と社会の高度工学人材要望が相まって、新学科や新講座が次々に増設され、工学部として多くの学生を抱えるようになっていく時代でした。それに伴ってキャンパスの再開発が進み、講義棟や各学科の新棟の建設ラッシュとなりました。キャンパスに余裕がなくスクラップ&ビルトで順次高層化されていきました。勤務を始めた時は、まだ未舗装の通りや木造の校舎が残っていましたが、時代とともにキャンパスは見違えるように美しく変貌していきました。伝統の高専時代の重厚な校門は、工学部キャンパスの西の門として、北側の食堂および工業会館前の桜並木は古

木の落ち着いた雰囲気醸し、春には桜の通り抜けて華やかに新入生を迎えていました。また、講義棟西面の直径3mの大時計がLEDで彩られ、それに向かう西側からの通りはシンボルストリートとしてキャンパスを代表する新しいスポットとなっていました。

工学部拡張の次には、小講座から大講座制に改組し、それをベースに博士課程設置への取組みが始まりました。博士課程の設置は、学術研究レベルの高さを示すものとして重要であったばかりでなく、大学の運営費や大学院を担当する教員の給与上の違いとしても現れるため、工学部にとって悲願でした。執行部の先生方、教職員の多大な努力により、○合資格の設置審をクリアし平成3年（1991）に博士後期課程が設置されました。

次には最も大きい変革である法人化の波がやってきて、平成16年（2004）に国立大学法人徳島大学となりました。大学が自由度を持って教育研究できる面も増えましたが、一方で大学の運営費交付金が毎年1%ずつ減ることになり、人件費を抑えながら対応していかざるを得ない状況になりました。若手の研究者をじっくりと育てることが難しい状況にもなりました。私が勤務を始めた時は、まだ社会の進展もゆっくりで、教育研究者として成長するのに随分と時間を与えてもらえたと思います。しかし、限られた短い期間に多くの成果を求められることになり、若い人にとっては大変な時代になったと感じました。また、法人化で自己点検評価を行うことが必要となり、大学のすべての活動が評価の対象となっていました。教育研究法人としての認証評価、学生の質保証の評価、授業に対する学生の評価、教員の業績評価、工学部や学科の取組みに対する外部評価など評価疲れもでるほどに評価一辺倒になり、それに対応するための資料の作成や準備で多くの時間が割かれるようになり、大学は極めて忙しい時代に入ってしまったように思います。

学生の変遷についても触れてみたいと思います。助手として任用された当時は、研究室では優秀で自立心の高い学生に囲まれ、アルバイト

をする学生も少なく、研究を通じて一緒に過ごす時間が長く研究室一丸となった活動も頻繁に行われました。退職前の学生は授業にも一生懸命参加し、真面目になったと感じましたが、その一方で、経済的理由でアルバイトをしなくてはいけないし、大学の授業も効率よくこなしていきたい、就職活動のために部活動もやっておきたい。そのために自由時間を減らしながら多忙であり余裕のない学生生活を送っているように感じました。前述の教職員の多忙さも含め、負荷が重なりすぎると積極的に考え動く活力や新しい発想に結び付かないことがあり、達成したい目標に対して優先順位を考え、より良い活動を選ぶ方向性も検討する必要があると感じました。

最後になりますが、ここ数年で工学部・大学院は新しい教育研究組織として理工学部、創成科学研究科理工学専攻、大学院社会産業理工学研究部への改組を済ませました。短期間で極めて大きな変革で、理工学部教職員、執行部の皆様の莫大な労力とエネルギーはいかばかりだったかと存じます。今後はさらなる少子化に伴う学生数の減少に対応しながら、個性がきらりと光る学部・大学院として特徴を出され、地域に根差す大学としてますます発展を続けられますよう祈念いたします。

徳島大学の学生たち



京都大学大学院
工学研究科
外輪 健一郎

学生時代にサークル活動の一環で徳島を訪れたことがある。徳島大学の学生が主催した合宿イベントに参加するため、中四国の各大学からやってきた多くの学生仲間に出会うことができた。徳島大学の学生は幹事としてイベントを見事に運営し、また楽しく盛り上げていた。そ

のときに日和佐駅で撮影した記念写真は今でも残っている。学生時代の楽しい思い出である。

それから約15年後、徳島大学に講師として赴任することとなった。徳島大学の学生のイメージはその合宿のときに幹事として活躍した個性豊かで活動的な面々のイメージであった。実際に学生と一緒に研究室生活が始まると本当に元気のよい学生が多いという印象であった。赴任当初から教授になるまでは川城克博先生の研究室、その後杉山茂先生の研究室に所属したが、両先生から自由にのびのびと研究する環境を与えていただいたこともあり、学生とともに充実した教員生活を送ることができた。

活動的な学生に誘われて初めて体験したことが2つある。1つは阿波踊りである。最初はどのようにしてよいのかわからず、運動神経も悪いので遠慮していたが、参加した途端すぐに夢中になってしまった。私が参加したのは学科の連であった。学生が中心になって練習を主導し、全国から集まる観客の前で踊りを披露するまでの過程を毎年見ていたが、いつも大変頼もしく感じられた。

もう1つは徳島マラソンへの出場である。40代後半からの初挑戦だったことに加え普段から運動不足であったので家族からは随分と心配されたが、研究室の学生に背中を押され思い切って出場することになった。トレーニングを始めた当初は100mも走ることができずショックだったが、地道な練習によって本番では学生に交じって無事ゴールできた。その感動は今でも覚えている。

工学部は創立以来100周年を迎えるが、その名称や組織は時代とともに変わっていくと思う。形は変わるとも学生が澁刺と活躍する学び舎でありつづけることを願ってやまない。

「学習の手引き」と 「学びの技：はじめの一步」



徳島大学名誉教授
電気電子工学科
川上 博

工学部創立100周年記念誌に「OB教員からのメッセージ」として何か思い出話をという案内を橋爪正樹先生から頂いた。私は、電気工学科の卒業生でもあり、教員でもあったのだからぜひひとの事のようにもあつた。ただ退職して10年余りが過ぎ、あらかた記憶も消えかかっている。考えているうちに何か教育関連で思い出してみようとターゲットを定めた。時期的には、学科が倍増し、大学院ができ、そして国立大学が法人になったという大学は激変の時代であった。教育・学習にも変わったものとそうでないものがあつたに違いない。身近なところでそれを探してみようと思った。

冊子「学習の手引き」

昭和59年（1984）当時、電気工学科と電子工学科は何かにつけて電気系学科として共同で運営されていた。教育システムの見直しもそうであった。1年がかりで助教授の先生方が見直し案を作成し、教室会議で認めて頂く方式で進められた。カリキュラム改正の目的は、学生の皆さんが電気系基礎学力を確実に修得しそれらを技術に応用する能力を身につけること等であった。加えて、両学科の全専門科目を整理し、科目間の内容の重複を少なくし、講義担当も、講座と関係なく適任である教員が行うなどかなり大胆な変更を行った。

学習過程の可視化

これらの検討結果を見える化するため、専門科目を分野別・年次順にマトリックス表示した「専門科目表（年次配列）」と、分野毎に科目間

の受講順序を示した「授業科目の関連図」を用意し、4年間で習う専門科目の全体が俯瞰できるようにした。こうして修学上のルールや研究室紹介などを一緒にまとめ、40ページたらずの冊子「学びの手引き」ができた。毎年、新入生のオリエンテーション時に工学部「履修の手引き」の補助資料として活用した。

専門科目のカリキュラム構成としては、単に初年次からの「積み上げ方式」のように見える。しかし、上記2つの図を使って専門科目表（年次配列）の任意の科目を指定し、そこに至る学びの経路を探索して自分の進路を模擬することができる。これを使って、例えば卒業研究着手までの学習計画を立てることもできた。

変わらなかったもの

1年生の専門基礎科目としてはあまり議論もされずに「電磁気学」と「回路理論」が指定されている。これは恐らくもっと昔からのカリキュラムの踏襲であったのだろう。「電磁気学（理学系）」と「回路理論（工学系）」の授業を並走させる。これが電気系学科の講義の出発点となっている。学習環境がいかに変わろうとも最初に学ぶ科目は変わらないという堅牢さを感じられて興味深い。具体的な授業に関しては、どの授業も先生方は楽しそうに生き生きとした講義を展開して下さいました。これは恐らく各自許される範囲で自由にシラバスを拡張しご自分の研究分野から講義ネタを作ってご披露いただいていたからではないかと推察している。

冊子「学びの技：はじめの一步」

もう一つ思い出しておきたい冊子が「学びの技：はじめの一步」である。21世紀が始まった平成13年（2001）頃、工学部では全国17大学と一緒に「新工学教育プログラム」を遂行していた。この冊子は工学部全学科で始めた初年次の導入教育・創成科目のテキストとして編集した。学びのしくみ、学びの技法、学びの倫理、学びの環境管理などの章があり、それまでの工学部の教科書にはなかった学びの設計ツールが述べられている。このプログラムでは、学生さ

んには能動的に学ぶアクティブ・ラーニングが、また、先生方には教育力を向上させるファカルティ・ディベロップメント（FD）の活動が推奨された。

さて、以上見たように教育システムの形態は10～20年程度の周期で見直され、改善されてきた。他方、工学倫理や危機管理等の諸問題は多分野に跨る大きな課題であり、今後の皆さんの活躍を期待したい。

情報工学科 創立以来の思い出



徳島大学名誉教授
知能情報工学科
矢野 米雄

新学科学生の思い出

昭和49年（1974）に徳島大学工学部に赴任しました。前年の4月に情報工学科が新設され、2年生が一期生で最高学年でした。情報工学科の建物がなく、電子工学科原田尚文先生の研究室に間借りです。20代で若かったので、学生とよく食事や飲みに行ったことが懐かしい思い出です。

新学科の最初の学年は勉強よりも、他に興味を持つ多様な学生が多かったです。そのお陰か情報一期生は多方面で活躍していると聞いております。

研究の思い出

昭和54年（1979）にCAI（計算機援用教育）として世界をリードしていたイリノイ大学に留学しました。私費留学でしたが基本給は工学部から頂いたので助かりました。海外での研究生生活で私の研究感が一変しました。インターネットのない時代での大規模なネット型教育システムPLATOがあり、その影響で教育工学が生涯の研究テーマとなりました。平成9年（1997）

には文部省短期在外研究員として米国とカナダに再度留学させて頂きました。工学部のご配慮で2度も海外留学できたことに感謝しています。

最初の留学帰国後から講演・解説記事の依頼が増え、東京への出張が多くなり、研究活動が全国さらに世界へと広がり始めました。教育工学の分野から遠隔教育、e-Learning、オンライン学習・教育へと変遷し今日に至っていますが、それらの流れの中で多少なりとも世の中に貢献できたのも、若い時代に良い研究環境に恵まれたお陰です。

工学部の思い出

平成2年（1990）に教授になり学内の仕事にも多く関わるようになりました。森吉孝学部長の元で自己点検・評価委員会委員長として、学生による授業評価アンケートと外部評価委員会を実施しました。先行事例が見あたらず、アンケートの質問、選択肢をどのようにするか、また外部評価委員の人選をどうするかに苦勞しました。評価委員は各学科より各分野で活躍されている立派な先生を推薦して頂き、大いに助かりました。工学部でシラバスを導入しました。今では一般的ですが、当時理解し難いものでした。

川上博学部長の元で評議員として、第1回科学体験フェスティバルを開催しました。阿波銀行、四国電力のご協賛、さらに四国電力からは大型クレーン車を出展して頂きました。四国放送と交渉し、前もってテレビで体験ブースの様子をスタジオから生放送して頂きました。当日工学部キャンパスに予想外の多くの保護者と児童、生徒さんが参加してくれました。同時開催のミニ講座では河村保彦助教授（現学長）が実物を示しての“光る物質”の講演でした。今でも印象に残っているお話です。フェスの準備等では教職員の皆さんにはご負担をおかけし、大変お世話になりました。当初は開催できるか危惧しましたが、今も続くイベントに育っており喜んでいきます。

学部長の時には、日亜特別奨学生制度を始めました。近藤光男教授には詳細な実施計画を立てて頂きました。日亜化学工業の小川英治社長

（現会長）にお会いし、ご快諾して頂いたことは印象に残っています。余談ですが、“眉山”の映画ロケが工学部でありました。電気棟の屋上で松嶋菜々子さん、大沢たかおさんと撮影の合間に雑談をしたことは楽しい思い出です。

法人化と部局化

バブル崩壊後不況の時代になり、大学の法人化と組織改革の波を経験しました。法人化後に学部の部局化が全国的に進められ、常三島キャンパスでも工学部と総合科学部との部局化を試みましたが、合併は成功せず単独で部局化を行いました。工学部内に研究部、教育部、工学部そして移行前の大学院研究科と複雑な組織になりました。部局化前後の変化の時は大変でしたが、今思い返せば工学部・工学研究科の改変、発展の時期に関わったことは懐かしい思い出です。

徳島大学に赴任して以来、定年退職まで国際・国内学会の会長、理事、研究委員長等を経験し、国際会議・全国大会も工学部で開催しました。文科省、総務省、JST等の専門委員・評価委員も経験させて頂きました。徳島大学の工学部での教員として大学と社会に私なりに貢献できたと思っています。私が指導・主査した20余名の博士取得者、10数名の留学生をはじめ、多くの教え子達もそれぞれの場所で個性を生かし、活躍している様子を見聞きますと、教師冥利に尽きます。

あつという間の37年でした。皆さんに感謝しつつ、新しい学部とともに今後の理工学部のさらなるご発展を願って筆を置きます。

思い起こせば、出会いから



光応用工学科
栞原 稔

創立100周年記念誌に“旧教職員からのメッ

セージ”として、原口雅宣先生、岡本敏弘先生の各々から依頼を受けた。光応用工学科設立以前からの繋がりもあり、承諾することにした。

振り返れば、私は大学に採用されてから当学科での退職まで約半世紀の時を費やしてきた。その中で、先ず思い起こすのは平成6年（1994）4月に当学科の一期生を迎え、催された新入生歓迎会である。周りの学生と会話も進み、この学科を選んだ理由を聞かせてもらったところ、光応用工学科と言う名称が当時としては珍しく、それに興味を引かれて入学してきたという者が多数見られたことである。

更に、一年生から演習科目などで関わる事が多くなるので、顔合わせには丁度良い機会だったと記憶している。“名称に引かれて”と言う彼らが、卒業までにどう成長していくのか楽しみと期待が高まるのを覚えた。また初期の頃、1年生で実施する合宿研修において、テーマに従いグループで簡単な工作をし、それについてポスター発表をするというプログラムがあった。これはクラスやスタッフに馴染み、物作りを楽しむ良い機会であったと思う。

技術職員として、主に実験装置の製作、保守を担当していたので、彼らが光学の基礎を身につけ、各研究室に配属されるころから深く関わることになる。実験班の学生には装置ごとに個別指導を行っていた。実験装置の仕様・目的に合わせ、できる限り学生と共に製作し、習熟するまで質疑を交えながらしっかりと伝えるよう心掛けていた。

ある日、ある学生の専用装置において、手元に神経を集中して細部を組立て中に、その箇所と私の顔面との間に覗き込もうとして頭を突っ込んで来たので、ぶつかりそうになるという出来事があった。自分の目で確かめようとする学生が久しく居なかった為、見落としていた事である。これ以後、この出来事も注意事項の一例として「見辛かった場合は、その旨を口に出して言うように！」と説明に付け加えるようになった。また、学生の練度によっては、横で説明をしながら直接本人に作業を委ねることも取り入れた。組立て後の確認作業に一手間増えた

が、学生自身が意味を理解し単独で安全作業が行えるよう意識を変えた。

今振り返れば、彼らの行動を観察しながら、些細な事でも見逃さず、積み重ねることで解決出来ることを折々に感じ、教えてもきた。また、自力で問題の解決策が見出せないときは視点を変えると見えてくることも伝えてきた。更に彼らが積み重ねた経験で答えが見出せない時は、立場に拘らず相談が気楽にできるよう接していたと思う。

電子工学科の小林邦博先生、川上博先生、服部敦美先生、田村宏文技術職員より基礎から教わり、光応用工学科に移動してからは福井萬壽夫先生、西岡一水先生から更に多くのことを学ばせて戴いた。御蔭をもって、教わったことを自分自身で理解を深め業務に生かし、次の世代に伝えることもできたと私自身は考えている。これまでに出会えた方々全てに心より感謝致します。

素晴らしき徳大生工時代



大阪大学教授・総長補佐
生物工学科
大政 健史

私の教授としての第一歩は、平成22年（2010）5月の徳島大学工学部への赴任となります。以降、平成27年（2015）3月迄在籍し、引き続き客員教授として令和3年（2021）3月迄お世話になりました。教授としての始まりの地であり、四国出身の私にとっては、地元とも言え、とても感慨深い赴任でした。生物工学科は、全国の工学系の分野における生物工学分野の先駆けとして設立され、現在ではさらに発展して生物資源産業学部にまで昇格しています。生物工学科に赴任した際の第一印象は実に素晴らしいサポート体制としっかりとした教育体制でした。JABEE認定プログラムに参加することも初め

てであり、大変貴重な経験をさせて頂きました。徳島大学においては、全学の学生委員会副委員長（工学部学生委員会委員長）や科学体験フェスティバルの責任者など、様々な役割も経験しました。最後に生物資源産業学部の立ち上げも少しだけお手伝いして離れることになり、心残りでした。

徳島大学の学生の印象は、大変アクティブな、前向きな学生さんが多いと感じています。地元密着型の学生さんもいますが、地元から日本・世界にはばたくチャレンジ精神あふれる学生にも多数接してきました。現在、自身の研究では、36企業、5大学、2国研、3団体からなる次世代バイオ医薬品製造技術研究組合で、AMEDの2つの大型プロジェクトのプロジェクトリーダーを務めております。このプロジェクトも徳大で始めたもので、徳大の出身者も活躍しています。また、現在、大阪大学では総長補佐（教育オフィス）、工学部・工学研究科では教育学務国際室長（教務委員長）・副研究科長として、大阪大学全体の教育ならびに工学部・工学研究科の教務・学生・入試に関わる全般を担っております。これも、徳大時代の様々な経験が役立っています。徳島の地は、近畿圏と四国地方の架け橋となる地域であり、その結節点を担って地域から世界の課題を解決できる重要な役割を徳島大学は担っています。今後の益々の発展を祈念いたします。

卒業生からのメッセージ

気がつけば50年



納田 盛資

[昭和52年(1972)土木工学科卒業、昭和54年(1979)修士課程土木工学専攻修了]

昭和47年（1972）、私が高校2年生の頃は日

本列島改造論がもてはやされ、父親も土木関係の仕事に従事していたことから、私自身「この業界は安泰だろう」との妙な安心感があり土木の道を選択しました。ところが、翌年大学に入学してすぐにオイルショックが発生し、大型公共事業の凍結・縮小が相次ぎ、本四連絡橋が起工式の5日前に着工延期になるなど、順調に思えた土木の世界に逆風が吹き始めました。

大学院修了後、徳島県庁に就職しましたが、それから建設業界は「バブル崩壊」「コンクリートから人へ」「リーマンショック」など世界経済や政治情勢で事業費が大きく変動し、どの業界であっても安泰な世界はないことを痛感しました。

その一方で、地震や台風などの自然災害や事故があるたびに土木の世界は注目され、人々が生活していく上で欠かせない重要な存在であることを再認識することができました。

県庁を退職し、再就職した今でもモチベーションを保ち続けることができるのは、社会に貢献しているという自己満足でしょうが、50年前の選択で良かったなと感じています。ただ、この間に仕事の進め方は激変しており、最近はその速度について行くのさえ必死です（泣）。

学生時代、研究室の倉庫の片隅で埃をかぶった機械を見つけ、それが往年の「タイガー手回し計算機」であることを知り、その頃発売された関数電卓との能力差と技術の発展に驚かされたものでした。その後、職場で一人1台のパソコンは当たり前時代になりましたが、リモートワークの本格導入によって、みんながディスプレイに向かって黙々と仕事をする姿さえ、過去のものになりつつあります。また、学生時代の測量実習では、かんかん照りの昼間に平板・トランシットと格闘し、夜には友人宅で対数表を片手に四苦八苦し徹夜でレポートをまとめたものが、今やドローンで3次元測量し、デジタル化されたデータはすぐに設計に利用されるという、昔の人間からすると夢のような時代となりました。

私が経験した50年間でさえこれだけの大きな変革の波に晒されてきたのに、工学部が創設

された100年前を生きた先輩方はどのような荒波の中で過ごされたのだろうかと考えると感慨深いものがあります。現在は、平和の秩序が乱れ、異常気象が進み、景気の行方も見通せない状況ですが、歴史を振り返ると、予算の大小はあるもののいつの時代でも人々の生活を支える社会資本は着実に整備が進められてきました。

近い将来、新設の構造物では条件さえ与えれば自動で設計は完了し、現場でもIT化の進展とともに、高性能な機械や高度な施工技術が次々に導入され、省力化が進むことになるでしょう。ただ、いくら緻密な施工計画であっても、人間の判断・作業に頼らなければならないことがたくさんあります。

将来に対して夢を描きにくい時代ではありますが、若い人たちには、ITをうまく制御できる「人間」を目指していただきたいと思います。

結びとなりますが、私たち卒業生の心の拠り所である徳島大学が、地域の将来を照らす道しるべとして、末永く発展することを祈念いたします。

学生時代の思い出と近況



土橋 勝

[平成元年(1989)建設工学科卒業]
ex.JI3SZK/5

徳島大学工学部が令和4年(2022)10月に100周年を迎えられ心からお慶び申し上げます。社会基盤デザインコースの先生から『卒業生からのメッセージ』を寄稿してほしいとの依頼があり、良い機会と思い学生時代の思い出と近況などについて書かせていただくことにします。

京都出身の私は1年の浪人生活を経て、六畳一間、風呂無し、共同トイレの下宿で学生生活をはじめました。その下宿にアマチュア無線クラブの先輩がいらっしたこと、中学時代に免許証を取得していたこともあり、徳島大学アマチュア無線クラブ(JA5YCS)に入部しまし

た。その当時の顧問は精密工学科の今枝先生で、電子工学科の橋爪先生はOBとして部活動を応援いただけていました。部室は工学部食堂の東側で散髪屋さんの裏側にあった木造平屋建ての建物内にあり、そこで工学部だけでなく、医学部、歯学部などの部員計20名程と一緒に無線をしたり、たわいない話をしたりして日々を過ごしていました。夏には、大きな発電機、無線機やアンテナをトラックに積み込んで、佐那河内村の大川原高原(標高1,013m)に移動し、全国の多くの無線局と交信することが出来ました。

このような有様なので、学業成績は芳しくなく『1つの優よりは3つの可』という方針でどうにか4年生に進級することができました。4年生になった昭和63年(1988)は、大鳴門橋と瀬戸大橋は完成していましたが、明石海峡大橋が着工する年でした。そこで、大型風洞試験装置で長大橋の耐風安定性などの研究をされていた宇都宮先生、長尾先生(建設4講座)にご指導いただき、どうにか卒業することが出来ました。その後、鋼製の橋梁を製作・施工する会社に就職し、今も橋に係わる仕事をしています。

最近の変化と言えば、コロナ禍による生活習慣です。令和2年(2020)2月にはコロナにいつ感染してもおかしくないと感じはじめ、リスク低減のため片道3kmの通勤をバスから徒歩に変更しました。経路はバスと同じとし、体調や天候が良くないときにはバスに乗ることにしました。徒歩通勤によって、朝型の生活に変化した他、街の景色を見ながら歩くと、40分あまりの時間で頭の中が整理され、心も健康になっているように感じます。また、緊急事態宣言もあり、自宅で過ごす時間が多くなり、時間の有効活用のために、IoTの真似ごとをしたくなりRaspberry Piという1万円もしないシングルボードコンピュータを買いました。とりあえず、LEDチカチカやGoogle App Script (Java Script) でプログラミングを始めました。最近ではQiitaなどのHPを見たり、Chat GPTに教わりながらPythonにも挑戦中です。

コロナ禍以前の私は、さして努力もせずその一方で一発逆転ホームラン的なことを密かに望

んでいたように思います。しかし、生活習慣の変化に伴い考え方が少し変わり、何か簡単にできることはないかと模索するようになりました。誰にでもできることを積み重ねると、半年くらいすると進歩したことを実感できます。今すぐやれることを探してやってみたり、やりたいことを小さな階段に分割して一段ずつ実行しています。すると、たとえ小さなことでも喜びが生まれ、次の一歩への力が出ます。

今後、地球環境も含め社会のニーズが変化していきます。私も少しずつ歩いて行きますので、この誌面を見ていただいた方になんらかの形でお会いできたときに新しい私の近況をお話したいと思います。

最後になりましたが、母校の益々の発展と3万人余名の工業会会員の方々のご活躍をお祈りしております。



思い出の シンボルストリート



板東 ゆかり

[平成21年(2009)建設工学科卒業、平成23年(2011)博士前期課程建設創造システム工学コース修了]

徳島大学工学部の創立100周年記念を心からお祝い申し上げます。

在学中は、徳島大学が創立60周年を迎えるとともに、参加していた“徳島大学オープンスペースプロジェクト(略称TOP)”が提案した「常三島シンボルストリート」が記念事業とし

て実現するという機会に恵まれました。このTOPとシンボルストリートに関する思い出話に少しお付き合いください。

TOPの活動は平成19年(2007)1月にさかのぼります。当時の常三島キャンパスでは、建物の耐震改修を中心に再整備が進む一方で「大学としての顔」や「学生が憩い、励む姿」が見えないとの指摘が多く聞かれていました。そこでオープンスペースに関する具体的なプランを、学生を交えて策定しようということになり、常三島キャンパスの学生と教職員でTOPが結成されました。TOPにて現状把握のための調査や学生ワークショップなどを進める過程で「工学部共通講義棟(K棟)の青色LED時計が多く、多くの学生に大学のシンボルであると考えられていること」、「K棟から総合科学部のグラウンドまで一直線に抜ける空間があること」が明らかになりました。最終的に提出したマスタープランにおいては、このLED時計前通りをシンボルストリートにすること、広場としての機能を持たせること、そしてカフェを新設することを提案に盛り込みました。

シンボルストリートの整備が記念事業に選ばれ、TOPとして具体的な基本設計プランを作ることになったのは平成20年(2008)に入ってからです。当時、学部4年生だった私は、卒業研究と並行して、樹木勉強会や模型作り、大学祭での仮設カフェによる社会実験などの検討作業に取り組みました。初めての取り組みに戸惑う私を導いてくださったのは、都市デザイン研究室の山中英生教授と真田純子助教(当時)です。プロジェクトと誠実に向き合う大切さ、調査・研究の進め方など、やさしく(ときに厳しく)ご指導して下さり、有難く感じたことが昨日のこのように思い出されます。

現在、シンボルストリートにある蘇鉄は、徳大工学部の前身である徳島高等工業学校の正門に植樹されていたものです。シンボルストリートの整備にあわせ、車両ゲート近くの茂みの中から移植されました。移植から十数年が経過し、整備時に植えられた他の樹木とともに、土地にも風景にも馴染んできた頃ではないでしょうか。

徳大工学部の歴史を象徴する蘇鉄の成長と、徳大工学部の今後ますますのご発展を祈念いたしまして筆を置かせていただきます。



検討時に作成したシンボルストリートの模型

「徳島大学の思い出と雑感」



林 正

[昭和47年(1972)精密工学科卒業]

徳島大学工学部創立100周年おめでとうございます。私は昭和43年(1968)入学、同47年(1972)卒業、同49年(1974)修士修了の後、助手勤務1年の計7年間徳島大学工学部に在籍していました。入学の昭和43年当時は、全国の大学で大学紛争が起き、翌年には東京大学安田講堂事件があり、その年の東大入試が中止されるという騒がしい世相でしたが、アポロ11号の月面着陸、翌年の大阪万博開催と活気に満ちた時代でもありました。夏休みに友人と一緒に信州方面へ旅行し、美ヶ原高原行きのバス待ちの停留所でアポロ11号月面着陸の衛星放送を見た事、また大阪万博へ行った事などが懐かしく思い出されます。時の流れの速さを感じ、

二十歳前後だった当時の自分と今の自分の違いに感慨深いものがあります。社会状況も、自分も時間と共に常に変わっていくことを実感します。当時、50年後の自分がどう思い、どう考えるのだろうなど考えもしませんでした。当時の社会状況、また学生の持つ価値観も、今とは大きく違っていたと思います。今振り返って当時考えた事柄も当時の世相、価値観に影響を受けていたと思います。

徳島大学工学部に在籍した7年間は、自分にとって非常に大きな意味があったと思います。諸先生方、諸先輩方、同学年の友人そして大学職員の方々などから色々なことを学び、その後の生き方に参考となる大きなものを得られたと思います。

現在在学中の学生の皆様にも、それぞれの経験と考え方があり、その上で色々な情報や学びがあり、考え、成長していくのだと思います。考える事に年齢は無関係で若い人程、斬新な考え方ができると思います。年齢を重ね、色々な経験を積むことで返って新しい発想ができにくくなる気がします。現在のように自分で考えなくてもインターネットで様々な情報が瞬時に得られる時代にこそ、自分で考える事の重要性が増すと思います。

現在在学中の学生の皆様には、コロナウイルス感染問題等で大変な状況だと思いますが、徳島大学工学部創立100周年の伝統を引き継ぎ、地方創生に向け、地域貢献型大学として新しい時代を築いていってほしいと思います。

徳島での学生生活を通じて 母校で学んだこと



大末 篤司

[平成18年(2006)
博士前期課程機械工学専攻修了]

徳島大学大学院博士前期課程修了後、今はな

き和歌山の写真現像機メーカーでの1年間の勤務を経て、本田技研工業に転職しました。勤務地は栃木県芳賀町の四輪R&Dセンターで、主にサスペンション部品の材料研究・開発を担当しています。

私が徳島大学に入学したのは平成14年(2002)の春、高専からの推薦・編入でした。

高専ではバドミントン部の主将を務める傍ら、少林寺拳法部にも出入りしており、入学後すぐに当時住んでいたアパートから程近い、徳島道院の門を叩きました。当時の私の格好はというと、大学デビューではなかったですが、金髪・ライオンヘッドで、上下ジャージといういで立ち。見学はさせてもらえたものの、入門はさせてもらえず、道場の先生に「とりあえず髪黒うしてから話聞こうかあ〜?」とドスの効いた阿波弁で追い返されてしまいました。その後、身を正し、入門を許された私が後で知ったことですが、徳島道院は世界的に知られた達人、坂東邦伯先生によって戦後の徳島県下で最初に開かれた由緒ある少林寺道場でした。元々、根が真面目で練習熱心な私は、先生方に可愛がっていただき、公私ともに支援を受ける傍ら、道場の行事を通じて、社会での礼儀作法や、主体的に役割を見付けて助け合うことを教えて頂きました。

大学の研究室は元々、金属材料の研究をしたという希望と、親しい先輩が所属していたということもあり、岡田達也先生が指導する材料科学研究室(現・結晶材料科学研究室)に入りました。研究テーマは「銅単結晶の塑性変形」で、結晶方位とすべり線のSEM/TEM観察を徹底的にやりました。当時は「就職に役立たない研究をやっているなあ」などと考えたものですが、金属材料の破壊に対する本質的な理解は結晶方位と転位の研究をやらないと身に付かないもので、現職についてからも材料研究と部品の強度耐久性評価に役立っています。

大学で過ごした学部2年、大学院2年の合計4年間は勉強していたというよりは、何かに熱中して飛ぶように過ぎて行った学生時代でした。ですが多くの先生方が突飛な事をしがちな私を

諫め、励まし、包容力のある親心で育ててくれた事は間違いなく、この風土がこれからも人間性と才能豊かな人材を輩出し、その活躍を通じて母校の益々の発展に繋がることを祈念しております。

~30年をふりかえり、卒業生へ~



山名 克巳

[平成3年(1991)
修士課程機械工学専攻修了]

この度、工学部100周年記念及び記念誌の寄稿依頼に対し祝辞と感謝を申し上げます。

私、平成元年(1989)機械工学科卒、同3年(1991)修了後、約30年岡山で産業機械の製造業に携わっています。

在学中、第二講座での学びより流体と機械の間でエネルギー変換を行う、またその逆方向もある、それを操れるという面白さより、将来も流体機械の製品の開発に携わりたい事を恩師に相談し、近郊であり先輩も活躍している同社を紹介頂き入社しました。同社には造船関係、プラント関係、機械関係で多くの先輩方が在籍し縦のつながりが頼もしく、現在も毎年後輩が入社し心強くもあります。

入社当時は(株)三井造船、平成30年(2018)に同社100周年記念と共に機械分野は三井E&Sマシナリーと持株会社制に移行し、更に令和5年(2023)春には持株会社制を解消し(株)三井E&Sとなりました。環境の変化に応じて会社も強い事業分野に集中と変革しています。

同社入社後産業機械製品(ガスタービン、圧縮機)の開発、設計に携わり、近年は企画管理分野で事業部運営を行っていますが、自分たちの作る製品が世の中で動き、更に新たな製品(鉄鋼、電気、石油製品)を生み出し社会に貢献していることに対しては自負とやりがいを感じられる仕事になります。産業機械分野においても、

ここ数年大きく外部環境が変わり、脱炭素化、持続可能な社会の実現化が重要となり、お客さんに求められる内容も変わってきています。また実生活の中でも温暖化、異常気象等の変化も肌で感じられていることと思います。社会では変化に対応できる人材を必要としています。大学で学んだことが将来どこまで役立つかは分野によりそれぞれですが、在学中に恩師、先輩・同期と時間を忘れ議論したこと、飲みあかしたこと、試行錯誤での研究、輪講、纏め・報告等と幅広い経験を積むことを通して身につく考える力、纏める力、行動力は必ず将来の人生のなかでプラスに活かされます。学生の皆さん、若手の皆さんも徳島大学卒業生である自信をもって人生にとりくみ頂きたいと思います。

最後に我が母校も社会の変化に対応できる卒業生を育て、社会貢献できるよう、一世紀を超えて次の百年も益々発展することを切にお祈りしております。

遊び心をいつまでも



吉川 卓志

[平成11年(1999) 博士前期課程
化学応用工学専攻修了]

工学部創立100周年を迎えられ誠におめでとうございます。大正、昭和、平成、令和と時代の変化にご対応され益々、ご発展されているとのこと、諸先輩、教官並びに職員の皆様の努力に深く敬意を表します。

私が入学した平成5年(1993)当時、現在の機械・化学・生物棟は平成3年(1991)8月ごろに建設された増築前の化学・生物棟でした。当時は外壁タイル張り建物は殆どなくモルタル表面が多かったように記憶しております。また私は晨鐘寮の卒業生で在寮時、共同トイレ(和式)、二人部屋でしたが現在は外壁が再塗装され共同トイレ(洋式)で一人部屋とのことで時

代の流れを感じます。

在学当時、化学プロセスには3講座あり、私はC-2講座(富田太平教授、土屋活美助教授、加藤雅裕助手、山下治郎技官)に在籍し、加藤先生指導のもと合成ゼオライトへのガス吸着実験を行っておりました。吸着測定にはガスクロマトグラフィーを使用し機器立ち上げに約2時間、一つの実験に2~3時間、実験後のゼオライト再生に約2時間を要しました。学会発表前には朝5時に機器を立ち上げ、一日に3回の実験を行い、データ整理をし帰宅は0時を過ぎるという実験生活を送っていたのが今では懐かしく思います。

平成11年(1999)に大学院を卒業し、現在、奈良県にある食品工場に就職し約23年経ちます。業務は主に本社工場、新潟県内子会社の工場設計と本社工場運転管理を行っております。工程設計は主に化学プロセス分野ですが工場設計となりますと更に建築、機械、電気また製造する食品物性など多岐に亘る分野の知識が必要となります。一つの工場を稼働させるには長いときで約2年間を要し多額の費用がかかります。試運転日が近づくと寝むれない。当日は帰れないことも多々ありますが協力会社や同僚の協力が無事に製造出荷納品されたときがモノづくりの一番面白いと感じる瞬間でもあります。現在、様々な工程管理ツールが開発されていますが、どんなに最新であっても機器やセンサーなど長期使用すると必ず不具合や故障が起こり最終的には人が対応しなければなりません。いつの時代も人と人とのつながりが世の中のモノづくりを支えていることを日々、実感しております。

幼いとき親からよく言われた『人生死ぬまで勉強』の意味を少しは理解できる年齢になったように思います。仕事でも趣味でも興味を持つと勉強という意識はなくなり追求、挑戦となり挑戦を続けると必ず困難が立ちはだかります。在学中、富田先生から物事の発想や発展には常に遊び心が大切で困難なときこそ『遊び心を持って視点を変えると解決策が見つかることがある』と教わり、工場設計や趣味において常に心掛けております。

ここ十数年、阿波踊りの観覧さえ出来ておりません。来年こそは化応連と全寮連で『踊る阿呆』で思いっきり踊りたい。また平成31年(2019)3月に人生初のフルマラソン『徳島マラソン』を完走しました。いつかもう一度走ろうと考えております。人生の折り返しは過ぎ、体力低下が著しいですが仕事に興味に挑戦をし続けていきたいと考えております。

終わりに寄稿の機会を頂いた加藤雅裕教授に感謝し、理工学部の益々の発展と皆様のご健勝をお祈り致します。

学部への感謝と抱負



山田 洋平

[平成25年(2013) 博士後期課程
化学機能創生コース修了]

工学部創立100周年、誠にありがとうございます。私は博士後期課程修了までの長きにわたり工学部に在籍したことから、今回寄稿させていただくことになりました。

私が入学した平成16年(2004)は、国立大学が法人化された年で、報道でもその是非について盛んに取り上げられていました。大学教育の大きな転換点であり、先生方が教育改善に向けた試行錯誤を重ねられている様子が、一学生であった私にも感じられました。授業評価アンケートはもちろん、アクティブラーニングを取り入れた講義も始まっていました。現在教職に就き、教える立場になったことで、当時の先生方のご苦勞が分かるようになった次第です。

研究室としては、分析化学系の講座(本仲・藪谷研究室)を選びました。当時はかなりの大所帯で、24名の学生が所属していました。当初は緊張しましたが、慣れてしまえば、学内に帰る場所が持てたようで嬉しかったのを覚えています。また、当時の研究室の一室(談話室)には夜な夜な?人々が集い、真面目な話から武

勇伝まで、大いに語り合いました。学内の先生方とも多くの交流を持つことができ、研究への情熱はもちろん、色々な生き様を垣間見させていただいたのは、今も私の財産です。

もう一つ、私が徳島大学で得たものとして国際経験があります。私がかねてより外国に興味があったのですが、一步を踏み出せずにいました。そんな中、指導教員や国際交流室の支援を受けて、博士課程の一年間オークランド大学(NZ)にて研究を行うことができました。ご助力いただいた皆様には、大きな感謝の意を表したいと思います。

卒業後は高等専門学校に職を得て、教員となりました。コロナ禍に入った令和2年(2020)からは遠隔授業やマスク生活など学校生活も時世に翻弄されました。5類への移行も視野に入り、落ち着きを取り戻しつつありますが、少子化やデジタル人材育成への対応など、教育機関を取り巻く環境、求められる成果は複雑・多様化しており、明るいニュースは多くありません。大谷翔平のようなユニコーンが現れて、状況がガラッと変われば話は別ですが、まずはできることを積み重ねていくしかなさそうです。私も徳島大学で得たものを胸に、後進の育成そして自身の成長に向けて、努力していきたいと思えます。

高分子との出会い



平田 智輝

[平成31年(2019) 博士前期課程
化学創生コース修了]

工学部が創立100周年を迎えられたこと、心からお喜び申し上げます。この節目の記念誌に参加でき、大変光栄です。ここでは在学中から現在に至るまでを書き綴りたいと思えます。

私が工学部に入学したのは平成25年(2013)の春でした。高校生気分が抜けないうちで、物理

化学の難解さに頭を抱えた日々を昨日のこのように思い出します。実験レポートを連日夜中まで友人たちと書き上げたことは、辛くはありましたが今となっては良き思い出です。無機化学や有機化学をはじめ、工学部ならではの化学工学など様々な専門科目を学ぶ中で、右手先生が面白おかしく語る高分子の世界に惹かれてA2講座の門戸を叩きました。

修士時代は、高分子の合成とNMRやGPC、MALDI-TOFMSを用いた解析に明け暮れていました。思い返せば、1つのテーマに集中して取り組めるのは大学ならではの良い経験だったと感じます。研究だけではなく、阿波踊りやソフトボール、徳島マラソンなど研究室メンバーで練習した日々は、今後も忘れることのない、かけがえのない思い出です。

高分子を3年間学んだ私は、社会人となり、現在はエポキシ系接着剤の研究開発を行っています。仕事の内容は、接着剤の構成を決め配合し、接着強度、ガラス転移温度などの硬化物物性と液物性の検討です。接着剤は硬化させてしまえば高分子となりますが、高密度に架橋しているため研究室で駆使していたNMRやGPCでの分析ができません。初めは高分子のキャラクタリゼーションができないことに戸惑いました。しかし、物性データからどのような反応が起こり、どのような構造を取っているのか推定できるようになってからは、新たな高分子の面白さに引き込まれています。また、接着剤には様々な粉体を混ぜ込むため、微粒子工学や攪拌に関する知識も必要です。講義ノートを引っ張り出し、教科書を読み返すこともあり、在学中に学んだことが思わぬところで役に立つものだと感じています。

最後となりましたが、寄稿の機会をいただいた右手先生に感謝し、理工学部の発展と皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

電気工学科から教官生活40年！



遠藤 秀治

[昭和46年(1971)電気工学科卒業]

早いものでして卒業からすでに半世紀が過ぎようとしております。思えば、昭和42年度(1967)入学し、昭和46年(1971)卒業後引き続き大学院に入りまして昭和48年(1973)修了以来この年月が経過しております。現在の電気電子システムコースも昭和42年度(1967)から電気工学科と電子工学科に分離し、60名定員が各30名の学科として出発しました。歴史的に誇りに思うことは、6歳年下にノーベル物理学受賞の中村修二博士がおられたことです。

昭和46年(1971)当時の景気背景から私以外の仲間は電電公社(今のNTT)や電力会社、民間大手会社に全員就職しました。大学院に進学したものの恩師であられた故牛田富之教授からは、「遠藤君どうするかね?」とその年の年度末まで就職が決まらないことに心配をおかけしたものでした。何とかその後福岡教育大学の助手(現在の助教)という職が決まりまして、昭和48年(1973)修了後に福岡県宗像郡赤間(現宗像市)に4月赴任したものです。その年3月まで大学院生である身分から大学授業を受け持つ教員としてスタートです。更に、翌年から電気研究室の卒論生を受け持つ講座の一員として教え子を送り出す生活でした。ご存知と思いますが、教育学部で工学部出身者が教員生活できるのか、と思われそうですが教員免許制度の関係で中学校の技術科教員免許取得に関する専門領域の電気分野の科目を8コマ受け持つこと、となっております。

教える内容が電気工学関係で電気磁気学と電気回路学を「電気理論」として、他に電子工学・電気計測・電気機械まで細切れの時間割に盛り込んでいました。教育系大学にて理系学科内容

に閉口する学生連中でしたが1年生から3年生までに技術科教員育成のために、情報関係、金属加工と木材加工、農業関係、そして学校教育法の科目を学習せねばなりません。そのため学生達は4年生の卒論割り振りになり好きな学科内容にて卒論を選んだものです。

卒業しても、当時昭和50年（1975）頃は、なんとも教員に就けられない就職浪人が増えた時期であり、警察官や銀行員等に就職した学生もおりました。

当初電気研究室の卒論テーマは、最終的な私の博士論文となる「神経回路による低周波発生リズム機構」に関する内容ではなく、当時木内陽介先生指導の「閾素子ニューロン回路による確率的演算」に関しての電子回路化であり、演算に用いたランダム性パルス列を発生する電子回路が貴重な卒論課題となりました。しかし、学生定員12名－卒論教室8研究室中で電気研究室を選ぶ卒論生が1－2名のうちが良いのですが、4名もの集中となる場合には、当時まだ貴重だったICを用いたアナログ&デジタル回路を模擬した内容としたものです。一例としては、論理回路をスイッチ形成vs. IC回路の比較、或いは、増幅回路の作製をアナログ回路（トランジスタ回路）vs. アナログIC（オペアンプ利用）の比較、等がテーマとして取り上げたものです。

当時の研究費は教育系大学ですが幸いなことに現代の経費減額が厳しい状態でなく、電子部品等も十分購入できる研究費でした。また、大学教員として恵まれていたことは、研究発表で国内の学会参加や国際学会参加でいろいろな世界に出かけられたことです。併せて、福岡教育大学には当時後援会組織として日米奨学金制度（出光石油の社長が赤間地区の出身であり資金を提供してくれていた）があり、英国ブリストル、USAのフィラデルフィア等に出かけることができました。更に、在外研究員制度があり10か月間の海外研究員派遣があり、平成8年（1996）10月から平成9年（1997）7月までオランダGroningen大学に行かせていただきました。この頃の研究は、生物リズムの中で低周波リズムである概日リズム（周期が約24時間）

を神経回路から発生可能なモデル作成に関する研究をしており、Groningen大学のDr. Serge Daan研究室に留学でき生物リズム機構について基礎研究を学ぶことができました。このこともあり、時間はかかりましたが平成15年（2003）5月8日付で博士論文を得ることができました。

大学教員時代の後半には研究・教育よりも大学運営上の改善を目指す各種委員会の委員や教職員組織の役員としての活動し、学生指導とあわせて教職員の待遇改善や運営組織の明瞭化、運営予算の獲得を目指す大学運営をどうするか、に時間を取られることとなりました。平成18年（2006）2月には学長特別補佐という役目、平成20年（2008）2月から2年間は大学理事（総務・財務担当）&副学長の拜命を受け大学運営にかかわりました。この立場は、なんとも人生の皮肉と思われませう出来事となりました。大学運営側の立場になる前までは、大学教職員組合の理事長・執行委員長として活動し、まさに大学側の運営に関して30項目以上の要求を突き付けたものです。ところが、平成18年（2006）以降なんともそれらの要求項目を突き付けた大学側に回る立場となり、「何だこれらの要求は?!」、という事態に陥りました。多分、当時それなりの対処で処理したことと思いますが、その後の学長対応についてお聞きすると、「学長交渉」そのものを拒否しているという事実を知りがっかりの世代交代でした。

とにかく、平成24年（2012）に39年間の教員生活そして1年間の再雇用非常勤講師を勤め上げ40年間の教員生活が終了したものです。しかし、社会への貢献を忘れない姿勢、という信条に関していえば、現役時代大学教員は非常勤講師が許可されることで、西南学院大学、当時赤間にありました東海大学福岡短期大学、等へ情報処理科目や電気関係の授業担当に出かけておりました。何と、退職後の現在も工学部電気系の先輩がおられた九州電気専門学校に現在も非常勤講師として出かけております。在職中は教育系大学故に小・中学付属学校での授業実施や県教育委員会からの要請にて、授業参観後

の指導助言や教育実習生への指導に出かけたものです。

また、九州地区にある国立大学故に熊本県・阿蘇そして長崎県・島原にある国立研修センターに1泊2日の学生合宿研修にて学生との交流が深まったものです。

昭和48年（1973）当時に民間会社に就職をためらったのは、人間相手の職業に就きたいという心の奥底にあった信条だったのでしょね。人間との対応に明け暮れました教員生活の中で、まさに思い出は貴重な時間の財産となっております。残された膨大な写真の数々や書籍のいろいろ－専門雑誌を含めて専門書や単行本の処分に困ったものですが、断捨離する場合にも何かの思い出のある品物はつつい手元に置いておくこととなり、5回の引越しをするごとに処分すれば良かったのですが、なんとも未だに手元にはいろいろと書籍・品物がたまっている状態です。そんな折、五木寛之「捨てない生き方」(マガジンハウス)の本と出合いました。身の回りにいろいろな物があることは自分が過ごした人生（歴史）が、記憶が思い出されることであり貴重な財産となることである、この本の出会いにより、今までに物をため込んだ生き方もまんざらではないな、という感じを受けました。

一方、人生を振り返るときの共感を呼び起こす書籍として、田原総一郎「堂々と老いる」(毎日新聞社)－自分自身の老化に対してそれをそのまま受け入れ信念のもとに堂々と生きること、森村誠一「老いる意味」(中公新書)－退職後は「第二の始発駅」でありいろいろなものをかかえて新たな旅に出かけることである、養老孟子「ヒトの壁」(新潮新書)－身の回りに起きる出来事に対して自分なりの解釈で過ごす、等の内容が今や人生100年時代に向けそれぞれが自分の人生を思うときの参考となる書籍が多く出版されています。

とにかく、就職後に会う多くの関係者との交際や人間形成時期に活動する学生諸君との出会いが自分自身の人間形成にかかわったことを深い時間の財産（記憶－歴史）として今後も保有していきたいと思えます。

最後に、徳島大学工学部の100周年記念を祝い、今後も益々の発展を祈ります。

電気電子卒



新居 浩二

[平成2年(1990)
修士課程電子工学専攻修了]

徳島大学工学部の創立100周年を謹んでお慶び申し上げます。恩師の橋爪先生、四柳先生より、このような貴重な機会をいただき感謝致します。学生時代の思い出や卒業後の変遷等についてご報告致します。

私は、平成2年（1990）3月に大学院工学研究科電子工学専攻を修了、三菱電機北伊丹のカスタムLSI研究所に就職しました。入社当時からマイコンやシステムLSIに搭載する混載メモリ、特にスタティックメモリ（SRAM）の設計開発に従事してきました。半導体業界から多くの日本企業が撤退を余儀なくされた時、三菱電機から半導体部門が切り離され日立製作所との合併で誕生したルネサステクノロジへと承継転籍となり、その後NECの半導体部門が加わりルネサスエレクトロニクスへと社名が変わっていきます。50歳を過ぎたころ、不揮発メモリの日本発ベンチャー企業に転職、2年ほど技術売り込みで米国・欧州、中国と海外を東奔西走。そして現在は、横浜みなどみらいに新たに設立されたTSMCデザインテクノロジージャパン株式会社にて働いています。

学生時代といえば、バドミントン部で練習に明け暮れ、夜は同級生の下宿に乱入して麻雀と飲み会。真冬の夜に海南までドライブし、路面凍結のため車ごと田んぼに落ちてしまったこともありました。そんな中、なんとか4回生となり、為貞・橋爪研究室（現四柳研究室）にてSPICEシミュレーションを用いたオペアンプ回路の最適化という課題にチャレンジすること

になりました。主流になりつつあるCプログラム言語をUNIXマシン上で流すことを覚え、もう少し学びたいと思い大学院に進学しました。当時から徳島大学工学部では国際化推進が始まり、為貞研には南米から留学生も入り、良い刺激を受けました。そして4回生で初めて香港へ渡航したのをきっかけに、大学院1年の時には先輩と一緒に先生の学会出張に同行させていただきました。シカゴからナイアガラ滝へ車で移動、その後ニューヨークやワシントンDCと東海岸をめぐり、スケールの大きさに圧巻されたものです。また、東京で遊びたい下心もありNECで1ヶ月間インターンシップを経験、都会の満員電車の大変さを実感したものの、全く知らなかったゲートアレイという半導体設計を学び、三菱電機での最初の仕事はそのゲートアレイのメモリ設計に繋がりました。

大学卒業後は、三菱電機の研究開発部門であったことから、学会発表・特許出願・事業貢献を頑張るようにと上司から勧められ、今思えばそれは、半導体部門の同期入社200人の中、私は新しい技術に取り組める環境で働ける恵まれた社員の一人でした。そして、平成5年(1993)に米国西海岸のサンディエゴで開催された半導体設計に関する国際学会にて初めて発表、英語ができなかったのととても大変でしたが、仕事の成果を海外で発表できる喜びを味わいました。その後、ISSCCやVLSIシンポジウムという業界最高峰の国際学会に主著／共著で毎年発表できるようになり、世界的な活躍の場を得ることができました。縁あって、元三菱電機上司で徳島出身の先生にお声がけ頂き、平成20年(2008)には神戸大学で社会人ドクターを取得しました。その後も研究チームからは学会発表が続き、又、金沢大学の客員教授として教育指導する立場も兼務し、これまでに6名の後輩達が社会人ドクターを取得しました。徳島大学では、四柳先生の研究室にて毎年講義を行っています。

現在のTSMCテクノロジージャパンにはコロナ禍が拡がった令和2年(2020)6月から勤務しています。台湾に本社を置く半導体ファン

ダリ会社ですが、“横浜での新たなデザインセンター設立の牽引を”とのお話をいただき、各国の優秀なエンジニアが日本に集まることで、かつての勢いを失った日の丸半導体業界に再び新しい風を起し、日本復活に貢献できると信じてまずはスタートしました。予想通り、熊本に工場建設というニュースが駆け巡り、TSMCの名前が知れ渡ると同時に、昔の仲間達が集まり、この3年で世界有数のメモリ設計チームを築けたと自負しております。今現在は、数ナノメートル世代の最先端メモリ設計開発が軌道にのり、台湾や北米のチームと連携したワールドワイドに仕事のできる環境での楽しみを実感しています。

これからの日本は半導体産業も含め、ますますグローバル化していくことでしょう。徳島大学の国際化が進み、多くの学生が世界へと羽ばたくことを期待しております。

最後になりましたが、今こうして仕事を乐めますのも徳島大学の自由な環境の中での諸先生、先輩方の温かいご指導のおかげであります。心より感謝申し上げますと共に、母校の益々の発展と工業会会員、並びにOB/OGの皆様のご活躍をお祈りしております。

「働き続けること」



安野 恵実子

[平成9年(1997) 博士前期課程
電気電子工学専攻修了]

私が徳島大学に入学した当時は、工学部には女子学生が少なく、電気電子工学科に女子が入ったと珍しがられ、事あるごとに「紅一点」と言われるようになりました。その後、後輩の女子学生が入ってからは「お局」といわれるようになった故でしょうか、創立100周年記念誌に書かせていただけることになり、大変恐縮しております。

大学時代の思い出



滝本 裕則

[平成14年(2002)
知能情報工学科卒業]

さて、大学生活では、木内陽介先生のご指導のもと、生体インピーダンスに関する研究に10年もの長きに渡り携わらせていただきました。一昔前までは女子が大学院へ行くと婚期が遅れるよと止められていたそうですが、私以降!は「いいんじゃない」という時代になり、私もただ同級生が進学するからという単純な理由で修士課程へ進み、学生生活を満喫しました。その後、共同研究先に就職し2年弱、生体インピーダンス計測装置の開発に携わらせていただき、結婚を機に遠距離になるので仕事はやめようかなと思っていた頃、阿南高専に女子学生が増えたので、院卒の女性を探していると声をかけていただきました。正直「私が学生に教えるなんて無理」って思ったのですが、パートナーから「とりあえずやってみたら」と言われ、結婚、転職、そして博士課程へ入学しました。「仕事と主婦と学生と3足の草鞋で頑張ります」とはいったものの、要領が悪く研究に時間を割かず、その間に娘も授かり、今度は仕事と学業と育児に追われるようになり、もうやめようって何度も思いました。パートナーから「学位がとれたらやめていいよ」と言われ、足掛け7年で無事に学位を頂くことができました。こんなゆっくりしたペースにも気長に付き合ってください、常に温かくご指導くださった木内先生には本当に感謝しかありません。

一昨年、娘が県外の大学に進学したため、娘ファーストだった生活が一変、強い喪失感に襲われましたが、仕事のお陰でなんとか引きこもらずに生活できています。今は仕事を続けてきて良かったと思えるようになりました。紅一点と言われた頃から周囲の方々の様々な配慮や支援のお陰もあって、こんな私でも高専で論理回路やマイコンなどをそれなりに教えられるようになりました。OGとしての活躍は優秀な後輩たちに譲り、唯一私ができること、それは「働き続けること」を女子学生の皆さんに身を持って示すことかなって思います。

私は、香川県の詫間電波高専を卒業後、平成12年(2000)4月に工学部知能情報工学科の3年次に編入しました。在学中は常三島・蔵本両キャンパスの軽音楽サークルに所属し、バンド活動に熱中しておりました。様々なバンドを組み、各地でライブを行い、徳島県内4大学が集まる初のジョイントライブイベントの立ち上げに参加するなど、充実した大学生活を送っておりました。

一方、学部4年次より知能情報工学科A3講座に在籍し、赤松則男先生、福見稔先生、満倉靖恵先生による熱心なご指導のもと、20名以上の学生と共に活発に研究活動を行っておりました。当時はデジタルカメラやカメラ付き携帯電話が普及し始めたころであり、だれもが気軽にデジタル写真を撮影することが可能になったことから、私は画像処理の研究に興味を持ち、顔を対象としたさまざまな属性特徴抽出に関する研究に取り組みました。私の所属した研究室は先生方や先輩後輩との距離が近く、昼食は“生協”、夕食は“あまやん”か“べるまん”へ研究室メンバーと食べに行くのが定番でした。また、飲み会、先輩宅で桃鉄大会、夏はキャンプ、冬はスノーボードなどイベントも多かったと記憶しています。特に、阿波踊り01連に研究室メンバー全員で参加し、鉦を担当させてもらったことは本当に良い思い出です。

さて、私は、大学への編入が決まったころから高専の教員になりたいという気持ちがありましたので、先生方のご指導ご支援のもと、研究成果を論文投稿・国際会議などの場で発表をさせていただきました。そして、博士後期課程2年次より、縁あって長崎県佐世保市の高専に助

手として着任し、仕事をしながら博士課程を修了しました。現在は、岡山県立大学 情報工学部にて准教授として教育・研究に日々取り組んでおります。学生時代に得た様々な経験は、現在も私にとって貴重な財産となっております。

最後になりましたが、在学時代にお世話になりました先生方にこの場をお借りして深くお礼申し上げます。また、母校のより一層の発展と、関係する皆様のますますのご活躍をお祈り申し上げます。

ジョギングで学んだ勉学と研究



後藤田 中

[平成18年(2006)
知能情報工学科卒業]

現在、徳島のお隣、香川に大学教員として着任し、仕事の関係で時折常三島キャンパスにお邪魔して、「(卒業後に) コースの建物が改修された…学生のパソコンが必携化した…」等、見聞きしてコースや徳島大学全体の変遷をいつも新鮮に体感しています。在学時の博士前期課程に進む際には、日亜特別待遇奨学金制度が誕生し、心の支えになったのは感謝の念に堪えません。さて、学生時代の私は、勉学とともに「ジョギング」がいつもそばにあったのを記憶しています。徳島大学は近くに徳島中央公園(城山)や眉山、吉野川、新町川は、走りやすい場所が多いので、ジョギングは日々の考えを整理する時間になっていました。当時のコース(学科)内では、赤松則男先生や青江順一先生が忙しい業務の合間を縫って取り組まれている様子がうかがえました。

研究もその延長線で、当時facebook等のSNSが広がりつつある時期の中、運動の教育環境e-Learningをやってみようと矢野米雄先生、松浦健二先生らにご指導いただきました。GPSや心拍計のログ、映像分析等をオンライ

ンのスポーツを学ぶコミュニティ形成支援に使うという研究テーマは、その後の仕事にもつながりました。博士後期課程の修了後は、高知工科大学でJSPSのポスドク研究員として1年過ごした後、国立スポーツ科学センターの研究員となりました。弓道で範士の称号を持つ大恵俊一郎先生にご報告した際には、スポーツ研究者をご紹介頂き、いくつかのご縁につながっていること大変感謝しています。その後、1年延期された東京オリンピック2020に向けて、同センターやナショナルトレーニングセンターにおける選手・パフォーマンスデータを計測・蓄積する戦略的な基盤システム設計・構築に携わることが出来たのは大変貴重な経験でした。学生時代の研究を機に、このような業務で貢献できたこと大変感謝しております。

今後も徳島大学の先生方、学生の皆さんとも教育・研究・地域貢献で一緒する機会が多いかと思っておりますので、連携を通じまして母校の発展に寄与してまいりたいと思っております。

変わりたくないもの



今宮 明則

[平成28年(2016)
知能情報工学科卒業]

私が徳島大学に入学したのは平成24年(2012)でした。学部と院で計6年間大学にお世話になった後、大阪の某大手ゲーム会社に就職し、そのまま現在までゲームエンジンの開発保守に携わっております。まだ徳島を離れてから数年しかたっておりませんが、もう遠い過去のことのように感じます。そんな学生時代の思い出をいくつか紹介させていただきます。

入学した直後は金環日食を徳島で見る機会に恵まれました。金環日食とは太陽が見かけの少し小さい月とぴったり重なってリング状に見える現象のことです。私は総合科学部横の広場に

向かいワクワクしながら空を見上げていましたが、実際見えたものは雲に隠れた太陽と大差なく、辺りが少し暗くなったことを除くと金環日食と分からない程度のものでした。微妙な気分で家に帰ると友人から暗い背景に黄色いリングが見える写真が送られてきました。綺麗な金環日食だなど写真を見ていると、なんと黒い画用紙に輪ゴムが置かれていただけでした。実物を見たことのない人なら騙せるような高クオリティな写真に大笑いさせてもらったことを覚えています。

学部時代は私の下宿先が大学に近いこともあり、毎日のように友人たちと酒盛りをしていました。S君とは日本酒好きなことや意気投合し、初対面なのにサシでオールした記憶があります。U君はゲーム好きで普段は安定したプレイングを見せてくれるのですが、S君の持ってきたお酒を飲んで敵のいない一本道で操作キャラを落下させてました。O君とは何かある度に居酒屋に行きチビチビ飲んでましたね。K君、学部卒業時にくれたオープンレンジは今でも熱燗用に使ってるよ。

研究室に配属になってからは小野先生、永田先生の指導の下、AIや最適化理論について真面目に学ばせていただきました。私は絵画的迷路の自動生成というテーマで研究しており、当時行った最適化の勉強が今の仕事の下地になっています。また学会にも複数回参加させていただき、多くの方の意見と大きな緊張を得ることができました。卒論、修論前はO君とともに、毎日研究室とご飯屋さんを往復していたのも今となってはいい思い出です。ちなみに私がAI関連の研究室に入った動機は、その時やっていたゲームの好きなキャラがAIという設定だったからです。この事は先生方には言わずに卒業しました。

たった数年でも世の中は変わるもので、私のいた知能情報工学科は名前が変わり、徳島大学のホームページも大きく変わっています。プログラミング言語は使える構文が増え、VRゲームなんでものも普及されつつあります。とても面白いですね。どんなに世の中が変わっても変

化に柔軟な若い感性だけは変わらないようにしていきたいものです。

光応用工学第1期生から



池田 貴裕

[平成10年(1998)3月
光応用工学科卒業]

創立100周年を迎え、心からお慶びを申し上げます。大学院を修了して22年の月日が過ぎました。この人生を振り返ります。大学研究室時代にホログラフィー光技術と出会い、大学院修了後、静岡県浜松市にある浜松ホトニクス株式会社へ入社、中央研究所へ配属されホログラフィック・ディスプレイの研究開発に携わり、平成16年(2004)から平成17年(2005)末にかけて米国マサチューセッツ州にあるMIT Spectroscopy Laboratoryの客員研究員としてホログラフィック顕微鏡の研究開発に携わりました。帰国後、浜松ホトニクスが主体となり開学した光産業創成大学院大学博士後期課程へ留学しました。本学では起業実践を通じて経験から産業創成について必要な知見を博士論文としてまとめます。実際に入学半年後の平成18年(2006)10月にパイフォトニクス株式会社を設立し、平成21年(2009)9月に博士(光産業創成)を学位取得しました。

現在はパイフォトニクス株式会社の代表取締役として第17期目に突入しています。主力製品である「ホロライト」は高輝度LED光源と大型光学素子の組み合わせにより、遠方に視認性の高い光パターンを形成できる光技術応用製品となります。開発当初の用途はホログラム再生であり、その他の用途については未知数でした。その後、数多くの展示会出展を通じて検査・演出・建築・安全・芸術・実験などさまざまな新しい光の使い方を見つけました。現在は自動車工場や製鉄工場における安全対策として国内

のみならず米国などの海外市場にも販路を拡大しており、将来、株式上場することを目標に事業活動を行っています。次のステージに向けた人材採用に困っています。当社に興味のある方はいたらご連絡ください！

このように大学時代に学んだ光技術を応用した製品の研究開発・事業化・販路拡大という事業活動における楽しみと苦しみを満喫できていることに喜びを感じています。さて人生100年と考えると、もうすぐ人生の半分を折り返すことになります。今までの人生経験の中で諸先輩方から実践に基づいたアドバイスに勇気づけられてきました。私も後に続く後輩の方々に自らの経験談を伝えて、第一歩を踏みしめる勇気を共有できればと思います。

最後に令和2年（2020）以前は毎年徳島へ訪問する機会がありました。令和2年（2020）以降のコロナ禍の状況から徳島へ訪問する機会が無くなりました。また機会をみて母校を訪問したいと思います。

創立100周年と 社会の変革期によせて



奥野 達也

[平成20年(2008)3月
光応用工学科卒業]

創立100周年の偉業、心よりお慶び申し上げます。私は平成16年（2004）に入学し、当時の工学部光応用工学科で学びました。その頃は白色LEDの実用化黎明期にあり、研究室で磨き抜いた光学解析技術を武器に勇んで総合電機メーカーに就職、LED照明デバイス設計に従事したものでした。ところが束の間、技術のコモデティ化も急激に進み、照明用途としての光源研究は完遂されたに思える少々寂しい時代も過ぎました。しかし、今や世界はSDGs、ESG、脱炭素など新たな社会課題に向け急進しており、

これを契機とした産業革命の兆候も多くの分野で顕在化しています。このトレンドはデバイス・材料にも波及し、これまで常識とされていた組成・構造・設計にもリセットを及ぼすかもしれません。例えば、次世代の照明デバイスは、いかなる姿をしているのでしょうか？異次元の電力効率を誇っているのでしょうか、紙のようにペラペラでしょうか、別途電力源がなくても自立駆動するのでしょうか、ヒトの行動や状態に連動して発光が変化するのでしょうか…妄想は止まりません。今やデジタルトランスフォーメーションはグローバルに展開され、モノは普く行き渡り、乏しさを平準化するための応用工学および製造産業は役目を終えつつあります。更にマクロでは、昨今まで我々を含む世界の列強国が謳歌した資本主義的な社会システムすら、行き止まりに至るかもしれません。その中で、大学研究の役割・意義とは、社会の変革期を超えた次の世界を見据え、真に人間らしく自然と調和し幸福に生きるための技術をデザインし、探求することではないでしょうか。デバイスの電力効率を10%向上させるという研究テーマでも、脱炭素などの社会的命題を意識するか否かで取り組み方は大きく変わるでしょう。若かりし当時の私には、徳島という街は少々刺激に足りない側面もありましたが、一方で、自ら「遊び方」を考えるという機会には事欠かなかった記憶があります。また、都会の大きな会社・コミュニティに属していると、地方の出身者は自発性や創造性に秀でていた傾向を感じます。均質の時代を打破し、次世代の舞台で活躍する人材を育む場としても徳島大学には大きなポテンシャルがあると考えます。

100年の節目と同時に現れた大きな時代の潮流に乗り、更なる飛躍を遂げる我が母校の姿に期待を寄せつつ、今後益々のご発展を心よりお祈り申し上げましてメッセージとかえさせていただきます。

華やかな大学生時代



藤原 康志

[平成31年(2019)3月
光応用工学科卒業]

この度、工学部創立100周年を迎えたことを心からお祝い申し上げますとともに、この記念誌に寄稿することができ、大変喜ばしい限りでございます。

さて、私が徳島大学大学院を卒業してはや三年が経過しようとしています。この場をお借りして私の学生時代を振り返りたいと思います。

私は平成27年(2015)に徳島大学工学部光応用工学科に入学しました。当時、中村修二氏がノーベル賞を受賞した時期で平年に比べると倍率がぐっと上がり、センター試験の点数が低かった私は後期試験の対策に必死であったことを今でも覚えています。

徳島大学に入学してからは初めての経験の連続で楽しい出来事しかありませんでした。一人暮らし、アルバイト、サークル、講義、ギャングブルなど今でも人生で一番楽しかった時期であったと感じています。当時の光応用工学科の一回生の一番の楽しかった思い出といえば学科全員の50人で1泊2日の淡路島合宿を行ったことでしょうか。その合宿中の課題は望遠鏡、顕微鏡を次の日の朝までに作るというものでした。当時の私は光学の知識など全くなかったので教科書やスマホを片手に朝まで徹夜して班員と試行錯誤した経験は今でも良い思い出です。また、二回生や三回生ではアルバイトが終わった後にテスト勉強があるのにもかかわらず、アルバイトのメンバーや同級生などと秋田町に繰り出し、夜通し遊び惚け、テストにそのまま臨むということをしていたことを振り返ると華やかな学生時代であったと感じています。

そして、今は光応用工学科で学んだ知識を生かし、関西の「オプテージ」という会社に就職

しました。会社の提供しているサービスとしては「eo光」や「mineo」などがあります。

入社後一年間の研修を経て、現在はインフラSEとして日々業務に励んでいます。在宅勤務がほとんどですが、学生時代にはリモート授業なども多く経験しており、学生時代の経験を生かしながら日々勉強しています。まだ、インフラSEとして数年しか業務経験のない未熟者ですが、徳島大学を卒業したことを誇りに社会のインフラを支えるシステムの構築に携われるような人材になりたいと考えています。

末筆ながら、徳島大学の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

変わるものと変わらないもの

富崎 孝司

[平成7年(1995)
博士前期課程生物学専攻修了]

失礼ながらこの原稿の依頼をいただくまで徳島大学工学部が創立されて百年経つということを知らなかった。まずは工学部が先生・先輩方の尽力で発展を続け、我々に学びの場を与えてくださったことに心より感謝し、今後のさらなる展開を期待したい。

当時読んだ新書か、先生方が講義中に脱線した時の話だったかは忘れたが、変化し続ける生物こそが最も強い生物である、という一文が強く印象に残ったことを覚えている。工学部が百年の間に起った多くの事件を乗り越えて存続できたのは、時代に応じて機敏に変化・適応していくことができた結果であろう。

私は生物工学科の二期生として月原先生の下で蛋白質結晶構造解析を学んだ。同僚のように自分も地元で大学か企業の研究職を紹介してもらえると薄々期待していたが、出来の悪い自分は課程の途中で海外に出されることになった。それ以降欧州で仕事を続けたが自分が外国語を喋り、実験機器の設計をし、いろいろな物理現象の測定を仕事とするとは思いませんでした。

私にとっての居場所はここしかなかったので、そうする他なかった。

思えば学科には専攻分野とは全く関係のない物理実験や統計計算の授業があった。今の同僚に話を聞いてもこちらの大学では講義はあっても、実験や実習などはしたことがない者が多い。計算機で処理をし物理測定をしていると、学生実験の時に使った覚えのあるものが出てくることも少なくない。欧州に来てから必要に迫られて自分自身で変わってきたと思っていたが、徳島で知らず知らずのうちに適応していくための方法を教えていただいていたのだと思う。その一方で、日本の先生方や同僚、フランスにいたときの仲間にも今この瞬間も助けていただいている。教えていただいた考え方や人とのつながりは、前に一歩踏み出すための大きな力になる。いつまでも変わらず大切にしていきたい。

この二、三年の間にも感染症や国家間の紛争など考えもしなかったことが続いた。工学部、並びに生物工学科はこれを絶好の機会としてさらに変化し、発展していただきたい。自分もその恩恵を受けてきたものの一人として寄与していければ幸いである。

生物工学科での出会いと学びから始まった研究者への道のり



新明 洋平

[平成17年(2005) 博士後期課程
機能システム工学専攻修了]

平成17年(2005)3月に徳島大学大学院工学研究科博士課程を修了してから18年になります。現在は、浜松医科大学医学部・神経生理学講座の教授として、教育と研究活動に従事しています。この度、寄稿の機会をいただきましたので、当時を簡単に振り返ってみようと思います。

私は、平成8年(1996)に徳島大学工学部生物工学科に入学しました。高校時代は野球に明け暮れる毎日で、高校3年の部活終了後は“甲子園出場”のような明確な目標を立てられないまま大学に進学しました。将来の方向性を模索する中、生物工学科での出会いや学びはとても刺激的でした。当時、生物工学科には、松田佳子先生や野地澄晴先生を筆頭に、個性的で情熱的な先生方がたくさんおられました。講義や個別指導を通しての先生方との交流は、緊張感もありましたが大変有意義なものでした。その中でも、生命現象の美しさや不思議さを学べたこと、先生方の研究者としての生き様に触れることができたことは、その後の人生の方向性を決める上で大変重要であったと思います。

学部4年生から博士号取得までの6年間は、野地先生の研究室でご指導をいただき、生命科学研究の面白さを体感することができました。また当時は、遺伝子研究の草創期で、生命現象の素過程が次々と遺伝子レベルで明らかにされていくエキサイティングな時代でした。脳や眼を作るマスター遺伝子があることに、大変驚いたことを覚えています。地方から世界に向けてインパクトのある研究成果を発信しようと日々、研究に明け暮れた大学院での経験が私の研究者としての礎になっています。大学院時代にご指導いただきました、野地澄晴先生、大内淑代先生、三戸太郎先生には深謝いたします。また、生物工学科で学べば、“甲子園出場”以上の目標に届くのではないか、という大きな期待を抱かせてくださった生物工学科の先生方にも感謝申し上げます。今後も生命科学研究の発展のために、研究と教育の両面で尽力していきたいと思っています。本稿を執筆する中、辻明彦先生の訃報が届きました。ご生前のご功績を偲び、心よりご冥福お祈り申し上げます。最後に、寄稿の機会を与えていただきました徳島大学の田井章博先生と田端厚之先生に御礼を申し上げます。

『生物資源産業学部の100周年に向けて』



吉田 健人

[令和2年(2020)
生物資源産業学部卒業]

「吉田くん、100周年記念誌の卒業生の言葉をお願いしてもいいですか?」と恩師の橋本先生からお声がけいただいたのは、令和3年(2021)10月のことでした。私は食料科学コースに所属しておりながら、あちこちの授業を履修し、生物生産コースで卒業した立派な問題児です。私以上にふさわしいであろう同期たちの顔を思い浮かべつつ快諾しましたが、この原稿を書いているのは令和4年(2022)の8月末日の締切当日です。落第学生だったあの頃と、そう人間は変わらないものだかと痛感しています。

「新型コロナウイルス」という言葉に怯え、看板も会場も無いけれども、思い思いに卒業写真を撮った不思議な日を迎えてから2年が経ちました。その後私は、地方創生の研究をすべく明治大学の大学院へと向かいました。結局そのほとんどを、オンライン授業で過ごしていましたが、現在は福山コンサルタントにて都市計画に関わる仕事をしております。

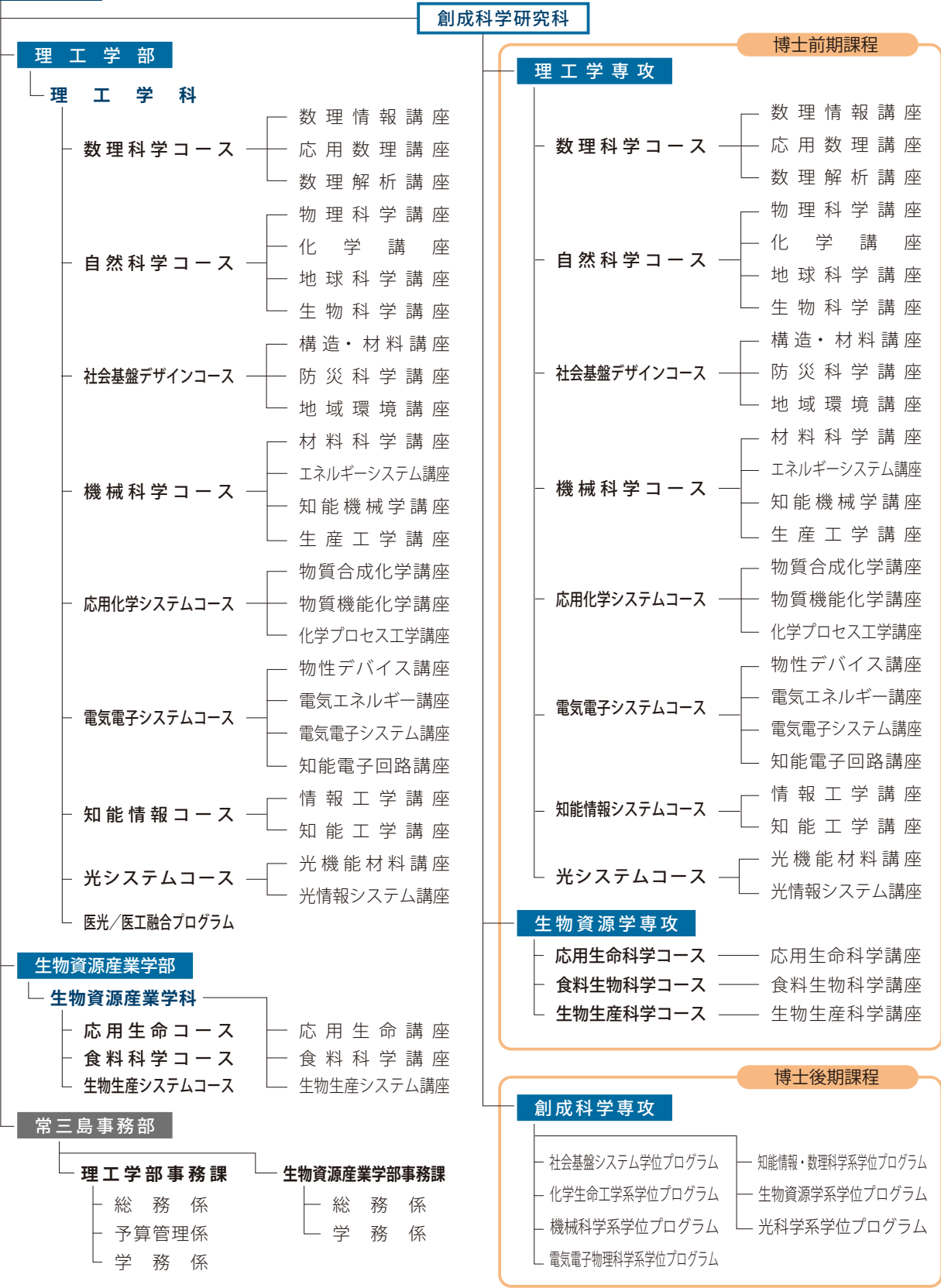
さて、生物資源産業学部の第1期生は、様々な「初めて」を経験しながら、ドタバタと大学生活を過ごして来たと記憶しております。思えば、入学式のアスティとくしまから戻る専用バスが用意されていないところから全ては始まっていたのかもしれませんが。あの頃は学生や先生方みなさんが、一丸となって新しい農学の形を模索していたように思います。付属農場をはじめ、設備が全て共用であることは新設学部の定めです。しかしながら、常三島・蔵本の諸先輩方、鳴門・石井・新野に隣接する施設の方々など、様々な関わりが新しい学部らしさを生んでいたと思います。

すだちポカ리가振る舞われた農場実習、漁船で鳴門の渦潮を見に行った水圏実習など、やさしく現場のリアルを学ぶ大切さはコロナ禍を経た今だからこそわかる代え難い経験です。2年次の海陽町での3週間のインターンは、卒業論文や大学院進学、就職のきっかけとなりました。理論と現場を結ぶ現在の仕事にも確実に生きております。

工学部が100周年を迎え、その流れを汲む生物資源産業学部が末永く徳島ひいては世界の発展に寄与することを切に願っております。

理工学部、生物資源産業学部と創成科学研究科の現状

徳島大学



■ 学生の定員および現員

(1) 理工学部

● 理工学科

(昼間コース)

(令和5年(2023)5月1日現在)

コース・系名	入学定員	現 員				
		1年次	2年次	3年次	4年次	計
数 理 科 学 コ ー ス	[35] 550	33 (4)	31 (5)			64 (9)
自 然 科 学 コ ー ス		40 (7)	31 (5)			71 (12)
社会基盤デザインコース		91 (18)	※ 1 92 (13)	※ 2 77 (11)	※ 1 70 (13)	※ 4 330 (55)
機 械 科 学 コ ー ス		128 (3)	127 (8)	118 (1)	※ 2 93 (5)	※ 2 466 (17)
応用化学システムコース		82 (22)	85 (20)	※ 1 68 (14)	※ 2 65 (18)	※ 3 300 (74)
電気電子システムコース		※ 2 114 (6)	※ 2 120 (7)	※ 2 106 (5)	105 (5)	※ 6 445 (23)
知 能 情 報 コ ー ス		※ 1 84 (7)	※ 1 69 (4)			※ 2 153 (11)
光 シ ス テ ム コ ー ス		56 (7)	43 (6)			99 (13)
情報光システムコース情報系		※ 1 1	7	※ 1 106 (10)	※ 1 99 (9)	※ 3 213 (19)
情報光システムコース光系		6	15	52 (5)	40 (2)	113 (7)
応用理数コース数理科学系		1	4	41 (7)	31 (4)	77 (11)
応用理数コース自然科学系			12 (1)	20 (3)	28 (12)	60 (16)
医光/医工融合プログラム		30	34 (10)			34 (10)
計	[35] 580	※ 4 670 (84)	※ 4 636 (69)	※ 6 588 (56)	※ 6 531 (68)	※ 20 2,425 (277)

(夜間主コース)

(令和5年(2023)5月1日現在)

コース・系名	入学定員	現 員				
		1年次	2年次	3年次	4年次	計
社会基盤デザインコース	45	16 (3)	9	13 (3)	12 (2)	50 (8)
機 械 科 学 コ ー ス		12 (2)	11 (1)	11 (1)	10 (1)	44 (5)
応用化学システムコース		12 (4)	7 (3)	4 (1)	8 (3)	31 (11)
電気電子システムコース		13	16 (1)	6	7	42 (1)
知 能 情 報 コ ー ス		14	8 (1)			22 (1)
情報光システムコース情報系			2	14 (3)	8	24 (3)
応用理数コース数理科学系					1	1
応用理数コース自然科学系						
計	45	67 (9)	53 (6)	48 (8)	46 (6)	214 (29)

注1. [] 内は第3年次編入学生定員を示す。

注2. () 内は女子を内数で示す。

注3. ※は外国人留学生を内数で示す。

(2) 生物資源産業学部

● 生物資源産業学科

(令和5年(2023)5月1日現在)

コース名	入学定員	現 員				
		1年次	2年次	3年次	4年次	計
応用生命コース	[2] 100		※1 38 (24)	※1 41 (22)	※2 30 (21)	※4 109 (67)
食料科学コース		※1 111 (64)	36 (21)	33 (22)	37 (19)	106 (62)
生物生産システムコース			※1 36 (19)	33 (9)	30 (12)	※1 99 (40)
計	[2] 100	※1 111 (64)	※2 110 (64)	※1 107 (53)	※2 97 (52)	※6 425 (233)

注1. [] 内は2年次編入生を外数で示す。

注2. () 内は女子を内数で示す。

注3. ※は外国人留学生を内数で示す。

(3) 創成科学研究科

● 博士前期課程／修士課程

(令和5年(2023)5月1日現在)

専攻名	コース名	入学定員	収容定員	現 員		
				1年次	2年次	計
理工学専攻	数 理 科 学 コ ー ス	308	616	2	3 (1)	5 (1)
	自 然 科 学 コ ー ス			※1 13 (3)	11 (1)	※1 24 (4)
	社会基盤デザインコース			※1 36 (4)	※2 40 (9)	※3 76 (13)
	機 械 科 学 コ ー ス			※2 75 (1)	63 (3)	※2 138 (4)
	応用化学システムコース			※4 49 (9)	※4 50 (8)	※8 99 (17)
	電気電子システムコース			※1 69 (2)	※1 75 (3)	※2 144 (5)
	知能情報システムコース			※4 55 (1)	※6 65 (8)	※10 120 (9)
	光 シ ス テ ム コ ー ス			※3 29 (3)	28 (3)	※3 57 (6)
計	308	616	※16 328 (23)	※13 335 (36)	※29 663 (59)	
生物資源学専攻	応用生命科学コース	39	39	22 (5)	※1 20 (10)	※1 42 (15)
	食料生物科学コース			21 (18)	11 (3)	32 (21)
	生物生産科学コース			7 (2)	6 (2)	13 (4)
	計	39	39	50 (25)	※1 37 (15)	※1 87 (40)

注1. () 内は女子を内数で示す。

注2. ※は外国人留学生を内数で示す。

● 博士後期課程

(令和5年(2023)5月1日現在)

専攻名	学位プログラム名	入学定員	収容定員	現 員		
				1年次	2年次	計
創成科学専攻	社会基盤システム系プログラム(学術)	47	47	2(1)	3	5(1)
	社会基盤システム系プログラム(工学)			※1 4(1)	2	※1 6(1)
	化学生命工学系プログラム			※1 4	※1 3(1)	※2 7(1)
	機械科学系プログラム			※5 6		※5 6
	電気電子物理科学系プログラム			3	2(1)	5(1)
	知能情報・数理科学系プログラム			※4 6(2)	※1 3	※5 9(2)
	生物資源学系プログラム			※1 1	※2 2(1)	※3 3(1)
	光科学系プログラム			※2 2	※1 3	※3 5
	計			47	47	※14 28(4)

注1. ()内は女子を内数で示す。

注2. ※は外国人留学生を内数で示す。

(4) 外国人留学生の現員

(令和5年(2023)5月1日現在)

国 籍	理工学部	生物資源産業学部	博士前期課程	博士後期課程	計
インド			1	4(1)	5(1)
バングラデシュ			2	3	5
マレーシア	2(1)		1(1)	2	3(2)
インドネシア				2	2
韓国	17(6)	3			20(6)
モンゴル				5(1)	5(1)
ベトナム	1	1(1)	1		3(1)
中国		1(研究生)	16(3)	15(2)	32(5)
台湾			9(2)	1	10(2)
ルワンダ				1	1
アメリカ				1	1
合計	20(7)	5(1)	30(6)	34(3)	87(17)
国の数	3	3	6	9	11

注. ()内は女子を内数で示す。

■ 理工学部の教育課程

○ 教養教育科目及び専門教育科目の所要単位数

科目等		コース・プログラム									
		数理科学コース	自然科学コース	デザイン・社会基盤コース	機械科学コース	応用化学コース	電気電子コース	知能情報コース	光システムコース	医光/医工融合プログラム	
教養教育科目	教養科目群	歴史と文化（「技術者・科学者の倫理」）					2				
		生活と社会（「キャリアプラン」）					2				
		自然と技術（「理工学概論」）					2				
		人間と生命（「医学概論」）					—				2
		歴史と文化（「技術者・科学者の倫理」以外から）									
		人間と生命（医光/医工融合プログラムは「医学概論」以外から）									
		生活と社会（「キャリアプラン」以外から）					※2				
		自然と技術（「理工学概論」以外から）									
	創成科学科目群	ウェルネス総合演習									
		グローバル科目					※2				
		イノベーション科目					2				4 ※3
		上で履修したもののほかイノベーション科目から					※2				
		地域科学科目					2				
	基礎科目群	上で履修したもののほか地域科学科目から					※2				
		SIH道場					1				
		基礎数学 ※1					8				
		基礎物理学 ※1			2				4		
	外国語科目群	基礎化学 ※1			2				—		
情報科学						2					
上記の条件を満たし、教養教育科目から修得する単位数	英語					6					
	初修外国語					2					
専門教育科目	上記の条件を満たし、教養教育科目から修得する単位数					39以上					
	学科共通科目（必修科目）					6					
	コース基盤科目（学科開設科目）	2以上	2以上	4以上	11以上	7以上	8以上	4以上	10以上	—	
	コース専門科目（必修科目）	10	22	45	48	51	42	38	38	—	
	プログラム専門科目（必修科目）	—	—	—	—	—	—	—	—	66	
	他コース専門科目等（上限：12単位 ※4）					2以上					
上記の条件を満たし、専門教育科目から修得する単位数					92以上						
合計						131以上					

※1 履修すべき授業題目は、コースごとに指定する。

※2 コースは6以上（教養科目群の5科目および創成科学科目群の3科目の合計8科目から3科目にわたって選択する。）
プログラムは2以上（教養科目群の5科目および創成科学科目群の3科目の合計8科目から1科目にわたって選択する。）

※3 プログラムは「起業を知ろう（2単位）」「ニーズ」からの医療機器開発入門（2単位）」の4単位を修得する。

※4 所属するコースまたはプログラム以外のコース専門科目から修得した単位は12単位を上限として卒業要件（専門教育科目の選択科目）に含めることができます。

○コース・プログラム毎の主な専門教育科目

コース・プログラム	主な専門教育科目
数理科学コース	数学基礎、数学基礎演習、計算機概論、プログラミング演習1、代数基礎1・2、基礎解析演習1・2、線形代数学演習1・2、複素解析1・2、確率・統計1・2、関数方程式1・2、代数学1・2、解析学1・2、幾何学1・2、応用数理1・2、計算機数学、プログラミング演習2、ネットワーク論、制御概論、数値計算法、最適化論、現象数理1、現象数理2、コンピュータ・グラフィックス基礎論、データベース基礎論、モデリング理論、数理科学演習、情報科学演習、雑誌講読
自然科学コース	物理学の基礎、化学の基礎、生命科学の基礎、地球科学の基礎、物理学基礎実験、化学基礎実験、生命科学基礎実験、地球科学基礎実験、力学、電磁気学1・2、解析力学、熱統計力学1・2、放射線科学、波動論、量子力学1・2、物性科学1・2、物理学実験1・2、相対性理論、無機化学1・2、有機化学1・2、有機機器分析、物理化学1・2、化学実験1・2、分析化学1・2、生物化学1・2、分子生物学、集団遺伝学、分子発生学、遺伝子工学、生命科学実験1～3、発生遺伝学、適応進化学、細胞機能学、生物統計学、細胞制御学、生命理工学、地層解析学、応用地形学、構造地質学1・2、地殻岩石成因論、地球環境変遷学、地球科学実験1～3、応用地質学、岩石解析学、自然科学セミナー、宇宙科学、分子化学反応論、生物有機化学、バイオテクノロジー特論、雑誌講読
社会基盤 デザインコース	社会基盤デザイン概論、建築物のしくみ、建設の歴史とくらし、構造力学1・2及び演習、建築計画Ⅰ・Ⅱ、土質力学1・2及び演習、建設材料学、水理学Ⅰ・Ⅱ及び演習、計画の論理、環境を考える、建築史、景観工学概論、コンクリート工学、計画の数理、生態系の保全、応用構造力学及び演習、建築製図1・2、解析力学概論、建設マネジメント、社会基盤実験実習、キャリアプラン演習、測量学、構造力学3及び演習、鋼構造学、地盤工学、鉄筋コンクリート力学、CAD演習、沿岸域工学、都市・交通計画、環境工学、景観デザイン、参加型デザイン、環境生態学、自然災害のリスクマネジメント、社会基盤設計演習、プロジェクト総合演習、河川工学、構造振動学、地震と津波、建築設計製図1・2、建築構造計画、計画プロジェクト評価、緑のデザイン、合意形成技法、測量学実習、建築の法規、建築環境工学、建築施工、建築設備工学、雑誌講読
機械科学コース	機械科学実験1～3、機械計測1・2、加工学1・2、基礎機械CAD製図、材料力学1・2、力学基礎1・2、熱力学1・2、メカトロニクス工学、電気電子回路、機械材料学1・2、機械力学1・2、機械設計1・2、自動制御1・2、プログラミング実習、流体力学1・2、機械設計製図、熱工学1・2、機械数値解析、計算力学、デジタルエンジニアリング、流体機械、バイオメカニクス、雑誌講読
応用化学 システムコース	基礎分析化学、物理化学序論、有機化学序論、基礎物理化学、有機化学1～4、基礎無機化学、分析化学、物理化学、無機化学、化学工学序論、化学工学基礎、物理化学演習、分離工学、材料科学、基礎化学実験、溶液化学、材料プロセス工学、高分子化学1・2、応用化学コース実験1・2、反応工学基礎、量子化学、機器分析化学、微粒子工学、有機化学実験法、化学工学演習、応用化学特別講義1～3、化学反応工学、電気化学、工業化学、自動制御、材料物性、物性化学、有機化学演習、反応工学演習、安全工学、地球環境化学、触媒工学、反応工程設計、雑誌講読
電気電子 システムコース	電気エンジニアリング入門、電気数学演習、電気回路1・2及び演習、電気磁気学1・2及び演習、半導体工学基礎、エネルギー工学基礎論、基礎制御理論、プログラミング基礎、電子回路基礎、電気電子工学基礎実験、情報通信基礎、過渡現象、電子物理学、電気機器1・2、電力系統工学、計測工学、制御理論、論理回路、電気電子工学創成実験、電気電子工学実験1～3、電子物性工学、電子デバイス、光デバイス工学、パワーエレクトロニクス、発電変電工学、照明電熱工学、高電圧工学、通信工学、デジタル信号処理、制御システム解析、電磁波工学、パルス・デジタル回路、プログラミング演習、電子回路設計、マイコンシステム設計、設計製図、電気エンジニアリングデザイン演習、電気施設管理及び法規、無線設備管理及び法規、電気電子工学特別講義、電気・電子材料工学、通信応用工学、集積回路工学、雑誌講読

コース・プログラム	主な専門教育科目
<p>知能情報コース</p>	<p>知能情報概論、コンピュータ入門および演習、プログラミング入門及び演習、アルゴリズムとデータ構造、信号処理、ソフトウェア工学、プログラミング方法論、情報通信理論、論理回路設計、画像工学、情報セキュリティ、生体情報工学、離散数学、電気回路及び演習、グラフ理論、コンピュータネットワーク、ソフトウェア設計及び実験、情報数学、マイクロプロセッサ、コンピュータアーキテクチャ、電子回路、知識システム、オートマトン、線形システム解析、数理計画法、システム設計及び実験、オペレーティングシステム、データベース、人工知能、最適化理論、機械学習、離散システム解析、コンピュータネットワーク演習、データマイニング、多変量解析、実験計画法、パターン認識、アルゴリズムとデータ構造実習、雑誌講読</p>
<p>光システムコース</p>	<p>光システムセミナー、プログラミング及び演習、光通信方式、光情報機器、画像処理、光デバイス、光の基礎、電気回路基礎及び演習、基礎光化学、電気磁気学、幾何光学、熱力学、波動光学、電子回路概論、線形システム論、応用光化学、光・電子物性工学、光学設計演習、レーザー工学、光応用数学演習、光応用工学実験1・2、光応用工学計算機実習、光情報処理、光導波工学、分子分光学、レーザー計測、マイクロ・ナノ光学、光科学・光工学特別演習、半導体ナノテクノロジー基礎論、コンピュータ入門、光学基礎演習、量子光学、非線形光学、AI応用、雑誌講読</p>
<p>医光／医工融合プログラム</p>	<p>微分方程式1、光応用数学演習、物理学基礎実験、統計力学、量子力学、熱力学、幾何光学、波動光学、光学基礎演習、アクティブ・ラーニング演習、光の基礎、分子分光学、基礎光化学、レーザー計測、基礎医学、臨床医学、先端医学、医療機器開発概論、アイデアから起業の成功へ、ニュービジネス概論、アイデア・デザイン創造、アントレプレナーシップ演習、世界のアントレプレナーシップから学ぶ、AI応用、アプリケーション開発演習、コンピュータ入門、プログラミング及び演習、研究室配属、医光インターンシップ、雑誌講読、微分方程式2、確率統計学、ベクトル解析、複素関数論、数値解析、離散数学、物理学の基礎、解析力学、物性科学1、物性科学2、化学—化学のしくみ—、化学の基礎、有機化学序論、有機化学1、有機化学2、有機化学3、有機化学4、基礎無機化学、無機化学、無機化学1、無機化学2、基礎分析化学、分析化学、分析化学1、分析化学2、基礎物理化学、物理化学、生物化学1、生物化学2、機器分析化学、材料科学、高分子化学1、高分子化学2、量子化学、反応工学基礎、化学反応工学、電気化学、材料物性、物性化学、基礎物理学・電磁気学概論、量子光学、非線形光学、レーザー工学、マイクロ・ナノ光学、光デバイス、応用光化学、光学設計演習、光・電子物性工学、光情報処理、光導波工学、光応用工学計算機実習、光応用工学実験1、光応用工学実験2、光通信方式、光情報機器、生体情報工学、分子生物学、集団遺伝学、分子発生学、遺伝子工学、発生遺伝学、適応進化学、細胞機能学、細胞制御学、バイオメカニクス、短期インターンシップ、実践力養成型インターンシップ、知的財産法入門、テクノロジーとビジネス、労務管理、生産管理、次世代事業創造入門、線形システム論、知識システム、人工知能、最適化理論、機械学習、データマイニング、アルゴリズムとデータ構造、信号処理、プログラミング方法論、情報通信理論、画像処理、情報セキュリティ、コンピュータネットワーク、電気回路基礎及び演習、電子回路概論、機械計測1、機械計測2、機械設計1、自動制御1、自動制御2、材料力学1、材料力学2、機械力学1、機械力学2、流体力学1、流体力学2、電子物理学、電子物性工学、電子デバイス、光デバイス工学、電気・電子材料工学、計測工学、制御理論、通信工学、デジタル信号処理、制御システム解析、パルス・デジタル回路、半導体工学基礎、基礎制御理論、電子回路基礎、情報通信基礎、過渡現象、論理回路設計、半導体ナノテクノロジー基礎論</p>

■ 生物資源産業学部の教育課程

○ 教養教育科目及び専門教育科目の所要単位数

科目等		コース	応用生命コース	食料科学コース	生物生産システムコース
教養教育科目	教養科目群	歴史と文化※	8 [#]	8 [#]	8 [#]
		人間と生命※			
		生活と社会※			
		自然と技術※			
		ウェルネス総合演習			
	創成科学科目群	グローバル科目	2	2	2
		イノベーション科目	2	2	2
		地域科学科目	2	2	2
	基礎科目群	SIH道場	1	1	1
		基礎数学	2	2	2
		基礎物理学	2	2	2
		基礎化学	2	2	2
		基礎化学実験	2	2	2
		情報科学	2	2	2
	外国語科目群	英語	6	6	6
		ドイツ語入門	2	2	2
		フランス語入門			
		中国語入門			
	計		33	33	33
専門教育科目	学科共通	必修	26	26	26
		選択必修	6	6	7
	コース専門	必修	12	10	15
		選択必修	32	34	28
	自由選択科目		10	10	10
	卒業研究		6	6	6
合計		125	125	125	

: 6単位は※を付した4科目のうち3科目から、2単位ずつ修得する

○ コース毎の主な専門教育科目

コース	主な専門教育科目
応用生命コース	生化学、生体高分子学、微生物学、生物物理化学、生物有機化学、バイオ医薬品生産工学、細胞情報学、バイオリクター工学、創薬学、免疫工学、微生物検査科学、バイオマス利用学、再生医学、医用工学、生命科学、物理化学実習、有機化学実習、微生物学実習、生化学実習、バイオマス実習、細胞工学実習、応用生命実習、応用生命演習Ⅰ・Ⅱ
食料科学コース	天然物資源化学、生物活性物質化学、機能食品学、食品化学、代謝生化学、分子病態学、栄養・口腔生理学、基礎生理学、食品衛生学Ⅰ・Ⅱ、食品工学、酵素化学、遺伝子工学、応用微生物学Ⅰ・Ⅱ、フードサイエンス、食料科学基礎実習、食料科学実習A～C
生物生産システムコース	植物生理学、生物資源環境学、農業科学総論Ⅰ・Ⅱ、森林科学、動物生産科学、水圏生産科学、植物生産科学、植物病理学、森林代謝学、応用昆虫学、水産資源学、植物細胞工学、生物多様性学、生産環境制御システム論、分子生物学、畜産加工学、地域・生物資源経済学Ⅱ、フードシステム論、食品マーケティング論、アグリビジネス起業論、生物生産システム実習A～C

■ 創成科学研究科の教育課程

○ 博士前期課程の授業科目および単位数

(1) 理工学専攻

・ 研究科共通科目

科目区分	授業科目	単位数			授業科目	単位数		
		必修	選択	自由		必修	選択	自由
研究科基盤教育科目	データサイエンス	2						
グローバル教育科目群	国際協力論		1		グローバルコミュニケーションB		1	
	グローバル社会文化論		1		グローバルコミュニケーションC		1	
	グローバルコミュニケーションA		1					
イノベーション教育科目群	科学技術論A		1		ビジネスモデル特論		1	
	科学技術論B		1		デザイン思考演習		1	
	科学技術論C		1		地域企業エクスターンシップ		1	
	科学技術論D		1		実践型地域インターンシップ		1	
	科学技術論E		1					

・ 理工学専攻共通科目

科目区分	授業科目	単位数		
		必修	選択	自由
	インターンシップ (M)		2	

・ 所属基盤コース専門科目

コース	授業科目	単位数			授業科目	単位数		
		必修	選択	自由		必修	選択	自由
数理科学コース	離散数学特論		2		数理大域解析特論		2	
	力学系数理特論		2		非線形現象解析特論		2	
	代数幾何学特論		2		確率計画法特論		2	
	組合せ最適化特論		2		函数方程式特論		2	
	代数構造特論		2		微分幾何学特論		2	
	現象数理解析特論		2					
自然科学コース	量子科学基礎理論		2		環境無機化学特論		2	
	宇宙素粒子科学特論		2		環境分析化学特論		2	
	宇宙線計測学特論		2		有機合成化学特論		2	
	量子物性物理学		2		物質化学特論		2	
	超伝導物質科学		2		有機金属化学特論		2	
	強相関物質科学		2		生物化学特論		2	
	固体イオニクス		2		発生情報科学特論		2	
	磁気共鳴科学		2		生命情報科学特論		2	
	物性計測学		2		集団遺伝学特論		2	
	極限環境物性学		2		構造地質学特論		2	
	環境物理化学特論		2		環境・防災地質学特論		2	
	グリーンケミストリー特論		2		岩石・鉱物学特論		2	
	有機機能性物質化学特論		2					

コース	授業科目	単位数			授業科目	単位数		
		必修	選択	自由		必修	選択	自由
社会基盤 デザイン コース	鋼構造学特論		2		事業継続計画(BCP)の策定と実践		2	
	耐震工学特論		2		行政・企業防災・危機管理実務演習		1	
	耐風工学特論		2		都市交通計画特論		2	
	斜面減災工学特論		2		都市・地域計画論		2	
	津波解析特論		2		プロジェクトマネジメント		2	
	地盤力学特論		2		都市交通システム計画		2	
	応用水理学特論		2		都市地域情報システム		2	
	鉄筋コンクリート工学特論		4		建築計画学演習		2	
	建設材料物性特論		2		建築系インターン		5	
	リスクコミュニケーション		2		流域水管理工学		2	
	危機管理学		2		ミチゲーション工学		2	
	メンタルヘルスケア		2		環境生態学特論		2	
	防災危機管理実習		1		グリーンインフラ論		2	
	行政・企業のリスクマネジメント		2					
機械科学 コース	生産システム論		2		振動工学特論		2	
	応用流体力学特論		2		材料工学		2	
	材料強度学特論		2		エネルギー環境工学		2	
	燃焼工学		2		熱力学特論		2	
	生産加工学		2		分光計測学		2	
	バイオメカニカルデザイン		2		ロボット工学特論		2	
	バイオマテリアル		2		デジタル制御論		2	
	機械材料物性特論		2		分子エネルギー遷移論		2	
	計算力学特論		2		非破壊計測学		2	
	流体エネルギー変換工学		2		アクチュエータ理論		2	
応用化学 システム コース	立体化学特論		2		分離工学特論		2	
	有機化学特論		2		材料科学特論		2	
	高分子化学特論		2		化学環境工学特論 ※		2	
	物理化学特論		2		科学技術コミュニケーション ※		2	
	量子化学特論		2		物質合成化学特論 ※		1	
	分析・環境化学特論		2		物質機能化学特論 ※		1	
	物性化学特論		2		化学プロセス工学特論 ※		1	
化学反応工学特論		2						
電気電子 システム コース	電力工学特論		2		電力システム特論		2	
	電磁環境特論		2		制御応用工学特論		2	
	制御理論特論		2		電子デバイス特論		2	
	高電圧工学特論		2		デバイスプロセス特論		2	
	デジタル通信工学特論		2		集積回路特論		2	
	光デバイス特論		2		プラズマ応用工学特論		2	
	ナノエレクトロニクス特論		2		光材料科学特論		2	
	回路工学特論		2		半導体工学特論		2	
	電子回路特論		2		生体工学特論		2	
	電気機器応用システム特論		2		フォトリソグラフィデバイス作製演習		2	
知能情報 システム コース	自律知能システム		2		ヒューマンセンシング		2	
	複雑系システム工学特論		2		自然言語理解		2	
	情報ネットワーク		2		言語モデル論		2	
	情報セキュリティシステム論		2		機械翻訳特論		2	
	画像応用工学		2		マルチメディア工学		2	

コース	授業科目	単位数			授業科目	単位数		
		必修	選択	自由		必修	選択	自由
光システム コース	光物性工学		2		ディスプレイ論		2	
	フォトリソグラフィ工学		2		視覚情報処理		2	
	ナノ光計測工学		2		多元画像処理		2	
	ナノ材料工学		2		バーチャルリアリティ技術 ※		2	
	光結晶設計工学 ※		2		光通信システム工学特論		2	
	光機能材料・光デバイス論1		1		フォトリソグラフィ工学		2	
	光機能材料・光デバイス論2		1		光システム工学論 ※		1	

注 授業科目欄の※印の授業科目は、所属基盤コース専門科目のみの授業科目を示す。

・教育クラスター科目

専攻	授業科目	単位数			授業科目	単位数		
		必修	選択	自由		必修	選択	自由
理工学専攻	計算数理特論		2		応用解析学特論		2	
	応用代数特論		2		数学解析特論		2	
	数理解析方法論		2		課題解決型インターンシップ(M)		4	
	微分方程式特論		2		アプリケーション実装実習		2	
	代数学特論		2					

・学位論文指導科目

科目区分	授業科目	単位数			授業科目	単位数		
		必修	選択	自由		必修	選択	自由
	理工学特別実習		4		応用化学システム特別輪講		4	
	数理科学特別輪講		4		応用化学システム特別研究		4	
	数理科学特別研究		4		電気電子システム特別輪講		4	
	自然科学特別輪講		4		電気電子システム特別研究		4	
	自然科学特別研究		4		知能情報システム特別輪講		4	
	社会基盤デザイン特別輪講		4		知能情報システム特別研究		4	
	社会基盤デザイン特別研究		4		光システム特別輪講		4	
	機械科学特別輪講		4		光システム特別研究		4	
	機械科学特別研究		4					

(2) 生物資源学専攻

・研究科共通科目

科目区分	授業科目	単位数			授業科目	単位数		
		必修	選択	自由		必修	選択	自由
研究科基盤 教育科目	データサイエンス		2					
グローバル 教育科目群	国際協力論		1		グローバルコミュニケーションB		1	
	グローバル社会文化論		1		グローバルコミュニケーションC		1	
	グローバルコミュニケーションA		1					
イノベーション 教育科目群	科学技術論A		1		ビジネスモデル特論		1	
	科学技術論B		1		デザイン思考演習		1	
	科学技術論C		1		地域企業エクスターンシップ		1	
	科学技術論D		1		実践型地域インターンシップ		1	
	科学技術論E		1					

・専攻共通科目

科目区分	授業科目	単位数		
		必修	選択	自由
	生物資源学研究	4		

・所属基盤コース専門科目

コース	授業科目	単位数			授業科目	単位数		
		必修	選択	自由		必修	選択	自由
応用生命科学 コース	創薬学特論		2		再生医学特論		2	
	細胞工学特論		2		微生物工学特論		2	
	生物化学工学特論		2		ケミカルバイオロジー特論		2	
	生体熱力学特論		2		細胞情報学特論		2	
	生物物理化学特論		2		微生物検査学特論		2	
	先端生命科学特論		2		応用生命科学特別実習 ※	1		
	環境生物学特論		2		応用生命科学特別講義 ※	1		
食料生物科学 コース	食安全学特論		2		食品評価特論		2	
	酵素化学特論		2		分子組織代謝学特論		2	
	応用微生物学特論		2		食品加工保蔵学特論		2	
	生体機能学特論		2		資源利用学特論		2	
	機能性食品学特論		2		食料生物科学特別実習 ※	1		
	栄養化学特論		2		食料生物科学特別講義 ※	1		
生物生産科学 コース	植物細胞工学特論		2		植物分子生物学特論		2	
	動物生殖工学特論		2		水産植物学特論		2	
	フィールド水圏生物学特論		2		農業市場学特論		2	
	畜産物利用学特論		2		森林生物学特論		2	
	植物保護学特論		2		発生生物学※		2	
	森林代謝科学特論		2		農業経済学特論		2	
	分子発生生物学特論		2		生物生産科学特別実習 ※	1		
	生産システム制御工学特論		2		生物生産科学特別講義 ※	1		
	分子生態学特論		2					

注 授業科目欄の※印の授業科目は、所属基盤コース専門科目のみの授業科目を示す。

・学位論文指導科目

科目区分	授業科目	単位数			授業科目	単位数		
		必修	選択	自由		必修	選択	自由
	応用生命科学特別演習	4			食料生物科学特別研究	4		
	応用生命科学特別研究	4			生物生産科学特別演習	4		
	食料生物科学特別演習	4			生物生産科学特別研究	4		

○博士後期課程の授業科目および単位数

(1) 創成科学専攻

・研究科共通選択科目

科目区分	授業科目	単位数			授業科目	単位数		
		必修	選択	自由		必修	選択	自由
	長期インターンシップ	2			国際先端技術科学特論A	1		
	企業行政演習	1			国際先端技術科学特論B	1		
	ビジネスモデル特論	1						

・研究科共通必修科目

科目区分	授業科目	単位数		
		必修	選択	自由
演習科目	創成科学特別演習	2		
研究指導科目	創成科学特別研究	2		

・学位プログラム専門科目

科目区分	授業科目	単位数			授業科目	単位数		
		必修	選択	自由		必修	選択	自由
研究指導科目	社会基盤システム特別研究	6			知能情報・数理科学系特別研究	6		
	化学生命工学系特別研究	6			生物資源学系特別研究	6		
	機械科学系特別研究	6			光科学系特別研究	6		
	電気電子物理科学系特別研究	6						

■ 大学院社会産業理工学研究部現員表

(令和5年(2023)5月1日現在)

学域	系名	教授	准教授	講師	助教	計	学域	系名	教授	准教授	講師	助教	計
理工学域	社会基盤デザイン系	8	8	4		20	生物資源産業学域	応用生命系	5	7	1		13
	機械科学系	13	9	3	2	27		食料科学系	4	5	3		12
	応用化学系	8	6	3	4	21		生物生産系	4	3	3	3*	13
	電気電子系	9	7	2	3	21		計	13	15	7	3	38
	知能情報系	6	4	6	2	18	※内2名は特任助教						
	数理科学系	7	6	4	1	18							
	自然科学系	11	8	4		23							
	学域長裁量		1			1							
	計	62	49	26	12	149							

理工学部と生物資源産業学部と 大学院の教育と研究

応用理数コース数理科学系・ 数理科学コース

science

数理科学系では、数理的概念と身の周りの自然現象に対する理解を深め、科学の最先端に触れながら、その背後にある数理的構造と性質を学習し研究できる人材の育成を目的として、数学と情報科学を軸にした教育カリキュラムを工夫し実施している。

数理科学系の学生は、1年次には応用理数コースに所属し、2年次に系へ配属される。それゆえに、1年次は自然科学系を志望する学生とともに、数理科学と自然科学の幅広い分野に触れながら学習をしてきた。令和4年度(2022)の入学者から、数理科学系は数理科学コースになり、1年次から数理科学コースに配属されることになった。これにより、自然科学に触れる機会は減少したが、数理科学に関しては、より広い分野を深く知る機会が増えたといえる。2年次、3年次は、代数学、解析学、幾何学、確率・統計、情報理論などを学年進行に応じて専門性を高めながら学んでいる。例えば、解析学であれば、2年次に基礎解析学演習1と2、複素解析1と2、2年次から3年次にかけて関数方程式1と2、3年次に解析学1と2のように段階を踏んで複素解析、微分方程式、測度論、フーリエ級数など解析学の幅広い分野を学ぶ。さらに、4年次には卒業研究だけでなく、学部と修士の6年一貫教育として数理解析特論や微分方程式特論など博士前期課程の科目を早期履修できるように計画されている。

卒業研究に関しては、3年次後期に研究指導教員への配属を決定するが、卒業研究に本格的に取り組む始めるのは4年次になってからがほとんどである。ここ数年の卒業研究のテーマは、「2連結グラフの2乗における完全独立全域木について、負のシュワルツ微分をもつ系について、

生存セル探索問題を解くプログラム作成、結び目理論と領域選択ゲーム、ロトカ・ヴォルテラ方程式を利用した競争の様子、未発症者を考慮した感染症モデル、内部の熱源が存在している場合の熱伝導方程式と初期値による影響、Markowitzモデルを用いた株式投資ポートフォリオ構築の実践、Girstmairの類数公式」など、各教員の専門と学生の希望を反映した様々な充実した内容になっている。また、毎年、一人当たり発表時間15分、質疑応答時間5分の卒業研究発表会が行われ、卒業研究の概要をまとめた「数理科学研究」が刊行されている。



数理科学コース情報実習室

毎年、1月頃になると多くの学生が情報実習室に集まり、情報交換をしながら卒業研究のまとめを行っている

学生の卒業後の進路としては、中学校・高等学校の数学教員や公務員が半数程度、他大学も含めた大学院への進学が3割程度、残りが一般企業への就職といった割合である。一般企業では、銀行などの金融関係や情報処理分野が中心である。数理科学コースでは教員を志望する学生が多いことから、教員採用試験の受審に向けて、勉強会を行ったり、主要な都府県の過去問や教職関連雑誌を購入したりするなど、学生への支援を行っている。

大学院創成科学研究科 理工学専攻 数理科学コースは、大学院総合科学教育部地域科学専攻の改組に伴い、令和2年度(2020)に設置され、令和3年度(2021)に一期生として4名が修了した。理工学専攻数理科学コースでは、代数学、解析学、幾何学などの数学の基礎分野から、数



数理科学コース資料室

過去問や雑誌などを自由に閲覧できる

値解析、離散数学、オペレーションズ・リサーチなどの情報科学や数学の様々な応用分野まで、幅広く基礎研究・応用研究を行っている。そして、数学や情報科学の教育・研究を通じて、論理的・抽象的思考能力を養い、高度な専門知識を生かして社会で活躍する人材の育成を目的としている。令和4年度（2022）末までの修了生のテーマは、「マルチレベルモデルによる生命表の作成、コセクター群と幾何学図形、非線形放物型方程式の粘性解の強比較原理に関する補題、複素射影平面上にある二次被覆における有効因子とその線形同値類について、警備体制が秘匿された警備ゲーム、楕円曲線を用いた同種写像暗号について、記号力学系における極限追尾性について」など、多様でありかつオリジナリティーがある専門性の高い内容になっている。

令和4年度（2022）から博士課程（後期）として知能情報・数理科学系プログラムが新設された。本プログラムでは、中長期的な産業界や社会ニーズを踏まえ、知能情報工学や数理科学に関する最新の基盤技術・基幹技術・先端技術を理解し、グローバルな視点から科学・技術・産業・社会の諸領域において新たな価値を創成できる高度専門職業人・研究者・起業家人材の養成を目的としている。

理工学科数理科学コースで取得可能な資格は、中学校及び高等学校の数学教員免許（一種）と高等学校の情報教員免許（一種）である。また、大学院では数学の一種免許を取得していれば、専修免許を取得可能である。専修免許は、大学院総合科学教育部時代には取得できない時期があったが、県内教育機関の求めもあり、現在は取得可能になっている。

教員組織と研究テーマ

教員組織としての数理科学コースは、数理情報講座、応用数理講座、数理解析講座の3つの講座で構成されており、各講座の具体的な研究テーマの概要は以下のとおりである。

数理情報講座：グラフの構造的性質とその応用に関する研究、微分可能力学系の位相的な性質に関する研究、組み合わせ問題を解くアルゴリズムに関する研究、複素射影平面上の曲線の特異点配置と埋込位相、時間発展するリーマン多様体上の幾何解析、可換環とその特異点のホモロジー代数的研究

応用数理講座：非線形現象の数理モデルと数理解析、関数方程式の安定性と分岐理論、オペレーションズ・リサーチにおける新たな数理モデルの開発および最適化手法の構築、非線形楕円型および放物型方程式の粘性解理論、曲面と離散曲面の微分幾何の研究

数理解析講座：パウルヴェ方程式を中心とする古典解析の研究、整数論および代数系の応用、高精度・高速数値計算手法の研究、非線形楕円型方程式の定性的研究、モジュラー形式と整数論、関数解析的手法による非線形微分方程式の研究、パターン形成に関する解析・数値計算手法の研究

数理科学コース教職員組織

(令和5年（2023）4月現在)

講座名	教職員名（着任年月）
数理情報	蓮沼 徹教授（2004.4）、守安一峰教授（1992.10）、白根竹人准教授（2018.4）、中山慎一准教授（1996.4）、國川慶太講師（2023.4）、松井紘樹講師（2021.10）
応用数理	小野公輔教授（1994.4）、村上公一教授（1989.4）、宇野剛史准教授（2008.4）、大沼正樹准教授（1998.4）、安本真士講師（2022.4）
数理解析	大山陽介教授（2016.4）、高橋浩樹教授（2013.8）、竹内敏己教授（1995.8）、深貝暢良准教授（1987.4）、水野義紀准教授（2009.4）、岡本邦也講師（1994.4）、坂口秀雄助教（1995.4）

応用理数コース自然科学系・自然科学コース

science

応用理数コース自然科学系・自然科学コースのカリキュラムでは、数学、物理学、生物科学、地球科学の各分野を専攻するようになっている。そこでは理学的な知識の基礎から専門までを深く修得し、また理工学部置かれたコースであるメリットを生かし、理学のみならず工学的観点から総合的かつ論理的なアプローチのできる能力人材の育成を目指している。そのため在学生は専門を超えて数理科学コースや他コースの講義も受講する機会が増えている。逆に幾つかの講義では、応用理数あるいは自然科学コース以外の学生が多く占める授業もある。これらの交流によって様々な現象を数学的な観点から見る事を学べ、諸現象の総合的に解明に必要な基礎的知識、論理的思考、情報技術、コミュニケーション能力など自然科学に関する能力を幅広く発展させられる事が出来るよう教育を行っている。そのため理学・工学的観点からの総合的かつ論理的なアプローチのできる能力人材の育成を目指している。

具体的には自然科学コースでは宇宙・地球から生物、さらには原子や素粒子の性質まで、全ての物質・生命に関わる現象を理論・実験を通して教育研究を行っている。ここでは理工学部という立場を活かして、既存の分野にとらわれることなく、幅広い視点を有する人材を育成するための教育と研究を行う。そのため卒業研究では、それまでに培われた高度な知識を活かし、実用に通じる技術の素早い修得が出来て世界に通用する人材の育成を行う。これらのため自然科学系では更に物理科学分野、化学分野、地球科学分野、生物科学分野の4分野を設けている。

● 物理科学分野

物理科学分野では、実験科目を通して、自然現象を正確に観察しながら、背景にある基本原理を探っていく。専門課程として、まず、力学、

電磁気学、熱統計力学などの基礎的な科目から物理の基礎概念を学び、それに基づき、量子力学、放射線科学、宇宙科学などの発展的な科目から、現代の自然科学について学ぶ。その上で、物質・宇宙・素粒子などに関する様々な課題を研究する。

物理科学講座のスタッフの専門はそれぞれ、井澤健一（素粒子理論模型、宇宙のインフレーション）、岸本豊（強結合超伝導体のエネルギーギャップの異方性の核磁気共鳴法による研究）、小山晋之（新奇超伝導体の超伝導発現機構に関する研究）、齊藤隆仁（超伝導体の核磁気共鳴）、中村浩一（リチウムイオン電池材料におけるイオン拡散に関する研究）、伏見賢一（宇宙暗黒物質探索）、真岸孝一（強相関電子系の核磁気共鳴）、川崎祐（強相関電子系における磁性と超伝導の核磁気共鳴による研究）、犬飼宗弘（固体核磁気共鳴法の新規な応用と装置開発）、折戸玲子（宇宙線物理学、放射線計測学）、久田旭彦（強相関電子系の物性研究）である。

● 化学分野

化学分野では、化学を使って持続可能な社会の維持のために、社会と共生する住みよい活気あふれる地域と未来社会を築くため、種々の社会的課題を解決できる実力を付けるべく、教育を行っている。先ず実験科目ならびに無機化学、物理化学、分析化学、有機化学などの基盤を教育研究する。

化学講座のスタッフの専門はそれぞれ、小笠原正道（立体選択的有機合成手法による遷移金属錯体の不斉合成法の開発とその応用）、三好徳和（新規有機合成手法の開発、新有機反応の開発）、山本孝（固体触媒科学、機能物質科学）、上野雅晴（グリーンケミストリー）、中村光裕（細胞生物学、細胞計測学）、山本祐平（環境中の重金属元素に関する無機化学・地球化学・環境化学・分析化学）である。

● 地球科学分野

地球科学分野では、地球環境問題の深刻化や、世界中で相次ぐ自然災害の猛威など、地球を舞

台にして進行している様々な現象を考えるために、地球の成り立ちから現在までの歴史の変遷を学び、将来に活かす教育研究を行っている。

地球科学講座のスタッフの専門はそれぞれ、安間了（海嶺沈み込みとマグマティズム、島弧・付加体の形成過程）、青矢睦月（変成岩の形成・上昇に関わるテクトニクス）、西山賢一（岩石の風化と地すべりに関する応用地質学的研究）、齋藤有（堆積学：堆積物の起源と挙動から読み取る環境変動および人間活動）である。

● 生物科学分野

生物科学分野では、生命現象について広い視野をもち、生体高分子レベルから個体レベル、さらに生物集団の進化レベルまで生命科学に関

する深い知識をベースに、社会の様々な分野で活躍できる人材の育成を目標としている。細胞を構成する物質の構造と機能について知り、それらの生体内での相互作用について学び、そのうえで細胞の振る舞いや情報の伝達のメカニズムや細胞分化のしくみ、さらに遺伝現象と進化の分子機構などの教育研究を行っている。

生物科学講座のスタッフの専門はそれぞれ、真壁和裕（ホヤを用いた初期発生メカニズムの分子・進化発生的研究）、松尾義則（適応進化の遺伝学的研究）、渡部稔（両生類胚を用いた初期発生の分子生物学的研究）、平田章（核酸関連タンパク質の構造生命科学、超好熱菌を用いた生命起源の研究）である。

自然科学コース教職員組織

（令和5年（2023）4月現在）

講座名	教職員名（着任年月）
物 理 科 学	井澤健一教授（2016.4）、岸本 豊教授（1987.10）、中村浩一教授（1996.4）、伏見賢一教授（1995.4）、真岸孝一教授（1998.4）、齊藤隆仁教授（1987.10）（教養教育院所属）、犬飼宗弘准教授（2014.10）、折戸玲子准教授（2010.4）、川崎 祐准教授（2002.6）、久田旭彦講師（2012.10）
化 学	今井昭二教授（1995.4）、小笠原正道教授（2016.4）、三好徳和教授（1994.4）、上野雅晴准教授（2015.4）、山本 孝准教授（2009.4）、中村光裕講師（2010.4）、山本祐平講師（2012.4）
地 球 科 学	安間 了教授（2018.4）、青矢睦月准教授（2012.9）、西山賢一准教授（2003.4）、齋藤 有講師（2022.4）
生 物 科 学	真壁和裕教授（2003.10）、松尾義則教授（1994.4）、渡部 稔教授（2004.4）（教養教育院）、平田 章准教授（2020.4）

社会基盤デザインコース

engineering

コースの教育

理工学部社会基盤デザインコースでは、昼間コース・夜間主コース共に、理学的・工学的観点から安全安心で自然と調和した持続可能な社会の構築に資する人材の育成を目的として、数学・物理・地球科学の理学と建設・建築・都市・環境・防災を融合的に学び、国・都市・地域の社会基盤（インフラ・建築物）のデザイン（計画・設計・施工・管理）に必要な建設工学のハードとソフトに関する幅広い理論と技術を習得できる教育プログラムを実施している。具体的な専門教育科目群としては、建設工学科時代と同様の構造力学・水理学・土質力学・計画学・材料学・環境学・測量学といった土木系科目に加えて、後述する建築士受験資格対応のための建築系科目があり、他にあまり類例を見ない多様な科目群のラインナップの下、学生の資格取得意欲とさまざまなキャリア・パスの形成プランを下支えしている。

創立75年以降の学部における教育プログラム編成での主立った改革事項を列挙すると、以下のとおりである。

○ JABEE 認定（昼間コース）

JABEE（日本技術者教育認定機構）とは、技術者教育の質的な同等性を国際間で相互に認定し合う協定であるワシントンアコード（平成元年（1989）～）におけるわが国の加盟団体（平成17年（2005）～）であり、大学など高等教育機関で実施されている技術者教育プログラムが、社会の要求水準を満たしているかを審査し、その水準を満たしている教育プログラムを認定する外部評価機関である。そこでは、高等教育の学士レベルに対応する技術者育成のための基礎教育に対して、1) 統一的基盤に基づく理工農学系大学における技術者教育プログラムの認定を行い、教育の質を高めることを通して、わが国の技術者教育の国際的同等性を確保する、2) 技術者の標準的な基礎教育として位置づけ、

国際的に通用する技術者育成の基礎を担うことを通じて、社会と産業の発展に寄与する、ことを目的としている。教育プログラムがJABEE認定されることで、そのプログラムの修了生は、修了時に「技術士補」の資格を得ると共に技術士第一次試験を免除され、直接「修了技術者」として実務修習に入ることができる。本コースでは、昼間コース教育プログラムに対して平成17年（2005）に最初にJABEE認定を受け、以降も継続中である。

○ スタディーズ方式（昼間コース）

2年次前後期を通じて土木系専門基礎科目（構造・水理・土質・計画・材料・環境各分野の必修科目）を一通り学修した後、3年進級時に学生は「建造物デザインスタディーズ」もしくは「地域環境マネジメントスタディーズ」のいずれかの履修方式を選択する。建造物デザインスタディーズは、主として構造・土質・材料に関する分野を中心に、社会資本を形成する多様な建造物を設計・構築・維持するための基礎的な工学技術を習得する。地域環境マネジメントスタディーズは、主として水理・計画・環境に関する分野を中心に、都市や地域の水・緑・野生生物・景観・交通など、人間生活に関わる環境をより良くするための工学技術を習得する。選択したスタディーズにより、3年次以降に学修する土木系専門応用科目の卒業要件や実験実習や設計演習の内容が異なることに加えて、研究室配属とも連動する。これにより、学生は自身の興味や関心、就職も見据えた将来志向に応じた科目履修が可能となり、学修に対する満足度も高まることが期待される。

○ 3年次後期からの研究室配属とPBL

PBL（Project Based Learning）とは、アクティブラーニングの一種で、課題解決型学習などと訳される。そこでは、学生自らが課題を設定し、さらにその解決法も自ら探索する中で問題解決能力を涵養していく学習方法とされ、本コースでは3年次後期に配当される「プロジェクト演習」が該当する。研究室ないしは指導教員単位で小グループを構成し、テーマ設定・調査計画の立案・調査の実施・結果の整理解析

と考察・成果発表（プレゼン）の全てを、学生が主体となって取り組む。本演習により身についた問題解決能力や技術的スキルは、卒論研究遂行の基礎力ともなる。演習の実施にあたっては教員から適切に助言を受けながらプロジェクトを遂行するため、3年後期開始時に研究室配属を決定している。

○ 建築士受験対応

平成20年（2008）の建築士法改正に伴い、建築士受験資格の学歴要件が変更され、国土交通大臣の指定する建築に関する科目（指定科目）の履修が求められることとなった。これに対して（旧）建設工学科では、夜間主コースの目的に「建築と防災に関する技術者の育成」を位置づけ、指定科目を開講し卒業要件に含めることとした。一方、昼間コースに対しては、希望者の受講を認めるが、卒業要件には含まないこととした。この運用は工学部の間は継続されたが、その後の受験生・学生の志望動向の変化や地元建築士会をはじめとする地域社会の要望等に応える形で、理工学部発足と同時に昼間・夜間主コース共に卒業要件に含めることとなった。なお、指定科目の開講にあたっては多くの非常勤講師を充当する必要に迫られ、コースの財政的負担を軽減するために、平成30年（2018）にコースとしてサポーター・カンパニー制度を立ち上げた。開講科目数の維持を通して学生の学修満足度の向上に多大なるご協力をいただいている。

一方、大学院の教育については、学部教育を基礎として社会基盤の持続可能な発展についての論理的な分析能力と課題探求・問題解決能力をさらに高めると共に、社会の変化に柔軟に対応できる自立的な応用力と創造力、さらには課題解決に向けて研究成果を国際的に発信する能力を磨き、地域の発展に主体的に貢献できる人材の育成を目的として、高度な専門知識の講義に加えて、実践的な課題設定と能動的な課題解決プロセスの探求が求められる演習・実習が開講されている。令和2年（2020）に新たに設置された創成科学研究科修士課程（後に博士前期

課程）では、幅広い視野と高い専門性を兼ね備えた人材養成を目指して、従来型の学問体系に基づく基盤教育に加え、研究に基づく分野横断型教育が導入された。具体的には、分野横断型教育の枠組みとして13の教育クラスターが設けられ、社会基盤デザインコースの学生はこのうち「防災・危機管理」「地域開発」「環境・エネルギー」「環境共生」のいずれかのクラスターを選択し、基盤教育とは異なる枠組みで自身の研究に関連する科目を履修することが求められている。

教職員組織と研究テーマ

本コースは、土木工学と建築学を融合させた新たな建設工学分野として、「安全で豊かさを実感できる持続可能な社会環境の構築」を理念とし、「持続可能な社会のための基盤づくり」、「自然と共生するエコシステムデザイン」および「災害に強い地域づくり」をメインテーマとして、自然災害がもたらすリスクと人・社会がもたらすリスクの両者に柔軟に対応できる社会のデザインを目標に研究を進めている。本コースは、構造・材料、防災科学、地域環境の3講座から構成され、各種社会基盤（構造物・建築物・社会システム）のデザイン（計画・設計・施工・管理）各段階における基礎的研究から、国・自治体・企業等との共同・委託研究を含む応用的・実用的研究まで幅広くカバーしている。現在の主要な研究テーマを以下に列挙すると共に、本コースに所属する教職員を表に示す。

構造・材料講座：

（構造工学） 構造解析及びシミュレーション、地震観測網、情報技術の工学分野への応用・制御、鋼橋の部材・継手の性能評価および構造合理化、構造物の長寿命化に資する補修・補強工法の開発、既設橋の健全度評価

（風工学） 構造物の耐風性、局所地形と風環境、数値風洞、突風災害の発生メカニズム、市街地を対象とした風力発電

（コンクリート工学） 可視化実験手法を用いたコンクリートの流動解析、性能照査型施工設計方法、フライアッシュの有効利用、IoTを利用

したコンクリート施工性能評価、弾性波を利用した非破壊試験法によるコンクリート部材の劣化診断・品質評価、超音波法によるプレストレス評価、透気試験によるコンクリート表層の品質・耐久性評価

(維持再生工学) コンクリート構造物の耐久性評価、コンクリート構造物の電気化学的補修工法、コンクリート構造物の非破壊検査手法

防災科学講座：

(防災レジリエンス) 巨大地震による広域地盤変動、中国淮河の流域治水及び遊水地利用、要配慮者利用施設の土砂災害時の対応、事業継続マネジメント、企業防災・危機管理

(河川・水文) 水域周辺の生息場基盤の形成、構造物周辺の流れと局所洗掘、水理構造物の破壊プロセス、森林流域の水質保全機能、森林の洪水低減・保水機能、植物の蒸散作用を活用した「緑のカーテン」

(地盤工学) 地盤の支持力（支持力、遠心模型実験）、地盤変状モニタリング装置の開発、地盤の変形と破壊強度

(地震工学) 海溝型巨大地震の発生過程、津波予測の高度化、地震津波被害の軽減

(建築計画) 木構造建築物の耐震化、集約型都市構造の構築、建築・都市防災の推進、免震建

築物、伝統的木材建築物、建築物の耐震設計、高齢者や障がい者の防災対策

地域環境講座：

(都市デザイン) 地区レベルの交通計画、都市の交通需要管理、自転車利用空間の設計、建設工事の調達システム、建設工事における科学的計画・管理技法の開発、往来による主体・地域変容論、場所性の存亡論、祭事・地域の相互関係論

(都市・地域計画) 交通シミュレーションシステムの開発、交通管理、交通安全対策、環境保全と防災に配慮した土地利用計画、ICTを用いた都市計画・都市設計支援システム

(生態系管理工学) グリーンインフラの評価と社会実装、二次的自然の保全・管理、生態系アセスメントの方法論、トキ野生復帰に向けた自然再生シナリオの作成と地域定着、アカテガニを指標とした都市公園の生態学・社会学的評価、鮎に注目したダム下流における生態系サービスの評価

(環境衛生工学) 沿岸生態系の修復・再生、環境学習・防災学習の手法、地震津波防災、人間活動が水環境に及ぼす影響の定量化、沿岸域やダムを対象とした水環境修復技術としての環境予測モデルの開発、四国防災八十八話普及・啓発、大学BCP

社会基盤デザインコース教職員組織

(令和5年(2023)4月現在)

講座名	研究室名	教職員名(着任年月)
構造・材料	構造工学	中田成智准教授(2017.9)、森山仁志講師(2022.4)
	風工学	野田 稔教授(2023.4)
	コンクリート工学	橋本親典教授(1997.4)、渡辺 健准教授(2000.10)
	維持再生工学	上田隆雄教授(1996.4)
防災科学	防災レジリエンス	蔣 景彩教授(1996.4)、湯浅恭史講師(2018.4)
	河川・水文	武藤裕則教授(2010.11)、田村隆雄准教授(2004.4)
	地盤工学	上野勝利准教授(1998.10)、堀越一輝講師(2023.4)
	地震工学	馬場俊孝教授(2015.1)、白山敦子講師(2020.4)
	建築計画	小川宏樹教授(2016.4)、金井純子講師(2019.4)
地域環境	都市デザイン	滑川 達准教授(2000.10)、森田棕也講師(2020.9)
	都市・地域計画	奥嶋政嗣教授(2008.12)、渡辺公次郎准教授(2003.10)、兵頭 知准教授(2023.4)
	生態系管理工学	鎌田磨人教授(1998.4)、河口洋一准教授(2009.4)
	環境衛生工学	上月康則教授(1996.4)、山中亮一准教授(2007.4)、松重摩耶助教(2022.4)
技術職員(本コース関係)		石丸啓輔技術専門職員(1991.1)、河村 勝技術専門職員(2009.4)、木戸崇博技術専門職員(2002.4)、源 貴志技術専門職員(2013.4)、小池崇代技術補佐員(1996.12)、佐藤智子技術補佐員(2012.6)、武市加代子技術補佐員(2020.2)



ワークショップによる地域づくり



測量実習



河川調査



地域環境づくりに関する実習



干潟調査



建設工事現場の見学



建築サークルの活動



高大連携模擬授業

機械科学コース

engineering



機械棟の外観

機械科学コースの教育

情報産業の発展や持続可能な社会の実現など、世界情勢は急速に変貌している。そのような中でグローバルな活躍をするためには、個々の技術だけでなく社会全体を見とおす能力がなければ健全な社会を創出することができない。その一方で、従来からある体系化された機械工学の重要性は失われておらず、新たな産業の創成に際してむしろその重要性はさらに増しているといえる。

機械工学とは、社会の中で人間が発揮する能力・行為を、人間に代わって、あるいは人間と共に実現する機械システムを考案・設計・製作し、それを作動させ、また管理・評価するために必要な学問である。工学系分野の中でも機械工学の活躍分野は非常に多岐にわたっており、今も、そしてこれからも様々な社会活動や産業の基盤を支える役割を担っている。

本コースにおいては、我が国の工業技術力を維持し発展させ、そして世界をリードする機械技術者の育成を目指し、社会人としての健全な使命感、国内外で通用するコミュニケーション能力、急激な技術革新に対応できる生涯学習能力、広範囲にわたる科学的・専門的知識と技術の修得、その応用による問題解決能力、さらには、独創性豊かな研究・開発能力を有する機械技術者の養成を目指している。

この目標を達成させるために、本コースが用意した教育の主な内容を以下に示す。

(1) 導入教育

入学後いち早く科学や機械工学への関心を持たせるために、1年前期にSTEM概論、STEM演習及び機械科学実験1を配置している。学科共通科目であるSTEM概論では、全コースの教員が理工学の様々な分野の研究に関するトピックを紹介し、入学生の学習に対する動機付けを行うと共に、広い視点を養っている。一方、STEM演習では、高校の数学・物理と大学の専門科目とを円滑に接続させるべく、材料力学を題材とした力学の初歩的な考え方を学ばせている。これに加え、機械科学実験1において、エンジンの分解・組立、引張試験、機械加工などを体験させ、機械工学に対する動機付けを与えて、以後の学習への意欲を涵養している。

(2) 工学に関する基礎知識および基礎技術

工学に対して数学と物理は基礎になる学問である。機械工学の専門科目を履修する上で最低限必要とする基本的な数学（線形代数学Ⅰ、Ⅱ、微分積分学Ⅰ、Ⅱ）および物理の概念（力学概論、電磁気学概論）を1年次の教養教育の必修科目として配置している。これを基礎として2年以降に、より高度で専門的な数学（微分方程式1、2、ベクトル解析、確率統計学、複素関数論、微分方程式特論）や物理学（物理学基礎実験、量子力学）を学科共通科目として配置している。

(3) 機械工学に関する基礎知識、応用力

機械工学に関する専門科目は、材料分野（材料力学1、2、機械材料学1、2、計算力学、[応用理数コース]物性科学1、2）、機械力学分野（力学基礎1、2、機械力学1、2、機械数値解析、[応用理数コース]波動論）、流体分野（流体力学1、2、流体機械、バイオメカニクス）、熱分野（熱力学1、2、熱工学1、2）、設計・加工分野（加工学1、2、機械設計1、2）及び計測制御分野（機械計測1、2、自動制御1、2、メカトロニクス

工学、電気電子回路、デジタルエンジニアリング)の6分野と実験科目(機械科学実験1~3、プログラミング実習、基礎機械CAD製図、機械設計製図)を1年次から系統的に配置している。理工学部への改組に際し、機械工学に関わる技術者として最低限必要な科目を必修化している。そのため、理工学部全コースの中で必修科目率が最も高いカリキュラムである点の特徴の一つである。また、必修の講義科目は、全科目で2クラス体制とし、各科目2名の教員が担当する手厚い教育体制も本コースの特徴である。

(4) 英語教育

1年および2年で開講される教養科目の英語および初修外国語の履修に続いて、2年次および3年次の技術英語入門と技術英語基礎1を配置し、機械技術に必要な英語による読解力、表現力を高めるため、工業英語の読み方および技術レポートの書き方を養成している。さらに3年後期には、5から6名の少人数で機械技術論文の講読を行う技術英語基礎2を配置している。これに加え、4年次の卒業研究では海外の研究論文の講読による専門的研究課題についての理解力を養っている。

(5) 自律的・継続的学習能力

多くの講義科目では、Webを利用した講義資料の事前配付、講義動画の配信、オンラインでの演習の実施などを行い、学生の自主的な学習をサポートしている。また、実験・実習を通して自らが主体的に学習に取り組む姿勢を養うほか、卒業研究を通じて自ら研究を企画し実施することにより、定められた計画にしたがって継続的に行動する能力を育成している。

(6) 技術者としての社会的責任

技術者として社会に果たすべき役割を自分で考え、機械技術が社会に果たすべき責任を認識させるため、1年前期に理工学概論(機械科学系)を配置し、機械技術者を取り巻く今日の社会環境や技術動向を入学直後に学び、機械技術者を目指す者が社会的な動向に興味を向ける

きっかけを与えている。さらに、3年次後期には、講義科目「技術者と科学者の倫理」を配置し、技術者としての倫理観と行動規範を持って多様化した社会の中で自分の技術を活かす能力を、理論と実習の形式で育成している。

これらの学部教育を通じ、知識の理解を高めさせるとともにそれを応用して機械システム的设计・開発に応用できる能力、事実を観察して物事の本質を見ぬく力とそれを科学的に分析する基盤的な能力を育成し、卒業研究や大学院での研究を遂行する基盤的な能力を育成している。

(7) 博士前期課程の教育

近年、博士前期課程の進学希望者は増加の一途をたどっている。最近では、学部卒業生の6割以上が大学院博士前期課程に進学し、研究活動を行っている。

大学院博士前期課程では、主に研究にもとづいた教育を行っている。大学院での講義はこれを補助する立ち位置であり、機械工学に関する発展科目に加え、理工学専攻の講義科目を研究分野毎に大まかに分類した科目(教育クラスター科目)の中から、自らの研究テーマに即した講義を受講させ、自らの研究テーマを俯瞰的に見る能力も養っている。また、博士前期課程の学生は、国内外で活発に学会発表を行っており、専門知識の修得と共に国内外で通用するコミュニケーション能力を育てている。

教職員組織と研究テーマ

機械科学コースでは、新素材の設計開発、構造計算の高速化や構造物の健全性などを取り扱う材料科学講座、流体力学、熱力学、物理学などをベースとして省エネルギー技術、新エネルギー技術、再生エネルギー技術の開発、力学環境と生体システムの解明などを取り扱うエネルギーシステム講座、機械システムの運動解析や計測制御を行い性能を向上させるための技術および理論を取り扱う知能機械学講座、および設計・生産・機械システムの維持管理に関連する幅広い分野を対象とした研究開発を行う生産システムの4つの講座を配置し、機械工学を基盤

とした様々な研究を行っている。これらの講座においては、従来からある伝統的な機械工学分野の研究のみならず、時代の要請に応じた物理学、電気電子工学、化学、光学、医学などにまたがる幅広い分野のテーマを取り扱っていることが大きな特徴である。

これら各講座における現在の主要研究テーマと所属する教職員を表に示す。

材料科学講座：超音波ガイド波および赤外線サーモグラフィを利用した非破壊計測技術に関する研究、セルロースナノファイバー（CNF）の抽出ならびにグリーンコンポジットの特性評価に関する研究、銅合金、アルミニウム合金三重結晶の変形に関する研究、レーザー照射を用いたSiCやダイヤモンドへのオーミック電極形成に関する研究、Ni基合金の組織制御に関する研究、機械学習手法のCAE分野への適用を見据えた接触探索アルゴリズムの開発や要素積分の高精度・高効率化に関する研究など。

エネルギーシステム講座：ターボ機械の性能向上に関する研究、気液・液々二相流及び沸騰・溶融・凝固といった相変化を伴う熱流動現象に関する研究、突起、円管、混合層の遷移に関する研究、境界層や乱流の複雑さ解析と情報量解析に関する研究、熱電変換システムやニオブ金属を用いたチタンアルミ金属間化合物の傾斜機

能化に関する研究、レーザー誘起ブレイクダウン分光法に関する研究、ディーゼルエンジン、バーナ燃焼炉、ガスタービンなどの燃焼に関する研究、骨、軟骨、血管、肺などの機能やそのメカニズムに関する研究、各種電池など固体イオンクス材料開発及び量子ビームを用いた電子・結晶構造に関する研究など。

知能機械学講座：実稼働応答から振動源となる非定常加振力の推定や簡易的に使える振動制御装置に関する研究、カメラを用いた無人航空機の自動制御や操縦のためのジェスチャ認識、CT画像を用いた人形浄瑠璃のデジタルアーカイブ、閉鎖空間内での空中作業を目的とした無人航空機の開発や有人マルチコプタの開発、微振動刺激による骨系細胞の活性促進に関する研究、空気圧駆動によるリハビリテーションやパワーアシストなどの人間親和性の高いロボットシステムの開発など。

生産工学講座：放電加工を用いた複雑穴形状の創成に関する研究、切削、研削・研磨などの機械加工を用いた各種材料の加工に関する研究、テラヘルツ計測や非線形光学顕微鏡に関する研究、ラマン散乱分光法を用いた各種計測技術に関する研究、薄膜の残留応力および回折弾性定数測定に関する研究、表面改質材の疲労特性・エロージョン特性に関する研究など。

機械科学コース教職員組織

(令和5年(2023)4月現在)

講座名	教職員名(着任年月)
材料科学	岡田達也教授(1995.10)、高木 均教授(1984.4)、西野秀郎教授(2004.4)、大石篤哉准教授(1990.4)、アントニオノリオナカガイト准教授(2011.4)、石川真志講師(2015.3)、久澤大夢助教(2017.5)
エネルギーシステム	一宮昌司教授(1987.4)、太田光浩教授(2012.4)、木戸口善行教授(1997.4)、出口祥啓教授(2010.3)、長谷崎和洋教授(2013.4)、松本健志教授(2015.4)、大石昌嗣准教授(2016.4)、越山顕一朗准教授(2018.10)、重光 亨准教授(2006.4)、名田 譲准教授(2010.11)、草野剛嗣助教(1996.4)
知能機械学	高岩昌弘教授(2015.4)、日野順市教授(1984.4)、佐藤克也准教授(2009.3)、三輪昌史准教授(2007.4)、浮田浩行講師(1995.10)
生産工学	石田 徹教授(2011.1)、安井武史教授(2010.8)、米倉大介教授(1999.4)、溝渕 啓准教授(1999.4)、南川丈夫准教授(2016.6)、日下一也講師(1995.4)

実習の様子



マシニングセンタ



エンジンの分解・組立



旋盤加工



引張試験



溶断

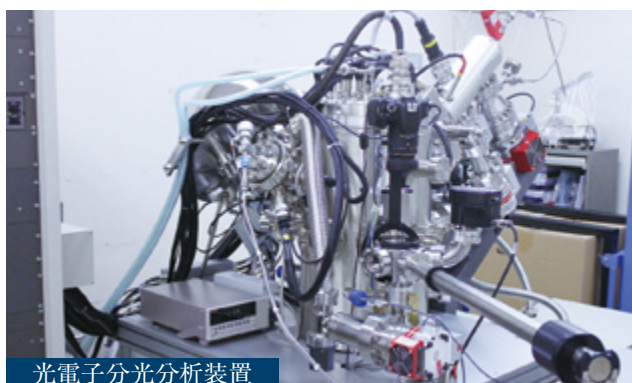


設計・製図

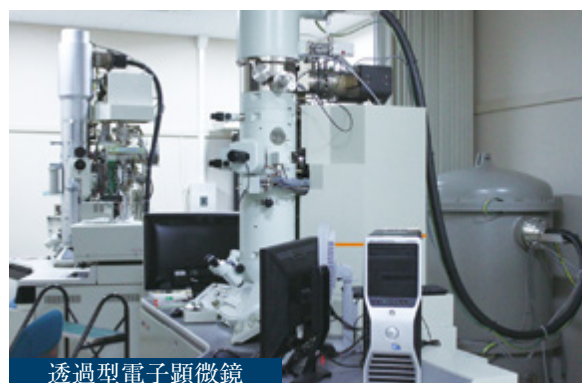
学生実験の様子



制御実験



光電子分光分析装置



透過型電子顕微鏡

応用化学システムコース

engineering

コースの教育

応用化学システムコースは、生活（理学）から産業（工学）に至る多様な分野に要求される素材提供に関わる化学について学修する分野である。そのために、全学生が備えるべき基礎学力を教授する理学的化学と各専門分野で必修となる工学的化学を明確にすることにより、理工学を意識した人材を養成する。理工学各分野の基礎知識とともに、物質を原子・分子のナノスケールサイズで捉え、理解しようとする先端化学の領域とその応用に関わる基礎化学分野、つまり理学的化学と、化学反応プロセス、新材料創出、新エネルギー創出、資源環境等に関する工学的化学の融合に基づき、物質生産と社会の抱える諸問題に化学の観点から解決に取り組むための高度な知識を教授する。そのために、物質の分子・反応設計から製造プロセスにわたる基礎から応用に至る幅広い知識と技術を習得させる教育を行い、人間と自然が共存する新しい豊かな社会に向かって行動・貢献する人材を育成する。

上記の目標を達成するため、各種の高機能性物質材料の分子設計と合成手法の開発に関する物質合成化学講座、物質の構造と機能の実用的応用の基礎となる集合状態の特性を微視的立場から解明する物質機能化学講座、ならびに化学工業における製造プロセスの開発と装置プラントの設計、保全に関する化学プロセス工学講座が、それぞれ相互に協力して物質の分子設計から製造工程にわたる広範囲の教育・研究を行っている。カリキュラムの編成にあたっては、基礎から応用までの専門知識を系統的に体得するとともに、豊かな人格、幅広い教養および倫理観を身につけ、自発的に問題を解決する能力や、創造性、表現力、コミュニケーション能力を備えた化学者・化学技術者を養成することを目的としている。

1年次では歴史と文化・人間と生命・生活と

社会・自然と技術・ウェルネス総合演習などの教養科目群と、創成科学科目群、基礎科目群および外国語科目群からなる教養教育科目のほか、専門課程への導入教育として、「STEM概論」および「STEM演習」が開講される。数学と物理の基礎および物理化学・有機化学・無機化学・分析化学・化学工学の基礎に関わる諸科目は、どの分野に進む場合でも専門基礎として必要であるため、主として1年次から2年次にかけて必修科目として組み込まれている。

物質合成化学・物質機能化学・化学プロセス工学の3つの分野にわたる専門選択科目は、主として3年次から4年次に開講される。また、各分野における最新の学問の進歩に対応するため、学外の専門家による特別講義が集中講義として開講される。実験科目はすべて必修であり、基本的な実験手法を身につけるとともに、講義・演習で学習した内容を、実験を通じて体得することを目標としている。

専門教育科目で学ぶ化学技術は産業と密接に関連している。産業界において化学者・化学技術者は、産業災害を防ぎ、人間の健康と地球環境との調和を図ることが重要な役割であることを認識する必要がある。そのため、「安全工学」、「地球環境化学」などの科目の中で、有害物質・危険物の取り扱いや、災害防止、環境問題などについて様々な観点からの講義が行われる。また、科学者・技術者として必要になる価値観、倫理観を身につけるための科目「技術者・科学者の倫理」が教養教育科目の必修科目として開講される。社会的・職業的自立に向けた就業力を育成するために「キャリアプラン」が教養教育科目の必修科目として開講され、産業の現場で実習を行う「短期インターンシップ」（学外学習）についても選択科目としての単位が認められる。さらに4年次の専門選択科目として開講される「ニュービジネス概論」や2年次の学科共通科目として開講される「労務管理」、「生産管理」などの一連の科目により、産業界への視野を広め、経営や起業について学ぶことができる。

4年次進級を認められた者は各研究室に配属

され、各自の研究テーマについて研究実験または理論研究を行い、その成果を自力で卒業論文にまとめるよう指導を受ける。そのため、各研究室では、海外の学術文献の読解力を身につけるため原著輪講（雑誌講読）に力を入れている。卒業論文発表会は学部課程の最終試験を兼ねており、専門学会での学術発表が行えるレベルを目標とする。

なお、以前の化学応用工学科では夜間主のカリキュラムや進級要件などは昼間主と一部異なっていたが、応用化学システムコースでは、夜間主と昼間主のカリキュラムや進級要件などはすべて同じとなっている。また、化学応用工学科では4年次への進級要件と卒研配属要件が別々に制定されていたが、応用化学システムコースではこれらの区別はなくなり、4年次へ進級すなわち卒研配属となった。

教職員組織と研究テーマ

応用化学システムコース各講座の教職員組織を以下の表に示す。また、各大講座の令和4年度の主要研究テーマは以下の通りである。

物質合成化学講座：医薬農薬合成方法の開発を志向した複素環化合物の不斉合成反応の開発、不斉触媒反応の開発、1,3-双極性環状付加反応の活性化方法の開発高分子のエステル交換反応を利用した共重合体の連鎖制御と連鎖解析、高機能ポリマー材料の研究開発に役立つNMR分光法の方法論（Diffusion-ordered NMR）、水素結合を利用した立体特異性ラジカル・アニオン重合、溶媒和イオン液体による安定化を利用したカチオン重合、生分解性・生体適合性を指向した高分子の合成、バイオマス由来高分子の合成環境に調和した有機合成手法の開発、酵素類似機能を有する有機分子触媒の開発、高分子固定化触媒の開発、可視光LEDを利用したフォトリドックス触媒反応の開発、立体選択的分子変換を実現する不斉触媒の開発、 π 電子系有機化合物の反応性と機能の開拓、発光性有機分子の創製と応用（バイオイメージング・蛍光センシング・キラル発光）、光を用いた癌治療法の開発。

物質機能化学講座：分離分析法を用いる平衡・速度論解析、平衡反応に基づく分離分析のシミュレーション、ミセルを分離媒体に利用する研究、ポータブル比色計と現場分析支援システムの開発、トラックエッチ膜フィルターを用いる電気化学センサの開発、非酵素型電極触媒を用いるバイオセンサ数万～数10万気圧におよぶ高圧力下の物性や物質機能、熱電物質や希土類半導体、ナノ物質などの光学的研究（光物性）、高圧下メタンハイドレートや高圧氷の分光研究国際宇宙ステーションでのタンパク質結晶化実験、タンパク質やコロイド粒子などナノ粒子の結晶成長と結晶構造解析、放射光を利用したタンパク質結晶構造解析発電プラント配管内壁保護に有効な皮膜形成アミン類の水熱反応挙動の解明と制御、広い意味でのナノ狭小空間（リン脂質二分子膜、包接水和物、超臨界流体など）の分子シミュレーション体内物質リアルタイムモニタリングを可能にする微細微小バイオセンサの開発、機能性薄膜形成及びその評価、新規バイオマテリアルの開発、水質浄化を目的とした低環境負荷吸着材の開発、層状水酸化物ナノシートとグラフェンの合成と応用。

化学プロセス工学講座：ワイドギャップ酸(窒)化物・可視光励起酸窒化物蛍光体・リチウム電池正極材料・燃料電池インターコネクタ・ゼロ熱膨張材料・熱電変換材料の合成と（放射光）X線分光法・X線回折法・紫外可視分光法・第一原理分子軌道計算等を用いた構造化学的評価ナノポーラスカーボンの調製とその特性評価、炭素材料への気相吸着に係る吸着機構に関する研究、非線形反応と協同現象の科学に関する研究レドックスを利用した化成品合成触媒の開発、リンの新資源開発と高機能化、水素エネルギーキャリアの合成と利用のための固体触媒の開発水素高選択性パラジウム薄膜の形成、ゼオライト膜の成膜とガス透過機構の解明、マイクロ研磨加工を施した金属面による強制流動沸騰系での伝熱促進。

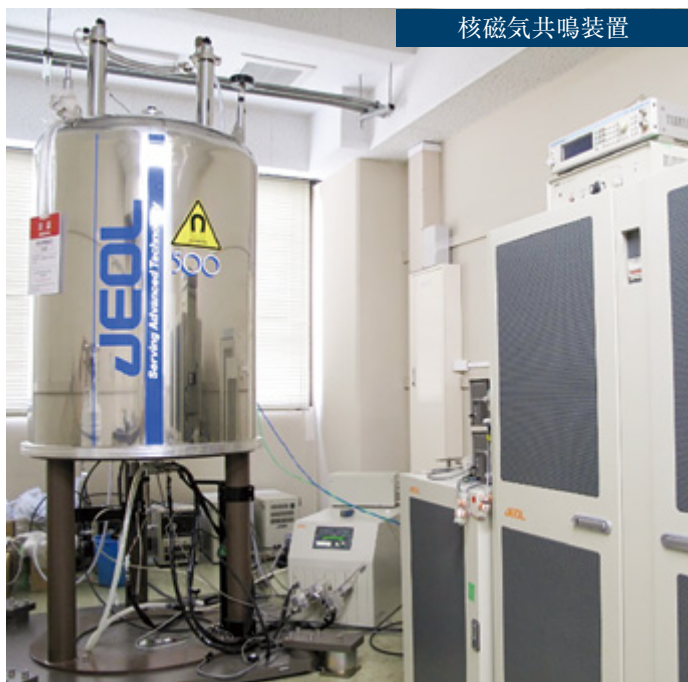
応用化学システムコース教職員組織

(令和5年(2023)4月現在)

講座名	教職員名 (着任年月)	
物質合成化学	A-1	西内優騎講師 (1996.4)
	A-2	右手浩一教授 (2006.11)、平野朋広教授 (1999.4)、押村美幸講師 (2010.10)
	A-3	南川慶二教授 (1995.4)、荒川幸弘准教授 (2013.4)、八木下史敏准教授 (2014.5)
物質機能化学	B-1	高柳俊夫教授 (2011.11)、水口仁志准教授 (2015.9)
	B-2	岡村英一教授 (2015.4)、鈴木良尚准教授 (2000.6)、吉田 健講師 (2009.4)、野口直樹助教 (2017.4)
	B-3	安澤幹人教授 (1987.4)、倉科 昌助教 (2006.5)
化学プロセス工学	C-1	森賀俊広教授 (1991.4)、村井啓一郎准教授 (2001.7)、堀河俊英准教授 (2004.4)
	C-3	杉山 茂教授 (1988.4)、霜田直宏助教 (2018.4)
	C-4	加藤雅裕教授 (1995.4)、花田隆文助教 (2023.4)
職員	上田昭子技術職員 (2008.4)、桑原知彦技術職員 (2011.4)、山下陽子技術職員 (2012.4)、井本朗暢技術職員 (2016.4)、東日出美技術職員 (2021.10)、岡山恵美子技術職員 (1982.10)	



令和4年度(2022)卒業式当日の教職員・卒業生・修了生の集合写真。化学生物棟前にて。



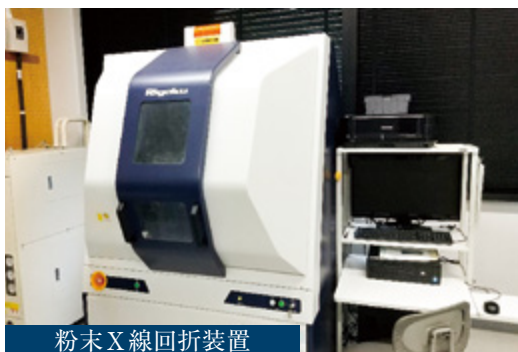
核磁気共鳴装置



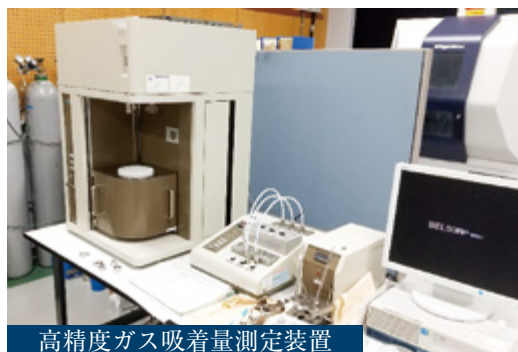
顕微赤外分光光度計



顕微ラマン分光装置

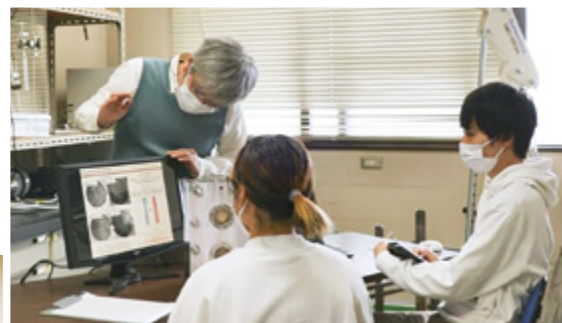


粉末 X 線回折装置



高精度ガス吸着量測定装置

令和4年（2022） 実験風景より



電気電子システムコース

engineering

電気電子システムコースの教育

理工学部理工学科の電気電子システムコースは、応用範囲が拡大された電気電子工学分野の教育・研究をカバーするため、工学部時代から継承している4大講座（物性デバイス・電気エネルギー・電気電子システム・知能電子回路）から構成され、基盤技術として重要なエレクトロニクス・エネルギーおよび通信・情報とその処理を基礎科目・専門科目として体系的に学習させている。

学部のカリキュラムを概説するにあたり、まずJABEEについて紹介する。JABEEは日本技術者教育認定機構の略で、高等教育機関の技術者教育プログラムの審査・認定を行う機関である。ワシントン協定に加盟しており、世界的に通用するカリキュラム認定が受けられる。また卒業とともに技術士の一次試験免除が認められる。電気電子システムコースのカリキュラムは、JABEEの認定を平成16年度（2004）から継続しており、平成16年度（2004）卒業生から現在までJABEEプログラム修了生として認定されている。カリキュラムはJABEEの学習教育目標に合致させるため、平成16年度（2004）に大きな改編を行った。



第1は「技術者・科学者の倫理」という科目の新設である。JABEEには倫理教育は必須であり、必修科目（4年前期）として開設した。当初は非常勤講師をお願いしたが、数年後から電気電子の専任教員4名で分担し、学生倫理・研究者倫理・技術者倫理・企業倫理などを教育しており、理工学部になってからは、教養教育科目の1つとして3年後期に開設している。

第2は「電気エンジニアリング入門」と「電気エンジニアリングデザイン演習」という科目の新設である。JABEEに求められる創成能力・自律能力・プロジェクト型研究遂行能力を養わ

せるため、前者（1年前期）ではエンジニアリングデザインの基礎・技術・手法を教育し、後者（4年前期）では5人程度の学生グループを構成し、与えられた課題に対するテーマの設定・ものづくりの構想・実際のものづくり・成果発表を通して、グループワークやデザイン能力の向上を目指している。与える課題は、学習支援システムの開発、SDGsに取り組む、災害に備える、エネルギー利用を考える等、学生目線でも教員目線でも興味を持ちやすいテーマを与え、その範疇なら自由に発想し自由なものづくりできる（予算上限あり）科目として用意している。この創成能力・自律能力・プロジェクト型研究遂行能力の養成や前述の倫理教育は、従来から卒業研究（4年通年）で研究室毎に行っていた内容ではあったが、教育水準を統一し、科目名として見える化した形としてカリキュラムに加えた。

第3は、分野毎の選択必修科目の導入である。例えば、基盤科目では、従来から必修科目である微分方程式1・2（2年前期・後期）はそのままだが、それ以外に2年前期から3年前期に開講のベクトル解析・複素関数論・統計力学・微分方程式特論の4科目から2科目以上修得するよう選択必修科目を設けた。専門科目においても4大講座毎に選択必修科目を設け、各分野から指定された科目数を必ず修得させることにより、広さと深さを与える基礎知識というJABEEの学習教育目標を実現した。またその一環として、従来から必修科目である電気回路・電気磁気学（共に1年後期と2年前期に6単位分）に加え、4大講座の基礎科目（2年次開講）として、半導体工学基礎・エネルギー工学基礎・基礎制御理論・プログラミング基礎・情報通信基礎・電子回路基礎・過渡現象も必修とした。選択科目は従来同様、積み上げ式に配置されており、学習分野を尖らせた科目選択も可能にしている。

理工学部への改組に際し、学科共通必修科目として、STEM概論・STEM演習（共に1年前期）・技術英語入門（2年後期）・技術英語基礎1・2（3年前期・後期）がカリキュラムに加わっ

た。STEM概論では各コースの基礎的な話題を通して、ものづくりには理工学全体を俯瞰して見ることが不可欠であることを教育し、STEM演習では電気電子工学分野の基礎となる各種原理・法則等をものづくりを通して実感できる教育を行っている。これらも、広さと深さを与える基礎知識というJABEEの学習教育目標の達成に大きく寄与している。また、教養教育科目の外国語科目に加える形で開講される技術英語入門・技術英語基礎1・2では、専門的・技術的な用語を含む英語力の向上をプレゼンテーション・コミュニケーションを多く取り入れた形で教育しており、これらも、地域社会・国際社会で活躍できる技術者というJABEEの学習教育目標の達成に大きく貢献している。

以上、電気電子システムコースのカリキュラムを近年継続して取り組んでいるJABEEの観点から概説したが、従来から取得可能な各種資格（電気主任技術者・無線従事者国家資格・教員免許など）も継続して認定されるよう、必要な講義科目・実験科目は用意している。また、卒業生の7割程度は大学院博士前期課程（修士課程）に進学するため、4年次に大学院開講科目を早期履修（大学院入学後に単位認定）する制度も多く活用されている。さらに、会社説明会の開催や卒業生をリクルーターとしてお送り頂ける等、企業様のご協力により、学部生・大学院生の就職も好調を維持している。

大学院博士前期課程（修士課程）の教育は、改組により導入された「教育クラスター」という考え方により、従来の電気電子システムコースの専門教育科目に、他コース科目もいくつか履修する仕組みが加わり、分野横断型教育も導入された形となっている。各科目の教育は、講義、セミナー形式、また両者を併用した形式で行われている。その内容は教員の研究テーマに近いものが多く、学生の自発的な学習と演習によって問題意識を高めるとともに、レポート提出や定期試験などにより高度で専門的な知識を習得させている。大学院生は、研究室においては卒業研究生と教員との橋渡しの役割も果た

しており、高度な専門知識を自ら学習するとともに、研究室の学部学生の指導にも当たっている。また、多くの大学院生はティーチングアシスタントとして、学部授業科目の教育も補佐し、特に演習科目や実験科目において欠かせない戦力となっている。

教職員組織と研究テーマ

電気電子システムコースの研究分野は、教育にも述べた4大講座から構成され、いま話題のIoT、人工知能、自動運転をはじめ、半導体、電子デバイス、LSI、画像処理、電力システム、ロボット、医療、高速通信など、急速に発展を続けている分野をカバーしており、各専門分野および関連する境界領域分野も含め、活発な研究が行われている。対外的にも国内外の大学間研究交流、企業との共同研究を積極的に進め、社会に開かれた組織として活動している。以下に、各大講座における主要研究テーマと所属教職員を示す。

物性デバイス講座：最先端の半導体、光・電子デバイス、デバイス作製プロセスを研究開発する分野

- ・次世代LED、光センサーの開発
- ・レーザー光を用いた物質加工、改質
- ・各種半導体の結晶成長
- ・ナノカーボン材料、グラフェンの研究
- ・半導体プラズマエレクトロニクスとその応用

電気エネルギー講座：電気エネルギーの発生・輸送と動力へのエネルギー変換・利用法に関する分野

- ・電力供給、設備診断技術
- ・プラズマやパルスパワー技術の応用
- ・パワーエレクトロニクス技術の応用
- ・知的な情報処理技術を応用したモノづくり

電気電子システム講座：対象物の様々な情報を測定・解析し、対象物の状態を最適に制御する技術、高速データ伝送技術に関する分野

- ・情報化社会の要となるデジタル通信技術
- ・物作りに欠かせない制御理論
- ・電気電子と医学のコラボレーション生体医工学

知能電子回路講座：電子回路の解析・設計方法

やコンピュータ等の知能を持つハードウェアとソフトウェアの効率的な実装技術を研究する分野
・ LSIの高信頼性を保証する検査・設計技術

・ 非線形回路ネットワークの現象と応用
・ 動画像処理と解析、LSIの仕様検討から設計まで

電気電子システムコース教職員組織

(令和5年(2023)4月現在)

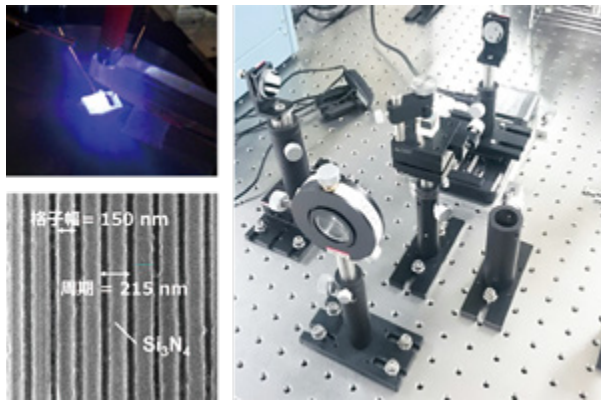
講座名	教職員名(着任年月)
物性デバイス	永瀬雅夫教授(2010.4)、直井美貴教授(1993.4)、西野克志准教授(1995.11)、富田卓朗准教授(2004.4)、大野恭秀准教授(2014.11)、永松謙太郎准教授(2019.4)、川上烈生講師(1999.4)、高島祐介助教(2019.2)
電気エネルギー	下村直行教授(1990.4)、安野卓教授(1994.1)、北條昌秀教授(1999.4)、川田昌武教授(2002.3)、寺西研二准教授(2007.3)、鈴木浩司助教(2015.9)
電気電子システム	高田篤教授(2009.4)、久保智裕教授(1988.4)、大家隆弘教授(1991.4)、榎本崇宏准教授(2008.4)、芥川正武講師(2004.1)
知能電子回路	島本隆教授(1984.4)、西尾芳文教授(1993.4)、四柳浩之准教授(1998.4)、宋天准教授(2004.4)、上手洋子准教授(2010.4)、片山貴文助教(2019.4)
技術支援部・技術職員	東知里技術専門職員(2010.4)、桑原明伸技術専門職員(2003.4)、三浦隆浩技術専門職員(2007.4)、北島孝弘技術員(2013.4)、七條香緒莉技術専門職員(2007.4)、大津朋也特任技術員(2021.5)、吉田浩子特任技術員(2020.9)



夏の風物詩「阿波踊り」に毎年参加している電気電子の学生グループ「雷連」



コロナ禍で久しぶり「第49回電気電子システムコース研究室対抗駅伝大会2022」



次世代LED・光センサーの開発



ナノカーボン材料・グラフェンの研究



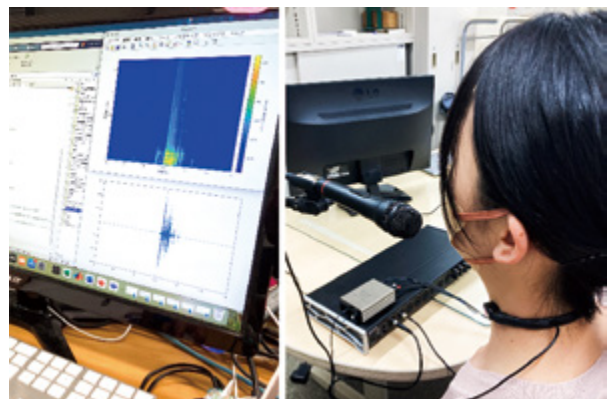
パワーエレクトロニクス技術の応用



知的な情報処理技術を応用したモノづくり



情報化社会の要となるデジタル通信技術



電気電子と医学のコラボレーション生体医工学



非線形回路ネットワークの現象と応用



LSIの高信頼性を保証する検査・設計技術

知能情報コース・ 知能情報システムコース

engineering

コース・プログラムの教育

理工学部知能情報コースでは、高度化・多様化・国際化する情報社会を担う人材養成という社会的要請に応えるため、基礎科学の広範な知識に加え、「計算機ハードウェア・ソフトウェア」「人工知能」「情報セキュリティ」「画像処理」などの情報工学の技術を学び、知的で創造的な情報システムの発展に貢献し、問題発見能力、計画立案能力、課題解決能力を有する研究者・技術者の育成を目指して、情報通信、医療ロボット、人工知能などの複雑で高度な情報システムの設計・開発・運用分野、知的ロボットなどの機械と情報工学を融合した産業分野など、幅広い分野での活躍を見据えた教育研究を行っている。

主な専門講義科目としては、コンピュータリテラシー、アルゴリズムとデータ構造、離散数学、グラフ理論、コンピュータネットワーク、数値計画法、電子回路、信号処理、ソフトウェア工学、最適化理論、知識システム、情報セキュリティ、コンピュータアーキテクチャ、データベース、オペレーティングシステム、マイクロプロセッサなどがある。

実験科目としては、ネットワーク対戦型コンピュータゲームの製作を通じてソフトウェア設計並びにプログラミング技法に関する専門的基礎を学ぶソフトウェア設計及び実験と、自律走行型ロボットの製作を通じてハードウェア設計・製作の技法と自律制御に関する専門的基礎を学ぶシステム設計及び実験がある。いずれも、グループワーク並びにコンテストの要素を取り入れており、高い教育効果を得ている。

夜間主コースの学生には、夜間に講義が行われる特殊事情を考慮しつつ、昼間コースに学ぶ学生に準じたカリキュラムを適用している。

学生に対するガイダンスは、入学直後のオリエンテーションから始まる。そこでは教員全員

が学生に対して自己紹介し、更には各研究室に分かれて懇談することで、早期に接点を持つとともに以後の学修への足掛かりとしている。また、1年次前期開講の知能情報セミナーでは、各教員の研究内容の紹介や大学院生との交流を含め、新入生が勉学への興味を失わないように努めている。以後も進級ごとにオリエンテーションを実施し、履修科目をアドバイスし、卒業単位を確実に取得できるよう指導している。

その後、3年次後期からの仮配属を経て、各研究室での卒業研究を行うが、コース全体での中間発表を挟み、研究室外の教員からの指摘も反映できるようにしている。

大学院理工学専攻知能情報システムコースでは、情報工学分野、知能工学分野の構成のもとに、現代社会の基幹を成す科学技術分野である人工知能やデータサイエンス等の専門性の深化と、広い視野に立って他分野と融合化することができるICT、IoT関連の高度専門職業人の養成を目指して、専門性との関係を意識しながら、専攻を横断する広い視野を持ち、組織的・系統的なハードウェアとソフトウェア系を対象としたシステム工学について体系的に深く学修するとともに、最先端の専門的知識・技術を活用し、専門性と創造性の視点を生かしながら、研究科内の関連する他の分野とも連携した教育を行っている。

主な基盤コース専門科目としては、自然言語理解、情報ネットワーク、自律知能システム、画像応用工学、ヒューマンセンシング、マルチメディア工学、情報セキュリティシステム論などがある。

特別研究（修士学位論文）についても、大学院特別輪講を通じて研究室外の教員あるいは学生との議論を重ねることとしている。また、修了までに1回以上の対外発表を行う必要があり、適切な進捗と内容が問われることとなっている。

学術面以外には、教員も含めたコース内での親睦を深めるため、研究室対抗でソフトボール、サッカー、バスケットボールなどの大会を開催している。運営は学生主体で行われており、イベント開催の訓練にもなっている。コロナ禍で

一時中断していたが、令和4年度より再開された。

教職員組織と研究テーマ

日進月歩の情報科学及び情報産業に適応し、また、多様化する情報社会に対応するための柔軟な研究を実施できるよう、コンピュータ技術のハード・ソフト両面における協調的発展に資する情報工学講座と、多方面にわたるコンピュータの知的で効率的な運用に応える知能工学講座の2大講座で構成されている。以下に、

各講座における現在の主要研究テーマを挙げ、続いて所属する教員を表に示す。

情報工学講座：感性情報処理、進化計算、強化学習、音声情報処理、非線形問題、認証連携、身体知支援

知能工学講座：画像処理、仮想現実／拡張現実／複合現実、コンピュータネットワーク、システム制御、自然言語処理、マルチメディア情報検索、ヒューマンセンシング、生体信号処理

知能情報コース教職員組織		(令和5年(2023)4月現在)
講座名	教職員名(着任年月)	
情報工学	永田裕一教授(2014.4)、上田哲史教授(1992.8)、松浦健二教授(2003.4)、松本和幸准教授(2009.10)、佐野雅彦准教授(1995.4)、吉田 稔講師(2013.4)、西村良太講師(2018.10)、谷岡広樹講師(2016.4)、康 鑫助教(2015.4)	
知能工学	寺田賢治教授(1995.4)、木下和彦教授(2015.2)、泓田正雄教授(1998.4)、獅々堀正幹教授(1995.5)、福見 稔教授(1987.4)、池田建司准教授(1991.4)、森田和宏准教授(2000.4)、光原弘幸准教授(2003.5)、カルンガル・ステファン・ギディンシ講師(2004.4)、大野将樹講師(2013.4)、伊藤桃代講師(2010.4)、伊藤伸一講師(2009.4)、ガジェゴス・ラモネト・アルベルト助教(2021.10)	

また、総合技術センターの石井技術専門職員、辻技術専門職員、片岡技術専門職員、藤田技術補佐員から、実験機材の保守、学生指導の補佐、

教育用計算機システムの管理運用などのサポートを受けている。



改修工事で新しくなった知能情報北棟と南棟



謝恩会



卒論発表

スポーツ大会



システム実験の一コマ



改修工事で新しくなった電算室

卒業式



研究室旅行の一コマ

光システムコース

engineering

光システムコースの教育

本コースは、産業構造の変化や将来の科学技術の展開に対応した光技術者の育成を目的として平成5年（1993）に設立された光応用工学科を母体としている。当時、「光」を冠した名前を持つ学科は国立大学として初めてであり、それまで基礎科学、機械工学、電気電子工学、応用化学、応用物理学、情報工学などの各分野においてそれぞれ個別に行われていた光工学に関する教育・研究を、体系的に行う特徴があった。また、同学科は平成15年（2003）から平成31年（2019）まで、一般社団法人日本技術者教育認定機構（JABEE）によって国際的な技術者育成認定プログラムとして認められていた。

光システムコースもその流れを汲み、様々な工学分野について「光」を切り口とした、光工学について体系化された学びができる全国でも珍しいコースになっている。加えて、平成31年（2019）に設置された「ポストLEDフォトンクス研究所」と令和4年（2022）に組織融合し、活発な最先端研究が行える環境のもと、多くのスタッフによる、手厚い教育・研究指導が受けられる。

本コースの教育は上記の特徴を生かして、高度化・多様化・国際化する未来の情報化社会を支える光科学・光工学に関する幅広い知識と技術を有する人材を養成することを目的としている。例えば、卒業後、光機能性材料・光デバイス分野に進んだ場合でも、光通信・映像技術・光画像処理などの知識を有していることで、システム分野からの要請を理解した上での研究開発が可能になる。また、システム分野に進んだ場合でも、材料やデバイスに関する知識を有していることが、効率的なシステムの設計・構築につながると考えている。

コースで養成する具体的な人材像は、(1) 光科学・光工学分野全体を大局的に把握し、光に

関する科学技術の視点から、創造的なものづくり・システム開発に貢献できる人材、(2) 光科学・光工学の基礎知識に基づいた問題発見能力、計画立案能力、課題解決能力を有する人材、(3) 光材料・光デバイスから光システムにも精通している人材、である。この目標を達成させるための教育の内容を以下に示す。

(1) 導入教育

入学後いち早く光工学への関心を持たせ、また高校と異なる大学の教育スタイルに早期に対応させるべく、1年前期にSTEM概論、光システムセミナー、光の基礎、また、教養教育科目であるSIH道場を開講している。コース教員が大学教育での学びを理解させるとともに、議論を中心とするグループワークを身に付けさせている。学科共通科目であるSTEM概論では、全コースの教員が理工学の様々な分野の研究に関するトピックを紹介し、入学生の学習に対する動機付けを行うと共に、広い視点を養っている。また、後期に開講されている光システムセミナーでは、研究室見学などの体験学習とカリキュラムの俯瞰を行い、光の基礎では、実社会での光技術の応用事例を元に光の特徴を理解させている。また、STEM演習（学科共通科目）では、高校での学びと大学での学びを円滑に接続させるべく、能動的学習に学ぶ能力の力をつけさせている。

(2) 工学に関する基礎知識および基礎技術

光工学分野で、最低限必要とする基本的な数学（線形代数学Ⅰ、Ⅱ、微分積分学Ⅰ、Ⅱ）と物理（力学概論、電磁気学概論）を1年次の教養教育の必修科目として配置している。これを基礎として2年以降に、専門的な数学（微分方程式1、微分方程式2、確率統計学、ベクトル解析、複素関数論、数値解析）や物理学（統計力学、量子力学、物理学基礎実験）を学科共通科目として配置している。

(3) 光工学に関する基礎知識、応用力

コース専門科目は、必修科目として電気回路

基礎及び演習、コンピュータ入門、プログラミング及び演習、基礎光化学、電気磁気学、幾何光学、波動光学、電子回路概論、光学基礎演習、レーザー工学、光応用工学実験1、光応用工学実験2、光応用工学計算機実習、卒業研究を開講している。選択科目としては、熱力学、応用光化学、光・電子物性工学、光学設計演習、非線形光学、光通信方式、光デバイス、光応用数学演習、光科学・光工学特別演習、量子光学、光情報機器、画像処理、半導体ナノテクノロジー論、光情報処理、光導波工学、分子分光光学、レーザー計測、マイクロ・ナノ光学、AI応用を開講している。これらの必修科目と選択科目は1年次後期から系統的に配置している。

(4) 英語教育

教養科目の英語および初修外国語の履修に続いて、2年次および3年次の技術英語入門と技術英語基礎1、技術英語基礎2を配置し、技術に必要な英語による表現力や読解力、コミュニケーション力を高めるため、技術英語の表現力やプレゼン能力を養成している。これらに加え、4年次の雑誌購読（及び卒業研究の一部）では海外の研究論文等の講読により、科学的英語の文章から専門的な情報や研究課題についての理解力を養っている。

(5) 自律的・継続的学習能力

授業において、オフィスアワーの設定はもちろん、多様な手法で学生の自主的な学習を促している。例えば、開講科目によっては、反転授業などのアクティブラーニングを積極的に取り入れたり、Webを利用した講義資料等の配付や講義動画の配信などを行っている。また、学生間でディスカッションを行う必要がある授業では、自発的・自律的な学習行動が促される傾向があるので、SIH道場で教育内容に取り入れている。さらに、実験・実習を通して自らが主体的に学習に取り組む姿勢を養うほか、卒業研究を通じて自ら研究を企画し実施することにより、計画にしたがって継続的に行動する能力を育成している。

(6) 技術者としての社会的責任

技術者として社会に果たすべき役割を自分で考え、社会に果たすべき責任を認識させるため、1年前期に理工学概論（教養教育科目）を開講し、技術者を取り巻く今日の社会環境や技術動向、先端的研究の動向を入学直後に学び、技術者を目指す者が社会的な動向に興味を向けるきっかけを与えている。さらに、3年次には、講義科目「技術者と科学者の倫理」を配置し、技術者としての倫理観と行動規範を持って多様化した社会の中で自分の技術を活かす能力を、理論と実習の形式で育成している。

これらの学部教育を通じ、知識の理解を高めさせるとともにそれを応用して光機能材料や光デバイスから光を用いたシステムの設計・開発に应用できる能力、事実を観察して物事の本質を見ぬく力とそれを科学的に分析する基盤的な能力を育成し、卒業研究や大学院での研究を遂行する基盤的能力を育成している。

(7) 博士前期課程の教育

博士前期課程の進学希望者は増加傾向にあり、最近では、学部卒業生の7割以上が本学の大学院博士前期課程等に進学し、自らの力を伸ばすべく研究活動を行っている。

大学院博士前期課程では、主に研究にもとづいた教育を行っている。大学院での講義はこれを補助するとともに、自らの専門を中心軸に学部で受けた教育内容をより深く理解するよう、光工学に関する発展科目が開講されている。さらに、理工学専攻の講義科目を研究分野毎に大まかに分類した科目（教育クラスター科目）の中から、研究テーマに沿った講義の受講を通し、研究テーマやその科学技術分野を俯瞰的に見る能力も養っている。また、博士前期課程の学生は、国内外で活発に学会発表を行っており、専門知識の修得と共に国内外で通用するプレゼン能力やコミュニケーション能力を育てている。

教職員組織と研究テーマ

光システムコースでは、令和4年にポストLEDフォトンクス研究所と組織融合した。こ

のため、同研究所の専任教員6名がコースの教育担当に加わることになり、従来採用していた、光機能材料・光デバイスと光システムの2つの大講座制が実態にそぐわなくなった。このため、現在は、よりフレキシブルなグループを形成して学生の教育研究を行っており、今後教育体制の見直しにより変更する予定である。

各研究グループにおける現在の主要研究テーマを以下に示すとともに、所属する教職員を表形式でまとめて示す。

Cグループ

教員6名による3小グループから構成されている。このグループでの主要研究テーマは以下となる。金属ナノ構造における光局在の応用に関する研究、3次元メタマテリアル作製に関する研究、光ナノ治療を目指した光熱科学に関する研究、超短パルスレーザーによる光機能ナノ材料の先端レーザー分光に関する研究、レーザーアブレーション法によるナノ材料作製とその応用に関する研究、時・空間分光による光機能性材料の反応機構解明に関する研究。

Dグループ

教員5名による3小グループから構成されて

いる。このグループの主要研究テーマは以下となる。3D表示や空中像をはじめとする新ディスプレイ技術に関する研究、最近の新しいディスプレイ技術のための視覚評価技術に関する研究、マルチスケール・マルチモーダル画像情報や、臨床・病情報と遺伝子情報を利用したラジオゲノミクス研究開発、光と電子融合による光情報・応用システムの研究開発、軌道角運動量光ビームを用いた通信技術に関する研究。

新たに光システムコース担当となった教員グループ

ポストLEDフォトリソグラフィ研究所で採用され令和2年度（2020）にコースの担当となった教員及び令和4年度（2022）の同研究所との組織融合によりコース担当となった教員である。このグループでの主要な研究テーマは以下となる。光コムによる通信・計測技術の開拓、メタマテリアルによる高感度ガス検知、マイクロリング共振器による小型光周波数光コムの開発、超高温下でのAlN単結晶膜成長、光計測技術の医療分野応用、近赤外光画像検出による異物検査に関する研究。

光システムコース教職員組織

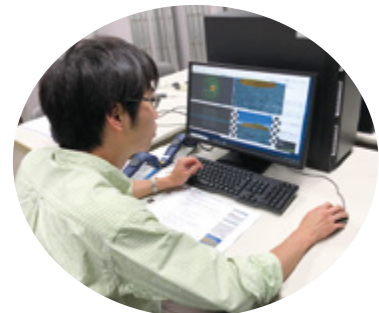
(令和5年（2023）4月現在)

講座名	教職員名（着任年月）	専門分野
光機能材料	C1 原口雅宣教授（1987.4）、岡本敏弘准教授（1995.4）	光科学／光工学基礎
	C2 柳谷伸一郎准教授（1999.4）	光材料設計
	C3 古部昭広教授（2015.4）、Pankaj Koinkar 准教授（2012.4）、片山哲郎助教（2019.7）	光ナノ材料物性
光情報システム	D1 山本健詞教授（2021.4）、水科晴樹講師（2015.4）	光計算工学
	D2 河田佳樹教授（1995.4）	光情報処理
	D3 藤方潤一教授（2021.4）、岸川博紀准教授（2015.4）	フォトニックネットワーク
令和3年度以降光システムコース担当となった教員	安井武史教授（2010.8） 矢野隆章教授（2019.4） 久世直也教授（2019.6） 永松謙太郎准教授（2019.4）* 南川丈夫准教授（2015.7） 山口堅三准教授（2019.4）	光コム計測技術 ナノ分光計測 極限レーザー（光コム） 結晶工学 顕微分光と医学応用 プラズモニクMEMSと異物検査
技術職員	横山智弘技術員（2009.10）、齊原啓夫技術専門職員（1997.2）、酒井仁美技術専門職員（1994.12）、川村亜梨沙特任技術員（2022.12）	

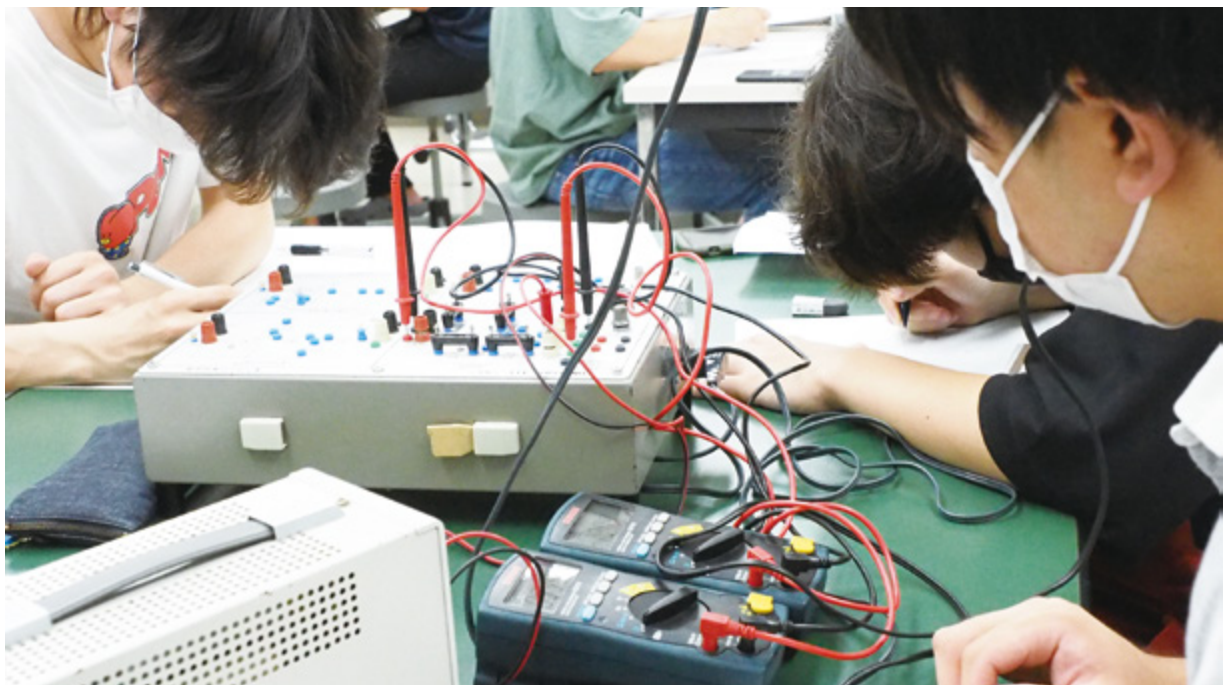
* 大学院博士後期課程の教育のみ担当



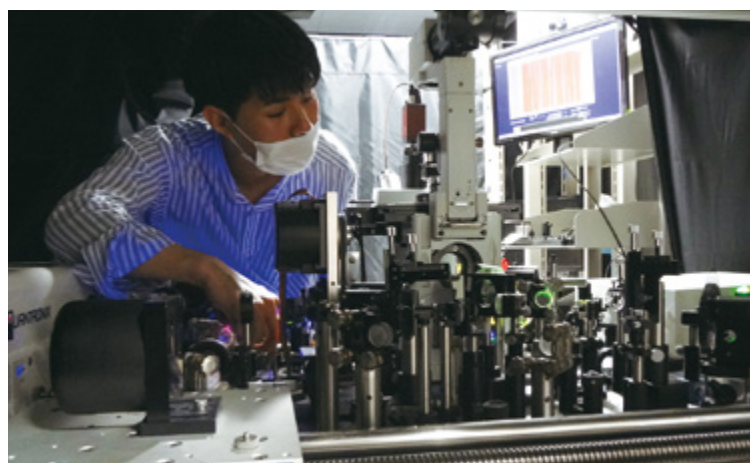
授業での学生発表の様子



計算機によるVR技術の修得



素子特性に関する実験の授業（光応用工学実験2）



先端機器を用いた光学実験の様子（卒業研究）

生物資源産業学部

生物資源産業学部の教育

応用生命コースでは生物資源を利用した医薬からエネルギーに至るバイオテクノロジー開発応用に関する専門知識と技術を身につけ、生命工学分野で貢献する技術者を育成する。食料科学コースでは安心安全な食品供給を可能にするための生物資源の加工、食品の機能成分の役割、有害物質の作用等に関する専門知識と技術を身につけ、食品科学分野で貢献する技術者を育成する。生物生産システムコースでは豊かな自然環境を保全し、一次産品の質向上や増産に寄与する革新的なアグリサイエンスに関する専門知識と技術を身につけ、一次産業の発展に貢献する技術者を育成する。

生物資源が関連する生命工学・食品科学・生物生産科学の専門分野において、各々の高度な専門知識と技術を習得させ、生物資源を応用する能力を修得させる。さらに横断的に他分野の科目も学ばせ、多角的視点を身につけさせる教育体系としている。さらに生物資源産業におけるイノベーションを担う人づくりを教育の要とし、生物資源を利用した産業の創出に貢献できる専門知識を修得できる教育体系としている。

授業科目は教養教育科目と専門教育科目により編成されており、専門教育科目については、学科共通科目、コース専門科目、自由選択科目、卒業研究に区分されている。

学科共通科目は全員同じ科目を修得する。生物資源産業学概論や生物資源産業学A・B・Cにより、生物資源の生産、加工と応用、並びに産業化に関する専門基礎知識と技術を学修し、生物資源の高度利用技術の開発や高機能・高付加価値農林水産物の開発に携われる人材を育成する。産業創出の担い手に必要な実践力を養成するために、地域・生物資源経済学Ⅰと商品企画・開発論、アントレプレナーシップを含むキャリアパスを学修する。産業体験実習による実践的な活動も体现できる。技術者倫理や知的財産

関連も学修し、倫理観を身につける。生物資源産業に関する商業的基盤を理解し、グローバルな視点から地域社会の課題を考え、次世代リーダーとなる人材を育成する。基礎科目（基礎物理化学、基礎有機化学、基礎生化学、基礎微生物学）の学修により基礎専門知識を身につける。

2年次より3コースに分属し、コース専門科目を受講し、専門的知識や技術を習得する。コース専門科目には他コース開講の専門科目も数科目指定しており、専門性を深化させている。応用生命コースの講義は生化学、生体高分子学、微生物学、生物物理化学、生物有機化学、バイオ医薬品生産工学、細胞情報学、バイオリアクター工学、創薬学、免疫工学、微生物検査科学、バイオマス利用学、再生医学、医用工学、生命科学、分子生物学、酵素化学、遺伝子工学、応用微生物学Ⅰである。食料科学コースの講義は天然物資源化学、生物活性物質化学、機能食品学、食品化学、代謝生化学、分子病態学、栄養・口腔生理学、基礎生理学、食品衛生学Ⅰ・Ⅱ、食品工学、酵素化学、遺伝子工学、応用微生物学Ⅰ・Ⅱ、フードサイエンス、分子生物学、生物有機化学、細胞情報学、微生物検査科学である。生物生産システムコースの講義は植物生理学、生物資源環境学、農業科学総論Ⅰ・Ⅱ、森林科学、動物生産科学、水圏生産科学、植物生産科学、植物病理学、森林代謝学、応用昆虫学、水産資源学、植物細胞工学、生物多様性学、生産環境制御システム論、分子生物学、畜産加工学、地域・生物資源経済学Ⅱ、フードシステム論、食品マーケティング論、アグリビジネス起業論、機能食品学、食品工学である。講義に基づき、各コースに実習・演習を配し、技術を身につける。

さらに自由選択科目として、自コース・他コースを問わず、学部で開講している科目の中から5科目を修得する。この分野横断的な履修を行うことにより、専門性を活かす広い視野や洞察力を深化させる。3年次後期に研究室に配属され、生物資源関連の専門英語を学修し、卒業研究の準備段階に入る。4年次では卒業研究に従事する。

本学部では、食品衛生管理者及び食品衛生監視員の資格、上級バイオ技術者と甲種危険物取扱者の受験資格を取得できるカリキュラムとしている。

生物資源学専攻の教育

生物資源学専攻では、生物資源学分野の深い専門知識と技能を基にした論理的な分析能力と課題探求・問題解決能力、さらに社会の変化に柔軟に対応できる自律的な応用力と創造力を涵養する体系的な科目の編成とし、常に自身の研究の立ち位置が確認でき、それを深化させられるような高度専門職業能力に加え、生物資源学分野において新たな価値を創成できる能力を養成する教育を施す。豊かな人格と教養、高い倫理観並びに自発的意欲を育て、社会の変化に柔軟に対応できるコミュニケーション能力や自律的な応用力と創造力を涵養できる科目を開設し、自身の特定の研究分野に捉われない教育を施す。生物資源に関する諸問題を分析し、解決に向けた世界水準を目指す先進的研究並びに技術開発を推進し、自身の研究成果を国際的に発信する能力を身につけると共に、持続可能な生物資源の活用により社会に貢献できる能力を涵養する。

本専攻では、研究科共通科目、専攻共通科目、所属基盤コース専門科目、教育クラスター科目、学位論文指導科目を履修する。

研究科共通科目は研究科共通で設定しており、データサイエンス、グローバル教育科目群、イノベーション教育科目群を修得する。

専攻共通科目としては生物資源学研究があり、修士論文の研究遂行に必要な最先端の知識や技術の修得、並びにコミュニケーション能力や自発的意欲を養成する。研究倫理等を理解させ、高い倫理観・責任感を身に付ける。修士論文に関する研究計画等について、複数の指導グループが共同で討論会を実施する。

所属基盤コース専門科目は所属するコースで学ぶべき専門科目である。応用生命科学コースには創薬学特論、細胞工学特論、生物化学工学特論、生体熱力学特論、生物物理化学特論、先端生命科学特論、環境生物学特論、再生医学特

論、微生物工学特論、ケミカルバイオロジー特論、細胞情報学特論、微生物検査学特論、食料生物科学コースには食安全学特論、酵素化学特論、応用微生物学特論、生体機能学特論、機能的食品学特論、栄養化学特論、食品評価特論、分子組織代謝学特論、食品加工保蔵学特論、資源利用学特論、生物生産科学コースでは植物細胞工学特論、動物生殖工学特論、フィールド水圏生物学特論、畜産物利用学特論、植物保護学特論、森林代謝科学特論、分子発生生物学特論、生産システム制御工学特論、分子生態学特論、植物分子生物学特論、水産植物学特論、農業市場学特論、森林生物学特論、発生生物学、農業経済学特論を設定している。

教育クラスター科目は、各「教育クラスター」に設定されている科目であり、分野横断型教育のプログラムとなっている。生物資源学専攻では、各コースが設定している教育クラスターから1つを選択するため、当該のクラスターに推奨設定されている他コースまたは他専攻の開講科目を最低1科目は修得することになる。これにより、自身の研究にとって最適と考えられる科目を履修し、自らの研究分野を多角的に見る能力を養い、専門性を深化させる教育を行っている。

応用生命科学コースは、応用生物資源クラスター、環境・エネルギークラスター、メディカルサイエンスクラスターを設定、食料生物科学コースは、食品科学クラスター、農工連携クラスターを設定、生物生産科学コースは、農工連携クラスター、6次産業クラスターを設定し、推奨している。

学位論文指導科目として、コース別に開講している特別演習、特別研究を修得する。特別演習は、修士論文の研究を行うのに必要な基礎力を養成するために、指導教員の指導による演習を行う。学術論文や専門書籍を用いた文献調査を実施し、文献内容を発表し、先端的手法や考え方を積極的に取り込む研究的態度を修得する。自身の研究内容について多様な考え方ができるように訓練し、学際的な課題に対する柔軟なコミュニケーション能力を養う。特別研究は、指

導教員の指導のもとで、修士論文の作成に向けた研究を主体的・能動的に実施する。得られた研究結果の解析や解釈について、指導教員との討論やグループ討論により、種々の課題を克服し、より発展的な研究の方向性を見出す。通年で研究を行い、修士論文を作成する。

教職員組織と研究

生物資源産業学域では、下記の各分野において、特色ある研究を行っている。各研究室における研究テーマを以下に紹介する。つづいて生物資源産業学部にも所属する教職員、および学部関係者を下表に示す。

応用生命科学分野

- C1**：両親媒性分子集合系の生物物理化学的研究、脂質膜の構造および物性に関する物理化学的研究、高圧力下における脂質ナノ粒子の物性に関する研究
- C2**：腫瘍移植鶏卵を利用した制癌剤の創薬研究、化学プローブを駆使した生体ケミカルバイオロジー
- C3**：生物資源の有効利用と生物的環境修復技術に関する研究、バイオマス変換工学と変換前処理システム効率化に関する研究
- C4**：がん幹細胞が卓越した生存能力を獲得する仕組みの解明
- C5**：光反応を利用した微生物制御技術の構築、バイオ医薬品の生産プラットフォーム開発
- C7**：微生物由来生理活性分子の機能研究とその応用研究、微生物の宿主内や環境中での生存戦略についての研究、微生物由来機能因子の研究と微生物検出システムの開発

食料科学分野

- B1**：極限環境微生物由来酵素の機能構造応用研究
- B2**：食品成分による食環境の微生物制御、タンパク質工学的手法による人工酵素の創製
- B3**：微生物変換と発酵を活用した有用物質生産に関する研究、菌類の分子育種を活用した代謝工学に関する研究
- B4**：食品機能成分による健康増進効果の研究

- B5**：食品および関連材料からの生物活性製品の研究開発
- B6**：機能性脂質分子からの創食・創薬研究、食品衛生と食品微生物に関する研究
- B7**：健康と病態に関わる脂質ネットワークの研究
- B8**：未利用天然物資源由来の有用化学物質の生産とその応用
- B9**：唾液腺の発生・分化・再生と機能発現に関する研究

生物資源生産科学分野

- A1**：植物栽培を中核とした生物環境工学とその応用研究
- A2**：生殖工学による遺伝子改変動物に関する研究
- A3**：水生動物や藻類の増養殖や保全に関する研究、海藻の陸上養殖技術の開発に関する研究
- A4**：森林微生物代謝機構の解明と林産物高付加価値への応用、森林植物由来有用成分の合成機構の解明とそれら成分の有効利用
- A5**：植物保護および造園設計に関する研究、被子植物の分類、生態、保全に関する研究
- A6**：バイオエコノミーに関する研究と社会実装、農産物市場・流通の展開と規格化の進展に関する研究
- A7**：植物遺伝子工学および分子育種の研究、植物-病原菌間相互作用の形成に関わる分子メカニズムの研究
- A8**：昆虫のゲノム機能と資源化に関する研究、植物栽培を中核とした生物環境工学とその応用研究、有用昆虫の応用利用に関する研究
- A9**：動物生産システムおよび畜産物利用に関する研究・開発、効率的かつ持続的な動物生産システムに関する研究

生物資源産業学部教職員組織

(令和5年(2023)4月1日現在)

コース名	教職員名(着任年月)	
応用生命 コース	C1	松木 均教授(1990.4)、玉井伸岳准教授(2003.5)、後藤優樹准教授(2010.7)
	C2	宇都義浩教授(1998.4)、山田久嗣准教授(2015.1)、小林 彩学術研究員(2022.4)
	C3	中村嘉利教授(2007.3)、浅田元子教授(2010.4)
	C4	岸本幸治准教授(2015.2)
	C5	白井昭博准教授(2007.4)、鬼塚正義講師(2010.6)、天羽宏枝学術研究員(2021.9)、中島ひとみ技術補佐員(2021.4)
	C7	長宗秀明教授(1986.8)、友安俊文准教授(2005.10)、田端厚之准教授(2006.1)
	食料科学 コース	B1
B2		金丸 芳教授(1992.4)、林 順司講師(2019.4)
B3		櫻谷英治教授(2014.5)、阪本鷹行講師(2015.3)
B4		向井理恵准教授(2009.4)
B5		田井章博教授(2019.4)
B6		田中 保教授(2008.2)、栗飯原睦美講師(2020.4)
B7		山本 圭准教授(2015.2)、三木寿美特任研究員(2023.4)、笹野真美技術補佐員(2016.10)
B8		佐々木千鶴准教授(2007.4)
B9		赤松徹也准教授(1997.4)
生物生産 システム コース	A1	宮脇克行准教授(2008.5)、中井 綾特任助教(2017.9)
	A2	音井威重教授(2015.4)、長原 恵助教(2023.4)
	A3	濱野龍夫教授(2009.4)、岡 直宏准教授(2015.2)、加藤美砂子技術補佐員(2019.7)
	A4	服部武文教授(2011.10)、山村正臣准教授(2021.11)、片山 恵技術補佐員(2020.8)
	A5	佐藤征弥准教授(1995.4)、山城 考准教授(2004.4)
	A6	中澤慶久教授(2020.4)、橋本直史講師(2014.12)
	A7	刑部敬史教授(2013.9)、山田晃嗣講師(2016.5)、和田直樹特任助教(2017.8)、松本 亮技術補佐員(2018.8)
	A8	三戸太郎教授(1999.10)、石丸善康講師(2012.10)、渡邊崇人講師(2013.3)
	A9	森松文毅教授(2017.11)、平田真樹講師(2017.8)
技術職員 (本学部関係)	佐々木由香技術職員(1991.4)、勢川智美技術職員(1989.4)、井上久美子技術職員(1996.4)、中村真紀技術職員(1991.4)、友成さゆり技術職員(1997.4)、堀内加奈技術職員(2010.4)、上野正裕特任技術員(2023.2)、近藤里緒技術補佐員(2022.4)	
農 場	新居志保技術補佐員(2016.4)、立川智大技能補佐員(2021.4)、富崎百英農場作業員(2017.9)	

理工学部と生物資源産業学部の 建物と利用する施設



常三島キャンパス出入口



シンボルストリートから共通講義棟を望む



化学・生物棟



機械棟



電気・電子棟

知能情報



南棟



北棟



ベンチャービジネス育成研究室



ポストLEDフォトリクス研究所



光応用棟

建設棟



総合研究実験棟





第1 食堂前



とくしまイノベーションセンター



運動場



体育館

各種センター・研究所の活動

環境防災研究センター

環境防災研究センターは環境と防災に関わる諸問題を文理両面から総合的に研究し、研究成果を地域社会に還元するための拠点として、平成16年（2004）4月1日に学内共同教育研究施設として発足した。平成30年（2018）4月に組織の見直しを図り、防災研究、災害医療研究、環境研究、危機管理研究の4部門を設け、研究・教育・地域連携活動を行っている。現在、本センターは専任教員5名、特命教授1名の他、併任教員35名、客員教員14名の計55名のスタッフで構成されている。

近い将来発生する可能性の高い南海トラフ巨大地震の被害想定（平成25年（2013））は最大ケースで死者約3万1千人、建物倒壊は11万棟に上る。本センターでは、南海トラフ巨大地震だけでなく、大規模な洪水、スーパー台風と高潮、さらに生物多様性の喪失は地域継続を脅かす甚大な危機事象であると捉え、被害軽減に資すると思われる様々な調査研究、取り組みを行政、市民、企業と協働し、総合的に実施してきた。

例えば、危機管理の4機能を充足させるために、①インテリジェンスでは、東日本大震災（平

成23年（2011）、紀伊半島豪雨（平成23年（2011））など30あまりの災害の現地調査を行い、災害メカニズムの解明、災害対応、復旧過程などの研究を行ってきた。またリスクハザード研究では「大規模自然災害からのインクルーシブ避難の実現」（令和4年（2022）～）にセンタースタッフも多数参画している。②セキュリティ機能では、BCP・BCM、避難所運営、事前復興、災害ケースマネジメントに関する研究を行い、一部の成果は社会実装されている。また災害リスクを低減させるためのグリーンインフラ研究も精力的に行われている。③リスクコミュニケーション機能では、環境保全や防災に関するシンポジウム、地域の防災風土資源からの教訓伝承、環境防災カフェ、ラジオやテレビでの講演などが精力的に行われている。また生物多様性リーダー、防災士、災害・危機管理マネージャーといった人材育成にも尽力されている。最後に④ロジスティクス機能では、大学BCPに関する研究や四国の5つの国立大学と連携したレジリエンスを向上させる取り組みも始めている。



令和4年（2022）台風15号による静岡・土石流災害



尼崎運河での市民協働での環境再生研究



勝浦川フィールド講座



四国防災・防災危機管理プログラム

国際連携教育研究センター

■ はじめに

国際連携教育研究センターは、平成17年度(2005)の文部科学省の大学教育の国際化推進プログラムの支援を受けて創設した国際連携大学院教育プログラム(ダブルディグリープログラム)を推進するために設立された大学院先端技術科学教育部の国際連携教育開発センターが前身であり、平成31年(2019)に採択された内閣府の地方大学・地域産業創生事業が採択されたのを受け、国際共同研究の連携促進をも目的とするため現在の名称に改称された。徳島大学大学院創成科学研究科理工学専攻の組織である本センターは、外国連携大学院と協同して複数学位を与える国際連携教育を行うとともに、下記に挙げるような徳島大学大学院創成科学研究科理工学専攻・理工学部・大学院先端技術科学教育部の学生交流・研究交流の国際活動拠点として活用されている。

■ 国際連携大学院教育プログラム

現在、韓国海洋大学校、東義大学校、西安交通大学、大連理工大学、南通大学、トゥールーズ工科大学、国立台湾科技大学(NTUST)、南台科技大学、マレーシアマラッカ技術大学(UTeM)、フロリダアトランティック大学、及び、パラナ連邦工科大学の11の外国連携大学院と協同してダブルディグリープログラムを実施している。しかし、これまでのところ、本学学生の外国連携大学への派遣数に比べ受入数が著しく多い。そのような中、平成26年(2014)に本学の海外拠点「徳島大学国立台湾科技大学教育研究センター」を設置したNTUSTとは、バランスの取れた双方向プログラム運営が実施できている。これは、サマースクール等の学生交流プログラムが双方で開催されることに加え、双方が研究費を用意して募集する共同研究(毎年5~7件)を実施しているためだと思われる。既にのべ50以上の共同研究が実施されている。一方、同じく平成26年(2014)に本学の海外拠点「徳島大学—マレーシアマラッカ技術大学アカデミックセンター(TMAC)」が設置されているUTeMとは、毎年2~3月に理工学部と生物資源産業学部の学生を対象に、レゴマインドストーム等を用いたPBL型授業を行うTMAC Design Workshopが実施されている。

このWorkshopに参加した学生の満足度が高いことから、平成31年(2019)にこのWorkshopをベースに全学的な短期海外派遣プログラム(Study Abroad First-Step Program in Malaysia: インターナショナルオフィス主催)を企画し、72名(うち理工学部の新入生54名)の参加を得た。コロナ禍が治まった本年度から再開するべく、現在準備を進めている。

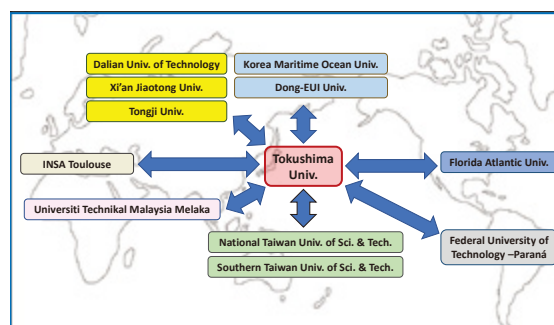
■ サマー・スプリングスクールプログラム

毎年7月下旬~8月上旬にサマースクールを、そして2月下旬~3月上旬にスプリングスクールを開催し、本学が尽力する環境関連技術・エネルギー関連技術等をコアとする講義を英語で実施すると共に、日本語のしくみ・日本文化を解説する講義や徳島の文化・技術を体験できるフィールドワーク、PBL型グループディスカッションを実施している。国際感覚を身につけた専門知識を持った高度な環境エンジニアを養成すると共に、協定校学生の本学への留学の動機付けになることを目指しており、例年当プログラムに参加した学生が本学に入学している。

■ グローバルインターンシップ

国内企業のグローバル化が進んでいる昨今、コミュニケーション能力に加え、異文化への理解・対応が可能なグローバル人材が広く求められている。このような人材を育成する方法として、NTUSTと連携し本学学生の台湾企業インターンシップ派遣を行ってきた。一方、コロナ禍により協定校の学生の国内企業へのグローバルインターンシップ受入は実現できていないが、県内企業にご協力頂き双方向グローバルインターンシップの実施を目指している。また、UTeMとも連携して、マレーシアの企業へのインターンシップ派遣を本年度中に実施する予定である。

Double-Degree Program 11 Partner Universities



情報センター

■ はじめに

徳島大学「情報センター」は、初期には「電子計算機センター」の名称で昭和41年（1966）に設置されてから、時代に応じた改組・改称を複数回経て、現在に至る。工学部・理工学部と同じキャンパスに拠点を置き、また、蔵本キャンパスには分室を置き、さらには事務組織内の学術情報部と協働しながら、五十年余の間、学内の情報基盤を企画・運用してきている。本センターは、これからも大学機能の高度化を情報施策・情報環境面から継続して支える組織であり、その役割の重要性を認識するところである。以下では、令和4年（2022）時点での本センターの所掌や活動を概説する。

■ ミッション

情報センター規則は、平成22年（2010）に制定され、その時点では「情報化推進センター」との名称であった。この時点で、それまでの「高度情報化基盤センター」が廃止され、組織のミッション定義や関連委員会・会議体の見直し、さらにはセンター内外のインタフェースなども変更されることとなった。この時の枠組み自体は、以後現時点（令和4年（2022））まで継承されているが、途中、教職共同の強化を目的として平成26年（2014）に改称した。

情報センターの設置目的は、(1) 全学的な情報化を推進する、(2) 情報戦略室の基本方針の下、情報化施策を実施する、(3) 教育・研究・社会貢献及び大学運営に係る情報関連業務を円滑に遂行する、の三点に大別されている。また、この目的達成のために、(a) 情報教育支援、(b) 部局情報化支援と、(c) 情報技術に関する研究開発を行うこととなっている。

(a) については、4～5年に一度の定期的な調達により、教育用計算機システムの環境を導入・運営している。また、教養教育の科目である「情報科学入門」の授業を実際に一部の学部・コース等で担務し、その授業内容の検討ワーキング等の中で、内容の検討や運営の検討に加わって活動をしている。(b) においては、部局固有のシステム導入や無線ネットワークシステム導入等において、様々な支援を行っている。この基礎的な機能として、ユーザのアカウントライフサイクル管理が重要であり、全学的な管

理の半自動化を実現している。さらに、(c) においては、教員と技術職員の共同研究により、学内で実践的に研究している成果を中心に、学術論文誌や学術研究集会等で発表を行っている。大学においては、これら成果の社会還元が重要なミッションである。

■ 組織構成

このような活動を実現するために、情報センター内の組織としては、

- ・ ICTサービス部門
- ・ 情報統括部門
- ・ 事務室

の三つのセクションがある。セクションごとのミッションとして形式的にいえば、情報基盤や情報システムなどで新しい機能提供を図ったりする際には、情報統括部門で検討し、ICTサービス部門で運用する。大学内外の調整や推進、事務処理等には、事務室が貢献するという大枠があり、これは情報セキュリティの維持・向上といった活動や仕組みにおいても同様である。一方、教職共同の考えにおいては、実際にはほとんどのプロジェクトや施策運用はセクションごとに独立実施されることはなく、機能分掌ではなくフェーズ分掌の形で取り込まれているところに本センターの組織的特徴がある。そうすると、ICTサービス部門に常に運用対象機能・サービスが依拠する割合が大きくなるため、バランスを考慮した分掌化が重要になってくる。

■ 活動・所掌の概要

教育、研究、社会貢献、組織運営のいずれの視点においても情報センターとしては支援業務という枠組みになるものの、全学的な情報基盤が整備され、構成員個々にその恩恵を自然と享受できる環境が望ましい。このために以下に例示するような方向性での活動を展開している。

- ・ ハイブリッドクラウドでのDX推進
- ・ ISMSに基づく情報セキュリティマネジメント
- ・ 多要素認証など技術的セキュリティ推進
- ・ ネットワークの高速化・高度化・広範化
- ・ 内製・外注の判断
- ・ ニューノーマルに対応した環境整備
- ・ セミナー等のコンテンツ化・活性化

人と地域共創センター

人と地域共創センターは、多くの公開講座を開講してきた「大学開放実践センター」とサテライトオフィスの運営など様々な地域活性化活動を展開してきた「地域創生センター」、そして、ものづくりを中心とした企業人のリカレント教育を行ってきた研究支援・産官学連携センターの「産業人材育成部門」を統合し、さらに、若者の徳島への定着に取り組む「とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム」を実施する「COCプラス推進本部事務局」を取り込むことにより、平成31年（2019）4月に設置された。

現在、センターでは「地域人材育成」、「協働教育」、「共創実践」の3部門で事業を展開している。

○地域人材育成

「とくしま健康寿命からだカレッジ」では社会的、地域的課題である「健康寿命の延伸」と、それに係る「地域ボランティア並びに地域リーダーの育成」を目的としている。基礎課程と専門課程が有り、専門課程修了者を対象に資格試験を行い、合格者には「とくしま健康寿命マスター」資格を賦与している。

「地域産業人材育成講座」では「ものづくり」を中核のテーマとし、次世代を担う地元企業の中核技術者の育成に取り組んでいる。近年ではAI等もテーマに取り上げ、令和5年度（2023）よりビジネス系講座にも取り組んでいる。

「まちしごとファクトリー」は徳島大学、徳島新聞社、徳島県信用保証協会の連携事業である。地域と連携しながらしごとを創りだし、地域を少しずつ変えていく。そんな取り組みを応援し、地域の新しい担い手を創り出す場となっている。

「公開講座」は大学における教育・研究の成果を広く地域に開放し、学びの機会を提供することを目的に、「春夏」と「秋冬」の2期に分け、年間で60講座以上を開講している。誰もが受講できる市民の学びの場となっている。

○協働教育

「とくしま創生人材・企業共創プログラム」は文部科学省「大学による地方創生人材教育



プログラム構築事業（事業通称名：COC+R）」（令和2年度（2020）～6年度（2024））として、地域を担う質の高い人材を大学が地元企業等と協働して育成し、県内企業等の魅力・経営の向上と県内への人材定着の促進という好循環の創出に取り組んでいる。

履修学生の県内就職・県内就職者の定着・定着意識の向上を目標に、地域学習・実習の実施、企業ニーズに対応した基礎力の育成、エクスターンシップなどによる地域企業と学生の関係づくり、企業や地域における課題解決型インターンシップなどを実施している。

○共創実践

「地域課題解決プロジェクト」では、地域の課題の解決と豊かな地域社会の創造を推進することを目的に、地域との連携の下に多くの地域課題解決・価値創造事業に取り組んでいる。また、防災、環境、地域文化などをテーマに「徳島大学地域交流シンポジウム」や「タウンミーティング」を開催している。

「サテライトオフィス・プロジェクト」では県内5つのサテライトオフィスの運営を行っており、地域ニーズに応じた多彩な活動に取り組んでいる。

那賀町地域再生塾是那賀町の町おこし団体「那賀人-Nacard」と協働し、上勝学舎は徳島大学と上勝町との包括連携協定に基づき、持続可能な地域づくりを展開している。徳島大学・美波町地域づくりセンターは津波防災等の課題を抱える美波町において、大学・行政・住民が連携した地域づくりを推進する。にしあわ学舎は徳島県西部2市2町（美馬市、三好市、つるぎ町、東みよし町）を対象に地域を支える人材の育成や課題解決等の事業を行う。神山学舎では若者に魅力ある地域づくり、持続する徳島づくりの未来設計プラットフォームを目指す。

ポストLEDフォトリクス研究所

ポストLEDフォトリクス研究所 (pLED)^[1] は、内閣府の地方大学・地域産業創生交付金において徳島県「次世代“光”創出応用による産業振興・若者雇用創出計画」(期間：平成30年度(2018)～令和2年度(2022))^[2] が採択されたのを機に、学部附属のフロンティア研究センターを発展的に解消し、平成31年(2019)3月に大学附置研究所として設置された。設置当時は、大学院社会産業理工学研究部から異動した5名の専任教員のみからスタートしたが、特任教員の雇用と一部テニユア化、そして令和4年(2022)4月には、大学院社会産業理工学研究部・光系教員が合流し、現在、専任教員28名、兼任教員19名の体制となっている。専任教員は理工学部や大学院創成科学研究科も担当し、研究活動に加えて、講義や卒業研究・修士論文といった学生教育(主に、光/電気/機械)にも携わっている。

図1は、pLEDが目指すシームレスな光イノベーションの創出を示している。ここでは、4つの波長領域における光イノベーションの創出を、弓矢(実用的な光デバイス)で的(応用展開)を射ることに例えており、横軸は時間展開を示している。例えば、可視光では、既に弓矢が準備できており、いま現在、弓矢が的にバシバシ刺さっている状態と言える。ただ、的が弓矢で一杯になってやり尽くされたかという

ずしもそうでなく、医療応用(医光融合研究)を含めた高付加価値応用はまだ残されている。一方、「深紫外光」「赤外光」「テラヘルツ光」といった目に見えない次世代光は、世界中で弓矢を作っている状況である。新しい光を使えば新しいことが可能になるので、もし次世代光の弓矢を世界に先駆けて実用化できれば、弓矢が全く刺さっていない「真っ新な」が現れた時に、真っ先に矢を射、応用という的を独り占めすることが出来る。更に興味深いのは、その応用的が現れるタイミングが、波長毎に少しずつずれていることである。したがって、これらの波長領域の光デバイスを世界に先駆けて順次実用化して弓矢を放ち、各波長領域特有の応用展開の的を射ることにより、光イノベーションを切れ目無く連続的に創出できると考えられる。このようなシームレスな光イノベーションの創出を目指して、研究活動とそれを通じた学生教育を行っている。これまでに、研究テーマの選択と集中、そして強化を行い、次世代移動通信と高感度バイオセンサーを重点化した。これらの研究成果に関する社会実装の加速を目指して、内閣府の地方大学・地域産業創生交付金(展開枠)に応募し、令和5年度(2023)から4年間の追加支援が認められた^[3]。重点テーマの社会実装に向けて、さらに加速していきたいと考えている。

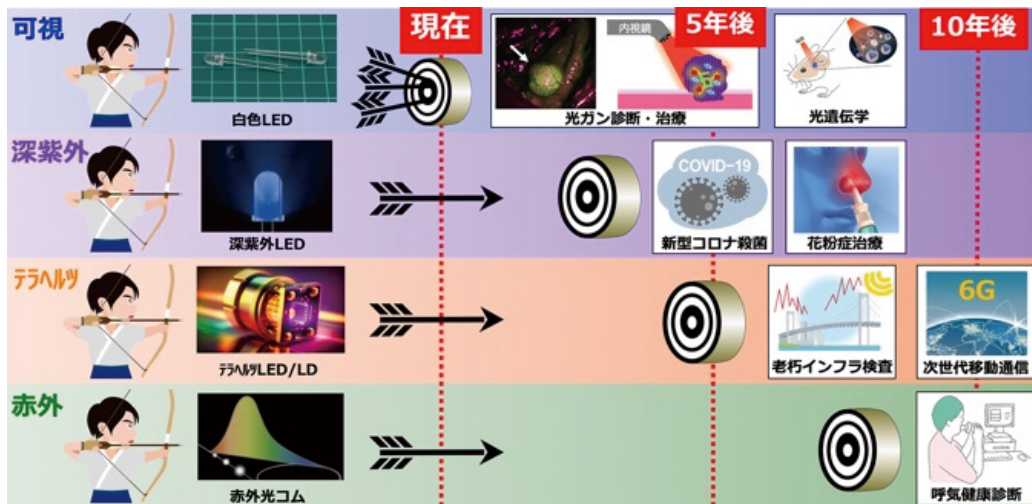


図1 シームレスな光イノベーションの創出

次に、文部科学省「魅力ある地方大学の実現に資する地方国立大学の定員増」に選定され^[4]、令和5年（2023）4月から始まる医光／医工融合プログラム（図2）^[5]について紹介したいと思う。大学教育は、講義に基づいた授業教育（学部1～3年）と研究室配属後に行われる研究教育（学部4年以降）に分けることができる。研究教育では、答えや解き方が分かっていることを学ぶ授業教育とは異なり、答えや解き方が分からないことに関して学生自身がそれらを見つけていく過程を通して、学生のポテンシャルを大きく伸ばすことができる。このような研究教育の効果を最大化するため、本プログラムでは学部1年生から研究室配属を行う。また、研究教育の環境も重要という観点から、医と光に関する学内トップレベル研究者（pLED、医

学部、先端酵素学研究所ほか）に本プログラムへ参画して頂いている。本プログラムを通して、新しいモノを創り出す企業人材、技術立国の再興に資する研究者、サクセスストーリーを体現する起業家、地方を元気にする地方創生人材など、新しい価値を作り出せる多種多様な人材を社会に創出していきたく考えている。

参考URL

- [1] <https://www.pled.tokushima-u.ac.jp>
- [2] <https://www.tokushima-u.ac.jp/hikari/>
- [3] <https://www.tokushima-u.ac.jp/docs/46385.html>
- [4] <https://www.tokushima-u.ac.jp/docs/40155.html>
- [5] <https://www.mpe.tokushima-u.ac.jp>

光学、工学、医学、情報科学に関する幅広い知識と技術を有し、
理工学部の視点で、医学に新しい価値を創り出せる人材育成



トップレベル研究者が教育に参加

世界水準の研究と学際的な学修でグローバルな視野を修得
教員組織を横断した学際的な特別教育プログラム



実感型実践教育として1年生から研究室配属

研究を通じて目的意識を育て、未知の課題への挑戦力を養う
研究活動を通じて、学問と実務の関連性を理解

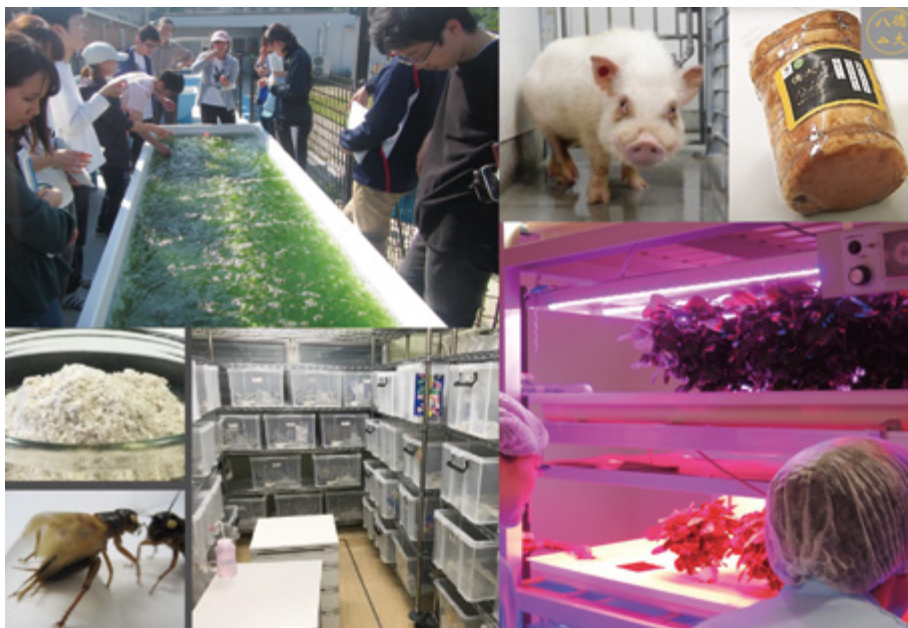
図2 医光／医工融合プログラム

バイオイノベーション研究所

徳島大学バイオイノベーション研究所(BIRC)は、徳島大学が地域や産業界と連携し、地域における生物や第一次産業に関連するオープンイノベーションの核となり、生物系新産業の創出を目指して令和2年(2020)7月に設立された。生物資源産業学部農場(石井町)、水圏教育研究センター(鳴門市)と新野キャンパス(阿南市)を統合し、8名の専任教員と14名の併任教員で産業生物系部門(9分野)および地域生物系部門(7分野)の2部門(16分野)で構成されている。これまで、専任教員が主体となり既に大学発ベンチャーが2社創業されており、商業的な創出とともに、地域経済にも貢献している。特に昆虫生産分野では、SDGs関連で食用昆虫飼育システムや高機能食材の開発など地域だけでなく、世界的課題に対応する大学発ベンチャー(株式会社グリラス)の創業につながっている。そのほか特筆すべき活動として、令和2年度(2020)に経済産業省J-Innovation HUB地域オープンイノベーション拠点(地域貢献型)に選定されており、企業ネットワークのハブとなって地域の課題解決や地域経済の振興等に貢献することに、大きな期待が寄せられている。また、これら実績を背景に、令和4年(2022)3月には「令和3年度産学連携推進事業費補助金(地域の中核大学の産学融合拠点の整備)」

の採択を受け、共同実験施設・設備として新規研究施設(ヴォルテックス棟)が竣工予定(令和5年(2023)8月)であり、整備施設への企業等の誘致や共同研究講座の設置により、未来の新産業の創出と地域創生につながる人材育成を行う体制が整いつつある。このように、本学を中心とした生物

系地域オープンイノベーションプラットフォームを構築することで、異分野融合の新展開、大学発ベンチャー創出、地域定着型産業人材育成による地域活性化を実現し、本学への資金循環による持続可能な産官学共創システムを構築することを目指している。



地域交流の推進

徳島大学工学部七十五年史では、工学部が開かれた学部として果たしてきた足取りとして、「大学開放実践センター」における公開講座の開設による社会人の生涯学習や技術者再教育、および「地域共同研究センター」による産・官・学共同研究の推進による地域産業の技術開発と地域振興が紹介された。「大学開放実践センター」は、平成31年（2019）4月に「徳島大学人と地域共創センター」に統合され、新たな徳島大学のリカレント教育と地方創生の拠点として、地域課題の解決と豊かな地域社会を推進するための地域貢献にさらに取り組んでいる。また、地域共同研究センターは、平成17年（2005）4月に徳島大学知的財産本部に統合され、現在は「研究支援・産官学連携センター」として全学組織として発展的に展開している。両センターとも設立当初に工学部が強く関与した種が大きく育ったことを示している。

ここでは、視点を変え、地域交流の推進として、工学部さらには理工学部主催で25回にわたり実施し、徳島の夏の風物詩となった「科学体験フェスティバルin徳島」を紹介する。大学入学に際しての受験生の理科離れを指摘されてから久しい。このことは工学部の将来にわたる発展を考えると致命的なことである。このため、理科離れを改善するための一助として、平成9年度（1997）から、主として小学生を対象とした“科学体験フェスティバルin徳島”を開催している。理科離れを意識した行事であったが、理科離れは徳島県内の製造現場においても危惧する事象であったため、徳島県内企業からの大きな支援を受けて実施するようになった。第1回開催時から、阿波銀行、四国電力徳島支店の協力（共催）を得て、徳島大学工学部が主催しており、これら3団体と徳島県小学校、中学校および高等学校の各教育研究会理科部会（高等学校：理科学会）、徳島県立総合教育センターの産官学からなる実行委員会により、計画運営されてきた。県内企業の「科学体

験フェスティバルin徳島」への参加には、原則自費での参加をお願いしているが、第1回大会では、40種類の体験型ブースを、産2団体、官1団体、学（小中高大）9団体で運営した。当初は産官側も手探りの対応であったが第13回大会では、50種類の体験型ブースを、産14団体、官6団体、学（小中高、高専、学会）7団体で運営するまでに至った。毎回、2日間で8,000名以上の入場者があるため、開催方法も参加者数や規模の拡大ばかりを目標とするのではなく、理科離れを防ぐという当初の目的に戻り、開催方法を改善するなどした。しかし、コロナ禍のため対面による通常大会の最後となった第23回大会（令和元年度（2019）、理工学部主催）でも、47種類の体験型ブースを、産9団体、官3団体、学（小中高大、高専、学会）9団体で運営し、参加者数も9,000名に達している。当初は、工学部の入学生を増やすことができると始めたものであったが、理科離れへの対策については教育界、官公庁、県内企業も熱心に対応してくれ、「科学体験フェスティバルin徳島」が今までになかった工学部（理工学部）の新たな地域交流となっている。ブースを担当した企業関係者からは、「私が子供の時にこのフェスティバルに参加しました。製薬系の県内企業に就職し、今度はブース担当者として参加させて頂くようになりました」と伺い、理系離れに少しでも寄与できているようである。コロナ禍のため、令和2年度（2020）の開催は中止となったが、令和3年度（2021）に開催した第24回大会では、「今年の夏はおうちで科学体験！」としてオンライン開催で実施した。オンラインによる初めての試みであったため、出展者は徳島大学関係とし、17種類のオンライン体験型ブースを映像として配信し、理工学部HPから参加できるようにして開催した。初めてのことであり不安もあったが、映像化に対するブース出展者や技術的な支援を頂いた教職員の献身的な貢献もあり、2,684回の視聴回数

を得た。第25回大会においては、まだコロナ禍にあったため、第24回に引き続き、オンライン形式（オンデマンド型）で安心・安全に最大限配慮した「おうちで科学体験フェスティバル」を開催し、「さわって、つくって、楽しい科学」をご家庭で実践できる動画コンテンツを配信した。

しかしながら、やはり大学に来て直に科学体験してもらいたいという実行委員会の想いもあり、第26回大会（令和5年度（2023））は「なぜ？ どうして？ がいっぱいワールド」をメインテーマとして、令和5年（2023）8月5日（土）、6日（日）に「withコロナ」を意識した事前申込み制にて4年ぶりに対面開催した。4年ぶりということで定員割れの不安もあったが、ありがたいことに、参加定員588名に対し2,563件に上る応募があり、当イベントの需要の高さが

窺える。今回は、15ブースの小規模開催ではあったが、今回の新しい開催方法をもとに、今後のさらなる発展を期待したい。

なお、このように大きく花開いたイベントであるため、「科学体験フェスティバルin徳島による理系進学の普及啓発」として平成23年度（2011）科学技術分野の文部科学大臣表彰 科学技術賞（理解増進部門）を受賞、また平成28年（2016）には徳島大学大学院理工学研究部総合技術センターが、「科学体験フェスティバルin徳島」や出前科学実験教室「やっ Toku、なっ Toku、Dai実験」などを通じて、理科や数学あるいは科学技術といった分野の実験やものづくり体験教室を実施し、科学技術の理解増進に向けた取組を推進していることを高く評価され、県科学技術大賞 科学技術理解増進部門を受賞した。



第1回科学体験フェスティバルin徳島

オープニングセレモニー



第8回科学体験フェスティバルin徳島

伝説のスライム



第23回科学体験フェスティバルin徳島

親子そろって工作！



第26回科学体験フェスティバルin徳島

事前申込み制での4年ぶりの対面開催



第24回科学体験フェスティバルin徳島

新型コロナ禍におけるオンライン開催用動画作成

キャンパスライフ



卒業式





入学式





オープンキャンパス





四季のキャンパス風景



阿波踊り

五月祭



常三島祭



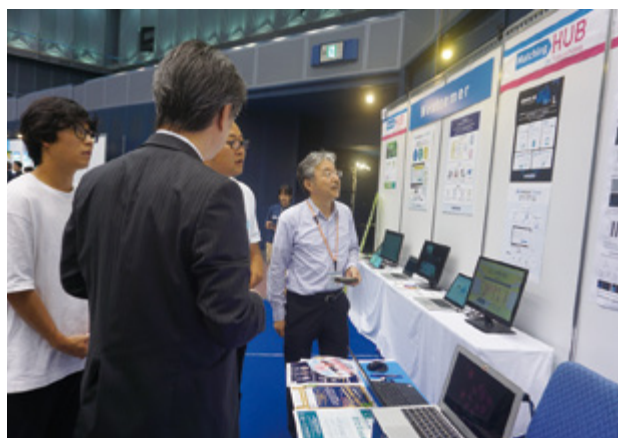
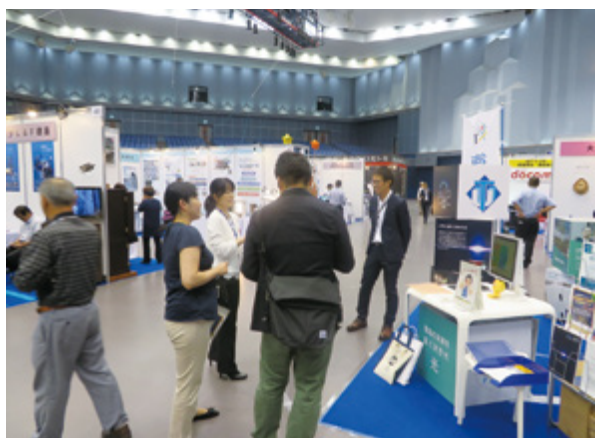
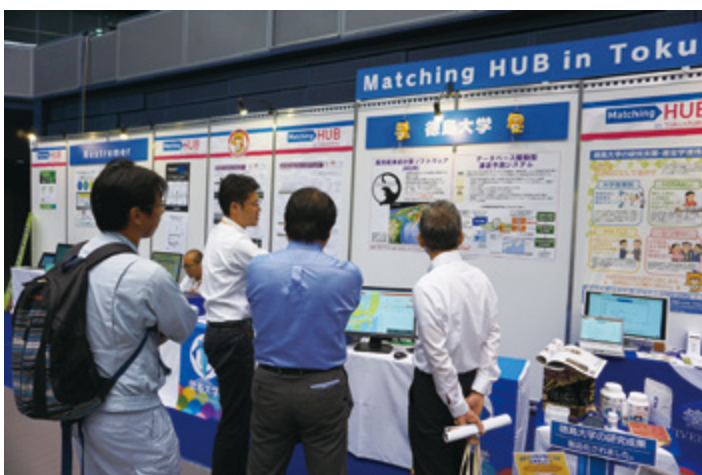
科学体験フェスティバル



社会産業理工学研究交流会



徳島ビジネスチャレンジメッセ



やさしい科学技術セミナー



創新教育





国際交流





部活動



徳島大学工業会の歩み

徳島大学工業会の発足

徳島大学工業会（英語表記：Tokushima Technical Association、略称 T.T.A.）は、徳島高等工業学校、徳島工業専門学校（附設臨時教員養成所を含む）卒業生、選科修了生、徳島大学工学部卒業生および工学専攻科修了生、徳島大学工業短期大学部卒業生、徳島大学大学院工学研究科修了生、徳島大学大学院先端技術科学教育部修了生、徳島大学理工学部卒業生、徳島大学生物資源産業学部卒業生、徳島大学大学院創成科学研究科理工学専攻修了生、徳島大学大学院創成科学研究科生物資源学専攻修了生、徳島大学大学院創成科学研究科創成科学専攻（工学・農学・理工学部教員指導の学術）修了生などからなる49,000名を超える正会員と、上記学部、大学院の在学生からなる準会員、母校の現、旧教職員からなる特別会員、および徳島大学工学部、理工学部、生物資源産業学部または本会に特別の功労があった名誉会員を擁するわが国屈指の工学系同窓会として、昭和8年（1933）12月に「徳島工業会」として創立（創立時の会則を示す）以来、会員相互の親睦ならびに母校の隆昌を図り進んで産業の発展に寄与することを目的に活動を継続してきている。同年12月18日に第1号の会報が発行され、その後、第2次世界大戦中と戦後の混乱期を除いて、定期的に発行され、大学の状況や卒業生の活躍等が報告されている。

徳島大学工学部創立75周年までの歩み

平成8年（1996）8月31日に竣工し、同年9月16日に工業会館落成記念式典および祝賀会が開催されるまでの徳島大学工業会の歩みは、「徳島大学工学部七十五年史」と「徳島大学工学部五十年史」にまとめられており、ここでは割愛する。

徳島大学工業会の活動概要

本会の目的は、現在の会則にも引き継がれており、「会員相互の親睦ならびに母校の隆昌を図り進んで産業の発展に寄与すること」であり、目的達成のために「会報および会員名簿の発行、母校への賛助、国際交流助成、卒業生・修了生の表彰、その他適宜の事業を行う」と定められており、以下の事業を行っている。（徳島大学工業会HP参照、<https://www.tokushima-u.ac.jp/kgk/>）

● **会報発行** 毎年8月もしくは9月に発行し、会員全員（正会員・準会員・特別会員）に郵送・配布している。

● **名簿発行** 2年毎に発行してきたが、発行間隔は見直す可能性もある。

● **母校への賛助** 理工学部と生物資源産業学部への賛助を毎年行っている。さらに、工業会会員が無給で非常勤講師として採用された場合に旅費、宿泊費を助成している。

● **国際交流助成** 昭和60年度（1985）から予算計上され、教員の国際研究発表者への助成金と外国人留学生のうち滞在費の少ない学生を対象として援助金を助成していた。そして、平成8年度（1996）からは教員を対象として私費での国際会議研究発表者に助成を行ってきた。その後、平成29年度（2017）より対象を博士前期課程学生に変更し、海外での国際会議研究発表者に助成を行っている。

● **卒業生・修了生の表彰** 各コースより推薦された卒業生・修了生に対し、卒業式・修了式の日には表彰と副賞（記念品）を贈呈している。

● **記念品の贈呈** 卒業生および修了生全員に対し、記念品を贈呈している。

● **学部生（1～3年次）成績優秀者の表彰** 平成29年度（2017）から、理工学部および生物資源産業学部の各学年各コースの年間成績優秀者に賞状と図書カードを授与している。

- **ホームカミングデイ** 平成20年（2008）5月11日に会員へのサービスの一環として、大学の現状（組織の変遷と推移、建物と設備、研究内容等）を紹介するとともに、会員相互の親睦を図ることを目的に第1回ホームカミングデイを開催し、原則として総会翌日に実施している。
- **工業会T&E会** 工業会会員の皆様の中で企業の取締役や役員等リーダーシップを執る立場にある皆様方と工学部執行部（平成28年（2016）4月1日の改組により理工学部と生物資源産業学部）や学科長（コース長、系長）らで構成される「工業会T&E会」が平成20年度（2008）に設置された。T&Eとは「Top and Executive」および「Tokushima & Engineering」を意味しており、設立の趣旨は、相互に連携を保ちつつ、本学の研究や教育の水準を引き上げるような有形無形の協力や助言をいただくことである。
- **支部活動** 全国に18支部があり、支部総会が基本的には、隔年もしくは毎年行っている。工業会役員と大学教員も出席し、大学の近況等について報告するとともに会員相互の親睦を図っている。
- **会議** **総会**は年1回5月第2土曜日に開催し、会務の報告、ならびに決算、予算および重要事項の審議・承認を行っている。総会終了後には「記念講演」を行っている。コロナ禍においては、総会・記念講演はリモートと対面（最小限の役

員のみ参加）のハイブリッドで行い、懇親会も開催していないが、令和5年度（2023）総会は、対面で開催し、懇親会も実施した。

理事会は、毎年4月に理事長、副理事長、監事、理事、事務局が出席し、重要事項の審議・承認を行っている。

学内理事会は、毎年12月（理事会となる場合もある）と3月に理事長、副理事長、学内理事、事務局が出席し、重要事項を審議している。

支部長会議は、年1回総会の前に理事長、副理事長、主たる業務担当理事、18支部の支部長および代理の方、近畿支部連合会、事務局が参加し、支部現況報告と工業会に関する意見交換を行っている。

● **工学部創立100周年記念事業** 工業会会報やニュースメールによる記念事業の周知と支援を工業会員に呼びかけるとともに本部・支部役員を中心に各地の企業への本事業への支援を呼びかけた。

● **工業会のキャッチフレーズの決定と旗の作成**
平成30年（2018）工業会会報で工業会のキャッチコピーフレーズを募集し、池田貴彦様（知情H4年卒）の作品が採用され、工業会報を郵送する封筒や下の写真の工業会旗（平成31年（2019）作成、幅1.5m 高さ1m）等、工業会のシンボルマーク（英語表記：Tokushima Technical Association 略称T.T.A.）とともに幅広く使用している。

徳島工業会会則（昭和8年12月）	
第1条	本会は徳島工業会と称す。
第2条	本会は会員相互の親睦並母校の隆昌を計り、進んで工業の発展を期するを以て目的とす。
第3条	本会は左記の会員を以て組織す。 1. 正会員 徳島高等工業学校卒業生及修業生並本校に1年以上在学せしものにして役員会の推薦による者。 2. 賛助会員 現旧職員にして役員会の推薦に依る者。 3. 名誉会員 前学校長及知名の士にして会長の推薦したるもの。
第4条	会長 学校長を推薦す。
第5条	本会は左の役員を置き任期は2年とす。 1. 評議員 若干名賛助会員中より会長の依頼したる者及徳島市在任正会員中各科2名宛互選したる者。 2. 幹事 若干名会長之を依頼し会務を所理するものとす。
第6条	役員会は会長、評議員、幹事を以て組織す。
第7条	本会は左の事業をなす。 会報、会員名簿の発行及機宜の事業。
第8条	本会の経費は当分の内校友会基本金の利子を以て之に充つるものとす。
第9条	会則変更は役員会の承認を經るものとす。
第10条	本会は本部を母校内に置き、多数会員在任せる地方に支部を置くことを得、支部設立の際は本部に通知するものとす。

徳島工業会会則（昭和8年（1933））



総会での工業会旗



工業会旗

徳島大学工業会会則

第1章 総 則

- 第1条 本会は徳島大学工業会（英語表記：Tokushima Technical Association, 略称 T.T.A.）と称す。
- 第2条 本会は会員相互の親睦ならびに母校の隆昌を図り進んで産業の発展に寄与することを目的とする。
- 第3条 本会は前条の目的を達成するため会報および会員名簿の発行、母校への賛助、国際交流助成、卒業生・修了生の表彰、その他適宜の事業を行う。
- 第4条 本会は事務所を徳島大学理工学部内に置く。

第2章 会 員

- 第5条 本会は次の会員をもって組織する。
- 1 正 会 員
- (イ) 徳島高等工業学校、徳島工業専門学校（附設臨時教員養成所を含む）卒業生、選科修了生
- (ロ) 徳島大学工学部卒業生および工学専攻科修了生
- (ハ) 徳島大学工業短期大学部卒業生
- (ニ) 徳島大学大学院工学研究科修了生
- (ホ) 徳島大学大学院先端技術科学教育部修了生
- (ヘ) 徳島大学理工学部卒業生
- (ト) 徳島大学生物資源産業学部卒業生
- (チ) 徳島大学大学院創成科学研究科理工学専攻修了生
- (リ) 徳島大学大学院創成科学研究科生物資源学専攻修了生
- (ニ) 徳島大学大学院創成科学研究科創成科学専攻（工学・農学・理工学部教員指導の学術）修了生
- (ル) 前記各号に準ずる者で理事会の推薦を受けた者
- 2 準 会 員
- (イ) 徳島大学工学部在學生
- (ロ) 徳島大学理工学部在學生
- (ハ) 徳島大学生物資源産業学部在學生
- (ニ) 徳島大学大学院先端技術科学教育部在學生
- (ホ) 徳島大学大学院創成科学研究科理工学専攻在學生
- (ヘ) 徳島大学大学院創成科学研究科生物資源学専攻在學生
- (ト) 徳島大学大学院創成科学研究科創成科学専攻（工学・農学・理工学部教員指導の学術）在學生
- 3 特別会員
- 徳島大学理工学部・生物資源産業学部学生の教育に携わる教職員及び次の各号の一に該当する者で、理事会の推薦を受けた者
- (イ) 徳島大学工学部および工業短期大学部の旧教職員
- (ロ) 徳島高等工業学校および徳島工業専門学校の旧教職員
- (ハ) 徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部の旧教職員
- (ニ) 徳島大学大学院理工学研究部の旧教職員
- (ホ) 徳島大学大学院生物資源産業学研究部の旧教職員
- (ヘ) 徳島大学理工学部学生の教育に携わられた旧教職員
- (ト) 徳島大学生物資源産業学部学生の教育に携わられた旧教職員
- (チ) 徳島大学工業会に功勞のあった者
- 4 名誉会員
- 徳島大学工学部、理工学部、生物資源産業学部または本会に特別の功勞があったとして理事会において承認した者

第3章 役 員

- 第6条 本会に次の役員を置く。
- | | |
|-------------|-------|
| 1 名 誉 会 長 | 1名 |
| 2 名 誉 副 会 長 | 1名 |
| 3 理 事 長 | 1名 |
| 4 副 理 事 長 | 3名 |
| 5 顧 問 | 若干名 |
| 6 理 事 | 50名以内 |
| 7 監 事 | 2名 |
| 8 支 部 長 | 各支部1名 |
- 第7条 役員は任期は次項による。
- 1 各役員は任期は2年とし、再任を妨げない。ただし支部長はこの限りでない。
- 2 役員は欠員が生じた場合の後任役員は任期は前任者の残任期間とする。

- 第8条 役員は次項による。
- 1 名誉会長は理工学部長あるいは生物資源産業学部長とする。
- 2 名誉副会長は理工学部長あるいは生物資源産業学部長とする。
- 3 理事は徳島県在住の会員から理工学部および生物資源産業学部各コース会員の推薦により理事会において選出する。
- 4 理事長および副理事長は理事会において理事から選出する。
- 5 顧問および監事は理事会において推薦する。
- 6 支部長は各支部において選出する。
- 第9条 役員は職務は次のとおりとする。
- 1 理事長は会務を総括し本会を代表する。
- 2 副理事長は理事長を補佐するとともに、理事長に事故あるときはその職務を代理する。
- 3 理事は重要事項を審議し会務を処理する。
- 4 監事は毎年1回以上会務を監査する。
- 5 顧問は理事長および理事会の諮問に応ずる。
- 6 支部長は支部の会務を総括し支部を代表する。

第4章 業 務

- 第10条 本会に次の各担当を置き業務を執行する。
- 1 庶務担当……会員相互の連絡に関する事項ならびに他の担当に属さない一般業務
- 2 会計担当……会費の徴収、経費の支出など会計業務
- 3 名簿担当……会員名簿の発刊に関する業務
- 4 会報担当……会報の発刊に関する業務
- 5 支部担当……本部と各支部との連絡調整に関する業務
- 6 情報担当……ホームページ、ニュースメールに関する業務
- 第11条 各担当には理事長が委嘱した理事を配置する。

第5章 会 議

- 第12条 総会は原則として毎年1回以上開催し会務の報告、ならびに決算、予算および重要事項の審議・承認を行う。
- 第13条 役員会は必要に応じ開催する。
- 第14条 理事会は必要に応じ開催し重要事項を審議・決定する。理事会の構成員は理事長、副理事長および理事とし、理事会は過半数の出席で成立する。
- 第15条 各支部と本部の交流を図るため必要に応じ支部長会議を開催することができる。支部長会議の構成員は支部長、理事長、副理事長および業務担当理事とする。

第6章 会 計

- 第16条 本会の運営は終身会費、寄附金その他の収入による。
- 第17条 準会員は入学時に、終身会費として4万円を納入しなければならない。
- 第18条 正会員は終身会費4万円を納入しなければならない。ただし前条により終身会費を納めた者は納付の必要はない。
- 第19条 納入した会費は原則として返却しない。
- 第20条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

第7章 支 部

- 第21条 正会員の多数在住する地区には、会員の希望により支部を置くことができる。
- 第22条 各支部の会務は支部長の責任において適宜処理するものとする。

第8章 会則の変更

- 第23条 会則の変更は理事会で議決し、総会で報告する。

第9章 附 則

- 第24条 会員が義務を怠ったときはその権利の一部を停止することができる。
- 第25条 本会の運営に関する詳細は別に定める内規による。
- 第26条 本会則は令和4年4月20日より実施する。

創立100周年記念事業

徳島大学工学部 創立100周年記念事業委員会

徳島大学工学部は、大正11年（1922）10月に設置された徳島高等工業学校を前身としており、令和4年（2022）10月に創立100周年を迎えた。

現在は、平成28年（2016）4月の学部改組により、工学部の生物工学科を除く学科と総合科学部理学分野を統合した理工学部と、及び工学部生物工学科を中心に総合科学部等の教員を統合した生物資源産業学部2学部生まれ変わった。両学部は創立以来約4万9千名に上る技術者を輩出しており、卒業生で構成される同窓会組織「徳島大学工業会」を組織している。

こうした経緯から、工学部創立100周年記念事業では、理工学部、生物資源産業学部、工業会を母体として、徳島大学工学部創立100周年事業委員会を令和3年（2020）7月9日に設置した。事業委員会には、実務を担う学内関係者で構成した「徳島大学工学部創立100周年記念事業実行委員会」を設置し、さらに各事業の遂行を担うため、募金、広報・記念誌、式典・記念講演・ホームカミング、キャンパス整備、教育研究・学生支援・国際交流、地域貢献のワーキンググループを設置している。

徳島大学工学部 創立100周年記念事業委員会

委員長 (理工学部長・工業会名誉会長)	武藤 裕則
副委員長 (生物資源産業学部長・ 工業会名誉副会長)	松木 均
副委員長 (工業会理事長)	林 宏二郎
前理工学部長 前工業会名誉会長	山中 英生
前生物資源産業学部長 前工業会名誉副会長	長宗 秀明

前工業会理事長	坂東 武
工業会副理事長	森 浩道
工業会副理事長	濱 昇司
工業会副理事長	上田 哲史
創立100周年記念事業実行委員長 前工業会副理事長	長尾 文明
元理工学部長 元工業会名誉会長	橋爪 正樹

徳島大学工学部 創立100周年記念事業実行委員会

理工学部長	武藤 裕則
前理工学部長	山中 英生
理工学部顧問	長尾 文明 委員長
副学部長 (総務)	寺田 賢治
副学部長 (教育)	米倉 大介
副学部長 (研究)	杉山 茂
副学部長 (国際)	森賀 俊広
学部長補佐	島本 隆
学部長補佐	古部 昭広
学部長補佐	村上 公一
学部長補佐	太田 光浩
学部長補佐	安間 了
学部長補佐	中村 浩一
学部長補佐	北條 昌秀
学部長補佐	小川 宏樹
元学部長	橋爪 正樹
生物資源産業学部長	松木 均
副学部長	櫻谷 英治
教授	中村 嘉利 副委員長

徳島大学工学部創立100周年記念事業後援会

また、創立100周年記念事業の趣旨に賛同いただいたOB、関係機関の方々を中心に事業後援会を組織していただいている。

徳島大学工学部創立100周年記念事業後援会 (令和5年4月1日現在) (敬称略)

【名誉会長】 野地 澄晴 (第13代徳島大学長)

【名誉副会長】 河村 保彦 (第14代徳島大学長)

【会長】 大西 徳生 (第21代工学部長)

【副会長】 林 宏二郎 (工業会理事長) 坂東 武 (前工業会理事長) 長宗 秀明 (前生物資源産業学部長)

【特別顧問】

森 浩道	濱 昇司	大坪 潤一郎	神田 睦	佐々木 久	内藤 修身	林 正	藤田 定吉
港 忠徳	美馬 敬正	山本 統一	徳永 剛志	中野 健児	足立 正文	石橋 聡	磯部 良彦
石城 猛	遠藤 秀治	金岡 秀司	四宮 忠雄	芝 光法	杉本 寧	住中 実	大丸 讓二
高瀬 浩之	高橋 一	立石 秀樹	田中 雅人	田村 義文	高村 浩司	原田 新一	平田 英二
藤澤 一仁	本田 正敏	前田 秀夫	松田 孝一	丸尾 和也	宮本 幸浩	宮本 良之	

【顧問】

阿波製紙株式会社	取締役社長	三木 康弘
株式会社エコー建設コンサルタント	代表取締役社長	齋藤 恒範
大倉工業株式会社	代表取締役社長執行役員	神田 進
株式会社基礎建設コンサルタント	代表取締役	中木 一文
グローリー株式会社	代表取締役社長	三和 元純
五洋建設株式会社	代表取締役社長	清水 琢三
四国化工機株式会社	代表取締役社長	植田 滋
四国建設コンサルタント株式会社	代表取締役社長	天羽 誠二
四国放送株式会社	代表取締役社長	岡元 直
株式会社島津製作所	代表取締役会長	上田 輝久
新明和工業株式会社	取締役社長	五十川 龍之
株式会社タダノ	代表取締役社長	氏家 俊明
株式会社徳島大正銀行	代表取締役頭取	坂東 豊彦
戸田建設株式会社	代表取締役社長	大谷 清介
徳真電機工業株式会社	代表取締役	村上 泰弘
富田製菓株式会社	代表取締役	富田 純弘
鳴門塩業株式会社	代表取締役社長	安藝 順
ニタコンサルタント株式会社	代表取締役社長	安藝 浩資
日亜化学工業株式会社	代表取締役会長	小川 英治
日本システム開発株式会社	代表取締役	金岡 秀司
日本フネン株式会社	代表取締役社長	久米 徳男
株式会社はなおか	代表取締役会長	花岡 秀芳
バナソニック エコシステムズ株式会社	代表取締役社長	小笠原 卓
株式会社姫野組	代表取締役社長	松本 哲
株式会社フジタ建設コンサルタント	代表取締役	藤田 達也
港産業株式会社	代表取締役会長	港 忠徳
株式会社山本鉄工所	代表取締役会長	山本 統一

【理事】

青江 順一	生田 信皓	池田 早苗	石田 啓祐	猪子 富久治	今枝 正夫	今田 泰嗣	逢坂 昭治
大恵 俊一郎	大橋 守	大淵 朗	片山 真一	川上 博	北 研二	木内 陽介	河野 清
小山 晋之	近藤 光男	田中 太平	富田 展	長尾 文明	長田 正義	中野 晋	中林 一朗
成行 義文	橋爪 正樹	端野 道夫	英 崇夫	日置 善郎	福井 萬壽夫	福富 純一郎	水口 裕之
三井 宏	村上 理一	村田 明広	森 一郎	森田 郁朗	森吉 孝	山上 拓男	山田 勝徳

【学内理事】

浅田 元子	一宮 昌司	上田 隆雄	右手 浩一	宇都 義浩	岡田 達也	河田 佳樹	木下 和彦
櫻谷 英治	獅々堀 正幹	田中 保	直井 美貴	蓮沼 徹卓	服部 武文	濱野 龍夫	原口 雅直
真壁 和裕	三好 徳和	武藤 裕則	安澤 幹人				

【会員】

安藝 浩資	浅井 洋	東 泰央	阿部 哲	阿部 弘	網谷 健二郎	天羽 誠二	新井 義治
荒木 一郎	貴之	石川 石川	石川 雅一	市川 亮一	伊藤 秀一	井上 弘幸	入山 益雄
岩瀬 一郎	武志	上西 正之	梅田 真司	大久保 重敏	大倉 繁	太田 雅也	大西 利治
大橋 邦彦	和之	岡田 亨嗣	長山 展	尾高 功二	敬三 敬三	小野 正人	織野 明弘
海磯 孝二	節雄	笠本 忠志	梶 英美	柏原 宏行	山 圭右	片山 昌人	加藤 憲一
金重 和義	節勝	笠本 俊明	川田 晋吾	川田 義英	喜多 宏思	北浦 淳	北畑 米嗣
楠川 量啓	國塩 和良	久米 圭史	黒田 憲二	五島 滋喜	後藤 尚	小谷 要	小林 利章
小山 徹也	小山 和太	近藤 明生	近藤 雅樹	佐伯 尚	坂本 雄一	先山 徹	佐藤 栄作
塩谷 博道	篠原 光彦	芝原 靖典	清水 孝広	下山 貴司	鈴江 正義	鈴木 勝之	鈴木 守
瀬尾 文隆	蘇鉄本 稔	高尾 仁士	高田 茂生	高橋 英基	田上 稔	武川 秀也	竹田 孝之
多田 佳織	谷 秀男	通弘 寛	田端 厚之	田原 克尚	田原 敏	田淵 敏明	千谷 昌孝
辻井 卓也	津田 裕史	鶴崎 寛	手塚 英治	寺田 光宏	寺田 義治	寺村 高司	戸川 聡
徳勢 允宏	友成 隆治	友道 康仁	西川 謙二	中木 一文	中筋 勝義	中谷 聡志	中山 忠幸
新村 仁盛	仁木 裕治	西川 英吉	長谷 修次	西村 茂	納田 野島	野島 好史	好史 昌秀
野山 義裕	橋本 清司	橋本 正	平谷 秀臣	濱田 平野	林 俊幸	林 福永	板東 浩二
久積 義人	平尾 正幸	岡 良和	平古 秀臣	平野 英二	岡田 好徳	福永 孝二	藤岡 直浩
藤山 真希	古川 勉	細川 哲	前川 恭範	前田 比呂紀	岡田 正順	増田 正木	増田 敏浩
増田 優男	益田 学	増田 義博	松浦 真司	松田 比呂紀	宮田 耕正	宮田 直司	村上 茂樹
村上 敏彦	龍太郎 裕史	室 進	室 進	森 澄生	森田 直	山田 直	山田 進
矢野 正人	山口 裕史	山地 進	山路 澄生	山下 智	山田 直	山本 耕司	吉野 伸輔
吉田 一郎	米川 孝宏	米富 康雄	脇田 清治	脇田 芳典	和 誠	渡津 秀孝	渡部 耕次

徳島大学工学部創立100周年記念 ホームカミングデー



100周年記念式典当日令和5年（2023）5月14日正午より、徳島大学工学部創立100周年記念（徳島大学工業会としては第15回）ホームカミングデーが徳島大学工業会館2Fメモリアルホールにて実施された。感染症拡大防止のため、令和元年（2019）開催後中止が続き、久しぶりの開催となった。前日の13日には工業会支部長会・総会も開催され、夕刻の記念式典との連続性もあり、参加者は82名に上った。

長尾文明名誉教授（100周年記念事業実行委員長）の司会によりプログラムが始まった。まず、武藤裕則理工学部長（工業会名誉会長）からは、令和4年度（2022）をもって工学部最後の卒業生を送り出し、工学部は記念事業開催と合わせて100年の有終の美を飾ったという報告、ならびに、理工学部の近況、および今後の発展に関する意気込みが述べられた。

松木均生物資源産業学部長（工業会名誉副会長）からは当該学部設立からの7年について、3拠点における活動内容の紹介を軸に総括が述べられた。また8月に開所予定の研究所について概要紹介があった。



林宏二郎工業会理事長からは100周年記念事業に関する協力ならびに記念事業基金への寄附について、関係者への謝意が述べられた。



昼食会においては参加者間で思い出話に花が咲くとともに、大学の現状や感染症問題後の学生の様子などについての意見交換、卒業生の勤める各企業のホットトピック、各地域の話題で盛会となっていた。当日は生憎の雨模様となったため、当初予定していた屋外での撮影は諦め、講義棟の教室内での集合撮影を実施した。



その後、理工学部・生物資源産業学部の各研究室・実験施設等の見学ツアーが開催された。理工学部の現コース構成に合わせて見学コースが設定されたが、参加者自身が卒業された学科に相当するコースへの訪問が基本ではあったが、

興味を持ったコースを選択したという参加者もいた。なお、数理科学・自然科学の2コースは卒業生を送り出し始めたばかりのため実施されなかった。以下、各見学コースのスナップ写真を、案内した教員名とともに紹介する。



≫ 社会基盤デザインコース：上田隆雄教授、奥嶋政嗣教授、野田 稔教授

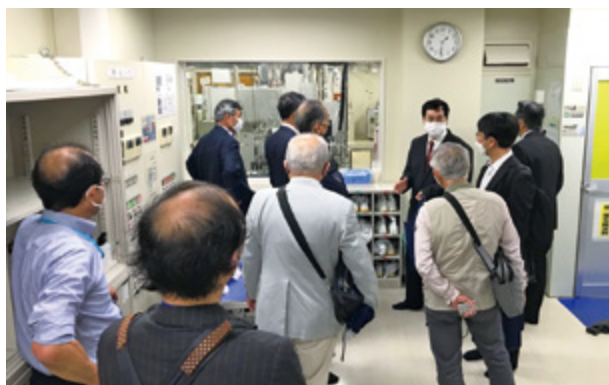


≫ 機械科学コース：佐藤克也准教授



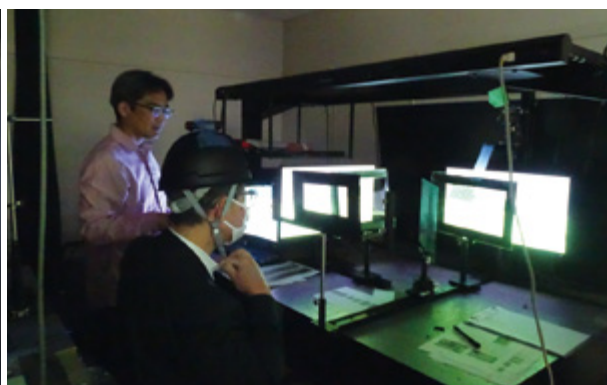
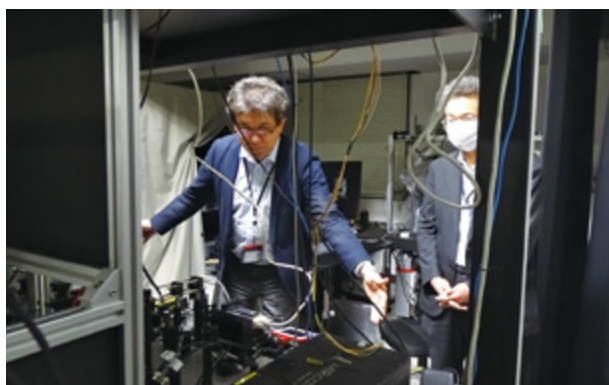
≫ 応用化学システムコース：

杉山 茂教授、安澤幹人教授、森賀俊広教授、岡村英一教授、加藤雅裕教授、西内優騎講師、花田隆文助教

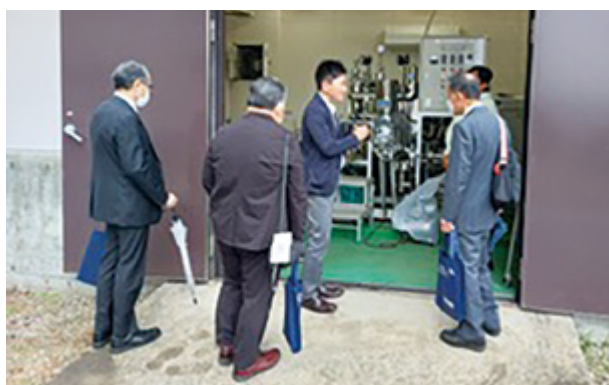


≫ 電気電子システムコース：直井美貴教授、北條昌秀教授、安野 卓教授

≫ 知能情報コース：泓田正雄教授（スナップ写真無し）



≫ 光システムコース：矢野隆章教授、山本健詞教授、水科晴樹講師



≫ 生物資源産業学部：赤松徹也准教授、白井昭博准教授、Sholafuddin さん

概ね1時間のツアーを終え、解散となったが、各コース建物前ではしばらくは参加者間で、名物先生の武勇伝や昔の講座の謎ルールなどの逸話に花がさいていた。今後ともこのような催しものは定期的に関催すべきだと感じた。

創立100周年 記念講演会・記念式典・記念祝賀会

徳島大学工学部創立100周年記念事業として、記念講演会、記念式典、祝賀会を令和5年(2023)5月14日(日)午後3時より徳島市のJRホテルクレメント徳島で、村澤普惠徳島大学大学院医歯薬学研究部特別補佐/医学部国際コーディネーターの司会進行により挙行了。なお、当初本事業は、令和4年(2022)11月3日(木)に予定されていたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため約半年延期して開催した。記念講演会と記念式典はオンラインでライブ配信され、教職員・学生・卒業生に理工学部HP内の100周年特集頁から限定公開される旨事前広報し約60名が視聴した。

◆ 記念講演会

午後3時から、講演に先立って、武藤裕則徳島大学理工学部長より、講師の方々の簡単な紹介と講演内容に対する展望と期待、さらには忙しい時間を縫っての今回のご登壇に対するお礼が述べられた。

● 武藤裕則理工学部長 挨拶



記念講演会の講師は本学卒業生である染井潤一氏(工学部化学工学科昭和60年(1985)卒業、大学院工学研究科化学工学専攻昭和62年(1987)修了、カルテック株式会社代表取締役社長)と安井武史氏(工学部機械工学科平成4年(1992)卒業、大学院工学研究科機械工学

専攻平成6年(1994)修了、大学院工学研究科生産開発工学専攻(博士後期課程)平成9年(1997)修了、ポストLEDフォトンクス研究所(pLED)最高研究責任者/理工学部教授)であり、それぞれ、「水・空気・食に貢献する光触媒の実用化と将来性」と「目に見えない光で切り拓く『光の世紀』」と題して講演を行った。両講師のご講演は、アフターコロナを見据えた光に関連した最先端の研究成果やその応用であり、約130名の参加者にとって大変興味深いテーマであった。

染井潤一氏の講演要旨

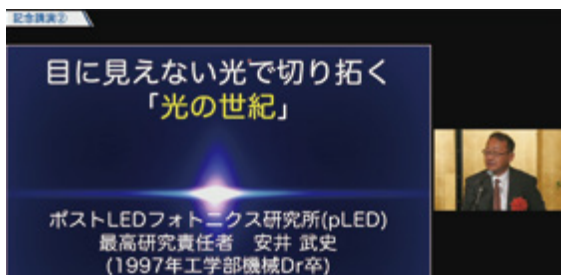


光触媒技術を用いて社会課題、特に環境問題の解決に寄与することを目的に起業され、これまでの実績と今後の新たな取り組み等について述べられた。

まず、「空気」事業に関連して、光触媒搭載型除菌脱臭機の新型コロナウイルスに対する不活化検証や臨床研究、花粉症に対する改善効果、ペットアレルギー物質(犬の皮脂等)の除去能力等について説明された。次いで、「食」事業について、みかん、トマト、なすび、シークワサーの鮮度や品質保持と腐敗抑制効果について説明された。また、「水」事業に関して、光触媒でレジオネラ菌の殺菌とエンドトキシンの分解、大腸菌の分解に成功、川の水などの水質浄化機能等について述べられた。最後に、光触媒

を用いた人工光合成によるカーボンニュートラル実現に向けても取り組みたい旨を紹介された。

安井武史氏の講演要旨



目に見えない光にこそ更なる可能性があり、深視外光、テラヘルツ波、赤外光の開発・実用化で社会貢献を目指す「ポストLEDフォトンクス研究所」の概要と研究成果

の例として、これからの世の中（アフターコロナ社会）に役立つ、テラヘルツ波を用いた次世代移動通信や、家庭での健康管理を可能にする赤外呼吸センサーの可能性について述べられた。次いで、本年度から理工学部を設置され新入生34名を受け入れた「医光／医工融合プログラム」の概要が報告された。このプログラムは、光学、工学、医学、情報科学に関する幅広い知識と技術を有し、理工学部の視点（1年生から研究室に配属し、課題を自分自身で考え、自己解決できる等）で、新しい価値を創り出せる多様な人材の育成を目指していることが述べられた。

◆ 記念式典

午後5時から徳島大学合唱団リーダークラスによる「徳島高等工業学校々歌」と「徳島大学の歌」の合唱で式典が始まった。出席者は招待された130名である。



徳島大学合唱団リーダークラスの合唱

● 武藤裕則理工学部長の開式の辞



冒頭、昨年10月に徳島高等工業学校創立以来無事100周年を迎え、また本年3月末をもって工学部在籍学生が0となりその幕を閉じたことが報告された。この間、講演者をはじめ各界において指導的立場で活躍する5万人弱の卒業生を輩出し、創立時の3学科から理工学部・生



司会の村澤様と来賓の方々

（前列右から塩田剛志文部科学省高等教育局専門教育課長、飯泉嘉門徳島県知事、内藤佐和子徳島市長、後列右からDr. Jia-Yush Yen 国立台湾科技大学（NTUST）学長、Ts. Dr. Massila Binti Kamalrudin マレーシアマラッカ技術大学（UTeM）学長、野地澄晴徳島大学工学部創立100周年記念事業後援会名誉会長、大西徳生徳島大学工学部創立100周年記念事業後援会会長）

物資源産業学部併せて11コース1プログラムを有するまでに発展したことに対して、学内外の関係者へのお礼が述べられた。結びに、両学部のさらなる発展へ向けての意見を拝聴する場となることを祈念し、開式が宣言された。

● 河村保彦学長 式辞



徳島高等工業学校から現在に至る沿革が紹介され、来賓はじめ参加者にこれまでの貢献やご支援に謝意を表された。さらに、かつて阿波の藍（INDIGO）は、多様な機能で人々の暮らしを豊かにし、社会の発展に寄与してきた。藍による染色工程は、徳島大学が目指す人材育成（学生は、多様なヒト、モノ、コトが行き交う中で学内外との交流を繰り返して成長し、幅広い能力で社会に貢献する。）を想起させる。このような着想から、徳島大学「INDIGO宣言」を創案し、今後の徳島大学の方向性を提示した。今までの100年の伝統から未来に向けて、理工学部、生物資源産業学部、徳島大学の発展に関係各位のさらなるご指導、ご鞭撻、ご支援を願われ式辞を結ばれた。

● 来賓祝辞

塩田 剛志 文部科学省高等教育局専門教育課長
(池田貴城文部科学省高等教育局長の祝辞代読)



大正11年（1922）の徳島高等工業学校設置

から昭和24年（1949）に工学部になって以来、「ものづくり」を中心とした教育研究により、多くの優秀な人材を輩出し、光産業や機械製作など我が国の産業発展に貢献する学術研究の成果をあげていることや、平成28年（2016）には理工学部と生物資源産業学部部に改組し、専門分野のより深い学修と分野横断的視点を備えた人材育成に取り組み、さらに、本年からの「魅力ある地方大学の実現に資する地方国立大学の定員増」に選定された大学として、理工学部の定員を増やすとともに、「医光／医工融合プログラム」を設置し、県内産業の更なる発展や新産業創出といった地域課題の解決に大きな成果をあげていることが紹介された。最後に、徳島大学のこれまでの輝かしい実績を踏まえつつ、大学の強みを活かした教育研究及び地域貢献の更なる充実を図るとともに、こうした取組を理工学部と生物資源産業学部が中心となってけん引していくことを期待していると結ばれた。

飯泉 嘉門

徳島県知事



歴代学長はじめ学内外の関係各位の尽力により工学部創立100周年を迎え、記念式典が盛大に開催されることへのお祝いが述べられた。そして、徳島県と徳島大学が協同して地域創生事業に取り組み、優れた成果をあげてきたことさらに今年度から全国で3大学のみでの定員増「医光／医工融合プログラム」に選定されたことが紹介された。最後に6次産業人材育成の拠点となる生物資源産業学部と6Gの通信媒体「テラヘルツ」研究（大阪万博までに技術確立することが切望された）等の理工学部が徳島から世界に向けてこれからの100年の未来を創造し、徳島大学の新たな形が世界に冠たるものとなることを祈念された。

Dr. Jia-Yush Yen

国立台湾科技大学 (NTUST) 学長



平成26年(2014)から研究資金が提供される共同研究プロジェクトを実施しており、優れた共同研究成果が多く得られていることダブルデグリー制度を活用して教員と学生の交流が深くなされていること等が紹介され、徳島大学工学部100周年記念式典に参加できたことを誇りとし心からのお祝いの言葉が述べられ、今後とも両校の発展とより深い交流の継続を約束して祝辞を終えられた。

Ts. Dr. Massila Binti Kamalrudin

マレーシアマラッカ技術大学(UTeM)学長



100周年記念式典への招待に対するお礼と100周年を迎えたことに対するお祝いが述べられた。平成25年(2013)から共同研究を実施し、アカデミックセンターがマレーシアマラッカ技術大学に設置され、積極的な学術交流がなされていることが報告され、マレーシアマラッカ技術大学と国立台湾科技大学と徳島大学のさらなる学術交流を積極的に行うことが提案され、最後に、ヘンリー・フォードの名言“Coming together is a beginning, keeping together is progress, working together is success.”で締めくくられた。

その後、植田道雄 四国化工機株式会社 創業者 名誉会長、福永丈久 株式会社阿波銀行代表

取締役頭取、三木康弘 阿波製紙株式会社代表取締役社長、板東豊彦 株式会社徳島大正銀行代表取締役頭取、楠 佑樹 日新機械株式会社代表取締役、大西康生 株式会社阿波銀行取締役監査等委員、高橋晋一 徳島大学総合科学部長からの祝電が披露された。

● 松木均生物資源産業学部長 閉式の辞



最後に、松木均生物資源産業学部長から、来賓、参加者、関係各位へのお礼が述べられ、理工学部、生物資源産業学部、両学部は、工学部が100年にわたって築き上げてきた歴史と伝統を継承し、徳島大学工学部100周年記念事業のキャッチコピー「創りだせ未来。徳島から世界へ。」の実現に向けて、今後ともたゆまぬ努力を続けていくことを宣言して閉式した。

◇ 記念祝賀会

記念式典から4Fのクレメントホールへと移動し、午後6時山中英生大学院社会産業理工学研究部長の開式の辞で祝賀会の幕を開いた。

● 山中英生大学院社会産業理工学研究部長 開式の辞



大正11年(1922)の創立以来、4万人以上の卒業生がさまざまな分野で活躍されてきたこ

とが発展の中身そのものであり、人本経営などもはや従業者は資本であるとされるように、人材獲得の競争は激烈になっている。そうした中、大学は社会に役立つ人材を輩出することこそが役割であると強く感じ、この100周年の特別な日に皆様と交流を深め、共創・発展へとつながることを心から楽しみにしていると締めくくった。

引き続き、4名の来賓の方から祝辞を頂いた。

● 来賓祝辞

難波 徳郎

国立大学法人岡山大学工学部長



岡山大学工学部は昭和35年（1960）に設置され、63年が経過し、学部や大学組織の改組を随時行い時代の要請に応じていることが紹介され、創立100年を迎えて発展的に再編された理工学部・生物産業資源学部のさらなる飛躍を祈念していると述べられた。

植田 滋

四国化工機株式会社代表取締役社長CEO



昭和36年（1961）に徳島で創業し、延べ200名を超える卒業生によって会社の発展が支えられたことに謝意を表され、次世代に求められる優れた人材の輩出と研究と教育で世界に貢献する大学となること、さらに地元の企業にも優れた人材の供給を期待していることが述べられた。

東原 敏昭

株式会社日立製作所取締役会長代表執行役



2050年の社会（人口減少、環境問題、本当の人間の幸せ、等）を想定し、バックキャストで今から計画的に物事を進めることの重要性と次いで、サイバーとフィジカルを組み合わせたシステムの構築と人材育成、最後に、主体性と共感性を持ち、周りを巻き込んで問題解決できる徳島から世界へ打って出る学生の育成に励んで欲しいと述べられた。

林 宏二郎

徳島大学工業会理事長



これまでの工学部及び、卒業生が社会の発展に大きく寄与してきたことと平成28年（2016）から発展的に改組された理工学部と生物産業資源学部においても引き続き国際社会の求める先端技術研究と優秀な人材育成によって母校が益々発展することを期待していると述べられた。

● 野地澄晴徳島大学工学部創立100周年記念事業後援会名誉会長 乾杯



その後、野地澄晴徳島大学工学部創立100周年記念事業後援会名誉会長による乾杯のご発声ののち祝宴が開始された。

祝宴の一コマとして卒業・修了生9名（川上剛司 株式会社IHI 取締役常務執行役員（建設昭和62年（1987）卒、建設平成元年（1989）修了）、寺田光宏 東急建設株式会社 代表取締役社長（建設昭和59年（1979）卒）、島村典尚 MHIニュークリアシステムズ・ソリューションエンジニアリング（株）（機械平成20年（2008）卒、機械平成22年（2010）修了）、白井祐太郎 三菱電機株式会社（機械平成23年（2011）修了）、小西寛 ケイミュー株式会社 専務執行役員（応化昭和59年（1984）卒、応化昭和61年（1986）修了）、西博義 元衆議院議員（化工昭和56年（1981）卒、化工昭和58年（1983）修了）、五島滋喜 大鵬薬品工業（株）徳島工場（情報昭和52年（1977）卒、情報昭和54年（1979）修了）、住友倫子 徳島大学大学院医歯薬学研究部口腔微生物学分野教授（生物平成12年（2000）卒、生物平成14年（2002）修了、博士物質材料平成17年（2005）修了）、池田貴裕 パイフォトニクス株式会社 代表取締役（光平成10年（1998）卒、光平成12年（2000）修了））から届けられた心温まるメッセージが放映され、学生時代の思い出話のアクセントとなった。理工学部の近況は、HPに掲載されて



生物資源産業学部の紹介ビデオ

いる各コースの紹介ビデオを参照願うこととし、生物資源産業学部の紹介ビデオが放映された。



アフターコロナとして旧交を温め、新たな交流を深めるなど会話が弾む中、瞬く間に終了時間が近づき、徳島大学雷連（理工学部電気電子システムコース学生連）による見事な阿波踊りが披露された。

● 大西徳生徳島大学工学部創立100周年記念事業後援会会長の閉式の辞と万歳三唱



最後に、大西徳生徳島大学工学部創立100周年記念事業後援会会長から徳島大学工学部創立100周年記念事業にご協力いただいた方々へのお礼が述べられ、参加者の拍手で謝意が示された。独創性の高い学生の輩出で工学部が高評価を受けていたことが紹介され、今後も優れた学生の輩出と未来を見据えた取り組みにより理工学部・生物資源産業学部が益々発展することを祈念して万歳三唱が行われ、午後8時過ぎに祝賀会は無事終了した。出席者は128名であった。



徳島大学雷連の阿波踊り

交流協定校からのメッセージ

The University of Auckland (New Zealand)

The University of Auckland, particularly its Faculty of Engineering, offers its congratulations to the Faculty of Engineering, University of Tokushima on the celebration of its 100th anniversary. The University has enjoyed a long and productive relationship with the Faculty of Engineering at the University of Tokushima extending over almost three decades, engaging several generations of researchers across our Faculties of Engineering and Science.

This has not only enabled very productive research collaborations, particularly in materials science, it has generated lasting friendship and deepened cultural understanding and appreciation between New Zealand and Japanese researchers. We congratulate you on achieving this milestone and look forward to a continued warm relationship between the institutions.

Yours sincerely,



FRANK H. BLOOMFIELD
Deputy Vice-Chancellor (Research)



INSA Toulouse (France)

INSA Toulouse offers congratulations to our valuable and esteemed partner, the Faculty of Engineering at the University of Tokushima, for its 100th anniversary. We are very pleased and honoured to have maintained this fruitful academic collaboration over the past 30 years, and we look forward to continuing and strengthening it in the years to come. This collaboration has greatly contributed to enriching both communities in Japan and in France. We wish you continuing success and development in the future.

Prof. Bertrand Raquet
Rector of INSA Toulouse
President of INSA Group



Florida Atlantic University (USA)

Florida Atlantic University (FAU) offers its sincere congratulations on the celebration of the 100th anniversary of the Faculty of Engineering at Tokushima University (TU).

FAU and TU have a long-lasting partnership in education that began in the mid-90's by signing an agreement of Co-operation on March 31, 1995. We are honored to continue that partnership as of today. As an outcome to that agreement, a Double Degree Program between the College of Engineering and Computer Science (COECS) at FAU and the Graduate School of Advanced Technology and Science at TU was initiated in 2009 and was renewed again in 2018.

Over the years, several TU students at both the graduate and undergraduate level have visited FAU and worked with faculty members in their Labs. Each of the TU students was simply exemplary. TU's Global Engineering Education Symposia held over the years have attracted academic talents from many countries and served as a model for international co-operation for Engineering Education. FAU is proud to have participated in these symposia and promote the global approach to education.

Again, we extend our congratulations on this momentous anniversary and wish you a continued success.

Sincerely,

Stella Batalama

Stella Batalama, Dean



COLLEGE OF ENGINEERING & COMPUTER SCIENCE

National Korea Maritime & Ocean University (Republic of Korea)

On behalf of the National Korea Maritime & Ocean University, I would like to express my deepest congratulatory remarks on the centennial anniversary to the Faculty of Engineering of the University of Tokushima. Since the academic cooperation agreement in 2001, our two universities have been achieving a variety of performances together.

I wish that the relationship between our two universities will become more solid and active via continued mutual academic exchanges. And hopefully, the relationship will help to strengthen global higher education and achieve our mutual goals.

Once again, congratulation on the 100th anniversary of the Faculty of Engineering of the University of Tokushima. We wish your university a continuing success.

Prof. Dr. DOH, Deog-Hee
President
National Korea Maritime & Ocean University



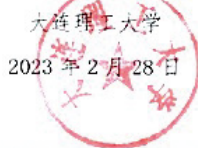
Dalian University of Technology (P. R. China)

百年春风化雨，千万桃李盈门。欣悉德島大学工学部喜
迎創立 100 周年紀念，在此，我謹代表大連理工大學向貴校
表示衷心的祝賀和美好的祝願！

德島大学工学部創立百年来为国际社会输送了大量优
秀人才，为两校合作交流和人才培养做出了重要贡献。在新
的一百年，我们希望与贵校携手，在高等教育领域，共同为
中日两国青年学子搭建更加通畅的友好交流的平台。

祝愿贵校继往开来，再创华章！

花开春暖，欢迎贵校师生到滨城大连做客。



校长

賈振元

Natong University (P. R. China)

值此德島大学百年华诞之际，我谨代表南通大学全体师生员工向
贵校致以热烈的祝贺和美好的祝愿！

德島大学经过 100 周年的风雨兼程，拥有优良的办学传统和鲜明
的办学特色，赢得了众多荣誉和社会各界的广泛赞誉。贵校与我校有
着三十余年的合作交流，双方在合作交往中建立了牢固的互信和友
谊，我相信在双方的共同努力下定能实现共赢发展。

最后，衷心祝愿贵校日益繁荣昌盛，真挚期望两校友好合作关系
日益紧密发展！



校长 施卫东
施卫东
2023年3月9日

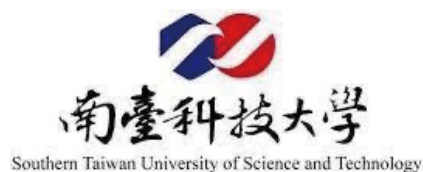
Southern Taiwan University of Science and Technology (Taiwan, R.O.C.)

The Southern Taiwan University of Science and Technology (STUST) would like to extend our heartfelt congratulations to the Faculty of Engineering at the University of Tokushima on reaching its 100th anniversary.

The faculty of Engineering at the University of Tokushima has created outstanding traditions and achievements, nurturing talents for society and standing tall for a century, which is truly a great feat. We are proud to be your partner for more than a decade and in fact you have been our best partner in conferring the most number of double master degrees, student exchanges and summer programs.

As we start our journey to the next century of collaboration, we look forward to working together on joint projects with significant societal impact. We also wish you continued success and a glorious hundred years to come.

Cheng-Wen Wu, President
Southern Taiwan University of Science and Technology




Savitribai Phule Pune University (India)

Savitribai Phule Pune University (formerly the University of Pune), India, expresses warm Greeting and Heartiest Congratulation to the Faculty of Engineering at the University of Tokushima, on the auspicious occasion of 100" anniversary. Indeed, it's a moment of pride and pleasure for us to be associated with the Faculty of Engineering on its march towards 100" anniversary. The association had been very fruitful, win-win of kind, wherein the academic staff and students have shared their expertise and resources, which has been very much beneficial for excelling the performance at individual as well as institutional level.

I, personally, as well as on behalf of my colleagues and students of Department of Physics, once again congratulate the Faculty of Engineering, and extends Best Wishes for the continuing success and bright future.




Prof. Sanjeev Sonawane
Pro Vice-Chancellor

Dr. Babasaheb Ambedkar Marathwada University (India)

On behalf of Dr. Babasaheb Ambedkar Marathwada University, Chhatrapati Sambhaji Nagar, Maharashtra, India. I extend my warmest congratulations to you on your 100TM anniversary. This is a momentous occasion that marks a century of excellence in education and research engineering.

As a fellow academic institution, we understand the dedication and hard work that goes into sustaining such a prestigious institution over the years. Your commitment to advancing the field of engineering and producing innovative, well-trained graduates has undoubtedly made a significant impact on the world.

We are proud to have you as a partner in the global academic community, and we look forward to continuing our collaboration in the years to come. Your achievements inspire us to continue pushing the boundaries of what is possible in engineering education and research.

On this special occasion, I wish you all the best as you celebrate this significant milestone. May you continue to thrive and achieve new heights in the years ahead.

with my best regards



Dr. Babasaheb Ambedkar Marathwada University

Prof. (Dr.) Pramod Yeole
Vice- Chancellor

Kavayitri Bahinabai Chaudhari North Maharashtra University (India)

Dear esteemed colleagues and friends from Faculty of Engineering, Tokushima University, Japan.

I would like to express my warmest greetings and heartfelt congratulations on behalf of entire faculty, staff and students of KBCNMU in India on the occasion of your "Centenary Celebration". 100 years of academic excellence, research innovation and social service is a remarkable milestone that deserved to be celebrated with great pride and joy.

We are honoured to be your international partner and have had the opportunity to collaborate with your esteemed institution since more than a decade in various academic and research endeavors.

We admire many achievements and contributions of faculty of Engineering, TU to the world of academia, science and society. We wish you continued success in endeavours and look forward to many more years of fruitful collaboration and partnership.

Once again, congratulations on this "historic occasion" and warmest wishes to all of you.



Kavayitri Bahinabai Chaudhari
North Maharashtra University

(Prof V L Maheshwari)
Vice Chancellor

Xi'an Jiaotong University (P. R. China)

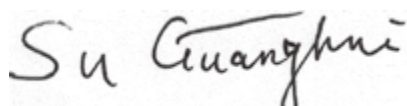
Warmest greetings from School of Energy and Power Engineering, Xi'an Jiaotong University. I am delighted to learn the 100th Anniversary Commemoration of the Faculty of Engineering, Tokushima University, one of our closest partners in Japan. On behalf of School of Energy and Power Engineering and of myself, I would like to extend my most heartfelt congratulations to you.

Tokushima University is a comprehensive research university offering programs in wide areas. Remarkable achievements made by Tokushima University have been widely recognized internationally, for its academically acclaimed reputation and contributions to education. Faculty of Engineering was established in October 1922 to develop Tokushima Prefecture's industries. With hundred year's history, the Faculty of Engineering has made innovations and achievements in science and engineering fields and

has been sending out core industrial human resources with applied and creative skills to the world. The past fruitful decades have witnessed the close and effective cooperation between Tokushima University and Xi'an Jiaotong University. Especially, there are close researcher exchanges and joint research cooperation Between Faculty of Engineering and School of Energy and Power Engineering. As one of the earliest founding schools in Xi'an Jiaotong University, School of Energy and Power Engineering is the base for talent training of energy power and science and technology as well as scientific research. I am confident that the cooperation and exchange between us will continue to make outstanding achievements in the future.

May our friendship and cooperation continue to develop with each passing day!

Sincerely yours,



Guanghui Su
Dean and Professor
School of Energy and Power Engineering,
Xi'an Jiaotong University, China



西安交通大学
XI'AN JIAOTONG UNIVERSITY

The University of Danang (Vietnam)

The University of Danang (Vietnam) is delighted to extend our sincere congratulations to our partner, the Faculty of Engineering at the University of Tokushima during 100th Anniversary.

The University of Danang is very proud to be a partner of the University of Tokushima in general, its Faculty of Engineering in particular. It is my strong belief that our longstanding and fruitful collaborations will remain as strong as in the past years and I am very much looking forward to further deepen our joint cooperation activities in the near future.



Assoc. Prof. Dr. Le Quang Son
Vice President
The University of Danang



ĐẠI HỌC ĐÀ NẴNG
THE UNIVERSITY OF DANANG

付 録

■ 年表

大正11年（1922）

- 10月 徳島高等工業学校が現理工学部の位置に設置された。土木工学科、機械工学科、応用化学科（農産工業化学部・製薬化学部）で発足した。
- 12月 熊本高等工業学校教授小溝茂橋が初代校長になった。
- 12月 徳島県会議事堂内に校長室、会議室などを設け、授業は徳島中学校の教室を借りて行った。

大正12年（1923）

- 4月 第一回入学式を徳島県会議事堂において挙行了した。
- 8月 本校事務所を常三島に移転した。
- 10月 第一回創立記念式を挙行了した。

大正13年（1924）

- 1月 皇太子成婚に対して蘇鉄を記念植樹した。

大正14年（1925）

- 6月 校舎が竣工した。
- 9月 校歌「吉野の川の注げる処」が作られた。
- 10月 開校式が挙行された。

大正15年（1926）

- 3月 第一回卒業証書授与式が挙行された。

昭和7年（1932）

- 10月 創立10周年記念式典が挙行された。

昭和8年（1933）

- 8月 徳島工業会が発足した。
- 12月 徳島工業会報を創刊した。

昭和12年（1937）

- 4月 応用化学科の製薬化学部が独立し、製薬化学科が設置された。
- 8月 臨時別科として工業技術員養成科が附設された。

昭和14年（1939）

- 2月 機械工学科に夜間部（2年課程）が設置された。
- 4月 機械技術員養成科が附設された。
- 4月 工業技術員養成科が廃止された。
- 4月 寄宿舍「青藍寮」が開設された。
- 5月 工作機械科が設置された。

昭和15年（1940）

- 4月 電気工学科が設置された。

昭和18年（1943）

- 3月 臨時教員養成所が附設された。
- 12月 徳島工業会館が竣工した。

昭和19年（1944）

- 4月 徳島工業専門学校と改称され、土木工学科は土木科、機械工学科は機械科、製薬化学科は製薬工業科、応用化学科は化学工業科、電気工学科は電気科に科名が変更され、また工作機械科が機械科に併合された。
- 4月 造船科と機械科に第二部夜間部（3年課程）が設置された。

昭和20年（1945）

- 4月 決戦教育措置要綱により授業が停止した。
- 7月 B29により徳島市が大空襲をうけ校舎のほとんどが焼失した。
- 8月 終戦を迎え勤労働員が解除された。
- 9月 焼け残りの校舎や他の学校などを借りて授業が二部制で開始した。
- 10月 復員学徒のための入試があり、代用校舎で授業を再開した。

昭和22年（1947）

- 1月 講堂及び事務室が竣工した。
- 2月 大学昇格期成同盟会が発足した。
- 3月 臨時教員養成所が廃止された。
- 10月 創立25周年記念式が挙行された。

昭和24年（1949）

- 5月 徳島大学（学芸学部・医学部・工学部）が設置され、徳島工業専門学校は徳島大学に包括された。
工学部に土木工学科、機械工学科、薬学科、応用化学科および電気工学科が設置された。
- 7月 第一回入学式を工学部講堂において挙行した。
- 11月 徳島大学開学祝賀式を工学部講堂において挙行した。（以後、11月2日を開学記念日とした）

昭和26年（1951）

- 3月 包括されていた徳島工業専門学校が廃止された。
- 4月 薬学部が設置され、工学部薬学科は廃止された。

昭和27年（1952）

- 5月 附属図書館が設置され、附属図書館常三島分館へ学芸学部および工学部の図書分館が移転した。

昭和28年（1953）

- 3月 第一回卒業式を工学部講堂において挙行した。

昭和29年（1954）

- 4月 徳島大学工業短期大学部が併設された。

昭和30年（1955）

- 1月 徳島大学の歌とバッチが選定された。

昭和31年（1956）

- 3月 工学専攻科（4専攻）が設置された。

昭和33年（1958）

- 7月 徳島大学学則および大学院学則が制定された。
- 8月 徳島大学工業会創立25周年記念行事が工学部講堂で挙行された、

昭和34年（1959）

- 4月 工学部規則を制定した。
- 5月 徳島大学学生歌を制定した。

昭和35年（1960）

- 3月 学生会館が竣工した。
- 10月 スクールバスの運行を開始した。
- 10月 徳島大学学報を発刊した。

昭和36年（1961）

- 4月 精密機械工学科が設置された。

昭和37年（1962）

- 3月 応用化学科棟が竣工した。

昭和38年（1963）

- 1月 徳島大学厚生会が発足した。
- 2月 精密機械工学科棟が竣工した。
- 2月 土木・化学系学科棟が竣工した。

昭和39年（1964）

- 3月 電気工学科棟が竣工した。
- 4月 大学院工学研究科（修士課程）4専攻（土木工学・機械工学・応用化学・電気工学）が設置された。
- 4月 精密機械工学科に1講座（精密測定）および電気工学科に1講座（高周波工学）が増設された。
- 4月 教養部が設置された。
- 11月 第一回工学部祭が開催された。

昭和40年（1965）

- 4月 化学工学科が設置された。
- 4月 大学院工学研究科精密機械工学専攻が設置された。

昭和41年（1966）

- 3月 機械実習工場が竣工した。
- 4月 化学工学科に1講座（単位操作工学）が増設された。
- 5月 徳島大学電子計算機センターが発足した。
- 12月 化学工学科棟が竣工した。

昭和42年（1967）

- 1月 徳島大学総合運動場が竣工した。
- 4月 電子工学科が設置された。
- 12月 機械工学科棟が竣工した。

昭和43年（1968）

- 4月 電子工学科に1講座（固体電子工学）が増設された。
- 12月 電気系学科棟が竣工した。

昭和44年（1969）

- 4月 大学院工学研究科化学工学専攻が設置された。
- 4月 建設工学科が設置された。
- 4月 電子工学科に1講座（電子回路工学）が増設された。
- 6月 工学部教官・学生が大学立法反対の市中デモを行った。
- 9月 専任教授会に代わり拡大教授会で運営することになった。

昭和45年（1970）

- 3月 建設工学科棟が竣工した。
- 4月 建設工学科に2講座（土質工学、土木防災学）が増設された。
- 6月 「徳大広報」第一号を発行した。

昭和46年（1971）

- 4月 大学院工学研究科電子工学専攻が設置された。
- 4月 建設工学科に1講座（土木計画学）が増設された。

昭和47年（1972）

- 5月 建設工学科に1講座（土木設計学）および共通講座として1講座（工業数学第二）が増設された。

昭和48年（1973）

- 4月 情報工学科が設置され、共通講座として1講座（情報処理工学）が増設された。
- 5月 工学部創立50周年記念式典および記念祝賀会が挙行された。
- 12月 工学部本棟が竣工した。

昭和49年（1974）

- 4月 大学院工学研究科建設工学専攻が設置された。

昭和50年（1975）

- 3月 情報工学科棟が竣工した。
- 4月 情報工学科に1講座（計画数学）が増設された。

昭和51年（1976）

- 3月 電算機室が竣工した。
- 4月 情報工学科に1講座（情報基礎工学）が増設された。

昭和52年（1977）

- 4月 大学院工学研究科情報工学専攻が設置された。

昭和54年（1979）

- 1月 共通第一次試験が導入された。
- 4月 補欠入学生の編入学年を2年次から3年次に変更した。

昭和57年（1982）

- 4月 精密機械工学科に1講座（精密機械設計学）が増設された。

昭和58年（1983）

- 11月 徳島大学電子計算機センターが情報処理センターに昇格した。

昭和60年（1985）

- 4月 電子工学科に1講座（光電子工学）が増設された。

昭和61年（1986）

- 4月 大学開放実践センターが設置された。

昭和62年（1987）

- 4月 臨時増募により工学部の入学定員が60名増加した。

昭和63年（1988）

- 4月 生物工学科が設置され、9学科44講座が6学科（建設工学科・機械工学科・化学応用工学科・電気電子工学科・知能情報工学科・生物工学科）17大講座に改組した。

平成元年（1989）

- 4月 3年次への編入学制度が導入された。

平成2年(1990)

1月 共通一次試験に代わって大学入試センター試験が導入された。

平成3年(1991)

4月 大学院工学研究科博士後期課程3専攻(物質工学・生産開発工学・システム工学)が設置され、同時に修士課程9専攻を博士前期課程5専攻(建設工学・機械工学・化学応用工学・電気電子工学・知能情報工学)に改組した。

大学院工学研究科博士後期課程に6講座(物性工学・物質変換工学・生産工学・開発保全工学・情報システム工学・電子機械システム工学)が設置された。

7月 化学・生物工学科棟が竣工した。

平成4年(1992)

4月 大学院工学研究科博士前期課程生物工学専攻が設置された。

平成5年(1993)

2月 拡大教授会を廃止し、専任教授会に戻ることが決定した。

3月 機械実習棟(機械工学科実験室を含む)が竣工した。

4月 教養部が廃止され、一般教養に関する教育は全学共通教育として行うことになった。

10月 工業短期大学部を廃止転換して、建設工学科・機械工学科・化学応用工学科・電気電子工学科・知能情報工学科・生物工学科を昼間コースと夜間主コースに改組した。

光応用工学科が設置され、6学科17大講座を7学科(建設工学科・機械工学科・化学応用工学科・電気電子工学科・知能情報工学科・生物工学科・光応用工学科)22大講座に改組した。

平成6年(1994)

6月 情報処理センターが総合情報処理センターに昇格した。

6月 地域共同研究センター棟が竣工した。

平成7年(1995)

4月 光応用工学科に1講座(光情報システム)が増設された。

4月 国際交流会館が竣工した。

11月 第一回高校生のための体験大学院を工学部内で開催した。

平成8年(1996)

3月 工業短期大学部は、3月末をもって閉学した。

9月 工業会館が竣工した。

平成9年(1997)

4月 光応用工学科棟が竣工した。

4月 徳島大学サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー棟が竣工した。

4月 大学院工学研究科エコシステム工学専攻が設置された。

8月 第一回科学体験フェスティバルIN TOKUSHIMAを工学部内で開催した。

10月 工学部創立75周年記念講演、記念式典および祝賀会が挙行された。

平成10年(1998)

4月 大学院工学研究科光応用工学専攻が設置された。

平成12年(2000)

4月 大学院工学研究科博士後期課程3専攻を4専攻(物質材料工学・マクロ制御工学・機能システム工学・情報システム工学)に改組した。

4月 共通講義棟I期が竣工した。

平成14年 (2002)

- 4月 共通講義棟Ⅱ期が竣工した。
総合研究実験棟が竣工した。
- 4月 総合情報処理センターに代わって、高度情報化基盤センターが設置された。

平成15年 (2003)

- 4月 電気電子棟の耐震改修を行った。

平成16年 (2004)

- 4月 国立大学法人法施行により「国立大学法人徳島大学」が設置された。
- 4月 建設棟の耐震改修を行った。
- 4月 環境防災研究センターが設置された。
- 4月 創成学習開発センターが設置された。

平成17年 (2005)

- 12月 工学部国際連携教育開発センターが設置された。

平成18年 (2006)

- 4月 大学院ソシオテクノサイエンス研究部が設置された。
寄附講座（ナノマテリアルテクノロジー（日亜）講座）が設置された。
大学院工学研究科を改組し、大学院先端技術科学教育部（博士後期課程及び博士前期課程）にそれぞれ3専攻（知的力学システム工学・環境創生工学・システム創生工学）が設置された。
7学科22大講座を7学科（建設工学科・機械工学科・化学応用工学科・生物工学科・電気電子工学科・知能情報工学科・光応用工学科）21大講座・1センター（工学基礎教育センター）に改組した。
- 4月 工学部国際連携教育開発センターが、大学院先端技術科学教育部国際連携教育開発センターとなった。
- 4月 創成学習開発センターが、工学部創成学習開発センターとなった。

平成22年 (2010)

- 7月 高度情報化基盤センターに代わって、情報化推進センターが設置された。

平成24年 (2012)

- 4月 大学院先端技術科学教育部環境創生工学専攻を物質生命システム工学専攻に名称変更した。

平成26年 (2014)

- 4月 情報化推進センターが、情報センターに改称した。
- 12月 フロンティア研究センターが竣工した。

平成28年 (2016)

- 4月 工学部（生物工学科を除く6学科および1センター）と総合科学部理系（総合理数学科および社会創生学科環境共生コースの一部）により、理工学部理工学科6コース（社会基盤デザイン・機械科学・応用化学システム・電気電子システム・情報光システム・応用理数）が設置された。
工学部（生物工学科）、総合科学部（社会創生学科）及び他学部や外部からの教員により、生物資源産業学部生物資源産業学科3コース（応用生命・食料科学・生物生産システム）が設置された。
大学院ソシオテクノサイエンス研究部を大学院理工学研究部に改組した。
大学院生物資源産業学研究部が設置された。

生物資源産業学部農場が設置された。

生物資源産業学部水圏教育研究センターが設置された。

平成29年 (2017)

4月 大学院総合科学研究部、大学院理工学研究部および大学院生物資源産業学研究部を改組し、大学院社会産業理工学研究部（社会総合科学域・理工学域・生物資源産業学域）が設置された。

4月 工学部創成学習開発センターが、創新教育センターに昇格した。

令和元年 (2019)

3月 ポストLEDフォトンクス研究所が設置された。

4月 大学院先端技術科学教育部国際連携教育開発センターが、大学院先端技術科学教育部国際連携教育研究センターに改称した。

4月 大学開放実践センター、地域創生センター、旧研究支援・産官学連携センター産業人材育成部門を統合し、人と地域共創センターに改称された。

4月 創新教育センターを改組し、高等教育研究センター学修支援部門創新教育推進班（イノベーションプラザ）となった。

6月 生物資源産業学部、とくしまイノベーションセンターが設置された。

令和2年 (2020)

4月 大学院総合科学教育部と大学院先端技術科学教育部を改組し、大学院創成科学研究科（修士課程）4専攻（地域創成・臨床心理学・理工学・生物資源学）が設置された。

4月 大学院先端技術科学教育部国際連携教育研究センターが、大学院創成科学研究科理工学専攻国際連携教育研究センターとなった。

4月 知能情報・南棟の改修を行った。

7月 バイオイノベーション研究所が設置された。

令和3年 (2021)

1月 大学入試センター試験に代わって大学入学共通テストが導入された。

4月 寄附講座（ナノマテリアルテクノロジー（日亜）講座）が終了した。

4月 知能情報・北棟の改修を行った。

令和4年 (2022)

4月 情報光システムコースを知能情報コースおよび光システムコースに、応用理数コースを数理科学コースおよび自然科学コースに改組した。

大学院創成科学研究科に博士後期課程1専攻（創成科学）が設置され、同時に修士課程を博士前期課程に名称変更した。

大学院社会産業理工学研究部理工学域光応用系が廃止された。

令和5年 (2023)

4月 理工学部に、医光／医工融合プログラムを新設した。

5月 工学部創立100周年記念講演、記念式典および記念祝賀会が挙行された。

■ 卒業生数・修了者数

徳島高等工業学校・徳島工業専門学校（大14～昭25）

年度	学科	土木	機械	応化 (製薬)	応化 (農産)	電気	造船	工機	臨教	合計
	14									
大	14	32	22	17	9					80
	15	30	27	16	15					88
昭	2	27	38	17	14					96
	3	35	32	19	18					104
	4	37	37	16	19					109
	5	35	39	16	19					109
	6	37	33	18	19					107
	7	33	36	20	19					108
	8	34	30	15	19					98
	9	36	37	18	19					110
	10	36	42	19	16					113
	11	38	37	19	16					110
	12	36	34	18	18					106
	13	39	40	19	18					116
	14	28	34	27	16					105
	15	35	71	37	51					194
	16	43	70	36	48			42	31	270
	17	61	59	37	45	34		70	27	333
	18	76	72	36	66	38		72	37	397
	19	77	151	39	65	36				368
	20	69	143	40	66	35				353
	21	73	134	42	72	81	34			436
	22	88	176	45	80	70	35			494
	23	27	37	31	31	38	28			192
	24	37	32	28	32	33	30			192
	25	31	27	31	22	21	24			156
合 計		1,130	1,490	676	832	386	151	184	95	4,944

備考(1) 機械：機械工学科および同二部、応化（製薬）：応用化学科製薬化学部、製薬化学科および製薬工業科、応化（農産）：応用化学科農産工業化学部、応用化学科および化学工業科、工機：工作機械科、臨教：臨教物象科を示す。
 (2) 数字は徳島大学工業会発行の会員名簿による。

徳島大学工学部（昭27～平4）（改組前）

年度	学科	土木	機械	応化	電気	精密	化工	電子	建設	情報	合計
昭 27		20	20	32	28						100
28		19	22	31	28						100
29		15	22	25	28						90
30		21	31	27	25						104
31		29	26	21	28						104
32		27	27	17	34						105
33		24	31	32	28						115
34		34	34	30	27						125
35		25	36	29	35						125
36		24	41	36	34						135
37		24	41	44	36						145
38		31	42	52	32						157
39		28	39	42	33	31					173
40		26	33	38	56	28					181
41		27	39	47	48	38					199
42		27	35	37	46	22					167
43		28	37	33	45	39	20				202
44		30	43	29	46	33	21				202
45		30	36	27	32	25	38	27			215
46		34	24	38	40	42	33	29			240
47		31	45	23	39	33	40	38	18		267
48		45	40	32	42	51	26	44	22		302
49		47	47	24	45	29	21	44	44		301
50		37	35	32	32	32	37	33	39		277
51		39	30	33	39	28	19	37	44	35	304
52		34	45	32	29	42	28	45	42	42	339
53		44	37	31	45	33	39	43	43	56	371
54		39	47	40	43	24	37	48	36	51	365
55		35	39	30	48	36	32	38	42	45	345
56		38	35	32	41	42	31	35	33	44	331
57		34	57	37	39	46	37	42	38	53	383
58		42	46	45	47	48	36	38	41	68	411
59		37	42	28	49	43	37	24	31	54	345
60		35	46	43	50	48	26	33	39	51	371
61		33	51	38	46	37	41	43	40	56	385
62		31	48	46	45	47	40	39	36	59	391
63		42	51	37	43	59	32	39	45	52	400
平 元		43	52	44	33	48	42	35	43	61	401
2		39	63	43	63	65	37	70	43	52	475
3		17	8	1	1	4	5			6	42
4						2	2		4	2	10
合 計		1,265	1,523	1,338	1,528	1,055	757	824	723	787	9,800

徳島大学工学部（平3～令3）（改組後）

年度	学科	建設	機械	化学応用	電気電子	知能情報	生物	光応用	合計
平	3	60	87	66	128	68	38		447
	4	75	93	72	83	78	39		440
	5	69	123	85	102	75	41		495
	6	93	116	77	96	80	39		501
	7	72	104	87	105	72	41		481
	8	84	85	79	101	71	41		461
	9	110	130	96	125	98	64	45	668
	10	106	124	98	126	85	63	37	639
	11	97	136	84	132	98	62	47	656
	12	105	138	92	116	85	63	56	655
	13	100	128	92	124	77	70	44	635
	14	107	145	81	116	91	64	51	655
	15	100	141	78	120	88	73	45	645
	16	87	149	101	125	92	73	46	673
	17	103	125	81	129	98	72	40	648
	18	108	119	93	122	86	77	50	655
	19	89	114	87	134	85	73	52	634
	20	107	135	91	120	96	78	45	672
	21	91	120	89	107	97	69	54	627
	22	95	124	94	113	88	72	49	635
	23	96	123	77	117	97	63	45	618
	24	98	117	83	114	80	51	48	591
	25	91	109	85	116	81	67	38	587
	26	82	105	82	114	91	58	46	578
	27	85	109	87	115	92	58	50	596
	28	93	111	80	112	94	73	45	608
	29	89	112	79	113	90	66	51	600
	30	95	122	76	100	91	59	53	596
令	元	11	23	14	20	13	8	6	95
	2	5	12		3	6		3	29
	3		6	1	5	1			13
合	計	2,603	3,385	2,387	3,253	2,444	1,715	1,046	16,833

徳島大学理工学部（令元～令4）

年度	コース	数理	自然	社会	機械	化学	電気	知能	光	合計
令	元	26	27	85	74	71	89	81	31	484
	2	35	24	102	109	85	82	90	48	575
	3	35	27	102	95	78	111	88	34	570
	4	22	27	90	107	76	110	99	38	569
合	計	118	105	379	385	310	392	358	151	2,198

徳島大学生物資源産業学部（令元～令4）

年度	コース	応用	食料	生産	合計
令元		32	34	26	92
2		32	38	31	101
3		30	33	31	94
4		37	35	29	101
合計		131	140	117	388

徳島大学大学院工学研究科修了者数（修士課程）（昭和40～平3）

年度	学科	土木	建設	機械	精密	応化	化工	電気	電子	情報	合計
昭40		3		7		7		5			22
41		3		9	5	3		6			26
42		5		8	7	8		11			39
43		5		8	4	11		3			31
44		6		6	4	4		3			23
45		9		9	3	6	4	8			39
46		7		3	1	5	2	10			28
47		10		4	4	4	5	4	8		39
48		9		5	5	10	4	7	10		50
49		11		7	7	8	7	3	7		50
50		4	3	3	8	6	5	5	6		40
51		7	9	8	8	8	4	9	10		63
52		10	8	11	7	5	9	6	7		63
53		7	8	4	3	7	6	5	6	11	57
54		4	7	5	4	2	7	6	5	9	49
55		3	5	4	3	5	5	7	5	9	46
56		4	3	6		1	2	4	6	9	35
57		4	4	6	3	9	5	5	3	7	46
58		8	6	7	7	5	5	5	8	12	63
59		10	5	7	6	10	10	6	10	10	74
60		10	8	11	11	10	7	10	10	15	92
61		6	2	10	6	8	8	9	10	15	74
62		5	9	12	13	9	2	13	7	13	83
63		5	7	14	12	7	9	11	10	14	89
平元		10	11	12	13	9	3	11	10	17	96
2		13	7	13	13	12	6	12	12	15	103
3		13	9	16	11	15	4	13	14	19	114
合計		191	111	215	168	194	119	197	164	175	1,534

徳島大学大学院工学研究科修了者数（博士前期課程）（平成4～平22）

年度	専攻	建設	機械	化学	電気	情報	生物	エコ	光応用	合計
平 4		22	40	23	40	16				141
5		27	42	26	40	32	15			182
6		31	35	32	47	33	16			194
7		25	40	37	43	33	14			192
8		30	51	23	44	37	16			201
9		31	54	25	42	36	11			199
10		27	30	33	49	24	11	38		212
11		27	36	42	64	42	14	30	32	287
12		26	39	35	63	40	26	35	23	287
13		35	37	35	61	47	20	36	25	296
14		32	54	30	56	54	26	32	28	312
15		32	48	34	46	50	23	30	21	284
16		34	55	36	60	66	25	27	31	334
17		29	47	50	58	56	30	28	33	331
18		33	52	45	63	70	23	26	33	345
19			1	1	1	3		3	1	10
20		1		1		1			1	4
21										0
22						1				1
合計		442	661	508	777	641	270	285	228	3,812

徳島大学大学院先端技術科学教育部修了者数（博士前期課程）（平19～令3）

年度	専攻	知的力学システム			環境創生工学			システム創生工学			合計
		建設	機械	化学	生命	エコ	電気	知能	光		
平 19		41	44	42	26	24	55	56	24	312	
20		30	47	39	29	24	80	54	30	333	
21		24	41	45	25	21	75	54	30	315	
22		33	55	49	35	22	76	50	26	346	
23		28	61	47	29	21	68	76	28	358	
24		33	60	35	32	21	79	57	22	339	
25		48	62	46	25	2	69	51	24	327	
26		42	69	39	23		76	50	27	326	
27		33	59	54	31		86	42	24	329	
28		32	56	43	30		81	46	34	322	
29		18	63	54	32		78	56	27	328	
30		33	65	53	25		83	64	27	350	
令 元		34	61	52	29		70	63	28	337	
2		32	64	40	28		66	52	28	310	
3		2	1	4	1		2	4		14	
合計		463	808	642	400	135	1,044	775	379	4,646	

徳島大学大学院創成科学研究科修了者数（博士前期課程）（令3～令4）

年度	専攻	理工学専攻								生物資源学専攻				
		数理	自然	社会	機械	化学	電気	情報	光	合計	応用	食料	生産	合計
令 3	3	4	13	37	61	41	71	44	22	293	18	15	6	39
令 4	4	5	11	28	69	54	51	50	33	301	22	9	7	38
合 計		9	24	65	130	95	122	94	55	594	40	24	13	77

徳島大学大学院工学研究科修了者数（博士後期課程）（改組前）（平5～20）

年度	専攻	物質工学	生産開発	システム	合計	
平 5	5		10	7	8	25
平 6	6		7	7	10	24
平 7	7		5	7	15	27
平 8	8		4	8	7	19
平 9	9		6	5	16	27
平 10	10		8	5	10	23
平 11	11		4	5	23	32
平 12	12		7	3	15	25
平 13	13		7	5	15	27
平 14	14		2		6	8
平 15	15			1		1
平 16	16			1	1	2
平 17	17					0
平 18	18				1	1
平 19	19					0
平 20	20				1	1
合 計			60	54	128	242

徳島大学大学院工学研究科修了者数（博士後期課程）（改組後）（平13～25）

年度	専攻	物質材料	マクロ制御	機能システム	情報システム	エコシステム	合計
平 13	13	1			1	8	10
平 14	14	4	2	6	3	7	22
平 15	15	10	5	11	7	10	43
平 16	16	9	7	11	5	5	37
平 17	17	7	3	6	15	4	35
平 18	18	7	4	4	20	4	39
平 19	19	12	6	8	22	4	52
平 20	20		6	1	5	7	19
平 21	21			1	1	1	3
平 22	22	1	1	2	1		5
平 23	23			1	1		2
平 24	24			2			2
平 25	25			1			1
合 計		51	34	54	81	50	270

徳島大学大学院先端技術科学教育部修了者数（博士後期課程）（平19～令4）

専攻 年度	知的力学システム		環境創生工学			システム創生工学			合計
	建設	機械	化学	生命	エコ	電気	知能	光	
平 19							1		1
20	2	1	3	8	2	6	1	2	25
21	5	7	1	3	3	4	15	1	39
22	6	6	6	1	2	5	10	1	37
23	4	5	2	4	3	3	2	2	25
24	3	3	6	2	4	2	7	2	29
25	8	7	2	2	1	5	11	3	39
26	5	5	2	3	2	6	5	2	30
27	3	1	1	6	1	6	2		20
28	8	7	4	5		6	4	3	37
29	5	5	2	4		6	2		24
30	8	8	4	8		5	5	3	41
令 元	5	3	2	4		5	4	4	27
2	6	5	1	6		3	4	4	29
3	1	5	4	8		3	8		29
4	3	1	1	3		1	9	1	19
合 計	72	69	41	67	18	66	90	28	451

徳島大学工業短期大学部（昭31～平7）

年度	学科	機械	生産機械	電気	電子	応用化学	土木	合計
昭 31		24		30				54
32		12		20				32
33		25		15				40
34		24		20				44
35		25		33			17	75
36		17		21		23	20	81
37		21		19		28	10	78
38		28		21		28	18	95
39		20		16		17	20	73
40		23		19		23	12	77
41		30		18		22	27	97
42		17		17		20	13	67
43		22		21		20	23	86
44		20	22	19		19	11	91
45		24	19	32		22	23	120
46		27	20	23		24	22	116
47		21	20	28		21	17	107
48		19	13	18	11	25	30	116
49		14	8	16	10	26	34	108
50		23	15	18	12	21	25	114
51		26	6	12	19	27	26	116
52		30	9	23	17	17	30	126
53		21	13	26	17	10	30	117
54		31	27	15	17	13	17	120
55		17	9	23	9	17	27	102
56		20	12	12	13	14	16	87
57		12	7	24	14	8	29	94
58		20	6	16	17	9	21	89
59		22	10	29	26	10	26	123
60		15	17	25	32	17	30	136
61		18	17	30	24	15	20	124
62		16	23	26	22	23	24	134
63		23	16	31	28	38	25	161
平 元		31	34	21	26	30	30	172
2		36	15	16	21	28	30	146
3		31	21	34	37	31	30	184
4		33	35	34	23	27	30	182
5		34	39	33	31	40	26	203
6		33	26	30	37	28	40	194
7		40	24	38	32	26	47	207
合 計		945	483	922	495	767	876	4,488

■ 留学生数の推移

専攻別

区分	大学院生	学部学生	研究生	特別研究学生	特別聴講学生	科目等履修生	合計
昭 37		1					1
38		1					1
39		1					1
40		1					1
41	1						1
42	1						1
43		2					2
44		2					2
45		2					2
46		3					3
47	1	1					2
48	1	1					2
49		2	1				3
50	1	1					2
51	1	1					2
52		1	3				4
53		2	3				5
54		2	2				4
55		1	2				3
56		1	3				4
57	1		1				2
58	1		3				4
59			5				5
60	1		3				4
61	2	1	3				6
62	3	2	6				11
63	5	4	7				16
平 元	6	7	1				14
2	9	9	10				28
3	18	10	6				34
4	28	11	7				46
5	39	12	7				58
6	16	47	1				64
7	39	18	4				61
8	41	18	10				69
9	48	16	4				68
10	44	17	4	1			66
11	54	17	2				73
12	57	15	1	1			74

区分	大学院生	学部学生	研究生	特別研究学生	特別聴講学生	科目等履修生	合計
13	67	15	5	1		1	89
14	56	13	5	2			76
15	59	17	4	1	1		82
16	58	24	8				90
17	66	32	11		1		110
18	69	35	5	1	1		111
19	82	39	7	2			130
20	98	38	4		3		143
21	119	31	6				156
22	115	27	11				153
23	105	21	8	5	1		140
24	104	19	2	2	4		131
25	96	19	6	2	1		124
26	88	23	6	3	2		122
27	79	20	5	4	4		112
28	95	11	6	2	2		116
29	117	11	7	1	1		137
30	139	9	6	1	5		160
令 元	109	8	5		3		125
2	74	16	3	1			94
3	63	17	3		1		84
4	56	20					76

国別

区 分	昭 37	38	39	40	41	42	43	44	45
韓 国							1	1	1
中 国					1	1			
台 湾	1	1	1	1					
朝 鮮							1	1	1
合 計	1	1	1	1	1	1	2	2	2
国 の 数	1	1	1	1	1	1	2	2	2

区 分	46	47	48	49	50	51	52	53	54
パキスタン				1	1	1			
韓 国	2	1	1	2	1	1	1	2	2
中 国							2	2	2
朝 鮮	1	1	1						
ブラジル								1	
ブルガリア							1		
合 計	3	2	2	3	2	2	4	5	4
国 の 数	2	2	2	2	2	2	3	3	2

区 分	55	56	57	58	59	60	61	62	63
イ ン ド				1	1				
スリランカ									1
マレーシア		1	1	1					3
インドネシア								1	2
韓 国	1	1						2	2
中 国	2	2		2	3	3	3	5	5
台 湾							1	1	1
エジプト								1	1
ブラジル					1	1	1		
ポリビア							1	1	1
コロンビア			1						
合 計	3	4	2	4	5	4	6	11	16
国 の 数	2	3	2	3	3	2	4	6	8

区 分	平 元	2	3	4	5	6	7	8	9
イ ン ド		1	1						
バングラデシュ				1	2	2	2	3	4
スリランカ	1	1	1						
ミャンマー			1	1	1	1			
マレーシア	6	7	11	11	12	14	14	15	15
インドネシア	2	4	5	6	9	7	4	1	2
韓 国	2	2		2	2	4	3	4	3
ベトナム						1	1	1	1

区 分	平 元	2	3	4	5	6	7	8	9
中 国	1	6	6	14	20	23	26	35	35
ブ ー タ ン							1	1	
台 湾	1	1	1	2	1	1	1	1	1
イ ラ ン		1	1	1	1	2	2	1	1
ト ル コ				1	1	1			
エ ジ プ ト	1								
チュニジア					1	1	1		
ギ ニ ア							1	1	1
オーストラリア								1	
ニュージーランド			1	1	1	1	1	1	1
カ ナ ダ		1	1	1	1				
ア メ リ カ				2	1	1			
メ キ シ コ		1	1	1	3	3	2	1	1
コスタリカ		1	1						
ブラジル		1	1	1					
エクアドル		1	1	1	1	1	1		
コロンビア								1	1
フ ラ ンス					1	1	1		
アルバニア			1						
カザフ共和国 (カザフスタン共和国)								1	1
CIS (旧ソ連)								1	1
合 計	14	28	34	46	58	64	61	69	68
国 の 数	7	13	15	15	16	16	15	16	14

区 分	10	11	12	13	14	15	16	17	18
バングラデシュ	5	6	5	4	2	2	5	7	6
ミャンマー	1	1	1						
タ イ		1	1	1	1	1	1	1	1
マレーシア	17	17	14	13	10	8	7	10	12
インドネシア	2	2		1	1	1	1	1	1
フィリピン								1	2
韓 国	4	3	6	6	7	7	6	5	2
ベトナム	1			1	3	3	3	3	2
中 国	27	31	36	44	38	47	56	70	71
カンボジア	1	1	2	2	3	3	2	2	2
ブ ー タ ン									1
ラ オ ス					1	1	1	1	2
台 湾	1			5					
イ ラ ン	1	1	1	2	1	1			
エ ジ プ ト	1	2	3	3	3	2	2	5	5
チュニジア	1	2	2	2	2	1			
ケ ニ ア		1	1	2	2	2			

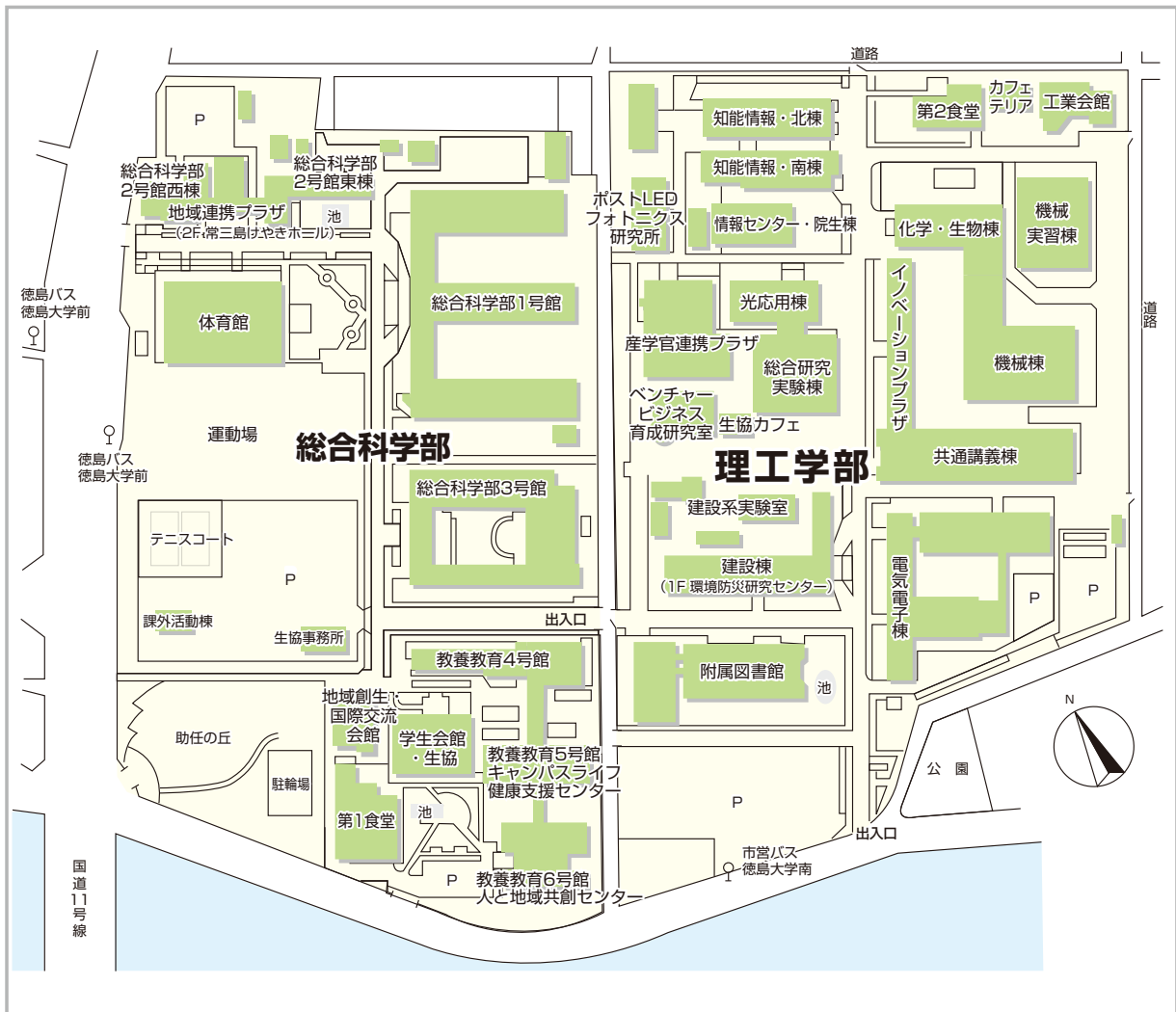
区 分	10	11	12	13	14	15	16	17	18
ギニア	2	1							
モザンビーク		1	1						
アメリカ								1	1
メキシコ					1	1	3	2	
ブラジル				1					
ペルー				1	1				1
エクアドル		2	1	1					
コロンビア	1								
ドイツ							2		
フランス						2	1	1	2
ロシア		1							
CIS (旧ソ連)	1								
合 計	66	73	74	89	76	82	90	110	111
国 の 数	14	16	13	16	15	15	13	14	15

区 分	19	20	21	22	23	24	25	26	27
インド								1	1
ネパール								1	1
バングラデシュ	6	6	6	6	6	5	5	2	3
タイ	1								
マレーシア	17	20	22	23	21	17	15	21	23
インドネシア	1	1		1	5	6	6	5	2
フィリピン	2	2	1	1					
韓 国	2	5	9	12	15	20	11	7	6
モンゴル				1	3	3	2	1	1
ベトナム	4	6	4	4	3	5	6	5	4
中 国	80	81	91	86	70	65	68	67	53
カンボジア	2	1							
ブータン	1	1	1	1					
ラオス	2	2	2	1			1	1	1
台 湾	1	1	2	1	6	2	2	5	10
ヨルダン・ハシミット		1	1						
エジプト	6	9	10	11	7	5	5	1	1
ケニア		1	1	1					1
ガボン		1	1						
モロッコ								1	1
ギニア		1	1	1	1	1			
ウガンダ				1	1	1	1	1	1
ツバル								1	1
アメリカ	1						1		
ペルー	1								
コロンビア						1	1		
ドイツ	1	2	2	2	2			1	2

区 分	19	20	21	22	23	24	25	26	27
フ ラ ン ス	1	1	1					1	
セ ル ビ ア	1	1	1						
合 計	130	143	156	153	140	131	124	122	112
国 の 数	18	19	17	16	12	12	13	17	17

区 分	28	29	30	令 元	2	3	4
パキスタン				1	1		
イ ン ド	2	3	4	3	2	2	4
ネ パ ール	1						
バングラデシュ	3	3	2	2	3	1	3
タ イ			1	1	1		
マレーシア	19	14	14	9	3	3	5
インドネシア	1		1	3	3	3	3
韓 国	6	6	5	4	11	14	16
モ ン ゴ ル	3	7	8	8	5	6	4
ベ ト ナ ム	5	6	8	6	5	3	2
中 国	59	79	95	75	51	42	30
カンボジア		1	1				
ラ オ ス	1						
台 湾	11	9	10	9	5	7	7
エ ジ プ ト	1	2	2	2	2	1	
ス ー ダ ン		1	1				
マダガスカル		1	1				
ケ ニ ア	1						
ナイジェリア		1	2	1			
モ ロ ッ コ	1	1	1				
ウ ガ ン ダ	1						
モザンビーク		1	1				
ルワンダ		1	1	1	1	1	1
ア メ リ カ						1	1
フ ラ ン ス	1	1	2		1		
合 計	116	137	160	125	94	84	76
国 の 数	16	17	19	14	14	12	11

■ 建物などの配置図



執筆者・編集者一覧

執筆者（順不同、敬称略）

- ・工学部各学科・独立専攻・共通講座・事務部の歩み（大山陽介、中村浩一、三好徳和、橋本親典、岡田達也、森賀俊広、橋爪正樹、寺田賢治、福見 稔、獅々堀正幹、河田佳樹、岡本敏弘、松木 均）
- ・理工学部・生物資源産業学部設立から現在までの歩み（米倉大介）
- ・理工学部各コース・生物資源産業学部・事務部の歩み（守安一峰、三好徳和、武藤裕則、高木 均、森賀俊広、橋爪正樹、永田裕一、河田佳樹、岡本敏弘、長宗秀明）
- ・自己点検・評価（河田佳樹）
- ・理工学部・生物資源産業学部・大学院の将来へ（山中英生）
- ・理工学部と生物資源産業学部と大学院の教育と研究（守安一峰、三好徳和、武藤裕則、米倉大介、岡村英一、島村 隆、木下和彦、原口雅宣、金丸 芳）
- ・各種センター・研究所の活動（上月康則、安澤幹人、松浦健二、田中俊夫、安井武史、音井威重）
- ・地域交流の推進（杉山 茂）
- ・徳島大学工業会の歩み（長尾文明）
- ・創立100周年記念事業（山中英生、長尾文明、上田哲史）

編集者（順不同、敬称略）

- ・徳島高等工業学校創立から徳島大学工学部への歩み（中村嘉利、米倉大介、原口雅宣、蓮沼 徹、長尾文明）
- ・思い出の恩師（渡辺公次郎、日野順市、岡村英一、川上烈生、永田裕一、大沼正樹、上野雅晴、岡本敏弘、田井章博）
- ・旧教職員と卒業生からのメッセージ（渡辺公次郎、日野順市、岡村英一、川上烈生、永田裕一、大沼正樹、上野雅晴、岡本敏弘、田井章博）
- ・理工学部、生物資源産業学部と創成科学研究科の現状（常三島事務部）
- ・理工学部と生物資源産業学部の建物と利用する施設（常三島事務部）
- ・キャンパスライフ（常三島事務部）
- ・付録（常三島事務部）

あとがき

徳島高等工業学校が大正11年（1922）10月20日に創設されて以来、徳島工業専門学校、徳島大学工学部、徳島大学理工学部・生物資源産業学部と改組等により名称は変わりましたが、徳島大学工学部は令和4年（2022）に創立100周年を迎えました。

これを記念するために「創立100周年記念事業委員会」を作り、記念事業として、令和5年（2023年）5月14日に記念式典、記念講演会、祝賀会を開催するとともに、100年の歴史と記念事業を含んだ「徳島大学工学部創立100周年記念誌」を発行することにしました。

この記念誌の作成に当たっては、「徳島大学工学部七十五年史」がすでに刊行されているので、75周年までの歩みはその概略にとどめ、75周年から現在までの歩みに重点をおいて編集しました。

20世紀から21世紀に入り、現在の科学技術は25年前には想像もできないほどまで進歩したと思います。創立100周年を記念したキャッチコピー「創りだせ未来。徳島から世界へ。」の通りに本学部の卒業生および関係者がグローバルな問題解決のために科学技術を駆使して新たな未来を創出されることを期待しています。

本記念誌が無事刊行できるのは、ご執筆していただいた学部内外の方々、資料提供を頂いた方々、写真撮影に協力していただいた方々のお蔭であり、これらの方々に心からお礼申し上げます。また、出版にあたってお世話になった徳島印刷センターの方々にも感謝いたします。

なお、本記念誌は前年に発行予定でありましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で記念式典が延期されたため、現時点に至ったことをご理解いただければ幸甚に存じます。

令和5年（2023）10月1日

編集者一同

徳島大学工学部創立100周年記念誌

● 発 行 ●

令和5年(2023)10月1日
創立100周年記念事業委員会
〒770-8506 徳島市南常三島町2丁目1番地
TEL:088-656-7304

● 印刷製本 ●

協業組合徳島印刷センター